

ペルソナQ ～資質ゼロ
だったはずの少年の物
語～

甲斐太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

文化祭が中止になった嵐の夜。

私たち特別課外活動部のメンバーは1人の少女を除いて、見知らぬ場所に引き摺りこまれてしまった。

知らない学校。

謎めいた時計塔。

そして、記憶を無くした善くんと玲ちゃんとの出会い。

私たちはこの世界の謎に挑む。

『PERSONA Q SHADOW OF THE LABYRINTH』

〈資質ゼロだったはずの少年の物語〉

謎を解明しようと進んだ先で私たちは出会った。

にぎやかで楽しい異世界のペルソナ使いたちと、私たちの知らない成長を遂げた少女と。

戦いの合間、文化祭で皆とはしゃいだり、ぶつかったりすることもあるけど、絆の力が芽生えていく。

閉じ込められたこの世界に私たちがペルソナ使いが集められた本当の理由。

それはいつたい？

『出会いが、人を強くする』

でも、この物語が1人の少年の死を確定させるものだったなんて、今の私たちは知る由もなかったのだ。

……to be continued.

※この物語は「ペルソナ！って言いたいけど、資質ゼロなんです」の派生作品です。

もしも、結城の死が避けられないものと知る総司がペルソナ能力を得て、10月4日

の満月を迎えたら？をコンセプトに書いています。

本編とは設定を引き継いでいるだけで、何の関係もありません。

目次

序章【彼がいない】	1
序章【嵐の夜に】	7
序章【未知の学校】	18
不思議な国のアナタ編①	29
不思議の国のアナタ編②	43
不思議の国のアナタ編③	57
不思議な国のアナタ編④	71
不思議の国のアナタ編⑤	84
不思議の国のアナタ編⑥	107
不思議の国のアナタ編⑦	129
幕間①	146
幕間②	155
幕間③	169
ごーこんきつさ編①	181
ごーこんきつさ編②	193
ごーこんきつさ編③	206
ごーこんきつさ編④	218
幕間④	235
幕間⑤	253
幕間⑥	266
ごーこんきつさ編⑤	282
ごーこんきつさ編⑥	294
悪夢①	304
悪夢②	316
ごーこんきつさ編⑦	327

ごーこんきつさ編 ⑧

ごーこんきつさ編 ⑨

幕間 ⑦

幕間 ⑧

放課後悪霊クラブ編 ①

放課後悪霊クラブ編 ②

放課後悪霊クラブ編 ③

幕間 ⑨

335 344 358 372 388 400 417 432

序章【彼がいない】

?月?日

ストレガによって負傷した荒垣さんと天田くんの見舞いを終えた後、私は病院から寮へと戻った。

扉を開けて中に入ると、まだ他の皆は帰ってきていないようである。寮内は静まり返っている。

時刻はすでに晩飯時。

本来であれば、台所で料理を作っているはずの少年の後ろ姿を幻視してしまい、私はその場で蹲って涙をこぼす。

やっぱり、駄目……。もう泣かないって決めたはずなのに。

「……………ん」

寮内の色々な場所で彼の姿が思い浮かぶ。

コルクボード前で皆の予定を確認する彼。

テレビの前で誰かと一緒に笑っている彼。

ソファで待っている私たちにデザートを持ってくる彼。

思い出の中の彼はいつも笑顔だ。

「……………くん」

2階に足を運ぶ。

タラップに置かれた机とソファを見て、彼とその妹が仲睦まじくテスト勉強をしている姿を思い浮かべる。

思春期の男女の双子にしてみれば、ものすごく仲が良かった。

「……………司くん」

3階と4階を通り過ぎ、私はあの日以降だれも足を踏み入れなかった屋上へと続く扉の取っ手を握る。

そして、ひと思いに開け放った。

そこにあつたのは誰も世話をしてくれなくなったことで萎れ枯れてしまった野菜や果物の苗。

彼が日常的に使っていた道具や、自作したビニールハウスの残骸。

彼がもうこの世にはいないのだということが改めて突きつけられる。

「……………総司くん。う、ああ……………あああああああ!!」



今から約1カ月前の10月5日の早朝、彼の明確な“死”を幾月さんの口から伝えられた。

現場に行つた順平とゆかりは自身の無力さを嘆き、彼の状態を後から聞かされることになつた桐条先輩と真田先輩は唇を血が出る寸前まで強く噛みしめ、アイギスとコロマルはどういつていいのか分からないと言いたげに悲しそうに俯く。

私はただただ呆然としていたような気がする。

私はどこかで思つていたので。

彼が死ぬはずはないと。

誰よりも私たちペルソナ使いのことや、未だに謎の多いシャドウやタルタロスのことを知りつくした彼が死ぬはずないと。

でも現実には残酷だった。

葬式の斎場で見た棺桶に入った彼はぼろぼろだった。

顔の右半分は火傷がひどいからと包帯を幾重にも巻かれ。火傷していない顔の左半分にも無数の傷があり、“激戦”を物語っている。

身体には月光館学園中等科の制服がかけられていて見る事ができないけれど、順平の話によれば、大型シャドウの攻撃で粉砕されたコンクリートや鉄筋などが彼の身体を

幾度も貰いたらしく、ゆかりの回復スキルをもつてしても完全に塞ぐことはできなかったとのこと。

彼の葬式に集まった人は老若男女関係なく数え切れないほど大勢いた。その全ての人たちが涙を流し、彼の早すぎる死を嘆き悲しんでいる。

この数こそ彼が一所懸命に生きてきた証なのだろうが、残された家族はどこか現実を受け入れきれずに呆然自失といった感じで、この場所において浮いている。

中でも酷いのは優ちゃんだ。魂が抜けてしまった屍のようにただ用意された席に座り焦点の合わない瞳で彼の遺影を眺めている。

彼女は10月4日の満月の日。いち早く兄の異常な行動に気が付き、彼がいる場所に誰よりも早く辿りついた。

そして、彼が命を落とす瞬間を目の当たりにした。

現場となった巖戸台駅前には現在、廃墟と化してしまっている。警察と自衛隊によって封鎖され誰も近づけなくなっているのは市民の安全を守ると同時に、本当は何が起こったのか分からないから近づきたくないとのこと。

表向きには戦争の負の遺産である不発弾が爆発してしまったことになっているが、現実には彼の死を目の当たりにした優ちゃんが興奮状態に陥り、彼を殺した大型シャドウを葬るためにペルソナを暴走させ、そこにあつた全てを破壊した。

優ちゃんに遅れて辿りついた順平とゆかりが見たのは、瓦礫の中心で「敵を取ったよ」と力なく啜う優ちゃんと、自身の血の海に沈む彼の姿。

ゆかりはここ最近まで病院にてカウンセリングを受けるまでに憔悴していた。

無理もない、話を聞いただけの私たちがこうなのだから、彼の死を目の当たりにした優ちゃんやゆかりたちが気を病むのは当然のこと。

優ちゃんは葬式後すぐに、巖戸台分寮を退寮した。

そして数日後には両親と一緒に県外へ引っ越していった。

私たちはどこへ引っ越したのか知らないし、すぐに連絡も繋がらなくなった。

◇

誰かに呼ばれたような気がして、私は1人タルタロスに来了。そして、タルタロスの迷宮に挑むための階段横にある青い扉を開いた。そこには、部屋の主はおらず代わりに……

「ようこそ、ベルベットルームへ……。ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所。珍しいこともあるものですね。主がいない間にあなたがいらっしやるなんて。むしろテオドアがおらず、私がいる時に来られるとは……」

特徴的な青を基調とした服を着た女性は鈴振るような声で首を傾げながら呟く。

「気のせい……でしょうか。確か以前にもこんなやり取りを行ったような気がします。そう……あれは、ほんの少し前の台風之夜」

何かを思い出したように目の前にいた女性は目を見開き、語り始める。

私が今まで忘れていた異世界での冒険のことを。

とある悲劇を体験したことによって変わり果てた少女のことを。

資質を持たず、今まで裏方で私たちを支えてくれた少年の「最期」の物語のことを。

「あら……。どうなされました？」

「ううん。続けて、エリザベスさん。覚えているよ、私は覚えている。忘れていいはずがない」

私は袖口で涙を拭い、目の前にいる女性を見つめる。

「聞かせて、『総司くん』の最期の物語を」

序章 【嵐の夜に】

9月18日（金）

寝坊してしまった。

「先に行くね」といってゆかりや風花が出発して30分。

やつのことで髪や色んなものの用意を終えて1階に降りると通学の途中でも食べられるようにとサンドイッチとコップ一杯の牛乳が用意されていた。

私はコップを手でつかんで一気飲みするとサンドイッチが入った箱を鞆の中に入れて、用意してくれた本人に声を掛ける。

「総司くん、ちそうさま！」

「はい」

台所の奥の方から声が聞こえてくる。私はその返事を聞いた後、玄関に向かう。壁に掛けられた時計を見て、「ギリギリかあ……」と力なく呟いた。

そして、扉の取っ手に手を掛ける寸前、台所の奥にいたはずの総司くんが声を掛けて来た。

「結城先輩、まだいますか？」

「ん、どうしたの?」

「天気予報では一日晴れて言っているんですけど、一応念のため折りたたみ傘を持ってって下さい。受付のところに置いてありますから」

彼の言葉に従って受付を見ると折りたたみ傘が積み重なって置かれている。

総司くんは皆に持って行くように言ったみたいだが、今の所誰も持って行っていないようだ。

私は一瞬だけ窓の外を見て迷ったが、受付に近づき折りたたみ傘をひとつ鞆に突っ込む。

「もー、時間を押ししているのにー。もし雨が降らなかつたら、晩ご飯一品増やしてよ?」
「ははは、望むところですよ」

私は総司くんに見送られ、巖戸台駅に向かって走り出す。本来であれば総司くんも一緒に行かないといけないのだが、彼は病気で欠席だ。

「台風が来るので色んな物を片づけないといけない病」というありえないものだが、休んで片づけないと間に合わないと言って桐条先輩を言葉でねじ伏せたという経緯がある。

「もし休ませてくれないのであれば、屋上の家庭菜園が元に戻るまで寮母の仕事は一切しない」と言い切られれば、桐条先輩の方が折れるしかなかった。

私たちの生活の中の食事の部分を一手に担う彼がボイコットしてしまうと、学校での生活もそうだけれど、タルタロスでの活動にも支障が出てしまう。

ただ晩ご飯を作るだけならば、飛躍的にその料理の腕を成長させた風花や総司くんの料理の師匠である荒垣さんが作ればいい。

しかし、彼が作る料理のようにステータスアップの補正はない。何故だか分からないが、彼が料理を作ると何かしらのステータスアップの恩恵がある。

彼の料理に命を救われたことも一度や二度ではない。

そのこともあつて桐条先輩は総司くんに強く言えず、目を瞑ることになった。まあ、品行方正な生徒会長さまなこともあつて、終始不満そうだったが、私たちのために納得してくれたようだ。

『間もなく、ポートアイランド方面の列車が発車いたします』

「わあっ!?!ちよつと、待つて! 乗ります、乗りまーす!!」

掛け込み乗車をしたことよつて、アナウンスで叱られたが何とか間に合つた。肩で息をしながら、走り出した電車から外の景色を眺める。

「いい天気……。この調子だと、晩ご飯はいただきだなあ……。はむ」

私は鞆の中からサンドイッチの入つた箱を取り出し、頬張るのだった。

放課後、玄関前でゆかりと順平ら生徒たちが立ち往生している。その原因は……

「うそ……。あんなに晴れていたのに」

「総司の言うとおり、傘を持ってくるんだったぜ」

丁度、帰りのホームルームが終わった頃を見計らって降り出した雨は、バケツをひっくり返したような雨となり生徒たちの足止めの要因となった。

生徒の中には鞆を頭に載せて走っていく者もいるが、すぐにびしょ濡れだ。

それに月光館学園の鞆は学校指定のものではなく、自分が好きなものを使用しているので防水加工がされていないものだ。自分自身だけでなく鞆の中身も全滅してしまう。

「うう、試合には勝ったけれど、勝負には負けた感じだよ」

私はゆかりと順平の横で鞆から折り畳み傘を取りだして用意する。

「あ、湊。傘を持ってきていたんだ？……いれて」

「あー、ずりいぞ。ゆかりっち。オレっちもいれてくれ、湊」

「こ、この雨の中3人は無理だよ!？」

傘をさして帰ろうとした私にひつつくようにゆかりが傘の中に入ってくる。順平は面白半分と言った感じで無理やり割り込んできたし。

「頭さえ濡れなきゃ大丈夫だってば」

「わわっ。ちよつと2人とも!？」

確かにゆかりが言うとおり、頭こそ守られたものの寮に着くころには身体はびしょ濡れになってしまっていた。

どうしようかと思っていると、勝ち誇った顔の総司くんが人数分のバスタオルを持って出迎えてくれた。

「ほら、僕の勝ちですね、先輩方。お風呂は沸かしてあるのでどうぞ」

ゆかりたちも朝から総司くんから傘を持って行くように言われていたのだろう。

まあ、天気予報では一日晴れると言っていたから、こんなの予想できる方がおかしいのだけれど、とりあえず……。

「ゆかり、どうせだし洗いっこする？」

「はあ!?何を言っているの、湊。って、引っ張らないでよ」

「おお、仲がいいこつて。総司、なんか温かい飲み物くれないか？」

「コンソメスープでいいですか？」

「もしかして、晩ご飯用か？悪いな」

「いえいえ」

順平と総司くんのやり取りを眺めながら私はゆかりと脱衣所に足を踏み入れる。

そしてお風呂で温もってまったりした後、脱衣所で気付く。

「しまった!?着替えがない!!」

連絡を入れた優ちゃんが私たちの着替えを持って来るまで、私とゆかりは浴室に缶詰状態になるのだった。

9月20日(日)

何か胸騒ぎがしてタルタロスに来たけれど、何の変化もなくとりあえずベルベットルームを訪れる。

すると部屋の主であるイゴールさんの姿はなく、以前一度だけ見たことのある女性が1人座っていた。

「ようこそ、ベルベットルームへ。ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所。珍しいこともあるものですね。主がいない間に、あなたがいらっしやるなんて。改めまして、私の名はエリザベス。不肖の愚弟テオドアの姉にございます」

不肖の愚弟って、ひどい言われようだねテオドア。愚かって2回言われているよ。

「あの……イゴールさんは？」

「あいにく不在にございます。ペルソナの合体でしたら、私にも多少は心得がございませのでお申し付けくださいませ。ちなみに本日は“レギオン”しか召喚できませんので、こちらで宜しいですね？」

テオドアとは違った意味で強敵のようだ。何で合体先を指定しているの？

しかも、有無を言わせないような傍若無人ぶり。あまり関わりを持つと拙いかもしいない。そんな風なことを私が考えている横で、エリザベスさんは演目を演じる女優のように告げる。

「『レギオン』が『軍団』の意……。複数の顔は異なる表情でありつついずれも豊かな苦悶を滾らせており、見ていると全く飽きることがありません。このエリザベス一押しでございます。では早速、合体の儀を……」

ちよっ、いきなり!?

「姉上、嘘はいけませんよ。姉上でしたら、他のペルソナも召喚できるではありませんか」

ベルベットルームにあるいくつかの扉のうちの一つからテオドアが現れる。

私はてつきりエリザベスさんがいるからてつきり出て来ないものと思っていた。

前回、エリザベスさんとテオドアの上下関係をまざまざと見せつけられているだけに。

「あら、テオ……ごきげんよう」

「姉上……いえ。結城さま、ただいま主が席を外しておりますので、念のため私も、こちらにいさせていただくことにしました」

「念のためってどういうこと？」

「主が不在のベルベットルームは、この部屋の存在自体がすこしばかり不安定になるのです。……そして、外の世界は嵐」

嵐……もしかして台風のことかな。

そう思つてエリザベスさんを見ると彼女は妖しげな微笑みを浮かべ答える。

「嵐は、揺さぶるのです。身体だけでなく、その心をも。決心や葛藤、隠してきた何かを
も」

エリザベスさんは目を閉じ、胸に手をかざす。

「嵐の中では、みな目を閉じる。すると、内なる世界が浸食してくる。背けてきた目で、隠してきた何かと、対面せざるを得なくなる。運命、そして“時”をも揺さぶる嵐というものがあるものなのです」

そうエリザベスさんが締めくくると同時に鳴り響く警報。

テオドアとエリザベスさんは様子の変わったベルベットルーム全体を見回す。その瞬間、ベルベットルームは闇に包まれる。

「あら？」

エリザベスさんの好奇心たつぷりな声に不安を覚えると同時に見知った気配が増えるのを感じた。

そして明りがついたベルベットルームは先ほどと変わった点が。

3人しかいなかったはずの部屋の中に、人数が増えていた。

「え、ちよつ、何だあここ!?!」

「はあ!?!青いし、上がってる?ここ、エレベーター!?!」

「なんだ、ここは……」

順平とゆかり、桐条先輩の声が聞こえたので椅子に座ったまま、振り向くと特別課外活動部のメンバーがいた。

あれ、いつもよりも数が多い気がするのはなんで?

「どういうことでしょう……」

「密室に招かれざる客。……すなわち、この中に犯人がいる!」

「一体何の!?!」

私は思わず正面を向いてエリザベスさんの言葉に突っ込みを入れる。

「は、犯人!?!」

順平が驚きの表情を浮かべ、エリザベスさんの顔を凝視する。見れば他のメンバーも警戒している様子だ。

しかし、そんな疑惑の目を向けられたエリザベスさんはどこ吹く風と気にしておらず、その上で、

「冗談です」

真顔でそんなことを言つてのける。

「ともあれ、これも何かの『縁』。そして始まり…なのでしよう」

エリザベスさんはテオドアの横に立つと一礼する。

「私はエリザベス、そして弟のテオドア。共にこの『ベルベツトルーム』の住人でございます」

「ベルベツトルーム？あ、もしかして、湊のベルソナを呼び出したりするつていう？」

「はい。私共はここで、お客人のベルソナ召喚のお手伝いをさせていただきますいております」

「ほ、ほんとだったんだ…！」

それはどういう意味かな、風花？

確かに普通に考えれば、頭がおかしいと思われるのはしょうがないけれど、それをどうして本人がいる前で言うの。

「で、なぜ我々をここに？」

「それは私どもにもわかりかねます」

真田先輩の問いかけにテオドアが答えるも要領を得ない答えに皆が首を傾げる。

が、次のエリザベスさんが告げた言葉にぎよつとする。

「平たく申し上げますと、こつちのセリフでございます。ここに立ち入ることができる

のは、何かの「契約」をなされた方か、もしくは……」

その時、上へ上へと上がっていたベルベートルームが動きを止める。

順平が周囲を見渡して一言呟く。

「まるで、ジェットコースターを思い浮かべるよな。発射台まで山を上がって行って降りる寸前の……」

「ちよっ!? フラグなんか立てなっ!? きゃあああ!!」

ゆかりが順平の言葉に反論し終える前にベルベートルームそのものが落下を始める。

「下方向へ自然落下しているであります」

「そんなこと言われなくても分かりますよっ!」

冷静に分析するアイギスと突然の浮遊感に戸惑う声を上げる天田くん。

その時、 “いないはずの声” が聞こえた。

「重力加速度は9.80665 m/s²。大体500 mの落下だと10秒足らずで到達して、時速は350 kmを超えますよ」

「怖いこと、さらっと言うんじやねえええええ!!」

順平のセリフに同意すると同時にベルベートルームは最下層に到達。

私たちは外の世界に放り出された。

そして、目を開けるとそこは、見たこともない学校だった。

序章 【未知の学校】

ベルベツトルームから放り出された場所は見知らぬ学校のようなだった。

出し物であったり、手作り感満載の店舗であったり、飾り付けの様子から見て、この学校では文化祭が行われているようだ。

「文化祭……それは、学徒が年に一度執り行う、興奮と狂乱の祭事！およそ商売に成りえない水準の料理、手作りゆえに温かみあふれるアトラクション……。そしてファイナーレには、業火の回りを踊り狂うとか！」

「なんと……そのような祭事が!? 素晴らしい瞬間に私たちは今、立ち会っているのですね」
青い服を着た姉弟2人が何かを言っているが、私はもう気にしない。彼らは、知識は豊富だけれど、人間社会の知識に関しては乏しいのは分かり切っている。

けれど、それを知っているのは私だけなので……

「えーと、ツツコむべき……？」

「まずもって、このいかにも怪しい文化祭を楽しもうとしてるっつーのが驚きだよ」

ゆかりと順平がエリザベスさんとテオドアの2人を見ながら言う。真田先輩と荒垣さんも腕を組んで、うんうんと頷いている。そんな中、桐条先輩が2人に近づき尋ねる。

「今一度聞くが、あなたがたが我々をここに連れて来たというわけではないんだな？」
「ええ、もちろんでございます」

エリザベスさんはにこやかに答えた後、まるで虫を見下ろすかのような瞳を向け告げる。

「この場所に心当たりもございませんし、お客人ではないあなたがたとは、お会いするつもりもございませんでしたから」

その言葉を聞いた桐条先輩はエリザベスさんを睨みつける。そのエリザベスさんは先ほどの冷たい表情をやめ、またにこやかな笑みを浮かべている。

桐条先輩が何かを聞こうと口を開けた所で、

「姉上…見てください。あの店舗の看板を……。『綿飴』…なんと、綿の、飴ですよ！一体どのような組成変化をさせているのでしょうか!？」

テオドアがぶつとんだことを言った。これには桐条先輩も固まるしかない。

天田くんは組成変化とは何なのかを近くにいた風花に尋ねているが、緊迫した雰囲気は拡散してしまった。

その証拠に順平がテオドアの発言にツツコミを入れる。

「もうそのターン終わったよー」

テオドアとエリザベスさんは顔を見合わせた。私は自然と天井を見上げていた。

私はテオドアの言動によってある程度、分かっていたのだ。

もし、皆と会うことがあつたら面倒なことになるだろうなつて。

「ともあれ……私どもの意思ではなく、ベルベットルームこそが、あなたがたをここへいざなつた。ベルベットルームは、お客様の定めと不可分の部屋。そこで全く無意味なことは起こらない」

「我々がここに來たのは必然だと？」

桐条先輩が意味深なことを言つたエリザベスさんに再度尋ねる。すると微笑みを携へたエリザベスさんが答へた。

「運命といつてもいいかもしれませんが」

「運命……ですか。この場所に、何があるつていうんでしよう」

天田くんは不安げに周囲を見回す。一見、普通の学校の文化祭だが、何があるか分からないのも事実。

「ここはいつちよ、偵察に行くであります」

「ワフツッ！」

アイギスとコロマルが提案すると、戸惑うような感じで桐条先輩が応対し、皆に指示を出す。

「そ、そうだな。よし、皆で手分けして様子を探ろぞ。山岸は岳羽と。明彦は私と、荒垣

は伊織と、アイギスはコロマルと、それと天田は鳴上と一緒に動……け?」

桐条先輩の目が点になった。

様子がおかしいと彼女の視線を追うと、ありえない人物が天田くんの隣に立っていた。

「どういうことか分からないけれど、よろしく。乾くん」

「そ、総司さん!? 優さんじゃなくて、どうしてあなたがここにいますか!」

「えーと……さあ?」

そう言った総司くんは肩を竦めるのだった。

ハプニングはあったけれど、学校の中を探索するだけなので危険はないだろうということで、真田先輩と荒垣さんの2人に天田くと総司くんを入れたグループと、桐条先輩とアイギスとコロマルのグループ、2年生グループの3手に分かれ、探索するという。私はエリザベスさんに誘われ、ベルベットルームの中に入ったのだが、私の知るソレとは風貌が変わってしまっていた。

「エレベーターが、いえベルベットルームが“止まって”います。こんなことは初めてです。それにこの大きな2枚の扉……」

私とエリザベスさんは扉の前に立って、それぞれ調べる。

「分かっていたけれど、開かないか……」

「2枚の扉には『4つの鍵』が掛っております。腕力には多少自信がありますのに、ビクともいいたしません」

そう言うエリザベスさんは右手の人差し指を口に入れて、悔しそうに俯いている。

「……………」

少しの間、俯いて考えているようだった彼女が顔を上げると先ほどまでの憂いの表情はなくなっていた。

「そろそろ、皆さまもお戻りになる頃かと、先ほどの場所に戻りましょう」

私はエリザベスさんの後について、ベルベットルームから外に出た。廊下に出ると探索にいった仲間たちが戻ってきていた。

「ここ、ヘンだぜ？誰に話しかけても、話が通じねーつか質問に答えてくれねーんだよ」

「…………、どこですか？」って問いかけたら、『やそがみこうこう』って言うけど、『それはどこにあるの？』って聞いても『やそがみこうこうの文化祭、楽しい』としか言わなくてさ」

なんだかロールプレイングゲームで町の入り口に立って「ここは○○のまちだよ」っ

て言う人みたいな返答だなあ。

「ワンツ」

私の足元に来たコロマルが見上げながら、一吠えする。すると近くにいたアイギスが説明してくる。

「コロマルさんについて、何かを言う生徒は存在しませんでした」

「普通言うよね。文化祭に犬が来ていたら」

皆、不安げに顔を見回している。桐条先輩は腕を組みながら窓の外を眺め、皆に尋ねる。

「学校の外は誰か確認したか？」

「したんだが、出れねえみてえだな」

「出られない?」

答えた荒垣さんの顔を見て首を傾げる桐条先輩。今まで不安げにしていたゆかりや風花たちも彼が言うことを待っている。

「校門があるんだが、一歩踏み出すと、中に戻ってる」

「どういう意味ですか?」

「そのままの意味だ。出たと思ったら、戻っている。要は出れねえ。門だけじゃない、フェンスをよじ登っても同じだ」

「えっと、じゃあ、来た方法で…」

荒垣さんが言うことを理解した風花は、継るような気持ちで様子を見ていたエリザベスさんに視線を向ける。しかし、告げられるのは無情にも否定の言葉。

「ベルベツトルームは、最早エレベーターとしての機能を停止しております。不可思議な“2枚の扉”がありました。頑丈な鍵が“4つ”も掛っており開けることができません」

「えーと…」

「ひよつとして…」

話を聞いていた順平とゆかりが恐る恐る確認するかのように尋ねる。しかし、答えは皆が予想した通りの言葉。エリザベスさんは飾らずに即答した。

「帰れません」

「うっ…」

「帰れません」

「…いや、いやいやいや！やべーっしょ！これやべーっしょ！何この不思議体験、勘弁なんすけど！オレここにずっといるとか無理っすよ？チドリンの病室にお見舞い行かないと！チドリン、オレに来てほしいって…」

「うっさいな…あ、携帯は!?!」

ゆかりの言葉に、特別課外活動部のメンバーは1人を除いて、それぞれ携帯電話を取りだした。

「…圏外？」

「……だな。通話もメールも無理ってことか」

ゆかりと順平は明らかに肩を落として落ち込んでいる。

「GPSも使い物にならないみたいです」

天田くんは別方向から切りこんでみたようだが、成果は芳しくなかった様子だ。

「このまま、ここを出られないという可能性も？」

桐条先輩の顔色はすぐれない。いや、皆も同じようなものだ。

通信手段も、外に出て助けを求めることもできない陸の孤島に取り残された状態の自分たちの行く末が不安になるって言う方が難しい。

「ベルベツトルームはお客様にとつて、無意味な事が起こらない場所。そのベルベツトルームが、あなたがたをここへといざなつた。つまりあなたがたはここで『為すべきこと』がある」

「為すべき…何のこと？」

「あなたがたが為すべきことを為すまで、おそろくこのまま…。何を為すべきかは、ご自分で確かめくださいますようお願いします」

「協力はしてくれませんか？」

私が尋ねるとエリザベスさんは向き直ってこう答える。

「このベルベットルームのお客人はあなた。ですからこの状況は、あなたの運命に紐づいているのです。私もテオも、変わらず『手助け』はさせていただきますが、……『手助け』は」

2度言わなくても分かっていますよーだ、それくらい。

私が頭を悩ませている中、順平たちが何かを言っているが聞いたところで意味のない話なのだろう。

私はそう割り切って、窓から外を眺める総司くんに近い話しかけた。

「総司くん、何か知っていることがあるなら教えてほしいな」

「結城先輩。……この人たちが言っている『やそがみこうこう』って、漢数字の『八十』の下に神社の『神』という字を書いて八十神高校っていうんです。叔父夫婦が暮らす八十稲羽町にある学校なんですけれど、こんな時計塔見たことがあります。優も一緒にいれば証言は得られたと思うんですが……」

「一応『やそがみこうこう』は実在するけれど、ここではないということ？」

「はい。順平さんじゃないですけど、こんな不思議体験、夢なんじゃないかと何度か頬を捻ったんですけど痛いばかりで目覚めないんですよね」

総司くんは捻って赤くなった右頬を窓に触れさせつつ、運動場に立つ時計台を見つめる。

「……結城！話は聞いていなかったようだな。こつちに来てくれ。鳴上、混乱しているのはよく分かる。だから、君は彼女らと一緒にいてくれ」

総司くんは桐条先輩の申し入れに頷き、エリザベスさんの元へ行く。

私は桐条先輩の後を追って、皆の所へ走った。

風花がシャドウの気配を感じるといった出し物の前まで来たのだが…

「不思議の国のアナタ……？」

「『アナタも手軽にアリス体験！』って、チラシに書いてあるから、体験型の出し物みたいだね」

風花は楽しそうにチラシを指差しながら言う。

順平が彼女に聞こえないように否定的なことを言ったので、私とゆかりは同時に肘鉄を腹部に叩き込んだ。どさりと何かが崩れ落ちる音がしたが気にせず、話を進める。

「女の子の夢だよね？」

と、問いかける風花には悪いとは思うけれど、『そんな暇』なかったしなあ。

「私、女じゃなかったわ…」

ゆかりも肩を落として眩いた。

「よし、無駄な戦闘は避けたいが、今はここしか脱出のヒントはなさそうだ。慎重に進んでくれ、結城」

「分かりました。じゃあ、風花はここからバックアップをお願い」

そう告げた瞬間、コロマルやアイギスが警戒するような態勢を取ったため、私も振り向く。すると、その視線の先に男女2人組の姿があった。そして、男の方が口を開く。

「その中は危険だ……入るのは止めておいた方がいい」と、忠告するように告げて来た。

不思議な国のアナタ編―①

シャドウの反応があるという教室の前で私たちは記憶を何者かに奪われ、私たちと同様にこの異世界に閉じ込められた善くんと玲ちゃんの2人と会った。彼らはペルソナ能力をもたないものの特別なスキルを持っており、私たちと共に迷宮に挑むこととなった。

ちなみに教室の中がどんな様子なのかを探るという意味合いが強いため、まずは偵察を行うこととなりタルタロスでリーダーとして采配を振るう私を中心に年長者組の美鶴先輩、真田先輩、荒垣さんの3人に善くん&玲ちゃんを加えた6人パーティーで行くこととなった。

順平たちには私たちに不慮の出来事が起きた際に、すぐに救援へ来てもらえるように教室の近くで風花と一緒に待機してもらっている。アイギスなんかは私と一緒に行きたくそうにしていたけれど、こればかりは仕方ないしね。

「ところで、善くんや玲ちゃんはどうかやって戦うの?」

私が2人を見ながら問うと、善くんは腰の後ろに括りつけていたボウガンを取り出した。玲ちゃんは何故かドーナツを掲げている。

「私の武器はこれだ。この世界にある物を組み合わせることで作った。玲は回復を担当することになる」

「回復します…もぐもぐ」

善くんは相変わらず冷静沈着のイメージを崩さないけれど、隣でドーナツを頬張る玲ちゃんのおかげで絵面がシュールだ。真田先輩や荒垣さんも微妙な表情を浮かべつつ見ているし。美鶴先輩もこめかみを押さえつつ悩んでいる様子だ。私はこの場の雰囲気を感じ拭くように元気な声で掛け声をかけ、先頭を歩き始める。

「それじゃあ、行きましようか。真田先輩と荒垣さんは前衛をお願いします。美鶴先輩は私と中衛で、前後から来る敵の両方に注意を払います。善くと玲ちゃんは後方から私たちの援護をお願いします」

私は先輩たちが領き、善くと玲ちゃんと返事をしたのを見て前を向く。私たちはこの場に残るメンバーに見送られつつ、不思議の国のアナタと呼ばれる体験型アトラクションの迷宮へ足を踏み入れるのだった。



「くっ……ペルソナが弱体化しているのは予期していなかったな。お前たちは大丈夫か明彦、荒垣？」

「俺たちは問題ない。だが、どうする？ここから出るには奴を倒さなければならぬ位置にいるぞ。桐条、そいつは大丈夫なのか？」

「ああ、今の所はな。だが、すぐにでも治療が必要だ」

先輩たちの声が聞こえる。

薄く眼を開けると正面に横向きの荒垣さん心配そうに覗きこんでくる顔と嗚咽をあげる玲ちゃんの姿が見える。いや、視界は地面に並行して見えている。つまり私は美鶴先輩の膝枕で寝かされているようだ。

では、どうして私は横になつているのだろうか。どうして、息をするだけでもこんなにも身体は痛いのだろうか。手足を動かそうにも、まず痛みが襲つてきて指一本動かさそうにない。

「ごめんなさい。ごめんなさい……。私が……。私の所為で……」

「玲、君の所為ではない。私が君を守り切れなかったから」

玲ちゃんは私の手を握つて、その薄緑色の瞳から大粒の涙をぼろぼろと零しながら懺悔するように『ごめんなさい』と言い続ける。そんな彼女の背を優しく撫でる善くんだが、彼からもやるせなさやが伝わってくる。

『皆さん、山岸です！こちらの救援隊の編成が済みました。今からそちらに向かいます』頭に響いた聞きなれた声は、いつもよりも随分と焦っているように上ずらっている。

そのことに不安を抱いた美鶴先輩は確認するように返事する。

「山岸、待て。奴のアナライズは済んだのか？」

『はい、確認できています。名前は『トランプの兵隊さん』、闇と光属性を無効化し、状態異常攻撃も無効化する強敵です』

そっだ……。

この不思議の国のアナタと呼ばれる迷宮に踏み入れた私たちだったが、何故か敵が現れなかつたので、サクサクと先へ進むことが出来た。しかし、風花のルキアの力をもつてしても、この迷宮のマッピングが出来ないと分かり、態勢を整える意味でも一度帰還することになったのだ。すると、入り口の手前に扉を守護するように立つ巨体のシャドウらしきものがいた。

「ヤソガミコウコウ」に戻るにはあのシャドウをどうしても撃破する必要があり、シャドウの反応があると聞いていたのにも関わらず、戦う事が出来ずにモヤモヤしていた真田先輩を筆頭にして、風花のアナライズ結果も待たずに攻撃を仕掛けてしまった。

だが、「それ」は俊敏なフットワークで早速シャドウの懐に入り込んだ真田先輩が先手の攻撃を仕掛け、その後を荒垣さんが距離を詰め、武器である斧をシャドウに振り下ろしたその瞬間に起きた。

「!?!」

真田先輩と荒垣さんというパワーアタッカーの攻撃をその身に受けたはずのシャドウは、その攻撃は効果がないと言わんばかりに2人を掴むと軽々と放り投げた。空中で体勢を立て直した先輩たちはそれぞれ召喚器でペルソナを呼び出し、攻撃しようとする目を見開いた。

「なんだこのステータスは！くそつ、ジオ！」

「ちいつ……ティアドロップ」

弱い電撃攻撃スキルと打撃属性らしき攻撃を行う真田先輩のポリデュークスと荒垣さんのカストール。これには私たちも驚いた。そして、すぐに自分のペルソナの状態を見て驚愕する。

「うそ……。オルフェウスだけ？しかもレベルが1に下がって、覚えているのはアギだけだ」

「ペンテシレアもそうだ。一旦、引くぞ！明彦、荒垣下がれ！」

美鶴先輩を先頭にして、巨体シャドウから距離を置こうとする私たちを追ってくるシャドウは突然の動きに反応が遅れた玲ちゃんに狙いを定めて、武器である杖を大きく振りかぶった。

善くんはそれに気付き、攻撃するためにボウガンを手を取ってしまった。ペルソナが弱体化してしまっている私たちの攻撃が通じなかった相手に、彼が持つボウガンの矢程

度の攻撃が通じるとは思えない。私は咄嗟にブレーキをかけ、玲ちゃんの救出に向かう。

そして、彼女の前に立ち振り下ろされる杖を受け止める様に薙刀を横に構えた。『ずんっ』と押し掛かる重みは今までに受けたことのない衝撃で、私が持っていた薙刀はいつも容易く杖を受けた場所から砕け散った。私が呆然とする間もなく、振り下ろされた杖の先端は胸に当る。肺の中の空気が全て強制的に吐き出され、痛みによって息が出来なくなつた。その衝撃によって私は後ろにいた玲ちゃんと一緒に後方に大きく弾き飛ばされた。1秒なのか、10秒なのか分からないけれど、永遠とも感じられた時間。駆け寄ってくる先輩たちの顔を見ながら、私は氣を失つたのだつた。

「……………あ……………くう……………」

息を吸うのも大変なのに、まともにしゃべれるはずがない。玲ちゃんが必死になつて、手を握り続けてくれるおかげで氣を失うことはないけれど、動けないことには変わらない。ここがタルタロスであれば回復アイテムを使って、回復することができるのだけれど、この異世界に来るに辺り、今まで持っていた道具は武器防具も含めて消失してしまっている。

この不思議の国のアナタに挑む上で持っていた回復アイテムは荒垣さんがテオドア

から貰ったという傷薬の一個だけ。それも、とつくの昔に私に使ってしまったって、もう回復手段は残されていない。もし、ここにゆかりがいれば話は別だったのだろうけれど、今言っても仕方がないことだ。

「大丈夫だ。すぐに助けが来る。それまでの辛抱だ、湊」

美鶴先輩が私を安心させるように優しく前髪を梳きながら語りかけてくれるが、彼女の表情は優れない。当然である。私たちが全員弱体化している以上、残っている順平やゆかりたちが全盛期の状態であるはずがない。

残っているメンバーは、順平・ゆかり・アイギス・天田くん・コロマルの4人と一匹。物理攻撃に対して耐性を持つ優ちゃんがいれば心強かったけれど、どうしてか分からなければ、いけれど彼女の代わりに総司くんがこの世界に来てしまっている。

エリザベスさんたちは言っていた。ベルベットルームにおいて無意味なことは起らない。すべては必然であり、運命であると。つまり総司くんがこの世界に招かれた理由もあるということだが、今は考えなくてもいいか。

私は手を握る玲ちゃんや美鶴先輩に安心してもらおうと笑みを浮かべようとしたが、それは甲高い悲鳴によって掻き消された。

「今の声は、もしや岳羽か?!」

「くそっ、シンジ来い！」

「ちい、ペルソナが弱体化していなければ、こんな奴らなんかに」

真田先輩と荒垣さんの走り去る後ろ姿が見えた。ゆかりたちの救援隊に真田先輩と荒垣さんを加えると総勢7人。対して敵は1体だ。囲む人数が多ければ多いほど、こちらの有利な状況になる。……行かなきゃ。

私は美鶴先輩に目で訴える。そして、ぎゅつと玲ちゃん握る手を強く握り返す。すると意を決した美鶴先輩が玲ちゃんと善くんに目配せした後、大きく頷いた。

「玲、君はそちらから湊を支えてやってくれ。善、君は私たちの周囲にシャドウが近づいてこないか見張ってくれ」

「は、はい！分かりました」

「承知した」

「湊、行くぞ。すまない」

「……かはっ……ぐう……」

まるで身体を中心に高温に熱された延べ棒を押しつけられているような酷い痛みにも、私は目を閉じ、唇を噛みしめて必死に耐える。強く噛みしめ過ぎて、口の中に鉄の味が広がるけれど、今はただ耐えるしかない。

「ごめんなさい。ごめんなさい……」

私の右隣にいる玲ちゃんが涙をこぼしながら必死に支えてくれている。私はだらん

と伸ばしていた右手で彼女の頬を撫でて、彼女に出来る限りの笑みを向け大丈夫であることを伝えようとしたが、もっと泣かれてしまった。笑ったつもりだったけれど、どうやら笑えていなかったみたい。

曲がり角を曲がって、戦いの場になっているところを見て私たちは息を呑んだ。

倒れ伏せる天田くんを庇うようにしてうつ伏せで倒れる荒垣さん。

壁にめり込んで動かない真田先輩。

太刀を持ったまま順平は仰向けに倒れピクリともしない。その彼の前にゆかりとアイギスが立って攻撃しているけれど焼け石に水。

「そ、そんなバカな……」

美鶴先輩の口からそんな弱気な声が漏れ出した。

もう誰もいない。

みんなこんなところで……死ぬの？

「ワオオオオン!!」

その時、コロマルの勇ましい咆哮が響き、シャドウの頭部付近に白い影が跳びかかる。シャドウはコロマルを追い払うように、大振りで攻撃する。軽いフットワークでそれを紙一重で避け続けるコロマル。

「コロマルさんがコイツはオレが引きつける。今の内に逃げろとのことですよ」

気を失ったままの順平と腰が抜けてしまったゆかりを連れて、私たちの近くまで来たアイギスが告げる。見れば彼女も損傷が激しく、所々がスパークしている上に、焼き焦げた臭いがすることから、オルギアモードを使用したらしい。それでも相手にならなかった。

負傷者だらけの今、いくらコロマルが時間を稼いだところで助かる確率はかなり低い。

「ワンワンッ!!」

「どうして来たんだ!とコロマルさんが言っています」

怪我人が戦場に赴くなつてこと?そんなのひどいよ、コロマル……。と顔を上げると、コロマルの言葉は私に向けられたものではないことに気付く。ゆかりたちが明けて入ってきたと思われる扉の下付近に新たな人影があった。

私の視界はぼやけてしまっていて、誰かまでは分からない。もしかして風花?と思っただけれど、それは美鶴先輩の眩きによって否定される。

「鳴上……」

美鶴先輩の眩きによって、人影の正体が総司くんだと分かると血の気が引いて視界がクリアになる。恐らく迷宮に入ったまま帰ってこない私たちが心配になって、彼のこの迷宮に足を踏み入れてしまったのだろう。

逃げる様に伝えようとしたが、私の口から出るのは言葉にならない息だけ。それでも何とか意思を伝えようとするのめりになり、私は美鶴先輩や玲ちゃんを巻き込んで前方に倒れこんでしまった。

シャドウもちよろちよろと動き回るコロマルではなく、新たな人影に狙いを定め武器を振り上げる。コロマルは背後から火炎スキルを連続して叩き込むが、相手はビクつくことも怯むこともない。

『総司くん、逃げてください！はやくっ!!』

風花の悲鳴のような懇願の音が響く。だが、無情にもシャドウは振り上げていた武器を勢いよく総司くんに向かって振り下ろした。

シャドウの攻撃は床を砕き、衝撃波を引き起こし私の前に守る様に立っていたアイギスをも倒れさせる。倒れ伏した私から見えるのは陥没した床とシャドウだけ。美鶴先輩やゆかりは咄嗟に目を背けたが、私は見続ける。

シャドウの武器の先を掴む手が見えたから……。

目の前にノコノコ現れた獲物を倒し終えたと思ったシャドウは再度、コロマルを狙いにつけようと床に振り下ろした武器を持ちあげようとして固まった。

「……………うそ……………」

私は信じられない光景を目の当たりにして、思わずそんな言葉をこぼした。シャドウの武器の先を握っていた手が力を加えたのか、シャドウの武器は先端が砕け散った。武器を持ち上げようとしていたシャドウは力のいれる先が無くなり後方に倒れこんだ。

シャドウが武器を振り下ろして出来た穴から、総司くんが出てくる。

そして、彼は右手を大きく天に向かって伸ばす。すると上空から青白い光をまとって輝くカードが降りて来た。

「きれい……」

床にペタンと女の子座りして、私と同様に現状を見守っていたゆかりが呟く。
降りて来たカードは総司くんの手にとまると、青い炎となった。

「……ペ……ル……ソ……ナー」

総司くんがその青い炎を握りつぶすと、彼の背後に黒い影が浮かび上がる。

その黒い影は随分と大柄で幾つもの武器を携えているようにも見える。

総司くんは目の前にいるシャドウを見据えると駆けだす。そして起きあがろうとしていたシャドウの鼻面に跳び蹴りを喰らわせて壁まで蹴り飛ばした。もの凄い衝撃音に気を失っていた面々が目を覚ます。

総司くんは床に落ちていたゆかりの弓を握ると構える。すると彼の背後に浮かびあがっていた黒い影が姿を変え、武者鎧を着た弓兵へと姿を変える。

「剎那五月雨撃」

総司くんが弓を斜め上に向けて矢を放つと上空からいくつもの光の矢が降り注ぎ、シャドウにダメージを与える。だが、シャドウも負けじと総司くんに迫る。彼は弓を置いて転がりつつ避け、天田くんと荒垣さんの傍に行き槍を構える。

すると黒い影がまた姿形を変え。今度は革製の甲冑を身に付けた武将のようだ。ただ表情は鬼のような憤怒を浮かべているけれど。

「イノセントタック」

槍を自分の手足の延長線上のように扱った総司くんは、シャドウに向かって思い切り槍を突き出す。その攻撃を受けたシャドウは思わず膝をついた。それを見た総司くんは転がっていた順平の大太刀を拾う。

当然のように総司くんの背後に浮かびあがっている黒い影も姿を変えた。

燃え盛る黒い焰を自在に操る自らの身体も焰の化け物の姿に。

目の前にいる総司くんが脅威的な存在であると認識したシャドウは武器を放り捨てて、一目散に逃げ出そうとするけれど、一足遅かった。

左手で大太刀を持ち、右手で照準を合わせる様にしてシャドウに狙いを定めた総司くんが口端を吊り上げて告げる。

「炫浄炎（かかじょうえん）」

それと同時に肌が焼けるような焔が風のようにまとわりつくようにしてシャドウを中心に吹き荒れる。断末魔のような叫びが迷宮内に響き渡ったが、次第にその声も小さくなっていき、焔の嵐が消え去るとそこには数枚の白い札が残されているだけで、私たちを全滅寸前にまで追いやったあのシャドウは跡形もなく消え去っていた。

私たちを救ってくれた総司くんを見ると、彼はお気に入り玩具を手に入れたように嬉しそうに笑っていたのだった。

不思議の国のアナタ編―②

「エリザベスさんが担当する保健室に運び込まれたコロマルを除いた特別課外活動部の面々の治療費は合計で1800円。現実世界においては大した金額ではないが、この世界においてはちよつと問題のある金額だった。何せ、私たちは売れる物を何も持っていない上に無一文だったためだ。」

その所為で無傷であったコロマルと善くんと玲ちゃん、そしてペルソナ能力に目覚めたばかりの総司くんの3人と1匹のパーティーで不思議の国のアナタの迷宮に挑むこととなった。私たちの治療費を稼ぐために。

ゆかりや美鶴先輩なんかは自身の無力さを嘆きながら、天井をじつと眺めてながら待つ他に方法がなかった。



総司くんたちが3回くらい迷宮に籠ってシャドウを倒して素材を集め、テオドアに売るという作業を繰り返し、エリザベスさんに治療費をきっちり払い終えてくれたので、毒々しく変貌した保健室からやつと解放された。その後、私たちは作戦会議も含めて、

フードコーナーへ移動する。

「……ペルソナの弱体化は予想していなかったな」

美鶴先輩がそう呟くと、皆がウンウンと頷いて同意する。とはいえ、ペルソナ自体はまた鍛えればいいだけの話なので、そこまで問題ではない。ここで重要なのは私たちを全滅寸前まで追い込んだ、あの巨体のシャドウクラスの敵がうろついているのかどうかである。あんなものが普通に出てきたら、毎回こんな目に遭うのだ。億劫にもなる。

「総司、中の様子はどうだった？」

「あの大きな奴は見かけませんね。とはいっても入り口付近で寄ってくるシャドウを狩っていただけなので、断言はできませんけれど」

順平が振った話しにちゃんとした答えを述べる総司くん。

私たちを全滅に追いやったシャドウを1人で撃破した彼の能力がこれからの肝になりそうだと思うしていたら、総司くんは罰が悪そうな表情を浮かべながら話し始める。

「えっと、僕的能力なんですけれど。複数のペルソナを交代して戦うことができます。ただ、現在所有するペルソナは火の魔法スキルを持つ『キジムナー』と氷の魔法スキルを持つ『フェアリー』だけなんですよね」

あはは……と苦笑いしながら告げる総司くん。どうやら、そう簡単には進ませてくださいないらしい。

総司くんは器用貧乏と言っているのか、使用する武器にこだわりはない。なのでメンバーに組み込もうと思ったら、足りていないなという武器を持たせてメンバーにいれることが可能だ。今は2体しか保有していないペルソナも、もしかしたら戦いの中で得て行くかもしれないのでそう悲観することではないと思う。

それとは別に問題がひとつある。それは迷宮のマップピングが出来ないこと。

これの解決策は善くんから齎された。善くんが持っていた「皮表紙のノート」に地図を私が書きこむことによつて、何故だか分からないけれど風花のルキアも地図を見れるようになったのだ。

「で、地図を書きこみつつ全員で先に進む訳ですけれど、これからは先行する班と後方で待機する班に分けようと思います。緊急事態が起きた時は全員でふるほっこします。今回はレベル上げということで、後方には治療費集めに奮闘しつつレベルを上げた総司くん、コロマル、善くんと玲ちゃんに詰めてもらいます。残りはローテーションしつつ、レベル上げです」

治療費集めという名目で総司くんらが集めた素材によつてテオドアが新しい武器や防具、道具を作ったので出来る限り装備を新調した私たちはいざ、不思議の国のアナタの迷宮に足を踏み入れる。

『んー……この出し物はとっても広いみたいです。構造も複雑そう……タルタロスと随

分違うみたいで、地形やシャドウの詳細な位置までは分からないです。すみません……』

風花の気落ちするような声が響く。それを聞いた美鶴先輩が頷き、私を見てくる。と
いうよりも私が所持しているノートをだけれど。

『それと……皆さんが最初に戦ったシャドウと同じ反応がちらほらとあります』

「ウウ〜……」

「リベンジマッチと行きたいが、……今は無理だな」

コロマルは威嚇するような唸り声を上げたが、真田先輩はいつものように強者との戦いに燃えるような発言はせずに自身の拳を握ったり開いたりして調子が悪そうだ。

『他にいるシャドウとは違って、とりわけ強そうなので、区別して呼びますね。えつと

……』

「フューシス・オイケイン・エイドロロン」

「……何だと?」

善くんが突然言い出した言葉に疑問を投げかける美鶴先輩だったが、善くんは聞き取れなかったものと思い、先ほどよりも大きな声で繰り返す。

「フューシス・オイケイン・エイドロロン」

「2回言われても!つかどーという意味だよ」

順平のツツコミはごもつともだった。私やゆかりもそうだが、英語に強いはずの美鶴先輩も首を傾げていることから結構難しい言葉のようだ。順平に分かるはずもない。

「そのままでが？」

善くんは何を言われているのか分からないと言いたげに首を傾げた。これじゃあ埒が明かないなと思っていたら、天田くんが隣にいた総司くんに見かねて尋ねていた。

「どういう意味なんでしょうか？」

「えつと……。フューシスが『自然』、オイケインは『住む』、エイドロンは『幻影や幽霊』を指すから、『そこにいる幻影』って意味なんじゃないかな」

「総司さんって、物知りですよ」

天田くんは尊敬の眼差しで総司くんを見ている。総司くんは後頭部を掻きながら照れるように顔を背けている。ほほう、『そこにいる幻影』とな。言い得て妙だ。

「……まあいい、それを使わせてもらおう。略称は『F・O・E』でいいな。」

『F・O・E』ですね、分かりました。このF・O・Eですが、おそらく今の皆さんでは勝てる相手ではありません。見た目で分かると思いますから無理せず避けてください』

風花の忠告に真田先輩が俯く。彼の本心では回避や逃走は認めることは出来ないが、現在の戦力を鑑みるに無理を犯すのは愚の骨頂だと思っているのかいなのか。口を

噤み反論することもない。

『では皆さん、気をつけて行ってきてくださいね。私も頑張つてバックアップしますから！』

私たちは周囲に警戒しながら迷宮を先に進み始めた。

私たちが再び迷宮に挑んで最初に戦つたシャドウとの戦いを終え、思ったのはただひとつ。

「弱っ!!」

現れたのは臆病のマーヤ2体と笑うテールブルが1体。タルタロスでお馴染みの敵であつたが巨体のシャドウのインパクトが強すぎて、全力で戦つたら一撃で消滅した。これには拍子抜けで、思わず皆で苦笑いをしてしまったほどだ。戦いの後に残された素材の他に落ちていた白紙のカードも回収しつつ、私たちは先に進む。

前回引き返した扉を通り抜けると正面に大きな時計が見えた。美鶴先輩は何かに気になつたようだけれど、何も仕掛けのようなものも見当たらなかつたので、私は地図上に「?」と書き込んで先に進む。美鶴先輩は名残惜しそうにそれを見ていた。

途中で見つけた宝箱から『命のベルト』という装備アクセサリを回収しつつ先に進

むと、先ほど？」を記した所の反対側に来た。

「全員、止まってくれ！」

美鶴先輩は私を持つ地図を覗き込んで、私が書きこんだ印を見て頷く。

「この壁の時計は先ほどの壁にあつたものと同じだ。各自地図を見てくれ」

美鶴先輩がそう言うためメンバーの皆が地図を見て、目の前の時計を凝視する。美鶴先輩も腕を組んでどうしたものかと考え込んでいる。

「やはり先ほどの壁の反対側か。なにか仕掛けがあるのかもしれない。ここは慎重に調査を……」

美鶴先輩が時計を見つつ考え込んでいる横で、順平が何かを発見する。

「おっ？ スイッチはつけくん！」

「ま、待て！ 伊織！」

「あひゃ!？」

順平がスイッチのようなものを押した瞬間、一瞬だけ視界が暗くなつたが身体には何も異常はない。だが、ふと顔を上げると視界に映るものが変わっていた。

「……あれ？」

周囲の状況を見るに先ほど通つた場所に出たようだ。美鶴先輩も同じ考えなのか頷く。

「とすると、この時計は「通り抜けが出来る仕掛けの目印」ということか」
 「仕掛けは向こう側にしかないんすかね？」

順平の疑問を聞き、時計を調べる美鶴先輩。するとすぐに結論に達したようだ。

「いや、どうやらこちらからも通れるようになったようだ。一度仕掛けを発動させれば
 両側から通れるんだろう」

「おおー。便利つすねー」

「感心している場合か、まったく！慎重にと言った傍から……。いいか、ここはシャドウ
 の巣窟だ。今後はもっと慎重に進むんだ」

「ス、スイマセン」

美鶴先輩の窘めるような説教に面目ないと頭を下げる順平。だが、美鶴先輩もひとつ
 見落としている部分がある。

「後続がいまね、美鶴先輩」

私の指摘によりやく気付いた美鶴先輩は周囲を見渡し、声を荒げる。

「何？……鳴上・アイギス・天田・コロマル・善と玲はどこだ！」

「せんばーい、こつち側です」

壁を挟んだ向こう側から総司くんの声が聞こえてくる。こちら側にいるのが私、順
 平、ゆかり、美鶴先輩、真田先輩、荒垣さんの6人なので、この仕掛けで通れる最大人

数は6人なのかもしれない。

「下手したら戦力が分断される危険性もあるのか。気をつけなければならぬ。湊、この仕掛けのことは地図に書いておいた方がいいだろう。使用する際は周囲の状況に注意するの忘れずにな」

「はいー」

私たちは時計のスイッチに触れ、総司くんらがいる所に戻る。

そして次の扉をくぐると、私たちが初めて戦ったものと同じ姿のシャドウがいた。私は思わず身構え、他のメンバーも戦闘態勢を取るが一向に襲いかかってこない。

私たちが首を傾げていると総司くんと善くんとアイギスが前に出て、冷静に相手の動きを見る。

「なんだか動きがおかしいですね」

「そうだな」

「確かに戦闘態勢を取ろうとしないばかりか、こちらに興味を示さないであります」

『そう言われれば……』

3人の分析にバックアップの風花も加わる。私たちも構えていた武器を降ろし、しば

らく相手の動きを見る。するとあのシャドウが結構規則的に動いていることが分かる。決められた場所をメリーゴーランドのように回っているような……。

「うん、ホントだね。あそこの池の周り、なんかあるのかな？」

ゆかりがそう言うと、コロマルが吼える。それを聞いたアイギスが翻訳して代わりに告げる。

「あそこはF・O・Eの縄張りだ。進入してアイツに突撃すれば、容赦なく襲われる……とコロマルさんが警戒しています」

「お……おう。さすが、縄張り争いの世界に生きてるだけあんな……」

「それなら、やつこさんの動きを読んで避けられるってことだな。……アイツらみたい
に」

語尾を濁した荒垣さんの言葉を聞いて、その場にいたメンバーが巨体のシャドウ、F・O・Eに視線を向けると総司くんと天田くんの2人が後ろをついて歩いていった。真後ろにいるにも関わらず、自分たちに興味を持たないF・O・Eを背後から指差して笑っている。

「「って、何やってんのー!!」」

私とゆかりと美鶴先輩の声が重なって響き渡る。しかし、そんな声にも興味を抱かないF・O・Eは相変わらず池の周りをぐるぐる歩き回っている。ちなみに総司くんと

天田くんはF・O・Eの縄張りからすでに向こう側に抜けており、私たちに手を振っている。

「……とりあえず、オレたちも行こうぜ、湊っち」

「うう、どんなに大人びていても総司くんも天田くんも子供なんだよね」

私たちはタイミングを見計らってF・O・Eの縄張りを抜け総司くんたちと合流した後、先に進む。

その途中、天田くんが下層に降りる為の階段を見つける。どうやらこの迷宮はタルタロスとは違い、下に向かって進む必要があるようだ。風花からの報告で下層にもシャドウはいるらしいことが分かった。

その後も周囲を警戒しながら進むと、今までとちよつと雰囲気の違いが場所に出た。というか、

「な、何これ？地面が光ってんだけど……」

「オーラじゃね？スピリチュアル的なアレ」

ゆかりと順平が光っている場所に入らないで何か話をしているが、興味を持ったアイギスが意見を言う。

「パワースポットと呼ばれる霊場でありますね。『ゴリヤク』なるものをもらうため、主に女性が集う観光地であります」

「そーそー！アイちゃん、良く知ってんじやん？」

「それとここは違うと思うけど……って、二度目はないから」

順平の意見にため息をついていたゆかりであったが、光る地面の所に入ってしまったがみこんでいる総司くんと天田くんを見て首を横に振った。私たちは身体に害はないのかを尋ねるもどうということはないとのこと。代わりに何かアイテムを見つけたようだ。

『それ！シャドウを倒した時に落とす“欠片”と同じ気配を発しているようです。テオさんに渡して見れば、装備や消耗品にしてくれるかも！』

私は風花のナビゲートの声を聞きながら、アイテムを自分のバックに入れようとした総司くんの肩をしっかりと握る。そして、彼が手に入れたアイテムを全て没収した後、ここを後にする。

途中、虚言のアブルリーという初見のシャドウが襲いかかってきたものの難なく撃退でき問題なかったが、玲ちゃんがシャドウのその形状を見て一言。

「あれだけ口が大きかったら、色んな物をいっぱい食べれそう」

という発言にそれはどうなんだろうという雰囲気は漂う。善くんはそうだなと軽く流すし。

そんなことを思っていたら行き止まりに行ってしまった。引き返そうとしたら玲ちゃんが床に落ちていた小さな箱を見つけた。派手な色彩で善くんは警戒した方が

いいと言う。風花に尋ねるも特に怪しい気配はしないとのこと。

そんな中、順平が前に出てきてその箱を持ちあげる。そして、マジックボックスだと呼称して、玲ちゃんが持っていたアメリカンドッグを入れると箱をぐるりと回して、箱を開けながら言う。

「じゃーん、美味しくなるのでしたー」

「わーい！2本に増えてるー！」

順平としては場を和ませようとしたのかもかもしれないけれど、それは順平の思惑とは違う方向に働いた。何せ、玲ちゃんのアメリカンドッグが2本に増えていたからだ。玲ちゃんは大喜びし、両手に1本ずつもって頬張る。

「……へ？」

順平は首を傾げながらその箱を置く。ゆかりや他の皆から向けられる視線にどう答えればいいのか分からない順平はマジシャンイオリと名乗ったのだった。私は傷薬を箱に入れて、数度振ってから開ける。傷薬は2個に増えていた。

次の扉を開けるとそこには階段と大きな宝箱があつた。階段はここまで来る途中で見たものに間違いがなさそうだが、気になるのはこの大きな宝箱。今まで通路にあつた宝箱と同様、簡単に開くだろうと思われていたそれは開かなかつた。男3人が力を入れるもビクともしない。加えて鍵穴がない代わりに地図の様なものが描かれている。

「結城先輩、ちょっと地図を貸してもらっていいですか？」

総司くんがそう言うので快く貸すと、彼はペンを持ってすらすらと何かを書きこんでいく。そして、その地図を宝箱の地図の様なものが書かれているところに押しつけると、鍵の開く音がした。

総司くんはすることが終わったのか、私に地図を返し大きな宝箱の前に座らせる。宝箱に手を掛けると何の抵抗もなく、開ける事が出来た。中身をメンバーで覗き見ると入っていたのは小さな光る石であった。

なんだろうと思って、ぎゅつと握りしめると淡い光を放つ。その光は戦闘で体力が減っていた身体にしみわたり力となる。どうやら回復アイテムのようだ。しかも傷薬と違って使用しても無くならない様子。私はそれをいつでも使える様に制服のポケットに入れ、階段を降りるのだった。

不思議の国のアナタ編―③

階段を降りると周囲の雰囲気が変わった。壁は紫色の葉をつける木々に変わり空には黒い雲がかかっているように見える。

「先ほどの階で終わり、とは行かないようだな」

美鶴先輩が腕を組みながら呟いた。とはいっても落胆している様子はない。むしろ当然と思っていたように周囲の様子を調べ始める。そんな中、善くと玲ちゃんが互いを気遣うような発言をして場を和ませる？

「……玲、大丈夫か？」

「……うん！みんながいるし、善もいるから怖いけど、平気だよ」

「それは良かったであります」

アイギスが微笑みながら玲ちゃんに言うと、彼女は自分の手を胸に当てつつ話し始める。

「あのね、この場所、ずっと気になっていたんだけど、怖かったんだ。みんながいるから、入れてね、すっごく楽しいよ。ありがとう！ございますー！」

まっすぐな気持ちをそのまま言葉にして言い切った玲ちゃんに、私たちはそれぞれ大

大きく頷いて返事としたのだが、一人だけ浮かかない表情を浮かべる者がいる。善くんだ。彼は玲ちゃんとは真逆に眉を顰め浮かさない顔をしている。

「……………」

「善?どうしたの?どつか痛い?」

「違う。…………よく分からない」

玲ちゃんの質問に自分でも要領を得ないのか首を横に振って、不安を口にする。

「玲、私と共にいてくれるか?」

「うん、もちろん!」

玲ちゃんはその善くんの問いに笑顔で答える。私は微笑ましいものと見ていたが、天田くんには居た堪れないもの、順平は元の世界にいる女の子を思い出し惚気て、ゆかりはそれを適当にあしらう。

『玲ちゃんも善くんも、早くここから出して上げられるといいですね』

「ワン!」

「だね。ふふ、コロマルも張り切ってる」

風花の言葉に賛成するように鳴いたコロマルの頭を撫でながらゆかりも頷いたが、美鶴先輩の発言を聞いて表情を曇らせる。

「あくまで最優先は、我々が出ることだ。それを忘れるな」

「……あ、はい」

急に沈黙が降りた。

「そ、そういえば、玲ちゃんも善くんも、ペルソナで戦わないよね」

「ペるそな……。ああ、君達の“心の力”のことか。そうだな、私と玲には使えないようだ」

「シャドウと戦えるのはペルソナ使いだけってきいていたけど……」

「こんなシャドウが出るとこにいたんだし、テキオーしたって感じなんかね？」

「そんなこと……あるのかな」

ゆかりが空気を変えようと話題に上げたのは善くんと玲ちゃんのペルソナ事情。ゆかりの言うとおり、私たちはシャドウに対抗できるのはペルソナ使いだけだと思って戦ってきた。確かにこんな特殊な条件下なのだから、順平の言うように適応したっていうのもなくもない話ではあるがすつきりとしない。

そんな会話を行っているゆかりと順平に近づいて行く美鶴先輩とアイギス。

「この場所自体がイレギュラーだ。正常や異常の区別すら難しい。この体験はいい研究内容になるだろう。……無事に帰れたら、な」

「異常ということなら、リーダーと総司さんのペルソナについても同じことが言えるで

あります。変幻自在に多数のペルソナを操るリーダーが、こちらに来てからオルフェウスしか召喚していませんし、総司さんは迷宮に入る前に言っていた2体に加え、光属性の即死攻撃スキルを持つ『スネコスリ』を召喚出来るようになっていてあります」

「それはそうだけど……というか、総司くんはいつの間に」

私は後ろの方で天田くんや荒垣さんたちと会話している総司くんの様子を見る。先行列と後続班に分かれても結局は戦闘を行う他に方法がないのなら、2つに分けて行動する意味もないのだけれど。

「君も他の力を喚べるのか？」

善くんが質問してくるが、そんなの私だって知りたい訳で。

「何故、今は喚べない？」

善くんに言われ、再度ペルソナを確認するも、そもそも「オルフェウス」以外のペルソナを持っていない。手元にあるのはシャドウを倒した時に得た「白紙のカード」があるだけだが……。

「『白紙のカード』……？」

私がそれを持って悩んでいると荒垣さんが様子を見に来て呟く。そして、数瞬思考した後、とある提案を行う。それはベルベットルームの住人であるエリザベスやテオドアに相談してみればいいのかということ。

「そうだな……もしこの先もリーダーがペルソナを付け替えられないとしたら、戦力に大きな痛手だ。さすがにペルソナに目覚めたばかりの鳴上を戦闘の中心に置く訳にはいかないし、厳しい戦いになる前に、一度ベルベットルームで話を聞きたいな」

「分かりました。すぐに戻りましょう」

私はそう言うのとテオドアのお店で購入したカエレルを取り出す。

「使い方は忍者が煙幕を張るみたいに、こうっっ！」

私がかエレルを床に叩きつけると閃光が私たちを包み込み、次の瞬間には不思議の国のアナタの迷宮の入り口に飛ばされていた。テオドアも便利な道具を作ってくれたと思う。おかげで帰りの心配をする必要が無くて助かる。

さて、迷宮から戻ったことだし白紙のカードのことや新しいペルソナが手に入らないことについて聞きに行かないと。そう思いつつ、私は皆を引き連れてベルベットルームへ向かう。

「ここがベルベットルーム。……？あの2枚の扉は何でしょうか」

「それが分からないのです。ご覧の通り、鍵が掛っているので奥を確かめようもございません。無意味な事は起こらないこの場所……。いずれその役割が私どもの前に現れてくることでしょう」

アイギスの質問に答えるエリザベスさんもここで何が起こっているのかを完全には

把握できていない様子。彼女に聞いても埒があかないと判断した美鶴先輩は私たちよりも先に閉じ込められていた善くと玲ちゃんと尋ねる。

「……善、玲。君たちはこの扉を知っているか？」

「んー、知らない」

「分からない……。が、おそらく、君達の場所に繋がっている」

君達の場所に繋がっている。つまり、この扉の先には元の世界があるかもしれないという事。

「出口と言うことか？何故分かる？」

「君達が来るまで、この小屋自体が存在しなかった。だからここは、君達の場所であり、そこにある扉は君達の扉だと……。そんな気がするだけだ。確証はない……。忘れてくれ」

「……………」

美鶴先輩は扉に近づくとノブを回し、扉を開けようとしてみるが4つの鍵に阻まれ開けることはできない。

「やはり、開かないか。今は放っておくしかないようだな」

腕を組んだまま思考に耽ってしまった美鶴先輩を見て、アイギスが一步前に出る。そして、エリザバスさんを見ながら告げる。

「では、本題に入らせていただきます。我らがリーダーが新しいペルソナを入手出来ないのはどういいう見か聞きに来たであります」

「まあ……何故でしょう？」

エリザベスさんの切り返しに私たちはずっこける。ゆかりや順平は「今の間はなんだ」と文句を言っているが、この切り返しを予想していた総司くんや天田くんたちは苦笑いしながら事の成り行きを見ている。

「こつちのセリフでございます」

アイギスなんかはエリザベスさんのセリフの真似をして返すくらいだ。順平が後方で小さく口調がうつっていることをツツコムが誰も指摘しようとしめない。

「では、それほど慣れてはおりませんが、少々観てみることにいたしましょう。そちらへお座りください」

私はエリザベスさんに言われるまま、ソファに座った。自分の右隣にはゆかり、左隣にはペルソナ能力に目覚めたばかりの総司くんが座らされる。

エリザベスさんは私たちの前にタロットカードを慣れた手つきで広げる。このタロットカードは私たちの定めを観る為のものらしい。そうやって彼女はテーブルの上に20枚ほどのカードを広げた。

そして、私の目の前のードを一枚めくった。

「『塔』……?」

エリザベスさんはめくったカードを凝視している。私はそんな彼女を見ながら、ここにはいない少女のことを思い浮かべた。どうして総司くんがここにいて、優ちゃんはいないのか。もしかして、これにも何か意味があるのではないか。

「な、何なの?」

「分かりません」

「……は?」

ゆかりがカードを凝視したまましゃべらない彼女に尋ねると返ってきたのは意味を為さない言葉。意味が分からないよとゆかりは私を見てくる。

「カードの絵……アルカナは多様な解釈ができるもの」

エリザベスさんは塔のカードを手に取り、皆に見える様に顔の横に持ちながら言う。

「今は『塔』が出たことではなく、『愚者』が出なかったことが重要な意味を持つておられます」

「愚者?……バカモノってこと?」

エリザベスさんの話を聞いた順平がそんな失礼なことを言つてのける。それを否定するようにエリザベスさんがすぐに訂正をいれる。

「いいえ。『愚者』は数字の0……『始まり』そして『無限の可能性』を意味するアル

カナ。その意味の通り、お客人は多数のペルソナを自在に使いこなしていらつしやる。私共はその能力を“ワイルド”と呼んでおります」

「ワイルド……」

「ですが、この場所の影響でしようか、本来の“ワイルド”の力は形を変えている様子」
ゆかりの呟きに答える様にエリザベスさんは自分の分析結果を話す。そして、私を
まっすぐ見ながら彼女はそのまま言葉が続ける。

「あなた自身の“オルフェウス”はここで外すことはできないようです」

「付け替えが出来ない……ということか？それでは、戦力に大きな痛手だがこの際、仕方がないか」

美鶴先輩が私を気遣うようにそんな言葉を掛けてくれた。しかし、エリザベスさんの話はまだ終わっていないかった。私のワイルドの力は失われた訳ではないと断言したのだ。

「まさしく“無限の可能性”……。こんなことって」

「ど、どういふこと？」

とは言ってもエリザベスさんにとつてもこれは予想だしなかったことなのか戸惑いを感じられる。その戸惑う姿に不安を覚えたゆかりが尋ねる。

「付け替えられないペルソナの“他に”、“もう1体のペルソナを付けられる”ような

のです。そしてその“もう1体”はご自由に召喚できる。つまり、付け替えが可能のよう……」

「同時に2体……ですか!？」

風花が驚きの声を上げる。確かにペルソナを2体同時に召喚出来れば、付け替えられないペルソナがあるとはいえ、戦略が大いに広がる

「ただし、付け替え可能な1体の方は本来の力を発揮できず、補助的な役割と捉えた方が宜しいかと。“オルフェウス”が“メイン”とすると付け替え可能なペルソナは“サブ”……。その2体を同時につけていられる。そうお考えになるといいでしょう」

らなかつた。そんな甘い話しある訳ないかと大きくため息をつく横で、順平が驚愕の表情を浮かべながら言う。

「“ワイルド”すげーな……」

「そして、もしや……。少々お待ち下さい」

エリザベスさんは、テーブルの上に20枚ほどのカードを再び広げた。そして、ゆかりの目の前のカードを1枚めくる。めくられたカードは『愚者』。

「“愚者”……こんなことが……」

「え、え、何? 私もワイルドとか……ハハ、まさかね」

「岳羽ゆかり様だけではありません。鳴上総司様以外の全員に“愚者”の加護が出てい

らっしやいます」

「へっ?」

「おろ?」

私の両隣に座った2人から別々の意味の声が聞こえた。

「全員に……?」

「ご自分のペルソナを“メイン”とし、付け替え可能なペルソナを“サブ”として、同時につける。皆様方にも、それが可能なようでございます」

「2体って、なんか信じられないです。けど、強くなった気がしますね!」

天田くんが率直な気持ちを言葉にすると、特別課外活動部の面々はそれぞれ頷いた。けれどそれを告げたエリザベスさんと左隣に座る総司くんはそこはかとなく不安そうだ。

「ですがこんなイレギュラー……何故?“愚者”の力が強まったような……。まるでワイルドがもうお一方いらっしやるよう。まさか、この2枚の扉の片方は……」

「ワイルドがもう1人……?それは総司さんではないのですか?」

アイギスがそんな質問をするとエリザベスさんは首を横に振った。だけれど迷宮内で見えたペルソナの付け替える能力は本物だった。扱うペルソナは弱い物ばかりだったけれど、私も戦いはじめた頃はあんなものだったし。

「鳴上総司様のペルソナに関しては、私共の管轄外。触れることも観ることも叶いません。もちろんお客様の手助けとしてのサポートもすることができません」

皆はサポートと聞いて首を傾げているが、私には意味が分かった。総司くんはペルソナを合体することもペルソナ全書からも好きなペルソナを購入し召喚することもできないのだということを。彼は手に入れたペルソナを地道にレベル上げていくか、消滅させて入れ替えて行く他に方法がないのだ。それではかなり制限がついてしまう。

しよんぼりと項垂れる総司くんを見て話題を変えた方が良いと判断した私は周囲を見渡す。すると善くんの横で話を聞いていた玲ちゃんが『とたたつ』とエリザベスさんの近くに駆け寄ってきて尋ねる。

「わたしも善も、ペルソナ使える?」

私たちの話を聞いていて、もしかしたらという希望を抱いて尋ねた玲ちゃんであったが現実は無情であった。

「……失礼いたしました。善様と玲様はペルソナをそもそもお持ちでないので不可能かと」

「そっかー……。ペルソナ、かつこいいのになあ」

玲ちゃんはそんなことを呟きながら定位置である善くんの横までトボトボ歩いて帰っていく。代わりに美鶴先輩が前に出てくる。

「善と玲がペルソナを持つていないのはどういうことだ？ シャドウと戦うのには必須ではないのか？」

「……それはおそらく、この場所自体の謎と深く関わることではないでしょう。ここは『狭間の地』。意識の深いところにそつとたゆたう浮島のような場所。本来、生身の人間がいるような場所ではありません。そこにいらしたのであれば……例えば、ペルソナやシャドウといった存在と同一化したのかも」

「善くんたちがペルソナ!？」

「ペルソナやシャドウが自我を持つなんて聞いたことが無い!」

「あくまでも私の仮説……でございます」

「だが……。まあ、今は何も分からないか」

「では、皆さまこれはお持ちですか？」

エリザベスさんはそう言つて白紙のカードを取り出した。私はこれまでのシャドウとの戦いで得ていたカードを鞆の中から取り出すと机の上に置いてエリザベスさんへ手渡す。エリザベスさんが力を籠めると、白紙だったカードに絵柄が徐々に浮き上がつていく。そして、ついには白紙のカードたちはそれぞれペルソナへと変化した。

『剛毅ザントマン』

『魔術師アガシオン』

『法王アンズー』

『恋愛ピクシー』

『刑死者コロポックル』

レベルは2と3で弱いけれど、組み合わせ次第では使える物になると思われる。話が済んだので作戦会議を行うことになり、皆がベルベットルームを後にしていく。

私も立ち上がって皆の後を追おうとした時、エリザベスさんに呼びとめられた。

「お客様、先ほどは本人がいたため説明するのが躊躇われましたが、貴女さましかいないこの場で警告をさせていただきます。お気をつけなさいませ、鳴上総司様は危険です」「危険? どういう意味ですか?」

「彼のアルカナは愚者……いえ、『逆位置の世界』に固定されています。様々な解釈が出来ますが、『何か避けられない運命を変える為に、自らの命を終わらせ、その人生を捧げる覚悟を持たれている』ようです。この世界で少しでも彼のありようを変えられるように行動された方がよろしいかと思われませう」

そういうとエリザベスさんもベルベットルームを後にして、私だけが残される。

「総司くん……」

私はしばらくの間、そこで立ち尽くすことしかできなかつた。

不思議な国のアナタ編—④

ベルベツトルームから出た私たちは作戦会議をするためにフードコーナーに移動する。

白紙のカードからペルソナへと変化したのは5枚。私はじつくりと能力を見て首を傾げる。元の世界で得る事の出来たペルソナの能力とスキルが違うためだ。

「アンズーとピクシーはともかく、ザントマンとアガシオンとコロポックルのこれは……」

私の呟きにメンバーの視線が集まる。私は情報共有するため、ザントマンが書かれたカードを持って説明する。

「例えば剛毅ザントマンですけど、レベルは3でHPをやや上げます。そしてスキルには壊属性の小ダメージに加え中確率で睡眠効果を与える『まどろみパンチ』と非戦闘時に周囲にある宝箱の位置を地図上に表示する『財宝ハンター』というものを持っています」

私が皆の様子を見ると腕を組んで眉を顰めたり、隣にいる人と話をしたりして、あまり要領を得ていない様子だ。ただ順平、総司くん、天田くんの3人は元の世界で慣れ親

しんだ『ゲーム』の経験が生きているのか、メンバーで唯一納得するように頷いている。

「メインペルソナが持つていない属性攻撃を持つサブペルソナをつけて、あらゆる局面に対応できるようにするっていうのが基本的な行動になりますね」

「そうだなー。元々回復スキルを持つゆかりつちに、回復スキルを持つサブペルソナを持たせても重複するだけで無駄だしな」

「それと同じで各属性魔法スキルを持つサブペルソナは、その属性魔法スキルを持たない人に持たせるのがいいと思います」

きつと意見を言ったのが順平だけだったなら、『ゲームと一緒にするな』ってツッコミが入ったのだろうけれど、総司くんと天田くんも加わるとこんなにも説得力がある。

「じゃあ、とりあえずお試して先行する班のメンバーがそれぞれ持つて戦ってみようか。5枚しかないから善くと玲ちゃんが入ってもらおうとして……レベルの低い順で順平、ゆかり、天田くん、総司くんは持てないからパス。えつと美鶴先輩お願いします」

「……………」 or z

四つ這いで落ち込む少年の姿が見えるが、ここは置いておくとして集まってきたメンバーの前にペルソナカードを置き、先ほどの意見を念頭に振り分けて行く。とはいっても選択肢はそれほど多くはないのであまり悩むことはない。

「じゃあ、順平がザントマン。アガシオンはゆかり。アンズーは美鶴先輩で、ピクシーは天田くんを持ってもらおうかな。コロポックルは私……いや、風花がつけてみて？」

「え、私がですか？」

風花は首を傾げながらも私からペルソナカードを受け取る。すると予想通りサブペルソナの恩恵を受ける事ができたようだ。それを見た真田先輩や荒垣さんが色々工夫する必要があるそうだと云っている。

「湊さんはサブペルソナをつけなくてもいいんですか？」

天田くんが心配して声を掛けてきてくれたが、今までなくてもどうにかなっていたので問題ないよと自信を見せる様に胸を張る。すると椅子が傾き転びそうになった。それをゆかりに指摘されて気付いたが、シャドウの素材を入れていた鞆がそこそこ膨れているので、不思議の国のアナタに再度潜る前に、テオドアの店『てづくりこくぼく』に寄ることにしたのだった。



装備とアイテムを調達した後、再び迷宮に挑戦することになったのだが……。

「つーか、またあそこまで歩かないといけないのか。だりーなー」

順平が手の後ろで頭の後ろで組みながらそう言った。確かにゲームであれば『最終到達階か

「始める」というご都合主義理論が使えるが、私たちにとっては現実。そう甘い話はない。私はさっさと諦めて地図を見る。

「えつと階段がある所までの最短ルートは……って、あれっ!？」

私は思わず地図を凝視する。私が前回書いた地図はお世辞にも見やすいものではなかった。通り抜けることが出来る壁には「?」マークを置いたり、F・O・Eが歩く所に「⇒」を書いたりしてごちゃごちゃとしていた。途中で地図を確認した美鶴先輩が「前衛的なナニカだな」と呆れていたように、とても見れたものじゃなかったのに。

「もしかして、総司くん。宝箱を開ける為に何か書きこんでいたけれど、君がやったの?」

「ええ、まあ。他の皆さんも見ろんだし、見やすい方がいいと思って。それと結城先輩、階段のところに行くなら、F・O・Eがいる部屋の手前のここを通り抜けるとすぐですよ」

総司くんが地図上のとある場所を指差すと確かに「⇔」のマークが浮かび上がっており、通れるようになっていことが分かる。私は宝箱と階段に目が奪われて、見落としていたが誰かが通れるようにしておいてくれたらしい。

「二応、私を書くけど。また後で綺麗に書き直してもらってもいい?」

「そのくらいお安いご用ですよ」

総司くんはそう言うと言田先輩や荒垣さんがいるところの下がっていった。私はその後ろ姿を見送った後、先行するメンバーを率いて迷宮内を進む。サブペルソナの恩恵によつて得た、自分のペルソナが持ちえないスキルを使った面々はむず痒そうな表情を浮かべながらも使いこなしている。ふと後続メンバーが気になつて振りかえるとあちらもシャドウと戦つていた。サブペルソナを持たない後方メンバーだが、多種多様なペルソナを操る総司くんを戦いの軸にすることで危なげなく戦うことが出来ている。

F・O・Eがいる部屋の前の壁を通り抜けて階段の前の部屋で後続を待つとすぐに彼らも来た。そして、先頭にいたアイギスが私に近づいてきてカードを2枚渡してくる。どうやらシャドウとの戦いで得たらしい。新しく加わつたペルソナは『愚者スライム』と『隠者アズミ』の2体。

「……スライムの方は致命傷を受けても耐え切る『食いしぼり』と敵を毒状態にする『ポイズマ』を持つている。アズミの方は氷属性のブフと倒した敵の素材入手確立を上げる『豊漁祈願』か」

ちなみにスライムの絵面を見た人にはデザイン的に不評のようで私がつけることになり、アズミの方は後方メンバーで氷結属性になにかと因縁のある真田先輩につけてもらうことになった。

迷宮の第2層に降りたが、特に変化はなく。私たちは周囲を警戒しながら先に進む。

総司くん率いる後方メンバーは私たちが先に行くのを確認しつつ周囲の探索を行っている。敵シャドウの種類も変わらないようなので、今の所はなんの支障もない。

たまた扉の先にシャドウが待ち構えていたりするものの、風花のバックアップによってそれが分かるので先制攻撃を仕掛けられることもなく、私たちは冷静に対処出来ている。そして、シャドウのいない広い空間に入ったところで順平がだらしなく座りこんだ。

「ハア……けっこー歩いたつすね。ちつと休んで行きませんか？」

「なんだ、この程度でへばるなんてだらしないな。身体が鈍っているんじゃないのか？」
「もう少し、普段から運動をされるべきだと思えますよ。順平さん」

そんな順平の姿を見て、真田先輩や天田くんといった後からやってきたメンバーが口々に言っただけじゃなく、同意を求めるような声を上げる。

「えー、絶対オレだけじゃないつすよ。ね？玲ちゃん。ねー？」

「あ、はい！おなかは当然すいてます！」

「それでは、食欲を刺激しそうなこちらの場所で、少々の休憩を提案するであります」

そう言うアイギスの言葉に従って周囲を見渡すと大きなお菓子のようなのが、壁に飾りつけられている。それを見たゆかりが、

「確かに美味しそうだけど、さすがに食べられないよね？」

「このザラつく手触り、漂うインク臭……。ずばり、パルプ100%であります！」
「そっかー、ぱるぶか！」

アイギスが手に持ったタルトを模ったソレを見て、嬉しそうに言う玲ちゃんに私は咄嗟に制止するように声を掛けようとしたのだが、一步遅かった。玲ちゃんは唾然とする私たちの前で、その“手作りタルト”の端を口に含み咀嚼し始めた。

「はむはむ。うん、不思議な触感のお菓子だね。ぱるぶつて……うえっ」

「紙だよ紙!!」

「誰か水を持ってない!？」

ゆかりの慌てる声に気付いた総司くんが鞆の中から何故かペットボトルに入ったウーロン茶を取り出し、キャップを開け玲ちゃんに持たせる。玲ちゃんは渡されたウーロン茶をごくごくくと飲み干していく。

「なるほど……いくらリアルとはいえ、ここは童話本の世界。当然、周りも無機物ということか」

美鶴先輩は冷静に状況分析をしているが、そもそもここは“ヤソガミコウコウ”の文藝祭の出し物のひとつ。手作り感があるのも、元々が人が作ったものをベースにしてシャドウの力が加わり迷宮化したものなのではないだろうか。それならば、飾り付けにああいった紙で作ったお菓子を壁に張っていたとしてもおかしくはない。

「でも、食べられなくて良かったかも。これがマジのお菓子だったら、体重やばいどころじゃないし」

「ゆかちゃん、お菓子嫌いななの？」

「ゆ、ゆかちゃん？なんか……カワイイな。お菓子は好きだよ、女子ですし。玲ちゃんはそれだけ食べててよく太んないね」

ゆかりがそう言うのと異次元ポケットから取り出したタコ焼きをほっぽり出して、玲ちゃんは善くんに向き直って慌てたように尋ねる。

「太る……善、わたし太った？」

「変わらない」

「なんだあー」

善くんの返答を聞いてしよんぼりとした言葉を呟いた玲ちゃんは、ポケットからフラックフルトを取り出すと頬張った。まだ食べますか……。

「残念なのか……うう……うらやましい」

太らない体質な玲ちゃんを見て、美味しいご飯やデザートが出される日常で、部活で汗を流したり、タルタロスでシャドウを相手に戦って汗を流したりして、必死になって体型を維持している女の子代表が悔しそうに彼女を見ている。

そんな中、メンバーで唯一の小学生である天田くんが素朴な疑問を玲ちゃんにぶつけ

る。

「玲さんは、嫌いな食べ物とかないんですか？ 苦いピーマンとか、苦いコーヒーとか」

「うーん……ぱるぷ」

「食べ物じゃないです……」

天田くんはなんだかガツカリした雰囲気を目線を下に向ける。そんな天田くんの横で総司くんがメモをとっているがそれは意味のない代物となった。何せ、玲ちゃんは

……

「味がある食べ物なら、何でも好きです！」

「範囲広すぎだ」

荒垣さんがツツコンのように嫌いなものなど存在しないと切り切ったのだから。腕を組んで話を聞いていた真田先輩が指を鳴らして、玲ちゃんにとあるものを手渡す。

「わあ、これケーキ？」

玲ちゃんに手渡されたそれは一見すると棒状のお菓子だが、私たちが知る真田先輩がそんなお洒落なものを持ち歩いているはずがない。そんな確信めいたことを思っていると案の定、それはプロテインバーであった。玲ちゃんは真田先輩に促されるまま、それを口にする。

「……ん〜、粉っぽい！ おいひい!!」

「これ一本で、なんとタンパク質が20グラム以上補給できる。摂取すると、体中に力がみなぎり、血沸き肉躍る魔法の食べ物だ」

「摂取すると、体中に力がみなぎり血したたる肉が焼き放題の踊り食いする魔法の食べ物!？」

玲ちゃんの盛大な聞き間違いに順平とゆかりが噴き出した。ちなみに真田先輩の偏ったプロテイン知識を正すため、タンパク質を効率よく吸収するために必要な必須アミノ酸を多く含む食品について、総司くんが天田くんとアイギスと風花に説明している。

私は視線を玲ちゃんたちに戻す。すると真田先輩がジエスチャーをしながら熱く語っているところだった。

「ああ、そうだ！鍛錬すれば、いずれ熊だつて素手で倒せるようになるぞ」
「熊を素手で?……本当か?」

玲ちゃんの隣で話を聞いていた善くんも興味を抱いた様に少し反応した。その様子を見かね、荒垣さんが話に加わる。

「いい加減にしろ、アキ。こいつら本気で信じるだろ」

「嘘を言ったか?」

「素手で熊を倒せるまでプロテイン食う気か?この脳筋バカが」

「おい……今、バカと言ったか？」

荒垣さんの余計なひと言に険悪な雰囲気になった2人は広場の中央で眼を飛ばしあう。それを見た順平とゆかりが話している。

「2人になると急にガキっぽくなるよな、あのヒトら……。昔からあんななんかね？」

「知らないって……。桐条先輩に任せておけばいいんじゃない？」

彼らの話題に上がった美鶴先輩の姿を探そうと周囲を見渡そうとすると善くんが話しかけて来た。

「湊。結局、プロテ……とやらを撮取すると、どうなるんだ？」

私は真田先輩の話を、総司くんが説明していた必須アミノ酸の話を加え、筋肉を効率よくつけるのに有効であることを話す。話を聞いていた善くんは良く分かったと感謝の言葉を述べてきて、ゆかりからも合格点をもらう。

ちなみに上級生2人の口喧嘩は呆れ気味的美鶴先輩に止められるまで続くのだった。

休憩を終えた私たちは扉を開け迷宮の奥へ進む。その中で、私たちは1冊の美麗な装飾の絵本を見つけた。天田くんと総司くんがそれを拾うと表紙には四つ葉のクローバーが描かれている。

「なんででしょう、これ？」

「『飛び出る絵本』か。昔、優に読んで聞かせたっけ」

総司くんの何気ない発言に私たちは鳴上家の家庭事情を察した。双子の妹に本を読んで聞かせる兄って、両親が家にいないっていうことを暗示しているようだったから。

「……ごほん。怪しいな、それは」

「確かに、この世界にあるものだからな。何が飛び出しても不思議はねえ」

確かに美鶴先輩と荒垣さんが言うとおり、ここにはシャドウがいる。何が起きても不思議ではない。

「表紙には四つ葉のクローバーが書かれているよ？食べていいって事？」

「どうしてそうなった」

「総司、天田。とにかく聞くぞ！シャドウなら望むところだ！」

「お前もどうしてそうなった。……って、お前らこっち向けて開けようとすんな！」

見れば総司くと天田くんは絵本を私たちの方へ向けて、自分たちは背表紙の方から絵本を観音開きにしようとしている。私たちは咄嗟に戦闘態勢を取ったのだが……

「よ、四つ葉のクローバー？」

絵本の中から飛び出してきたのは、四つ葉のクローバーだった。いや確かに表紙には描かれていたけれど……。

「皆さん、見てください」

そう言う天田くんの声に導かれ、絵本の表紙を見ると先ほどまで描かれていた四つ葉のクローバーは跡も形もなくなっていた。

「飛び出るってそこから!？」

「満を持してのツツコミに一同、ほっとしてあります」

「あ、ど、どうも……」

にこやかにほほ笑むアイギスに毒気を抜かれたゆかりが項垂れる。

私が苦笑いしながらそんな2人のやり取りを見てみると、天田くんを抱えて逃げ回る総司くんの姿が映った。追いかけているのは荒垣さん。結果はどうあれ、彼らのした行動は許されないということなのだろうか。……あ、カストールの攻撃で2人とも飛ばされちゃった

不思議の国のアナタ編—⑤

始まりは突然だった。

迷宮を進む私たちの前にピンク色のウサギっぽい物体が現れた。シャドウとは違う感じなので、原作にもウサギは登場することから調べようと捕まえることになったのだが、

「このウサ公、待ちやがれ！」

「総司さん、そつちです！」

「なっ、僕を踏み台にした!？」

「げふっ……」

「真田サーン!!」

「明彦がやられた！」

「「この人でなし!!」」

シャドウでも何でもなかった1匹のウサギを相手しているだけなのに何だろう、このカオス。皆、ちよつと頭に血が上りすぎなのではないだろうか。

「とりあえず、……マハブフ」

「えつと、皆。落ち着いた?」

ガクガクと身を縮みこまらせて震えるメンバーを前にして、私は落ち着くように促す。そして、あのウサギが私たちの手が届かないギリギリの距離を保って逃げていることと、地図を見せながら効率よく相手を追い詰めて行く必要があることを説明する。

それに私たちは2班いるのだから、最初から挟撃していればこんなみじめな思いをしないで済んだのだ。

「落ち着いたけど、止める方法は他にもあったでしょ!氷結属性が弱点な真田先輩と運が悪かった総司くんが再起不能状態じゃない!!」

ゆかりの鋭いツツコミを受けて私は視線を逸らす。その視線の先には気絶してしまつた真田先輩と総司くんが静かに横たわっている。その視線の先には気絶してし

私は靴を触り、集めて来たシャドウの素材と取得アイテムの整理もあるし、一度帰還することを提案した。皆は倒れている2人を見て、仕方がないと頷いたので、私はカエレルを使い皆とヤソガミコウコウへ戻る。

出迎えてくれた風花と一緒に、毒々しい変貌を遂げた保健室に足を踏み入れた私たちは気絶してしまつた2人をエリザベスさんに預けた後、テオドアのでづくりこくぼくに

立ち寄り、素材を売って装備品とアイテムの補充を行う。

2人が回復するのを待って、再度迷宮に行こうとして、私は立ち止まった。

「そういえば、総司くん。ペルソナはどのくらい増えた？」

私が総司くんに向かって振り向くと、皆の視線も自然と彼に向く。総司くんはちよつと待つように言うと言腕を組んで悩み始めた。すると私たちが使っているサブペルソナと同じような感じでカードとして彼が保有しているペルソナが具現化した。そして1枚1枚手にとって、彼は保有しているペルソナを説明していく。

「えつとキジムナー、フェアリー、スネコスリまでは皆さんの知る通りです。で、あれから増えたのは壊属性スキルを持つ『ゴブリン』と雷属性スキルを持つ『チュウコ』ですね」

私は総司くんが保有するペルソナを確認して行く。

『太陽キジムナー』 耐性：火、弱点：氷。スキルはアギ、マハラギといった火炎攻撃とスクカジヤを持つ。

『恋愛フェアリー』 弱点：雷。スキルは回復魔法とブフといった氷結魔法を持つ。

『正義スネコスリ』 耐性：光と闇、弱点：斬と壊。スキルは即死系のハマと回復魔法。加えて状態異常回復も使える。

『愚者ゴブリン』 弱点：火と光。スキルは突撃やアサルトダイブといった物理攻撃と自身

の攻撃力を上げるタルカジャを持つ。

『隠者チュウコ』耐性・雷、弱点・風。スキルはジオ、マハジオといった電撃攻撃と相手の防御力をさげるラクンダが使える。

「ガル系とムド系以外は全部、総司くんでカバーできるようになったつてことだね。となるとコロマルにガル系の魔法スキルを持つサブペルソナを持たせれば、後方に憂いはなくなる訳だ」

「あ、僕は後方組確定なんですね。……別に構いませんけれど」

総司くんはいじけるようにしてコロマルと戯れる。メンバーの構成上はこうしないといけないのだ。それに総司くんは元の世界でもコロマルと一緒にいることが多くて、コンビネーションは抜群だ。

実際、私たちが敗北することになったF・O・Eとの戦いの時もコロマルは総司くんの動きを阻害しないようにうまく立ち回りながら、援護できていたし。私たちはコロマルと一緒に戦おうと思ったら、アイギスに翻訳を頼まないといけないのでちよつとした間ができてしまうし、メンバー構成はこれがベスト。

「順平たちのレベルも上がったし、メンバーも入れ替えよう。美鶴先輩はストッパーとして残ってもらおうとして、真田先輩と荒垣さん、天田くんとアイギスが先行組に。サブ

ペルソナは現在『ザントマン』『ピクシー』『アンズ』『アガシオン』『コロポックル』『スライム』『アズミ』『アプサラス』の8体。先に手に入れていた5体はレベルアップして、もう覚えるスキルはないっ」と

先行組のメンバーの特性を簡単にまとめるところだ。

私は斬・火。

美鶴先輩は突・氷。

真田先輩は壊・雷。

荒垣さんは壊・無。

天田くんは突・雷と光。

アイギスは壊・無。

メンバーの中で魔力が高い美鶴先輩に火のスキルを持つアガシオン、天田くんは風のスキルを持つアンズを渡す。成長することでジオと電撃耐性を覚えたコロポックルを電撃が弱点なアイギスに渡し、ブフと氷結耐性を持つアズミはそのまま真田先輩に持つてもらうことで弱点をカバー。荒垣さんには物理攻撃スキルを持つザントマンを持つてもらう。私は回復を担うためにピクシーを所持する。

余ったスライムとアプサラスはそれぞれ順平とコロマルに渡す。ただ順平は嫌そうな表情を浮かべていた。やはり万人受けするビジュアルじゃないものね、スライムつ

て。

「これで準備オツケーかな？」

「あとはテオさんのところで帰還用アイテムと回復アイテムの補充ですね。何が起ころか分かりませんので準備していくに越したことはないですよ、皆さん」

風花の確認の声に皆が頷くのを見て、私たちははてづくりこゝぼくへと足を進める。そんな中、善くと玲ちゃんと総司くんが歩きながら何か話しかけている。

「じゅ……」

「えっと、善さん。何で玲さんは僕を……いや、僕の鞆を見ているんですかね？」

「……恐らく、君の鞆の中身が気になるのだろう。先ほども迷宮内でウーロン茶を取り出していただろう」

「ええ。このヤソガミコウコウで購入したアイテムを入れていきますから。……もしかして、あとで乾くと一緒に食べようと思っっているスイートポテトを狙って」

「総司くん！どこで買ったの？わたし、まだ食べてない!!」

「う、うわあっ?!善さん、助けて」

玲ちゃんは目の色を変えて、総司くんに襲いかかった。いや、総司くんから鞆をひつたくろうとしていて。善くんはどうしたものかと悩んでいたが、玲ちゃんを諫めることにしたらしく、彼女を抱きかかえた。

そして、総司くん申し訳なさそうにしながら、スイートポテトをくれないかを交渉している。結果、総司くんは渋々スイートポテトを差し出し、代わりに玲ちゃんからもらったドーナツ×2を鞆になおす。

「甘くておいし〜」

「玲、場を弁えてくれ。そして総司、すまない」

「いえ、また買えばいいですし。もらったドーナツもおいしそうなのでかまいませんよ」
デザートを食べて頬を桃色に染めて悶える玲ちゃんの後ろで男2人が同時にため息をつく。可愛い女の子には男の子は振り回される運命なのだよ。私はそんなことを思いながら、皆の後を追ってテオの店に入った。



そして件のウサギを追って不思議の国のアナタの迷宮の第3層に降り立つ。またも雰囲気が変わり、今度はまるで城壁内にいるような錯覚を覚えるような風景だった。一変した光景に息を呑む面々。中でも玲ちゃんは身体を震わせ、隣にいる善くんにしがみつく。

天田くんが身体を震わせている玲ちゃんに怖くないかを尋ねると彼女は、まるで自身に言い聞かせる様に大きな声で答えた。

「これはいわゆる武者震いというやつで震えて体温を上げることで胃の消化が良くなって脂っこいものが食べられる！」

「武者震いって、そういうもの……かなあ？」

「わたし、頑張ります。みんなと、帰りたいからです！乾ちゃん、よろしくお願いします！……むぐ」

玲ちゃんは怖さを払拭するために言い終えた後、ポケットからタコ焼きを取りだして食べ始める。善くんは玲ちゃんからお願いされる形になった天田くんを見下ろしている。

彼の視線に何かを感じた天田くんはきよろきよろと周囲を見渡し、目的の人を見つけると駆け寄って彼の背後に隠れた。いきなり盾にされた総司くんは首を傾げている。

「おーおー、王子さま妬いてるで」

順平がその様子を見て茶化す様にいうと、玲ちゃんがタコ焼きを食べるのをやめて期待を籠めた瞳で善くんを見上げる。

「妬いてる？善、妬いてるの？」

「やく？何をだ？」

しかし、残念ながら善くんはそこまで女心を理解できていなかった。いや、恋愛経験値が足りていないようにも見える。私とゆかりの見立てだと善くと玲ちゃんは相思

相愛つぼいので時間をかければお似合いのカップルになるだろう。これは善くんの恋愛方面の教育も必要となるかもしれない。だが、今はレベル1の彼に玲ちゃんの気持ちを察しろというのは無理な話な訳で。

「妬いてないの？」

しょんぼりといった感じで肩を落とした玲ちゃんを慰める術は、今の善くんは持ち合わせていないだろう。その証拠に彼は勘違いしているし。

「だから、何をだ？ 私が今何かを焼いているように見えるのか？」

「見えない……」

「善くんって、結構ニブイ？」

「いや、あれは恋をしたことがないんだよ、ゆかり。でも素質はあると思うから、これからに期待だね」

私とゆかりが話している横で、順平が玲ちゃんを褒めて善くんに思い切り睨まれるとということがあったが、大した問題はなくこのまま探索を進めようとした瞬間、風花の声が入ってきた。

『皆さん、お疲れ様です！ エリザベスさんからお話があるそうなので、ベルベットルームまで来てください。とつてもいいことみたいですよ！ じゃあ、待っていますね！』
通信が切れるのを待って、何人かが口を開く。

「「うさんくさいな」」

「これまでのエリザベスさんの言動を振り返りますと、いいこと」である確率は高くないと思われませう」

アイギスはそう言うけれど、あのエリザベスさんを放置したまま探索を続けることの方がリスクが高い気がするのです、皆にそのことを伝える。するとアイギスが、

「低い確率に賭けるということですね。潔いであります。では、忘れない内に行くであります」

と、言つて手を大きく振り上げた。その手にはいつのまにかカエレルが握られてい

る。

「使用する際はニンジャーのように投げるであります！」

彼女はそのまま床に思い切り叩きつけた。使用方法は間違っていないけれど、少々やり過ぎではなからうかと思つたのは、カエレルが床にめり込んで光を発さなくて、皆が頭の上にクエスチョンマークを浮かべていたら、いつのまにかヤソガミコウコウに戻つていたのである。

「……ともかく、ベルベットルームに行きますか」

「そだね」

若干疲れ気味のゆかりたちを伴つて私はベルベットルームに入っていく。

エリザベスさんから齎されたのは、ペルソナの合体についてのことだった。2体以上のペルソナの合成をすることでペルソナは強力な力を得て、戦いや探索を助ける。それに加えて、今までに召喚したことのあるペルソナは全書と呼ばれる辞典から費用を払うことで召喚できるようになった。まあ、私にとっては慣れ親しんだシステムである。

ここに来る前にロクでもないことだと思っていた面々から、何故かため息がこぼれる。

「普通に『いいこと』だったな」

「ガツカリであります」

そんなことを言う荒垣さんとアイギスを放っておきつつ、私は早速ペルソナの合体を行う。

対象はアガシオンとアンズーの2体。テーブルの上に置いたペルソナカードが浮かび上がり、上空で重なり光となつて落ちて来たものをエリザベスさんが器用にペルソナ全書で挟み込んで受け止める。そして、私に向かって差し出す。生み出されたのは『女教皇アメノウズメ』元々覚えていたハマに加えてアガシオンとアンズーが持っていたスキルであるアギとガルを持つペルソナである。

それを見ていたメンバーから拍手喝采が沸き起こる。それによつて気を良くしたエリザベスさんから強烈な視線を感じる。彼女の目もつと寄越せと言っているような

気がするけれど、手持ちが少ない今、無暗やたらにサブペルソナを減らすのは愚の骨頂。私はまた来るからと言って、その場を後にするのだった。

さて、不思議の国のアナタの迷宮第3層だが、水が足りていないのか枯れ気味な花を見つれたり、一方通行な抜け道を通って迷ったり、白いバラを必死に赤く塗る兵隊さんたちにほっこりしながら先に進む。

ちなみの一步通行な抜け道によって迷路となっていた場所だが、私たちが行き来するのを眺めていた総司くんが地図を書いたことによつてあっさり突破できた。私と一緒に歩き回ることになった先輩方には本当に申し訳ないことをしてしまったと反省。

そして、歩を進めた私たちは運命の再開を果たす。

「あ、ウサギ！今度こそ逃がさないんだから！」

「捕獲モードに入ります」

私たちの姿を見て逃げて行くウサギを追つて走り出そうとする面々をとにかく落ち着かせる。そうやって無暗に追いかけては今までの二の舞になると。

「まずは周辺状況を調べるのが先決ですよ、結城先輩」

「うん。ここがどんな風な作りになっているのかを見極めて行動しないと」

私たちは周囲の状況を見ながら動き、先行班と後方班で連携することでも容易く

ウサギを袋小路に追い詰めたのだが、その袋小路には例の額縁が飾ってあった。皆は氣付いていないよう息をまいているが、アイギスがウサギに跳びかかろうとした瞬間、ウサギは額縁をぶち破つて逃げてしまった。

「目標、逃亡しました。追尾態勢に変更します」

「はあ、どうやつても捕まえられない気がする……」

アイギスとゆかりがそんなことを言う横で、私は地図を広げる。もし、ここで片方がこの額縁を通つてウサギを追い、もう片方の班が待ち伏せすれば一網打尽なのではないかと思う。

「結城先輩、僕たちはここの角であのウサギがくるのを待ち構えますので、先輩たちを連れて追つてください。挟撃しましょう！」

「それがいいか。うん、お願い。総司くん」

総司くんはしっかりと頷くと、順平やゆかりたちのところに行つて作戦を説明する。彼らの様子を見てみると理解してくれたのか、親指を立てて作戦を了承したとの合図を貰う。私はそれに頷き、美鶴先輩たちを連れて破られた額縁を通つて向こう側に出ると、きよろきよろと周囲を警戒していたピンク色のウサギを追いたてる。

「待てこちらウサ公！」

「次は逃がさん！」

荒垣さんと真田さんが互いに競い合うようにウサギを追いかける。それを見ている美鶴先輩の額に青筋が浮かびつつある。私はアイギスと天田くん近づき、これは拙いかもとメンバーの班分けをミスったことを後悔する。

それはともかくこの先を曲がれば、総司くん率いる後方班が待機する場所という所に出た。タイミングを合わせて正面から順平とゆかり、コロマルがウサギを迎え撃つ。こちらにも真田先輩と荒垣さんがウサギを捕まえようと迫る。

ウサギには逃げ場がなく、これでお終いかと思われたが、ウサギは今までにない俊敏さで急ブレーキをかけると包囲網を作りだしていた面々の顔を踏んで抜けだし、上へジャンプした。

このままではまた鬼ごっこになってしまおうと思われたが、上空に飛び上がったウサギを通路の「横から」飛び出してきた総司くんが蹴り飛ばすことでウサギは袋小路の方へ飛んでいく。

「よし、予定通り！」

そんなことを言つてのける総司くんを怨みがましく見上げる順平や真田先輩たちの顔にはウサギの足跡がくつきりと残っている。

「と、とりあえず、追いつめましたよ！ここならどうですか！」

袋小路の奥で倒れたままピクリともしないウサギに向かって天田くんが言う。だが、

この袋小路にも例の額縁が飾られており……。案の定、ウサギは跳び起きるとぶち破つて行つた。

「また、壁に突つ込んだな」

善くんが冷静に言うのと、天田くんは大きいため息をついた。いつになったらこの鬼ごっこは終わりを迎えるのか。そんなことを言いたげだ。そんな中、額縁に開けられる穴を見ながら、美鶴先輩が呟く。

「素朴な疑問なのだが、ウサギはなぜこのような形で飛ぶのか。大の字に見えるが……」
「ウサギさんはこう飛ぶよ！ 私のお友達のウサギさんも、寝るときとか飛ぶときとか、こうやって手足を広げてるもん！」

「な、なるほど……。変わったタイプのウサギもいるんだな」

美鶴先輩は納得できないと言いたげだが、夢見る玲ちゃんのことを考えてそれ以上の言葉は紡がなかった。さすが生徒会長、空気をよめるんですね。

「おい早く行こうぜ」

蹴られた部分を手で擦りながら荒垣さんがそう言うと、他の面々もそれぞれ額縁に開けられた穴を通って行く。その先にあつた扉には南京錠がかけられていた。鍵穴も小さく、それ専用のものを探してこないといけないようだ。何せ、アイギスが壊そうとしてもビクともしないほど、衝撃に強い素材が使用されていたのだから。かといつて、今

まで通ってきた道にそんなものはどこにもなかったのだ、ここら辺を探索することになった。

周囲を探索すると風花から扉の反応があるというので集まると、そこには扉などなかった。代わりに無色透明の液体が入った瓶がいくつかテーブルの上に置かれているだけで。

するとコロマルが小さく吠えたので、見てみると足元に小さな青い扉があった。

『あ、きつとそれです！その扉の奥に、何かありそうですが……』

「奥と言ってもな……かなり小さな扉だ。コロマルでも無理だろう」

「美鶴さん、こんなものがありました」

そう言ってアイギスが美鶴先輩に渡したのはテーブルの上に置かれていた無色透明の液体が入った瓶。ラベルには“DRINK ME”と書かれているようだ。

『それ、アリスに出てきませんでした？確か、飲むと小さくなるドリンクだったはず』

子供の頃に読んでいたという風花の説明を聞いて、美鶴先輩は明らかに怪しむ目でそれを眺める。風花の言葉を独自に解釈した玲ちゃん言葉に皆が突っ込んだり、話を広げたりしている中、アイギスがテーブルの上に置かれている瓶の内の一本を持ってきた。

「成分を分析して宜しいでしょうか？金属を劣化させるような成分は入っていないよう

ですのぞ」

「うん、お願いするよ」

「了解しました」

アイギスはその言うとキヤップを外し、一気に飲み干す。ゆかりが寄つてきて、何にも異常はないかを尋ねる。

「……どう？」

「ほんのりフルーティであります」

「いや、味じゃなくて」

「身長、体重、そしてスリーサイズにも変化は見られません。加えて、人体に害を及ぼす物質は入っていないようです」

アイギスの分析を聞き終えた私たちはとりあえずこれからどうするかと顔を見合わせる。この小さな扉の先に何かがあるということは風花のアナライズで分かっているのだが、先に進む手段がないとなると……。

「毒でもねーし、小さくもなんねーか……。意味ありげだけど、効果ないんじゃない」
「どうしたものか。なあ、明彦、荒垣……」

そう話を振つた美鶴先輩の視線の先では仲良く2人で言い争いをしていた。しかもしようもない内容で。美鶴先輩はその光景を見て、頭を抱える。言い争いをする2人を

見ながら順平が疑問を口にすると、美鶴先輩がその疑問に答えて行くのだが、次第に2人の言い争いはヒートアップしていつている。そして、何故か「人畜無害」で「ブルーティ」な味のする液体の入った瓶を飲むことになっていて彼らは互いに負けるかど一気に飲み干した。

「あ、やつちつた……」

「つたく、馬鹿が……」

順平と美鶴先輩が真田先輩と荒垣さんの様子を見ながら言う。

「あれ、そういえば総司くんの声がさっきからしないけれど……」

私は周囲を見るが、彼の姿が見当たらない。代わりに善くんと玲ちゃんと天田くんの視線が同じ所に向かっている。その視線の先には開いた小さな扉が……。

「……もしかして、総司くん？」

「はい。ここに最初に到着したのは総司さんで、「のどが渴いた」と言つて鞆を探していたんですけれど、玲さんにウーロン茶を上げてしまつてないことに気付き、そこにあった瓶の中身を飲み干していたんです。で、皆さんが話し合っている内に総司さんは小さくなつてしまつて、待つのもなんだからと言つて中に入って行つちやいました」

「そこそこ待っているのだが、出てくる気配が無い。中で何かが起こっているのかもしれない」

天田くと善くんの話を聞いた私はテーブルの上に残っている“DRINK ME”と書かれたラベルの貼つてある瓶を手にとると一気に飲み干す。あまりの男気のあつた行動に玲ちゃんがおおーと声を上げた。

飲み干した私は、同様に液体を飲んだ先輩たちを見て頷いた。ドリンクの効果は靦面のように彼らは美鶴先輩に抓まれた状態で言い争いをしている。私の視界もどんどんと小さくなっていく。気付けば人形サイズになっていた。

私は深呼吸をした後、扉をくぐつて総司くんの後を追つた。扉をくぐつてすぐに彼の姿は確認できたけれど、その背中は途方に暮れていた。私が声を掛けながら近づくと理由はずぐに分かつた。

「いたいた。総司くん、鍵は……あつた？」

「あ、結城先輩。ええ、あそこに……」

彼が見上げる先には垣根の枝に引つかかつた状態の鍵がぶら下がつていた。1人ではどうやつても届かない高さだ。総司くんは振り返ると、意見を言つてくる。ここは何人かで組体操して、取るしかない。私は真田先輩と荒垣さんがドリンクを飲んで小さくなつていふことを伝える。すると、ギリギリで足りるかなとことだった。

「じゃあ、2人を迎えに行こうか」

「いや、その必要はなさそうですけれど、……何かあつたんですかね」

「……………」

私と総司くんが見たのは扉の所で息も絶え絶えにうつ伏せで倒れる真田先輩と荒垣さんとゆかりの姿だった。特にゆかりは何故か何かに全身を余すところなく舐められたようにびちやびちやでエロイ。ただ近寄るのはいやな感じだ。

「……………もしかして、コロマルかな？ 僕が小さくなった瞬間、コロマルがなんだか興奮しているような気がして、その視線に寒気が走ったから急いで扉の中に駆けこんだんです」「そういうことはちゃんと誰かに言っ行って行こうね。……………ゆかりー、大丈夫？」

私は入り口の方で倒れる3人に近づかないで、その場から声を掛ける。

「ハア……………ハア……………も、死ぬ……………」

「ハア……………ゴホツ、ハア……………。いい、トレーニングだな……………」

「ハア、あんま、走らせんな……………オエツ……………」

うつ伏せのまま、そんなことを言う彼らには悪いけれど、これから一働きしてもらわないといけない訳で。私が総司くんを目配せすると、彼は大きく頷き彼らに下へ歩いて行く。

「おい!?なんだ、いきなり!」

「持つところを考えろ、なんで足なんだ!?!」

総司くんは何も言わず真田先輩と荒垣さんを引き摺って行く。うまいことにコロマ

ルにあまり舐められた形跡のない足の部分を掴んでいる辺り、彼の観察眼の高さがうかがえる。総司くんは真田先輩と荒垣さんを無理やり立たせると正面から抱き合わせて、台になるように促す。鍵がある高さにはあと一人と半分の高さがあれば届きそうだ。

「真田先輩と師匠には上を見ないように言いくるめて来ました。岳羽先輩……はこのまま寝かしておきましょう。足りない高さは結城先輩を僕が肩車することで補うことにしましょう」

「ふあっ!?!」

私は思わず、倒れ伏したままのゆかりの様子を窺う。しかし、彼女はまだ動くこともできないくらい、丘の上に上げられた魚のようにぐったりしている。それに、コロマルの唾液でびちゃびちゃなのも気になるし……。私は枝に引つかかった鍵を睨みつける。「背に腹は代えられないってことか……うう……」

私は諦めて総司くんに肩車してもらおう。彼は華奢に見えるが、制服の下にはしっかりと鍛え上げられた肉体を持っているので私を肩車しても軽々と立ち上がった。そのまま彼は少し助走をつけ、飛び上がると真田先輩と荒垣さんが作った台に飛び乗る。

「ぐっ!?!」

台となつていている2人から苦悶の声上がる。だが、そのおかげで鍵はちようど私のお腹の前に来るくらいなので難なく取ることができた。うん、難なく取ることが出来たの

だ。

恐らく、真田先輩たちが作ってくれた台に乗れば、その上に乗った総司くんが背伸びすれば取れるくらいの高さだったのだ。それに気付いたのは総司くんに降ろされた後だったけれど、彼に悪気はないようだったので深くは追求できなかった……。

小部屋の外に出ると自然と身体の大きさが元に戻った。

「あ、戻ってきた！お帰りなさい！」

「ハイ……タダイマ……」

玲ちゃんの明るい声が響くが、返事をするゆかりに元気はない。玲ちゃんは気遣うような言葉をかけるが、ゆかりは首を横に振って話しかけないでオーラを出す。

「鍵は取ってきたぜ」

「よくやったな、ブリリアント！」

荒垣さんが小部屋で回収してきた鍵を美鶴先輩に手渡す。美鶴先輩は口角を上げて、私たちが褒めるが、足元にいたコロマルが一鳴きすると荒垣さんと真田先輩とゆかりの肩がびくりと跳ねる。

「ワンツ」

「く、来るな！」

「クーン……」

「少し、野生が過ぎた、反省している……とのことです」

近寄ろうとしたコロマルをすごい勢いで拒絶する真田先輩。そんな彼の姿を見て、コロマルがしょんぼりしたように情けない声で鳴く。その心象をアイギスが言葉にすると、彼らは居た堪れないような雰囲気醸し出すが、先ほどの恐怖体験が尾を引いているのは丸わかりである。

「とりあえず、さっきの南京錠の場所に行きましようか。そして、扉を開けたら一度ヤソガミコウコウに帰りましょう。岳羽先輩のためにも」

総司くんがそう言うと言とメンバーの皆がゆかりの現状を見て、一斉に大きく頷く。

「ねえ、湊。私、泣いてもいいよね……」

「うん。シャワー浴びたら、私の胸を貸してあげるね」

「うう……」

ゆかりはヤソガミコウコウの体育館にてシャワーを浴びるまで、どんよりとした空気をまとったままであった。

不思議の国のアナタ編——⑥

南京錠の掛っていた扉を抜けると件のウサギを再度発見する。すぐに追おうと動こうとする面々だったが、風花から同じフロアにF・O・Eがいることを聞いて、すぐに立ち止まった。

見ればバラを赤く塗っていたトランプ兵が2体いる。後方班の総司くんとコロマルがすぐにフロア内を調べ、赤いバラが2か所あることを教えてくれた。総司くんにはじょうろを渡し、私たちがその場で待機していると思いきいに動き回っていたF・O・Eが何かに引き寄せられるように私たちの視界から消えて行った。

その直後に戻ってきた総司くんとコロマルと合流した私たちはピンク色のウサギを追いかけるが、またしても額縁を破って逃走されてしまう。

「いつまで、この追いかけてっつて続くんだろ」

ゆかりがげんなりとした様子で話すと風花が慰める様に声を掛ける。

『この階層もあと少しだから、頑張つてゆかりちゃん』

バックアップを担当している風花がそういうなら、この階層も終わりが近いということなのだろう。私は皆に目配せをした後、破られた額縁の穴を通つて先に進む。進んだ

先のパワースポットでアイテムを回収した後、先に進もうとしたら善くと玲ちゃんが行き止まりに白いバラの花が咲いていることに気付いた。

「ワンワン！」

コロマルが大きく尻尾を振っている。どうやらバラの花に戯れているようだ。その様子を見ていた荒垣さんがコロマルに尋ねる。

「オマエ、バラが好きなのか？」

「ワン！」

律儀にお座りをして返事をしたコロマルに荒垣さんは『フツ』と笑って、その白いバラの花を回収する。回収する際に棘で指先を切った様子だったが、彼は気にすることなく花を潰さないように丁寧に鞆へ直していた。

「おーい、湊。この先にF・O・Eが3体いるって風花から連絡あったよ。……って、荒垣先輩、その手どうしたんですか？」

「ん、いや。なんでもねーよ」

「ワンワン」

「そうなんだ。まあいいけど、早く行こう。真田先輩が単独で突撃しそうなんだよね」

ゆかりはそう言って駆け足で戻っていく。私は荒垣さんやコロマルに目配せをした後、皆がいる場所に向かった。するとすでに扉が開いており、様子を見るに真田先輩が

突撃した後だった。

「あんの脳筋バカが！俺たちも行くぞ」

「ワン！」

荒垣さんとコロマルが急いで駆けて行くが、皆は扉から少し行つたところで立ち往生していた。

「えっと、状況は？」

「3体のF・O・Eとバラが3か所に設置されています。バラの配置と動きは分かりましたので、地図を貸してもらつてもいいですか？」

私は総司くんに地図を手渡し、彼の作業を眺める。まるで答えが分かっている様にさらさらと書きあげて行く彼の手際に、その様子を見ていた皆が感嘆の声を上げた。総司くんは書きあげた地図を床に置いて皆に見える様にした後、誘導する順番を説明していく。

「えっと、このフロアにいるバラを塗る兵隊さんは自分にとつて一番近い白いバラを塗りに行くという習性を持っています。それを利用して、まず一つだけ飛び出ているバラを白くして、左右どちらかの兵隊さんを足止めします。その後、ここに隣接しているバラを白くすれば、自然と階段への道は開けると思えますよ」

何の澁みもなく説明し終えた総司くん。順平や真田先輩が彼を小突いて褒め、天田く

んは出来る男の見本ともいえる総司くんを尊敬の眼差しで見つめている。

「ふむ、それでは湊」

「はい。総司くんの案で一度やってみます」

とは言ったものの、総司くんがあれだけ自信満々に説明していたことが外れるということ自体がありえない訳で、私たちはあっさりとF・O・Eが3体いるフロアから離れることに成功するのだった。そして、階段を降りる前に周囲の探索をして、道を開通させ宝箱を回収した後、私たちは階段を降りて新たな階層へと向かうのだった。

降り立った階層は今までと違い一本道だった。風景は全体的に赤くおどろおどろしい雰囲気醸し出しており、まさにボス部屋に続く道のようなのだ。その一本道を進んでいくと、上の階層で散々私たちをひっかき回してきたウサギが鎮座していた。

「ウサギ、こんなところにいたよー」

「あれ、コイツ逃げねーのな。んじや、今の内に捕まえて、と……」

そうやって順平が近づいて行くと、周囲をきよろきよろと見回しているだけであったウサギから強烈な光が発せられる。思わず目を瞑った私たちが目を開けると、そこにはウサギの姿は影も形も残っていなかった。

『ウ、ウサギの気配が完全に消滅しました！』

風花の声を聞いて、私は結局あのウサギは何をしたかかったのだろうかとう首を傾げる。す

ると、善くんが俯きながらぼそつと呟いた。

「ウサギ……。どこかで……。……ダメだ。何も思い出せそうにない」

彼は玲ちゃんと一緒に何者かに記憶を奪われた上で、この狭間の世界に閉じ込められている。さっきのウサギは彼の奪われた記憶と何か関係があったのだろうか。善くんは考えを振り払うように顔を横に振った後、玲ちゃんに話しかける。

「……玲、大丈夫か？」

「……うん。ここを出るって、決めたもん」

「ああ、そうだな。先へ進もう」

そう言った善くんが私を見つめてくる。私は何も言わずに頷き、皆の先頭に立って奥へと足を進めて行く。すると、明らかに異質で大きく堅牢な扉があった。

「完全にボスがいますよって感じだなー」

「結城先輩、ここにはシャドウの気配もなさそうですし、一旦休憩しませんか？ 僕たちはそれほど傷ついていませんけれど、先行班の先輩たちは結構戦闘していましたし」

「それも……。そうだね」

私たちは円形になって座って、傷ついている人は傷薬を使つて治療をしたり、腹ごしらえをしたりして準備を整える。この迷宮に訪れる前に準備していたという総司くんは、鞆からドーナツと紙パックに入ったコーヒー牛乳と抹茶オレを取り出すと天田く

んに渡す。ドーナツとコーヒー牛乳を貰った天田くんは満面の笑みを浮かべながら総司くんにお礼を言つて頬張る。まるで仲の良い兄弟の一コマを見ているようで、何だか気分がほっこりとする。

「総司つて優ちゃんに不満なんか抱いていなかっただろうけれど、やつぱり男の兄弟も欲しかったんじゃないかな？よくよく考えれば、天田少年が寮に来た日からずっと優しくかったしな」

「そう言えばそうだよね。風花が勝手に台所に侵入しようとしたら、『キッ！』と睨んで追い返していたのに、天田くんはむしろ呼び込んでいたし」

『うう……。ずるいです……』

風花の悔しさを物語るような心の声が聞こえて来た。私は風花をフォロースするためにはゆかりたちに声をかける。そう風花のフォロースをするためだ。何もやましいことはない。

「ゆかり、前提条件が違うよ。風花が総司くんを手伝おうとした時のレベルはどつちかって言うとマイナスだったじゃない。今の風花のレベルだったら、きつとあの頃の総司くんも快く台所に入れていたと思うよ」

「……それもそうだね。むしろ、風花のあの『バイオテロ』があったから、総司くんは蔵戸台分寮に来てくれることになったんだしね。……風花、ごめん！」

『……はあ、そこまで酷くなかったと思うんだけど……』

5月の満月戦の後、私たちの仲間となったばかりの頃の風花の料理の腕は、お世辞にもうまいと言えるレベルのものではなかった。むしろ料理の形をしたナニカだった。それをたつた3カ月で人並みレベルまで、彼女の料理の腕を向上させることが出来たのは総司くんと荒垣さんの指導があつてこそ。

「というか、最近さ。天田くんの料理の腕がかなり上達したじゃない。ま、総司くんの英才教育を受けているから当然と言えば当然なのかもしれないけれど。正直、まずくない？」

「確かに！」

このままでは巖戸台分寮の台所を預かる人間の半分は年下の男の子という事態に陥るのも時間の問題だ。かといって、料理を手伝おうと思つても鉄壁のガードがあるので、私たちは外部で練習しないとイケない。つていうか、この状況はすでに詰んでいるじゃ……。

「よしつ、休憩はもういいだろう。湊、号令をかけてくれ」

美鶴先輩が立ち上がるのを見て、私たちは話を切り上げ立ち上がる。そして、門の様な扉の前に立つて触れると、風花から警告を受ける。

『ちよつと待つて下さい！その扉の先から、とても強力な気配を感じます！準備は整え

ていると思いますが、しっかりと心構えをしてから開けるようにしてください！」

私は扉に触れながら後ろを振り向き、メンバー一人ひとりの顔を見て行く。彼らは領きを持って返してくれた。なら、何も怖がることはない。私は扉を開け、先に進むのだった。



扉の先に進むと大きな宝箱を愛おしそうに抱きしめ頬ずりする巨大な女王のようなものがいた。身の丈が私たちの軽く3倍はありそうなソレに、私たちは思わず身構える。

『気をつけて！この迷宮で、最も巨大な反応です！』

「ボスのお出ましと言う訳か」

風花の言葉にやりと不敵に笑う真田先輩の姿に私は安堵の息をつく。どうやら異様な相手に飲まれているメンバーはいないようだ。元の世界で伊達に修羅場をくぐってきた訳ではないということだろう。私もしっかりと正面にいる大きなシャドウを見据える。

【危険！危険を感じるううう！駄目よおお！これは渡さないイイ!!】

「喋った……?」

「さあな。マトモな話が聞ける相手ではなさそうだ。腕がなるだろ、結城?」

「ええ。でも慎重にいきましよう」

私は真田先輩の問いにそう答え、武器である薙刀を大きく振って構える。

「出力最大!行くであります!」

アイギスの言葉を皮切りに特別課外活動部の面々が次々と戦闘態勢に移行していく。それに合わせ、巨大なシャドウの雰囲気が変わる。

「渡さないイイイツ!!来なさい、アンタたち!ロイヤル?ストレート?フラッシュ!」

巨大なシャドウがそう言うと、私たちの前にトランプの柄をした小型のトランプの兵隊が現れた。数は……

「結城先輩!敵は小型トランプ兵52体、ジョーカー柄のトランプ兵……いやF・O・Eが2体です!」

「つ!?風花、F・O・Eの解析をお願い!」

『分かりました!』

総司くんの的確な戦況分析によって、ほぼタイムロスなしで風花に指示を出すことが出来た。私はその場から一步引いて、戦場となった部屋全体を見渡す。部屋の奥に巨大シャドウ、その前に部屋を埋め尽くさんと召喚された52体の小型トランプ兵。総司くんの言うジョーカー柄のF・O・Eは部屋の左右に1体ずついる。

『解析結果です！名前は女王を守る兵隊さん。レベルは18で今の皆さんの戦力では格上の相手で倒すことはほぼ不可能です！』

風花の解析結果を聞いて、皆の顔に緊張が走った。思い出されるのは、この不思議の国のアナタの迷宮に初めて挑んだ時に味わった敗北が頭をよぎる。構えていた剣先が少し下がったその瞬間、総司くんの櫓が部屋中に響き渡った。

「結城先輩！すっかりしてください。左のF・O・Eは僕とコロマルで引きつけますので、あとはお願ひします。行くよ、コロマル！」

「ワオオオオン!!」

総司くんは片手剣を構え、コロマルと共に部屋の左側にいるF・O・Eへと向かって行く。風花は倒すことは「ほぼ不可能」って言っていた。なら可能性はゼロじゃないってことだ。なら、私たちが取るべき手段は……。私は目を見開いて声を張り上げる。

「真田先輩、荒垣さん、天田くん。右側のF・O・Eの相手をお願いします」

「よし、任せろ！」

「天田、無理すんじゃないぞ！」

「子供扱いはやめてください」

拳を鳴らして部屋の右側に駆けて行く真田先輩の後を荒垣さんと天田くんが追って

行く。私は続けて、残っている皆に声を掛ける。

「残りのメンバーで部屋中央の小型トランプ兵を殲滅し、奥の女王を撃破します！」

「よっしゃー、切り込み隊長いっくぜー！」

「目標を撃破するであります！」

「岳羽、合わせろ！」

「了解です！」

「玲、君は下がっているんだ」

「みんな、がんばれー！」

「特別課外活動部S・E・E・S……。呐喊します！」

「「「「おおー！！」」」」

不思議の国のアナタの迷宮最終層の戦いはこうして火蓋が切って落とされたのだった。

どれくらいの時間が過ぎただろうか。

私たちが相手することになった小型のトランプ兵は数こそ多いが弱かった。ただ私たちの攻撃やスキルでは一撃で倒せず、何回か攻撃して撃破するしか方法が無い。相手

の防御力を下げれば一撃で倒せるが、その分精神力を浪費することにつながり建設的ではない。何せ、こいつらは倒しても倒しても奥にいる巨大シャドウが召喚し直すからだ。

「湊、また20体くらいが一遍に召喚されたよ!」

「反則技もいい加減にしやがれであります」

「くっ……マハブフ!」

私は周囲にいた小型のトランプ兵を多数の相手に攻撃が出来る魔法スキルを使って薙ぎ払い、ゆかりとアイギスの近くに移動する。移動中も薙刀を使って、近くにいるトランプ兵を斬るのを忘れない。

善くんは玲ちゃんを守りつつ部屋の入り口の所で戦い、美鶴先輩は順平と背中合わせで死角をなくし戦闘しているが、小型トランプ兵の波状攻撃に無傷とはいかないように、彼女の服の至る所に血が滲んでいるのが見える。

真田先輩たちや総司くんたちが戦っているのは、上の階層で見て来たF・O・Eよりも強い敵だ。倒すことはほぼ不可能という風花の解析結果が出ている以上、部屋の中央で戦う私たちに奴らの目が行かないように足止めするのが彼らの役目だが、真田先輩たちの方は少々分が悪いようだ。

「総司さんとコロマルさんのコンビネーションは素晴らしいであります」

私と同じように戦いながら戦況を見ていたアイギスが総司くんたちの戦いぶりを見てそう告げた。コロマルのフットワークを生かしたヒットアンドウエー戦法を総司くんが多種多様のペルソナを使い分け、相手の防御力を下げたりコロマルの攻撃力や回避力を上げたりなどして援護することで、2人という少人数でありながら強大な力を持つはずのF・O・Eを完全に抑え込んでいる。

「湊、アイギス、危ない!」

ゆかりの声で気付いた時には、私たちはトランプ兵の攻撃を避け切れなかった。致命傷は受けなかったものの、武器を取りこぼした私に群がるトランプ兵を振り払う力はない。思わず目を瞑りそうになったが、

「はあああああ!」

「どりゃあああああ!」

私に群がろうとしていたトランプ兵を斬り裂いて、手を差し伸ばしてくれた2人に感謝の言葉を述べる。

「ありがとうございます、美鶴先輩。順平」

「ふっ、お互い様だ。……伊織、あれを」

「はいよ、湊っち。今度は落とすなよ」

順平から私の武器である薙刀が渡される。どうやら拾ってきてくれたらしい。だが、

私の窮地を救ってくれた彼らもまた満身創痍であり、体力が切れるのも時間の問題であることが窺える。

「しかし、キリがねーな！」

「奥に控える『女王』に辿りつく前に、我々の体力が消耗すると思われませう」

「回復が追いつかないよ！」

部屋の中央でトランプ兵の相手をしてきたメンバーが自然と集まってくる。順平は自分の袖で汗を拭い、アイギスは近寄ってくるトランプ兵に弾丸を叩き込む。ゆかりは私たち一人ひとりに回復魔法をかけるが、彼女が言うとおりの回復が間に合っていない。

回復魔法が使えるのは、メインペルソナで使えるゆかりと、サブペルソナによつて使えるようになっていく天田くん、そして『本来』のワイルドの力であらゆるペルソナを扱える総司くんの3人のみだ。戦力が分散させられている以上、ゆかりに負担がかかるのは当然のことだ。だからといって、私たちにとつて格上であるF・O・E相手に回復なしなんていう無理をさせる訳にもいかない。

すると、入り口の方で戦っていた善くんが声を張り上げた。

「全員、撤退してくれ、私が殿をする！」

「お前だって、ボロボロじゃねーか！」

順平が怒鳴り声をあげると、善くんは唇を噛みしめて俯く。彼もこの状況が拙いとい

うことが分かっているのだ。私たちが全滅するのも時間の問題だと。

「せめて、少しでも休めれば……」

美鶴先輩がそう呟く。しかし、それは叶わないことだと分かっているからか、彼女は力なく肩を落とす。

「とはいえ、こんな状況じゃ……」

その時、私たちの誰もが予想していなかったことが起きた。

「よう、待たせたな!」

聞いたことのない男の子の声に、私たちは一瞬だけ自分の身が戦いの最中にあることを忘れ、声がした方へ身体ごと向きを変える。

「な、なんだあ!?!」

「なんなの、つてか、なんなの!?!」

入り口に善くと玲ちゃん他のに8人の男女が立っていた。

そんな彼らの中央にいるのは灰色の髪を腰の辺りまで伸ばした目つきの鋭い女の子。彼女は肩に乗せていた刀を右腕一本で軽々振るうと、しっかりと部屋の奥にいる女王を見据えると告げた。

「……突撃」

たった一言だったが、彼女の横にいた少年少女たちが私たちを助けようと駆け寄ってくる。

『敵はトランプ兵だよ。物理攻撃全般、魔法攻撃全般が弱点。みんなやつちやえー!』
風花と違った感じの明るい声が頭に響いてくる。私たちの助けとなってくれる少年少女たちは、私たちのように召喚器を使わずにペルソナを召喚し戦っている。

大きなヘッドホンはめれたオレンジ色の髪の少年は苦無を二つ持って、軽やかなフットワークで敵を斬り裂き、ゆかりと同じ風属性の魔法スキルを使っている。

緑色のジャージを着た短髪の女の子はカンフーに良く似た体術を用いて、トランプ兵を蹴り飛ばす。怯んだところに氷結魔法をぶつけ消滅させる。なんか見覚えがあるな……。

「つて、千枝ちゃん?」

「あれ、結城さん!?……つて、おわあっ」

「危ない、千枝。コノハナサクヤ、マハラギ!」

火炎属性の魔法攻撃で周囲にいたトランプ兵を燃やしつくしたのは、赤い衣服を身にまとった黒髪の少女。つて、彼女もまた見覚えが……あ。

「天城旅館の雪子ちゃん!」

「ふえ?……あ、月光館学園のお姉さん?」

私を知っている彼女たちとは違い、女らしく成長した姿だけれど見間違はずもない。

「と、とりあえず今は戦闘に集中しましょう！」

「う、うん。そうだね」

私は彼女たちから離れると、ゆかりたちの所がいる所へと移動する。改めて援護してくれている少年少女たちの様子を見る。

金髪でガタイの良い少年は鉄板の様なものを振り回し、近くにいるトランプ兵を蹴散らす。多少攻撃を受けてもビクともしていないところを見るに、見た目通り体力は有り余っているようだ。

青い帽子を被った少年は拳銃を使つて的確にトランプ兵を撃ち抜いている。敵の攻撃を予測し、回避しているところを見るにかなりの場数を踏んできているように見える。

そして、何故かキグルミが戦っている。その体躯を利用したトリツキーな動きで敵を翻弄して倒しているのです。実力はあるのだろうけれど、何故キグルミを着て戦う必要があるのか。謎だ……。

『お姉ちゃん！何で戦わないの？』

バックアップの明るい少女の声を聞き、入り口に目を向けると千枝ちゃんたちに号令

をかけた少女が佇んでいた。彼女は鋭い目つきで私たちを睨んでいる。何を言われた訳ではないけれど、その雰囲気は踏躡踏む。

「ちっ……。りせ。私はこの『ヒトたち』のために戦うんじゃない。陽介たちを助けるために戦う。これ以上、とやかく言わないで」

少女はそう言つて刀を構えると、部屋の中央に駆けて行く。立ちはだかったトランプ兵の数を一撃で葬ると、一刀両断の文字通り圧倒的な強さでトランプ兵を狩り取つて行く。

「なっ!? 私たちが何度か攻撃しないと倒せない相手を、ああも容易く……」

「な、なんだあいつら? 強えーな!」

「ていうか……ペルソナ使い!」

美鶴先輩やゆかりたちの驚愕する気持ちは分かるけれど、私は鋭い目つきの少女のことで頭がいっぱいで話に加わる余裕が無かった。鋭い目つきの少女は中央にいたトランプ兵をあらかた片づけると真田先輩たちが戦うF・O・Eに攻撃する。

目つきのように鋭い剣戟でF・O・Eをも圧倒する彼女に私たちは唾然となる。攻撃を受けていたF・O・Eが向きを変えた頃には、目つきの鋭い少女は身を翻し、今度は総司くんたちが戦っているF・O・Eを攻撃する。

しかし、精彩さを欠いたのか彼女が振るつた刀はF・O・Eの武器に当り、大きく弾

かれた。

『お姉ちゃんっ！避けて!!』

バックアップの少女の叫びが響く。だが、そこにいるのはただのペルソナ使いじゃない！

「コロマル！」

総司くんが指示すると同時に飛びかかるコロマルは、少女を攻撃するためにガラ空きとなった背後からサブペルソナによって使えるようになっていた中ダメージを与える壊攻撃『アサルトダイブ』を放って、F・O・Eをダウンさせる。そして、

「ペルソナチェンジ！コッパテング、ガルーラ!!」

げっ、総司くんがまた新しいペルソナを得ているし。もしかしたら、この戦闘中にも得ていたのかもしれないけれど、とにかくガルの上位魔法スキルを受けたF・O・Eは消滅した。そして、総司くんは目の前に手を伸ばし、その手を握ると一枚のペルソナカードが現れた。

その後、総司くんは武器を弾き飛ばされた少女に手を差し出して、固まった。

どうしたんだろうと私たちが思っていたら、F・O・Eを倒されて焦った部屋の奥にいた女王が再度トランプ兵たちを呼び出してしまふ。

「くっ……せっかく彼らが数を減らしてくれたというのに……」

美鶴先輩がそう嘆いていると、助けに来てくれた彼らも入り口の方へ下がってきた。「ちつくしよー、せつかく格好良く助けに来たのに」

「ていうか、際限なく呼び出すとか反則っしよー!」

彼らも私たちと同意見らしいが、さて困ったことになった。彼らの参入のおかげで大分体力は回復したが、トランプ兵は無限とも呼べるくらい際限なく召喚されてしまう。

どうしたものかと思っていたら、鋭い目つきの少女が涙を流しながら、入り口の方へやってきた。

「ど、どうしたんだよ?! 相棒!!」

「ううん、陽介。気にしないで、今の私の気持ちは誰にも止められない。こんな雑魚、私
が蹴散らす。だから、奥の女王は任せます。……「湊先輩」」

少女は懐から銃の様なものを取り出すと、皆が見守る中こめかみにそれをあてがう。

美鶴先輩やゆかりたちが息を呑む。だって、彼女が持っているのは特別課外活動部のメンバーしか持ちえないはずの代物なんだから。

目つきの鋭い少女は、そんなギャラリーの驚きに気づかず、一思いに引き金を引いた。「敵を全て斬り裂きなさい! ヨシツネ、八艘跳び!!」

彼女が召喚したペルソナの攻撃は部屋全体に及び、女王によって召喚されたばかりのトランプ兵も真田先輩たちが相手にしていたF・O・Eもすべて倒してしまい、部屋に

残っているのシャドウは女王だけとなった。

「こ、こんなバカなことがあぁ、あつていいはずがないイイイ!!」

ヒステリックな声をあげて暴れる女王だが、冷静さを欠いている今なら。

「皆、総攻撃。行くよ!」

私の掛け声を聞いた特別課外活動部の皆は部屋の奥に向かって駆けだす。

正気に戻った女王が再度トランプ兵を召喚するが、その頃にはすでに私たちは女王を攻撃できる位置まで来ており、トランプ兵の相手は「成長した優ちゃん」たちが受け持ってくれている。

私たちは安心して、女王の相手が出来、倒すまでそう時間はかからなかった。

こうして不思議の国のアナタの迷宮、最後の戦いはこうして幕を閉じるのであった。

不思議の国のアナタ編—⑦

女王を倒すと同時に召喚されていたトランプ兵たちも消滅する。私たちは構えていた武器を降ろし安堵のため息をついた後、周囲にいる皆と一緒に笑いあう。すると私たちを援護するように召喚されたトランプ兵を相手取ってくれていた少年少女たちが、私たちのいる所まで来て話しかけて来た。

「やったな！」

大きなヘッドホンをかけた少年が率先して話しかけてきた。美鶴先輩は思わず身構え、彼らは何者であるのかを問う。すると答えたのは青い毛皮のキグルミを着たナニカであった。彼？は自分をクマだと名乗っているが、どう見ても……

「クマ……という名のサルでしょうか？」

「どっからどう見てもクマでしょ!?!さつきから3回もクマって言っているのに疑うクマか!?!」

キグルミを着たナニカはアイギスの言葉に憤慨するように、その場で地団駄を踏む。……限りなくうざったい生き物のようだと思っていたら、話に割り込むようにキグルミの彼をどかした千枝ちゃんが話しかけて来た。

「あー、もういいから！ともかく詳しいことは出てから話し……はな……話しませんか
と？」

「先輩、なんで金持ちキャラみたいになってんすか？」

金髪のがタイの良い少年に指摘され、顔を真っ赤にした千枝ちゃんは開き直るよう
にして強気で返答する。

「うっさいな！敬語使うか迷ったら変ななったの！……マーガレットさん、高校生
“っただけ言うから、歳分かんなかったし”

千枝ちゃんの発言を聞いていたらしい女性、その人はエリザベスさんやテオドアと似
たような青い衣服を身にまとっていた。そして、金色の瞳と銀色の髪という特徴まで一
緒となると、あの2人と何か関係があるのかもしれない。

「フツ、年齢の1つや2つ……いえ10や20は同じことでしょう？」

「……結構、違うと思いますが」

青い帽子を被った知的な少年の指摘を気にも留めない傍若無人さ。エリザベスさん
とそっくりだ。確実に姉妹なのだろうと思う。そして、こんな2人に挟まれるテオドア
は不憫だ。

「……どうやら、敵じゃなさそうだな」

荒垣さんがそう言うともマーガレットと彼らから呼ばれた女性は薄く笑って答える。

「理解していただけたようですね。私は、エリザベスとテオドアの姉でマーガレットと申します。先ほどの迷宮の外で、妹たちから事情を聞いて駆けつけました。そして、ここに待るのは我がしもべたち」

「何の話だよ！つーか、初対面だっつーの！おい、相棒も何か言つてやつてくれ……つて、何してんの相棒？」

ヘッドホンの少年の視線を追うと一組の男女が抱き合っていた。いや、抱き合っている訳ではなく、先ほどの女王とトランプ兵との戦いの折、肉体と心の強さを私たちに堂々と見せつけた目つきの鋭い少女が『ほにやつ』と表情を崩し、総司くんを後ろから抱き締めて首筋に頬ずりしている。

援護に来てくれた少年少女たちも、そんな彼女が普段の姿とかけ離れ過ぎているのか面食らつて何も言うことが出来ないでいる。

「と……ともかく、詳しいことは後にして、まずはここから出ませんか？」

ヘッドホンの少年が頬を引き攣らせながら提案した。私は周囲を見渡して頷こうとしたが、その前に善くんが告げた。

「まだ、あれが残っている」

その言葉に部屋にいた皆の視線が大きな宝箱に向けられる。

「箱か」

「この箱は先ほどのシャドウが守っていた物と思われます」

真田先輩とアイギスが宝箱の周囲や本体を周囲から調べ、危険物でないことが確認したのを見て善くと玲ちゃんも宝箱の前に立つ。玲ちゃんは心配そうに善くんを見ながら呟く。

「開けるの?」

「ああ」

善くんは迷いなく宝箱を開け、中に手を入れ探る。玲ちゃんを含めた私たちが心配そうに見守る中、彼は宝箱に入っていた物を取り出して私たちに見せつける。どうやら宝箱に入っていたのは、ウサギのぬいぐるみのようだ。

「ん?足の所にネームタグがあるけど……」

ゆかりがぬいぐるみを見ていて気付いた。確認すると英語で“NIKO”と書かれている。

「にこ……かな?どういう意味だろう」

「ん……きつと、笑顔って意味!」

ゆかりが思案するように首を傾げていると玲ちゃんがそう言う。ゆかりはそれを聞いて、それもひとつの考え方かと頷きながら答える。

「ああ、ニコツと笑う、の“にこ”?どうだろうね」

すると順平と真田先輩が近づいてきて善くんが持つウサギのぬいぐるみを見ながら話し始めた。

「このウサギ、上の迷路んとこで出て来たやつか？……にしちゃ、色が違うか」

「あいつを追いかけてたら、ここに来たようなもんだな。善、玲。このウサギに心当たりはあるか？」

真田先輩の問い顔を見合わせる善くと玲ちゃんだったが、

「分かんない」

玲ちゃんの答えはシンプルだった。それを聞いた真田先輩もそれ以上は追及せず、腕を組んで考え込む。すると、善くんは持ち直したウサギのぬいぐるみを眺めながら小さく呟いた。その言葉を聞き取れた玲ちゃんが善くんを見上げつつ様子を眺める。すると、

「4つ……ここには4つの迷宮がある。何かを……隠していて、『番人』が守っている。私にはここでやるべきことが……。使命、……。そう使命があった。……。なのに、記憶を無くした」

善くんが目を瞑り右手で頭を押さえつつ、心に浮かんだ思いを拙いながらも言葉へと変えて行つた。それは今後の私たちの行動を決める重要な情報源でもあった。

「思いだしたんですか？」

アイギスが善くんの様子を見て尋ねると、彼は首を横に振りながらこれ以上は思いだせないと言顔を俯かせる。

「それだけでも前進であります。『番人』とは先ほどの、女王的なシャドウのようなものでしょうか？」

「ああ、そうだ。あのような強大なシャドウが何かを守っている」

「そのぬいぐるみが引き金となって記憶が戻ったんでしょか」

「多分そうだ。これに触れたら、何だか……亀裂が入った様に、浮かんできた。玲は……何か思い出さなかったか？」

善くんは自分を見上げている玲ちゃんと視線を合わせ、問いかけるが彼女は胸の前でぎゅつと祈る様にして手を握りしめると首を横に振った。その姿はまるで、『失われた記憶を取り戻したくない』ように見えてならない。

その様子を見て思ったことがあったのか、宝箱から得たウサギのぬいぐるみは善くんが持っていることとなった。

「先ほどのシャドウはこう言った。『ここから出さない』と。今の所はこう考えられるだろう。『誰か』が我々を『意図的に』この世界に閉じ込めている。脱出するための手掛かりは、この世界に以前からいる善と玲の奪われた記憶にあるかもしれないが、その記憶はあと3つの迷宮を巡り、『番人』が守っている物を手に入れれば取り戻せそう

だ」

「ああ、きつと、その『誰か』が隠したんだ。迷宮の中に、私の記憶を。だが、玲の記憶は戻っていない。玲の記憶はどこに隠されているんだ?」

善くんが俯いて手を握りしめていると、外から鐘の鳴る音が聞こえて来た。部屋の中にいた皆が知らず知らずのうちに視線を上にあげる。

「また鐘か……」

「この鐘、俺たちの方でも鳴ったんですよ」

「この鐘に、何か意味があるのか?」

鳴り響いていた鐘の音が止むと同時に、風花から通信が入った。

『大変です!!ベルベットルームにある『2枚の扉』の鍵が外れそうです!!』

「なんだと……!?山岸、詳細を!」

『ええと……ベルベットルームに『2枚の扉』があつて、『4つの鍵』が掛つていますよね?そのうちの『1つ』がたつた今、外れそうになつて!エリザベスさんが『扉』は違う空間を繋ぐためのものだ』

美鶴先輩に言われ、風花は今得られている情報を繋ぎ合わせたものを説明する。すると会話を聞いていた青い帽子を被った知的そうな少年が自身の推考を述べた。

「それはつまり……『出口』だと?」

「善が言っていた通りなのか!？」

『分かりませんが、とりあえず、戻ってきてください』

「4つの迷宮に、4つの鍵か……。偶然だと思うか?」

美鶴先輩は近くにいた真田先輩と私に視線を投げかけてくる。私はすぐに首を横に振って答え、真田先輩も美鶴先輩の推論が沿っていると太鼓判を押す。

「迷宮を巡り、番人が守る物を手に入れると鍵が開くって事だろ。そこに善の記憶がどの程度絡んでいるか分からないが、ついでに取り戻せるならやることは変わらない。俺らを閉じ込めた『誰か』にとつて俺らの迷宮巡りが都合悪ければ。邪魔しに現れるさ。それを叩けばいい、シンプルだ」

真田先輩はそう活きこんで左手に右手を打ち付け音を鳴らす。美鶴先輩はそんな真田先輩をじつと見つめる。

「……………」

「何だ?」

「たまにはまともなことを言うじゃないか」

美鶴先輩が感心したように言うのと、頬を赤くさせた真田先輩が心外だと言い返す。美鶴先輩はそんな真田先輩の姿に小さく「そうか」と呟いた後、成行きを見守っていた面々に向き直り言う。

「よし、では戻るとしよう。あまり長居しても危険だ」

「俺たちは先に行っています。あとでゆっくり話を……つか相棒の役目だろ、こういうのは!!里中、天城、相棒をどうにかしてくれ!」

「えっと、無理っばい」

「うーん、〃兄妹〃のスキンシップを邪魔するのはちよつと……」

千枝ちゃんと雪子ちゃんは状況が分かっているようだが、残りは頭の上にクエスチョンマークを浮かばせ、首を傾げている。すると総司くんは私たちに向かつて心配ないと言を横に振って、ポケットからカエレールを取り出した。

「じゃあ、君にもこれを」

「へ?……あ、これってもしかして」

私はヘッドホンの少年にカエレールを渡すと特別課外活動部のメンバーに集合を掛ける。総司くんたちは一足早く使用して、部屋からいなくなつた。見れば私たちを援護に来てくれた少年少女たちもカエレールを使用した様子で、キグルミの彼しか残っていない。

「ヨースケー!クマを置いてつたらいかんクマー!!」

『よよよ……』と泣き崩れるキグルミの彼がなんとも不憫で、私はアイギスに回収してくれるように頼む。アイギスは頷き、すぐにキグルミの彼に近寄ると背後からでっばって

るところを掴んで引き摺ってくる。キグルミの彼が何やら騒いでいるが、アイギスは気にも留めず私たちの所まで来て、手を離れた。『ずべしやっ』と顔面から床にダイブすることになったキグルミの彼は微動だしない。

「ま、いつか。カエレールつかいまーす！」

私はカエレールを床に叩きつけ、目を瞑る。そして、目を開くとヤソガミコウコウの不思議の国のアナタ迷宮の入り口に立っていた。

そこにはベルベットルームで待機していたはずの風花やエリザベスさん、テオドアの他に見慣れない少女の姿があった。順平なんかは新たな美少女の登場に鼻の下を伸ばし表情をだらしなくさせている。

「無事に合流できたようですね」

エリザベスさんがそう言うのと、私たちと一緒に戻ってきていたマーガレットさんが説明を始める。どうやら援護に来てくれた少年少女たちも私たちと同様、この狭間の地へと迷い込んだようだ。ただし、私たちと違う場所、そして違う時間からだと言う。

私は自然と総司くんと戯れている少女と、より女の子らしく成長した千枝ちゃんと雪子ちゃんに目を向ける。その姿を見ていたマーガレットさんは理解が早くて何よりと話す。

真田先輩は自分たちと同じ境遇の彼らに興味があるのか、ちゃんと一人一人の顔を見

て行くすると、風花たちと一緒にいた少女が話しかけてくる。

「他にもペルソナ使いがいるって聞いて、驚いちゃった」

「それはこつちもだ……。一体、どういうことだ？特に……」

美鶴先輩の視線は総司くんを抱きついたまま、こちらのことなどに興味はないと言いたげに目を細めて頬ずりしている少女に向いている。私を知る彼女と比べ合わせても、ちよつと違和感がある行動に首を傾げる。

「やっぱテレビに入ったんすか？」

すると金髪のガタイの良い少年が鼻息を荒くして質問してきた。しかし、「テレビに入ったか」なんて質問をされると思っていなかった美鶴先輩の目が点になる。

「……は？テレビ？」

「待て。君たちが住むところでは、影時間はどうなっている？」

「かげじかん？」

私たちが知る情報と、彼らが知る情報の方向性が違いすぎて話にならない。どうすればいいかを双方が悩んでいると、マーガレットさんが自己紹介をしてはどうかと提案してきた。私たちはそれに頷き、改めて自己紹介をすることとなった。

マーガレットさんは総司くんと戯れている少女を見て、大きくため息をついた。そして、彼女の下へ近寄っていく。それを見ていた少年少女たちが先に自己紹介をするよう

だ。

まずはヘッドホンをかけたオレンジ色の髪の少年。

「俺は花村陽介。八十神高校の2年生で、あそこで少年と戯れているやつは相棒ってとこつすね。すんません、いつもはあんなじゃないんですけど」

話を聞いていた真田先輩が荒垣さんと自分のような関係だと言うが、荒垣さんは心底嫌な表情を浮かべている。

緑色のジャージを着た活発な少女が周囲にいる人の顔を窺いつつ自己紹介する。

「ええと、里中千枝です。やっぱ高2で……な、なんかキンチョーするなあ」

何を言えいいのか悩んでいる千枝ちゃんの後ろで先ほど自己紹介を終えた花村くんが声色を変えて言う。

「好きなものはプティングでえす☆」

「なっ!?……靴痕つけるよ!」

いじられていることに気付いた千枝ちゃんが怒りの形相を彼に向けるが、いつものことなのか飄々としている。そんなやり取りを見て風花がゆかりと順平みただと笑う。

花村くんとか千枝ちゃんのやり取りを見ながら、くすくすと笑っていた黒髪の少女が前に出る。

「じゃあ次は、私かな?天城雪子、高校2年生です。千枝とかとは、みんな同じクラスな

の

澄ました顔で佇む雪子ちゃんを見ながら順平がゆかりに美人だよなと確認を入れる。ゆかりは順平の想い人である少女の名前を口にするが、順平は、『それはそれ、これはこれ』と最低な発言をしたため、ゆかりは冷めた目で見ながら彼の足先を思い切り踏みつけた。

「ここからは、高校1年生!」

そんな明るい声に導かれ、見てみると風花たちと一緒にいた少女が大きく手を振っている。

「私は、久慈川りせ♪」

「久慈川……あれ、どっかで聞いたような?」

ゆかりに踏まれた足先をさすりながら順平が首を傾げている。

「私は戦えないけど、バックアップは得意。よろしくね!」

「やはり、風花さんと同系統の能力の方がいらっしやるんですね」

アイギスが領きながらそう言うと、風花が自分以外の後方支援専門のペルソナ使いの存在に驚いたと言いながら近寄っていく。

場が落ち着いたのを見て、今度は金髪でガタイの良い少年が気をつけをした状態で話す。

「あー、オレあ、異完二…っス」

「えー、完二それだけ？」

「趣味いっつけー」

「ううううっせーよ！」

先に自己紹介を終えていた久慈川さんと花村くんに言われて、巽くんは顔を真っ赤にしながら腕を振り払った。その様子を見ていたゆかりが順平にひそひそと何かを言っている。順平も同意しているが……、本当のところはどうなのだろうか。

次に出て来たのは青い帽子を被った知的な少年。

「僕は、白鐘直斗。よろしくお願ひします」

すると天田くんが白鐘くんの足元にしゃがみこんで、見上げながら言う。

「……靴底、厚いですね」

「えっ、あっ……」

「すごい！一気に身長が伸びる魔法の道具ですね！」

「も、もうやめてください」

天田くんからの何の疑いもなく尊敬するような眼差しに頬を染めて懇願する白鐘く

ん…… “くん” だよな？

「次はクマの番ね！」

満を持しての登場で張り切るような声を荒げる彼であったが、この場に在るほとんどが目を背けている。そんなこと気にもせず、彼は自己紹介を始める。

「ここ八十稲羽が誇る地元デパート『ジュネス』の愛されゆるふわマスコット、クマクマー！なんんこのクマ、キュートなクマ皮を大胆不敵に脱ぎ捨てると……」

そう言つて震えるキグルミに集中して見ていると誰かに肩を叩かれた。そして振り向くと千枝ちゃんと言子ちゃんが首を横に振っている。どういう意味か聞こうとしたが、クマくんの演出のため息が漏れたのを見て、見なくていい物であったと納得した。

クマくんの演出で微妙になつた空気であったが、エリザベスさんが引き締める。今度私は私たちが自己紹介する番だ。実を言えば、彼らの要である少女はまだ自己紹介を終えていないんだけどね。

私たちは美鶴先輩を始めとした3年生組から自己紹介を始めていく。自己紹介慣れてない真田先輩がプロテインを薦め始めた頃合いから、自己紹介しつつも皆ぶっちゃけていく。この自己紹介を通して彼らの性格がある程度わかつたような気がした。

「では、最後に……。というか、まだその格好だったのか」

美鶴先輩が呆れたような声を出したのは、当然のことだった。何せ、私たちが迷宮を脱出してからずっと、その少女は総司くんを抱きしめたまま微動だしていなかつたのだ。

隣に立って2人を見下ろすマーガレットさんも立ち上がらせることを諦めたのか、その状態で説明を始める。

「見ての通り、ここで歳端もいかない少年を抱きしめて頬を染めている危ないのが私のお客人、そちらの結城湊様と同じように「ワイルド」の力を保有しております」

皆の視線が自然と集中するも、少女は気にも留めず総司くんに抱きついたまま。こちらを見ようとするとする気配がしない。その姿にちよつとカチンときたのか美鶴先輩とゆかりが一言文句を言おうと口を開こうとしたが、

「……鳴上優。これでいいでしょ」

少女が名前を告げた瞬間、文句を言おうとした2人は目を見開いた。いや特別課外活動部の私を除くメンバー全員の表情が凍った。そして、信じられないものを見る様にして、少女の動向を見る。

「あの、結城さんは驚かないんすか?」

花村くんが声を掛けて来た。私は大きく頷くと持論を展開する。

「うん、女王と戦う時に彼女から「湊先輩」って言われたし、総司くんが見知らぬ女性にあんなされるがままになることもないだろうし、何よりも私たち特別課外活動部の絆の証である召喚器を持っているしね!」

「そうなんすか」

と、花村くんが言うと同時に、『カランカラン』という乾いた音がその場に響き渡った。音の発生源は廊下に無造作に転がっていた。今、私と花村くんとの会話にて話題に上がった召喚器。

私はその召喚器から目を優ちゃんに向ける。すると彼女は大きく肩を震わせ、大きな声で言い切った。

「いらない……。そんな絆なんか、……。私はいらない!!」

そう言った優ちゃんは総司くんを解放し、その場から走り去った。やつとのことで解放された総司くんだったが、廊下に転がった召喚器を手にとると私たちに一礼して、優ちゃんの後を追いかけるように走って行ったのだった。

幕間①

面倒を見て来た可愛い妹分の口から放たれた一撃は、私を動揺させるのには十分な威力があった。

花村くんたちが『自分たちは高2だ』と言っていたので、彼らは2年後の世界から来たことになる。つまり、この2年以内に『純粹無垢な優ちゃん』から『女番長な優ちゃん』にジョグレス進化するようなことが起きたということだ。それにしても……

「……知らない。私たちとの絆……知らないんだ」

私は目の前が真っ暗になるような錯覚を覚えるほど、衝撃を受けていると自覚する。正直、女王との戦いの折、彼女が助けに来てくれた時は本当に嬉しかったのだ。自分のことを成長しても『湊先輩』と呼んでくれたことが嬉しかったのだ。それなのに……

「何があつたつていうの……優ちゃん」

優ちゃんの衝撃発言を受けて私がショックを受けている間に、月光館学園の特別課外活動部と八十神高校の自称特別捜査隊の面々はこの世界から脱出することを目的とし

て協力することを決め、互いの戦力というかペルソナの能力について把握していく。単純に計算して戦闘要員18名にナビ専門が2人の合計20人の大所帯になったから、結構覚えるだけでも一苦労だ。

そうこうして過ごしていると、走り去った優ちゃんを連れて総司くんが戻ってきた。そして総司くんはそのまま、私たちのところには来ないで八十神高校の人たちと交流を始めた。面識のあるメンバーもいるようで話は盛り上がっている。その様子を連れ戻された優ちゃんが寂しそうに眺めるといふ意味深な行動を取っていた。

それに気付いた風花とゆかりが優ちゃんに近づいていったけれど、気配に気付いた彼女は『キツ』と2人を睨みつけると総司くんたちとの会話の輪に入らずに、手持ち沙汰になっていたクマと呼ばれるキグルミの中味の彼の頭をアイアンクローすると問答無用で引き摺って行く。

「センセエー!?クマが何かしたかクマー?」

「……。黙ってついてきなさい」

「イエス、マム!クマー」

背筋が凍るほどの冷たい瞳で見下ろしてくる優ちゃんに、クマと呼ばれた彼は抵抗することを出嗟に止め、市場に水揚げされたマグロのように固まったまま、連れて行かれた。その様子を眺めていると肩を落とした風花とゆかりが寄ってくる。

「取りつく島もない、つてこのことよね」

「一体全体、どういうことなんでしょ。湊ちゃん、彼女は本当に私たちが知る優ちゃんなんですか？」

「そうだと思うよ。でないと思喚器のことが説明できないし、あそこで八十神高校の彼らと会話を弾ませる総司くんを見れば、一目瞭然じゃない」

私の言葉を聞いてゆかりと風花が振り返って確認すると、総司くんは千枝ちゃんや雪子ちゃんと一緒になって異くんをからかっていた。からかわれている本人も嫌そうな感じじゃないので、本当に彼らと面識があることが窺える。すると私たちの視線に気付いた総司くんが手招きしてくる。私はゆかりと風花と顔を見合わせると頷いて、彼らの下へ向かった。

「優がすみませんでした、結城先輩。一応、説得はしたんですけど、先輩たちと仲良くすることは出来ないって、頑なに拒否するんです。一体、どうしたんだか……」

総司くんは腕を組んで首を傾げている。彼の後方でも普段の様子とかけ離れた優ちゃんの行動に疑問を抱いているらしい雪子ちゃんたちの様子が窺える。

「あれ？花村くんと白鐘くんの2人がいないね」

「あ、ホントだ。花村はともかく直人くんはどこに行っただら」

「クマくんは優が連れて行ったしね」

私の疑問に答えたのはナビゲーターの久慈川さんと雪子ちゃんであった。

「花村くんも白鐘くんも男の子なのに、扱い方が分かれるんだね」

風花がそう言うのと千枝ちゃんたちはキョトンとした様子で顔を見合わせた後、口元に手を当てた後に笑った。眉を寄せてクエスチョンマークを頭の上に浮かべる私たちに、目尻に溜まった涙を拭き取った千枝ちゃんが教えてくれた。

「直人くんは男装しているけれど、れっきとした女の子なんですよ」

「マジでっ!？」

「どっから湧いてくんのよ、アンタは」

私たちが驚く暇もなく、真田先輩たちと一緒にいたはずの順平が話に割り込んできたのを見たゆかりが即座にチョップとツツコミを順平に与える。チョップが叩き込まれた額を押さえて蹲る順平を見て、雪子ちゃんが大爆笑している。

「イテテテ、ヒデエよ。ゆかりっち……、そうだ」

順平はチョップを討ちこまれた額を擦りながら半泣きの状態で周囲を見渡し、キョトンとした様子の総司くんを狙いを定めると話しかける。

「総司は直人くんが女の子って気付いていたか？」

「え?……ああ、白鐘先輩の話ですね。僕も最初は気付きませんでしたよ」

「ん、最初って?」

「乾くんがシックレットシューズを指摘した後、白鐘先輩を下から見上げた時に、服の裾をまるでスカートを押さえるような仕草を見せた瞬間にティンってきました」

あの一瞬のやり取りで白鐘くんは……いや白鐘 〆さん”はそんな仕草をしていたかなど私は周囲にいた皆に目配せするが、ゆかりも風花も順平も首を振って気付かなかった様子。相変わらず細かいところを良く見ている総司くんには感心するしかない。そう思っていると総司くんの姿がダブって見えた。目を擦るといつの間にか彼の後ろに優ちゃんが立っていたのだ。彼女は背後から総司くんに話しかける。

「兄さん、ちよつといい？」

「あれ、優。どうかしたの？」

「うん。保健室でエリザベスさん……だっけ？彼女が呼んでいるの……その……」

「……ああ、なるほど”。結城先輩、優と一緒に保健室に行ってくれませんか？……分かった、分かったからそれ以上引つ張らないですよ。僕も一緒に行つてあげるから」

ジト目で見てくる優ちゃんに負けた総司くんが肩を竦めている。頬を『ぷくつ』と膨らませ、総司くんに甘える姿は正しく私たちの知る優ちゃんの間違いが無いのに、一体全体どうしてこんな感じで成長してしまったのだろうか。それとも、彼女がああなることがこれから起きてしまったのだろうか。

「けど、エリザベスさんの保健室か……あの毒々しいところには正直な話、行きたくない

んだよね。飾り付けかどうか知らないけれど、ジャックフロストが首吊っている姿はあんまし見たくない」

「兄さんはショーケースにぎゆうぎゆう詰めにしているけどね。私はあつちの無機質なつぶらな瞳の大群の方がトラウマだよ」

「えー、あれはあれでいいじゃないか。ああしていればいつか、キングジャックフロストに進化するかもしれないだし」

「兄さん、混ぜってる！なんかのゲームと混ぜっているよー！」

年齢的には優ちゃんの方がお姉さんになったはずなのに、相変わらず仲の良い兄妹だなあ。

「ヤソガミコウコウ」 1F 保健室にて

「ようこそ、エリザベスの部屋へ。お薬？お注射？そ・れ・と・も……」
「どこの新妻三択ですか？」

というエリザベスさんと総司くんの漫才から始まった『依頼』についての説明。

エリザベスさんが言うには優ちゃんたちが通っている八十神高校には七不思議というものが存在していたらしく、それを参考に依頼ノートというもの設置するという。ち

なみにその八十神高校の七不思議は、『保健室のノートに願う事を書く』と、その願いは叶う』といったものであったが、初回はエリザベスさんが書いた願いを私たちが叶える必要があるらしい。

「七不思議って、そういうものじゃないけれど。この『ヒト』に言っても無駄だしなあ」と、総司くんはまるで昔からエリザベスさんのことを知っていたかのような言葉を呟いた。そのことを聞こうとした私だったが、丁度視線が合った優ちゃんに睨まれ、口を閉ざすことになる。エリザベスさんに言われて私を呼びに来た優ちゃんは総司くんを挟んだ向こう側にいるけれど、時折私を色んな感情を織り交ぜた複雑な視線で見つめてくる。しかし、決して話しかけてくることはない。

「つまり、エリザベスさんの言う依頼を達成することで強力な装備やお金などの報酬を得られるってことですな」

「その通りでございます」

私が優ちゃんのことを話している間も、エリザベスさんの話は進んでいた。依頼の中には期限を設けているものもあるらしいが、仲間の中にはしつかり者も多いし依頼を達成せずに終わるって言うことはないと思う。

3Fにある、もぎてん通りの“キッチンなまやけ”の前に皆が集まって話をしているとコロマルとアイギスに伝えられ、そこへ移動すると皆が真面目に話し合っていた。私

に気付いた美鶴先輩が手招きするので近寄って行く。

「やつときたか、湊。我々と彼ら、互いの『総称』を決めておいた方が、何かと話し易いのではないかと思つてな」

「初めて会つたんですし、少しでも連携を良くしたいですね」

美鶴先輩が切りだした話題に対して雪子ちゃんが微笑みながら頷いた。他の皆も同意見の様なので私としては反対する理由にはならない。ただ、私たちから少し離れた場所から様子を窺っている優ちゃんの見線が痛いのが気になるけれど。

「では、そうだな……我々には既に『S. E. E. S』という呼称があるから、それを……」

美鶴先輩は私たち、特別課外活動部の通称を持ちだした。ちよつと長いけれどもいいかなつと思つていたのだが、意味を分かつていないとただの横文字でしかないので、こんなことも予想していないといけなかった。高校1年生の巽くんが悩み悩みながら呟く。

「えす、いー……うーえす、いー……せー！せ、せ……セーフ！」

「ぶつぶー。アウトー」

千枝ちゃんのツツコミが入り、顔を真っ赤にしてそっぽを向いた巽くん。そんな彼の姿を見ていた美鶴先輩は額に手を当てて、「これは駄目だな」と小さく呟いた。するとやり取りを見ていた真田先輩が言った。

「なら、学校名はどうだ？俺たちは月光館学園。お前らは八十神高校……だったな」

「月光館学園さんと、八十神高校さん……？」

「呼ぶたびに舌を噛むな」

真田先輩の意見に首を傾げる天田くんと異くん。そんな中「ふっふっふ」と意味深に笑う真田先輩がパチンと指を鳴らして続ける。

「締めればいい。月光館学園は、月高ともよばれたりしている」

「つきこう？何かカツコイイつすね！ウチはね、八十神の“八”を取って、“はちこう”って呼ばれてる」

真田先輩の意見を聞いていた千枝ちゃんが諸手を挙げて、八十神高校の略称を言うと2人は拳をぶつけ、周囲にドヤ顔を見せてくる。

「じゃあ、月高組と八高組ですか？」

「うん、それでいいんじゃないかな？」

出た意見をまとめた天田くんの言葉に私が頷くと、話を聞いていた他の皆も口の中で言葉を転がし、問題ないと頷いたので私たち月光館学園の出身者は月高の誰々、八十神高校出身者の優ちゃんたちは八高の誰々と名乗ることで話がついたのであった。

幕間②

— エリザベスの依頼① —

エリザベスに渡された印の入った割り箸を両手で持った月高メンバーの一人であるクマはもぎてん通りの廊下の隅で途方に暮れていた。保健室から勢いよく飛び出して玲ちゃんにプレゼントする食べ物も、ゲットしに来たのはいいけれど、割り箸と食べ物に交換する手立てが思い浮かばなかったのだ。

「……よよよ。これからどうすればいいクマか」

そうやってクマが一人廊下で項垂れていると、丁度彼の前を通りかかった少年が声を掛けて来た。

「うん？ こんなどころで割り箸持って、何をしているの、クマさん？」

「およ……、センセイのお兄さんクマか？」

クマが顔を上げるとそこにはお日様のような暖かな笑みを浮かべる総司の姿があった。彼が差し伸べる手を取って立ち上がったクマは、直面している問題について相談することを決めた。何せ、頼りにするはずだった優が玲ちゃんとの仲を争う好敵手である善につくことに決めてしまったからだ。

「うん。名前は総司だよ。割り箸を持つているってことは、何かを食べに来たの？」
「違うクマよ。玲ちゃんに何かプレゼントがしたいクマ……」

そう言つてクマは黙つた。自分が割り箸を持つてもぎてん通りにいる状況だけで、玲ちゃんにプレゼントを贈るといふ行為には繋がらないことに気付いたからだ。事情を最初から説明をしないといけないと口を開こうとしたクマであつたが、それよりも前に総司が口を開いた。

「なるほど……、大方エリザベスさんの提案で割り箸を使つて『わらしべ長者』をするこ
とになつたのかな？よく見れば、その割り箸には印が入つているし。交換は何回まで、
オーケーなの？」

クマはキグルミの中であんぐりと口を開けて固まつた。総司に与えた情報はたった
2つしかなかった。

『玲ちゃんへのプレゼントを必要としてゐること』
『自分が割り箸しか手段に持たないこと』の2つ。

そのことから、そこまでのことを推理したのであれば、自分では想像できないことも
簡単に為してしまうかもしれない。そう思つたクマは咄嗟に総司に抱きつき、助けを求
めた。

「クマっ!?す、すごい……クマは何も言つていないのに。さすが、センセイのお兄さんク

「マームムム、クマはこれからお兄さんのことをシーフー（師夫）と呼ぶことにするクマ！」

「別にそこまでのことではないと思うけれどなあ……で、交換は何回までオーケーなの？」

「3回までクマ」

クマがキグルミの手を上げながら言うと、総司は顎の下に手を当て、周囲を見渡す。すると数人、もぎてん通りに月高と八高のメンバーがいるのに気づいた。

「クマさん、とりあえずここら辺にいるメンバーの皆に話を聞きに行こうよ。エリザベスさんが作ったルールに則って行動しよう。それで得られた物が何であれ、それで勝負しようよ。……それにエリザベスさんは怒らせるとラスボスよりもヤバいから」

総司が最後に呟いた言葉を聞き逃したクマは首を傾げたが、彼が「何か質問があるの？」と首を傾げたのを見て、気のせいだったと思うことにした。

「分かったクマよ、シーフー」

「氣にいつちやったの、そのフレーズ？」

総司は呆れつつもクマと一緒に歩み始める。クマは頼れる八高メンバーのリーダーであり、自分を外の世界へと連れ出してくれたセンセイとして慕う優の助力を得られなかった代わりに、総司というこの世界では「反則級」の力を持つ仲間の助力を得る事に

成功したのであった。

□□□

依頼①『わらしべ対決を手伝って』。

記念すべきエリザベスさんが運営する保健室での依頼の第一号となったのは、玲ちゃんと仲良くなるうとしたクマくんの行動が気に障った善くんとの勝負の手伝いであった。エリザベスさんが提案した勝負方法は割り箸を使った『わらしべ長者』。

印をつけた割り箸をそれぞれ3回まで交換し、玲ちゃんの要望である『大きくて美味しい』食べ物を手に入れなければならぬ。そのことを聞いたクマくんは勢いよくもぎてん通りに向かって飛び出して行ったが、善くんは私たちに助力を求めて来た。私と優ちゃんに。

「えっと、クマくんの手伝いはしなくていいの？」

「……いい。偶にはお灸をすえてやらないといけないから」

「そっか。じゃあ、善くん。私たちが手伝うよ」

「すまない。助かる」

そうやってフードコートを訪れた私たちは一通りメンバーの言い分を聞き、模擬店で買ったラーメンをどう食べようか悩んでいた順平に箸を渡してお礼にアイスクリーム

をもらい、甘い物が欲しいと言っていた天田くんにはアイスクリームを渡してお礼にコーヒーをもらう。そして、巨大なパフェを食べきって豪華賞品をゲットしたはずなのに、胃もたれと豪華賞品の内容にノックダウン状態の花村くんと巽くんのペアにコーヒーを渡して、ジャンボパフェの引換券をもらった。

ジャンボパフェは花村くんたちが食べているところを見た限り、私の身長でも見上げるほど大きなものだったから、善くんとクマくんの『わらしべ勝負』は勝てただろうと思っていたのだが、自信満々のクマくんの横に総司くんがいることに気付いた瞬間、背筋に冷たい物が流れた。

「むっふっふ……、逃げずによく来ることが出来たクマな」

「ふん。こちらにも負けるつもりはない」

クマくんと善くんが睨みあう。そこに保健室に待機していたエリザベスさんと玲ちゃんをつれた優ちゃんが戻って来た。エリザベスさんが2人の間に立ち、ジャツジするようで商品を持つてくるように告げたため、私たちは善くんに引換券とジャンボパフェを交換してくるように伝える。クマくんの方もゲットした商品を取りに総司くんと向かった。

「ちっ。……まさか、兄さんを味方につけるなんて」

「そうだね。正直、クマくんだけだったら負けるなんてありえなかったけれど」

ちなみに会話する間も優ちゃんは視線を交わそうとしないで壁に凭れかかっている。しかし、総司くんの説得で心境の変化があったのか、会話だけは出来るようになっていた。それでも、以前の優ちゃんとは違い、抑揚は無く事務的な感じですごく寂しい。

そうこうしている内に善くんはジャンボパフェ、クマくんは自分と同じくらいの大きさの綿飴を持ってきた。丁寧に小さい綿飴を使って耳や手足まで再現されたクマくん型になっている。

「わあー」

玲ちゃんはそれぞれが持ってきた物を見て、『キラッキラ』な笑みを浮かべている。それは正に大輪の花が開いたような輝いた笑顔である。

「私、ルール違反がないようにお二方の動向を調べておりましたが、どちらも問題なく既定の回数で目的の物を取られましたのを見ておりました。では、早速。実食とまいりましょう」

エリザベスさんはそう言って、善くんが持ってきたジャンボパフェを玲ちゃんの前に置いた。

両手を合わせて元気いっぱいに「いただきます」と言った玲ちゃんは、フードファイターも真つ青なスピードで生クリームのホイップ、色とりどりのフルーツ、嵩を増やすスコーン、甘いアイスクリームを次々と平らげて行く。花村くと巽くんの2人がヒイ

コラ言いながらやつとで食べ終えた代物が物の2分ほどで無くなってしまった。
「美味しかったよ、善」

満面の笑みで善くんに告げる玲ちゃん。その姿に善くんは目を細め、静かに喜んでい
る様子だが、私たちと総司くんは玲ちゃんの驚異の胃袋に戦慄していた。

「玲さんの胃袋はブラックホールかつ!？」

「あの身体のどこに入ったって言うの!？」

私たちの反応は余所に、勝負は進行する。二番手はクマくんの大きな綿飴である。

「はい、玲ちゃん。どうぞクマー」

「ありがと、クマさん。あーん……『はむ』」

クマくん型の綿飴の耳部分が玲ちゃんの口に入ったかと思うと、いつのまにか本体部
分も消えていた。お腹を撫でる玲ちゃんがいるっていうことは食べ尽くしたってこと
だろうと思うけれど、いくら何でも早すぎないだろうか……って、クマくんが泣いてい
る。

「よよよ、『シーフ』と一緒に作った『綿飴クマ次郎』が一瞬で食べられてしまったク
マー……。クマ次郎ー!」

そう言ってクマは玲ちゃんのお腹に向かって抱きつこうとしたのだが、

「はい、ストップ。見え見えなのよ、アンタの行動は」

「ひえっ!? センセイ、じよ、冗談クマよー……」

玲ちゃんに抱きつこうとしたクマくんの背中にあるジツパーを掴んだ優ちゃんはフードコーナーの窓のひとつを開けると、そのまま『ポイツ』と窓の外に彼を放り捨てた。視界の端に映っていたクマくんの姿がヒュツと掻き消える。

「あつ——」

「クマさーん!!」

玲ちゃんと総司くんがほぼ同時に叫んだが、無情にも優ちゃんは『ピシヤツ』と窓を閉めた。そして、つかつかと善くんの横に立つと彼の右手を大きく天に向かってあげさせた。

「ウイナー、善。はい、終了」

彼女はそう言うのとフードコートから去って行った。キョトンとしていた私たちにエリザベスさんが依頼の終了を淡々と宣言した。私に報酬であるアクセサリーを渡すと彼女もまたフードコーナーから去って行った。フードコートに取り残された私たちが再起動したのは、3階から落下したはずなのに、ピンピンとした様子のクマくんが再度玲ちゃんにちよつかいを出した直後であった。

□
□
□

—マリーとの出会い—

フードコートの一角に私たち月高のメンバーが3年生を除いて揃っている。数人、八高のメンバーもいたりするけれど、重要なことではないので割愛する。

「さて、ベルベットルームに現れた2枚の扉を実際に見て検証して、八高メンバーとの顔合わせも粗方終わった訳ですけれど……。私には気になることがある！そう、ベルベットルームにいた『マリーちゃん』について！」

八高組は知っている素振りがあり知り合いであることが窺える。彼らが2年後の世界から来ている事は成長した優ちゃんを通して分かっている、マリーちゃんもまた2年後の世界からここに来た事になるのだろうけれど。

そんな彼女のことをどうして、総司くんは知っていたのか。八高組も最近になつてようやく知り合ったようだし、これは大きな謎の予感がする。

『回想』

2枚の扉の様子を見るためにベルベットルームに足を踏み入れた際、そこに青い帽子を被った少女がいることに気付いた。彼女は気だるそうに私たちを見据えると首を傾げた。マーガレットさんはそんな彼女の存在を無視したまま、ベルベットルームに現れた2枚の扉について思考している。その姿に業を煮やした少女が話しかけてくる。

「ねえ、なんで無視!？」

マーガレットさんは本当に今いることに気付いた風に装っているが、エリザベスさんと同類の彼女がそんな訳ないだろうなと思って、優ちゃんたちに目配せしようとする。1人だけ、憧れのスターに会ったファンのように身体をうずうずさせる人物がいることに気付く。

「うわあ、本物だ」

と、彼が小さく呟くのを私は見逃さなかった。私は疑問に思って、見知らぬ少女をじつと見つめる。しかし、見当もつかないので尋ねる事にした。

「あなたは、誰なの?」

尋ねられた少女がじつと私を見返してくる。当然、見覚えの無い私を見て首を傾げ、話が進まない。その様子を見ていたマーガレットさんが間に入って話を進める。

「ああ、……申し訳ございません。ご紹介が遅れましたが、この子はマリィ。一応、ベルベットルームの住人として、我々と共におります」

見知らぬ少女の名を聞いた私たちは聞き覚えのある名前に「ん?」と首を傾げる。〃マリィ〃という名前に聞き覚えがあったからだ。具体的には7月末の屋久島へ向かうフェリーの上で、心理ゲームをした際に総司くんが書いた名前が確か〃マリィ〃だったはず。項目は『好きだけど叶わない人』だったと思う。

「え、マリーちゃん!? 何でここに……って、住人!? どゆこと?」

八高メンバーの千枝ちゃんが戸惑いつつ尋ねると、バツを悪そうにしながらだがマリーは答える。

「住人とかじゃないもん。たまたまいるだけ……。で、何なの? 人多すぎ、キャラ被つている」

マリーという名の少女はベルベツトルームにいるメンバーを眺める。そして、視線を足元に向け、行儀よくおすわりしていたコロマルが目にと映るとピタッと身体の動きを止める。

「……犬ふさふさ」

「ワン!」

コロマルの可愛さにやられてしまうのは万国共通なので良く分かる。

「この通りの子ですが、少しは皆さまのお役にたてることもございますでしょう。今から、ここではない世界との交流はこのマリーに任せますので、どうぞ、ご遠慮なくお申し付けください」

「はあ!? またあの仕事すんの? 聞いてないんですけど」

無茶ぶりされた少女はマーガレットさんに抗議の声をあげるが、マーガレットさんは眉ひとつ動かさずに返答する。

「今、初めて言ったのだから当然よ。暇な時はいつものようにポエムでも書いていたらどうかしら?」

「な……ポエム?は、知らないし!あ、あれは……他の世界のことをメモっただけで私のじゃないし、何で知ってんの?」

「そう、仕事熱心ね。それなら今回もお願いするわ」

「うう……ばか……」

マリーはその場で項垂れる。仕事を任せる事はマーガレットさんにとっては決定事項だったようで平然としている。そんなやり取りを見ていたら、後ろの方から『とたたた』とマリーに近づく影があった。その影の正体は玲ちゃんだった。

「ポエム……って何?」

「ポエムじゃないし。ココロの叫び(パトス)だし」

「ばとす!!善。善、ばとす、カツコイイ!」

「……そうか?」

カツコいいと言われたのは初めてだったのかマリーという少女は頬を紅く染め照れている。そして、善くんは嫉妬しているのか、玲ちゃんへの返事は若干冷める印象を受け言葉であった。

「ところで、ポエムとはいったい何かを知っているか」

善くんはたまたま隣にいた総司くんに見つかる。見つめられた総司くんは自信満々に胸を張った。

「では、善さんのご希望に添いまして、一個披露しますね。タイトルは……『解放セヨ』」
 総司くんの言葉を聞いて、玲ちゃんの言葉で照れていたマリーは表情を凍らせて彼を見つめる。まるで、その先を言わないでくれと懇願するように恐る恐る手を伸ばすが、無情にもその続きが発せられる。

「『解放セヨ！欲望ヲ！衝動ヲ！理由モ根拠モ臆病者ノ言イ訳ニ過ギヌ！』ってな感じですよ」

「ギヤーツ!?……ばかきらいさいあくさいてー! って、何でキミが知っているの!？」
 「照れツツコミ、ありがとーございまーす」

頭を抱えて蹲る彼女と裏腹にイイ笑顔をしている総司くん。黒歴史を暴露されるほど苦しいものはないもんね。ご愁傷様。

『回想終了』

「あの時はさらつと流しちゃったけれど、色々とありえないよね」

「うん。マリーちゃんを知っていたのもそうだけれど、彼女のポエムを知っていたのもね」

「千枝ちゃんたちも最近になって会ったって言うていたってことは、2年前の私たちの状況じゃ出会ったことがあるとは言いい訳も出来ないよね」

悩みの種は総司くんの事だ。ちよつとしたことだけれど、この世界に来てからの総司くんの言動には皆、気になっているみたいだ。

「けど、あんまし関係ないだろ。総司がこれまで、俺等の邪魔をしてきたか？むしろ、総司がいなきや拙いってことが何回もあつたじゃないか」

「うう……それもそうだね」

という順平の取りなしの一言で私たちは心にシコリを残したまま、解散する流れになつたのだつた。

幕間③

『わらしべ対決』にて玲ちゃんの望んだ『大きく美味しい』食べ物を用意して、憎き恋敵である善との勝負を引き分けたクマは、まだ満足に話せていない月高の女の子たちと一時のアバンチュールを過ごすために校舎内を歩きまわっていた。

「むむむ、ゆかりちゃんや風花ちゃんはいったどこにいるクマか……」

『キュッピーン』とキグルミの目を光らせるという器用なことをクマがしていると、先ほどの対決でお世話になった人の姿を発見した。クマは邪魔にならない程度の速度で、彼に近づいて行く。

「シーフー、どこに向かっているクマか？」

「あ、クマさん。お疲れ。うん、ちよつとね」

そう言つて総司が視線を向けた先には、先ほど女王を倒してクリアしたばかりの迷宮、『不思議の国のアナタ』の教室があつた。クマは教室と総司を交互に見て、不安そうに尋ねる。

「ここに何か用があるクマか？一人で行くのは危険クマよ、せめてりせちーか風花ちゃんのだじがないと……」

「ねえ、クマさん。男が女性に隠れて特訓するのって、そんなに駄目なことかな？特訓して強くなれば窮地に陥った女性を華麗に助けてカッコいいところを見せつけられるようになるってことなだけれど」

「クマも行くクマ！」

「ありがとう！クマさんなら、きつと“そう言ってくれる”と思ったよ。この特訓のことは僕とクマさんだけの秘密だからね」

総司はそう言つて笑うと右手を差し出してきた。クマは自身の邪まなる欲望を顔に出さないようにしながら、彼の手を握つた。そして、迷宮に突撃しようとして呼び止められた。

「ちよつと待つた、クマさん。クマさんって、電撃属性が苦手でしょ？レベルをあげて電撃耐性を持ったコロポックルのカードだよ。サブペルソナとして使つて」

「おおー。クマのキントキドウジの弱点まで調べておいてくれるなんて、さすがシーフークマ。一生、ついて行くクマよ！」

「いくらなんでも大げさだよ、クマさん。あ、クマさんは僕のペルソナについて聞いている？」

「勿論クマ。本来のセンチと同じように色んなペルソナを使えるクマよね？」

「うん。けどね、結城先輩や優たちにも見せてないペルソナもあるんだ。スキルが微妙

であったり、使い所が無かったりしたのもあってね。そういったペルソナのレベルを上げて、戦力になるようにしておきたいんだ。結構、作業のようにシャドウを倒すのを繰り返すことになると思うけれど、クマさんは大丈夫？」

総司が前もって目的を話してくれたことに、クマは彼が自分を信頼してくれているのだと嬉しくなった。正直に言えば、今すぐにでも小躍りして喜びを体現したかったのだが、そんなことをすれば、騒ぎに気付いた他のメンバーが寄ってくるかもしれないと思い自重することにした。全ては秘密の特訓で強くなって、玲ちゃんやゆかりちゃん、アイギスといったメンバーからちやほやされるのを夢見て。

「問題ないクマよー。コロポックルのカードはありがたく使わせてもらおうクマー」

そう言ってクマは総司が持っていたコロポックルのカードを受け取るとキグルミの顔の下にあるジッパーを横にずらし、開いた空間にカードを入れた。すると自身のキントキドウジの他に、もらったコロポックルの力が流れ込んでくるような、不思議な高揚感に包まれた。

「これでクマには怖い物はないクマー！ シーフー、今すぐにでも特訓に出発するクマか？」
「うん、頼りにしているよ。クマさん」

そう言った総司は右手に月高の桐条美鶴が扱うような片手剣を、左手には八高の白鐘直人が使っている小型の銃を装備していた。クマはその不思議なスタイルに呆然とす

る。

「あ、この装備の仕方が気になる？ 実はね、女王の取り巻きのF・O・Eを倒した時に入れたペルソナがね、『リヨウマ』っていうペルソナだったんだ。……ほら」

銃をホルダーにおおした総司はペルソナカードをその手に出現させて、クマに見える様に差しだした。カードには紺色の着ものを羽織った若い青年が描かれている。確かに描かれている青年も今の総司のように右手に刀、左手に銃を持っている。

「僕には扱えない武器はないんだけど、得意と呼べる武器も無いんだ。けれど、武器と一緒に描かれているペルソナをつけている間は、その描かれている武器に近い物が得意になるみたいなんだ。今回はこのリヨウマを基本にして、色んなペルソナのレベルをあげようと思ってるって訳」

「なるほどクマ」

「あ、この情報もクマさんだから教えたんだから、皆には内緒だよ」

総司はそう言ってお茶目にウインクしてくる。クマはそれを見て「ときめき」はしなかったものの、総司が自分に寄せる信頼の大きさは、八高メンバーの誰にも負けない物だと思った。信頼されるということがどれだけ自分に自信をくれるのか、クマはそれを実感していた。

「……でしゃべっている時間がもったいないクマ！ シーフー、行くクマよ!!」

「うん、秘密特訓開始！」

クマは総司と並んで迷宮内に足を踏み入れる。それと同時に思うのだった。

『どうして、センセイはいるのに、センセイのお兄さんである総司はクマたちがいるところにはいないのか』

『遠くの方にいるにしてもセンセイの口から一言も総司の話が出なかつたのは何故なのか』

そんな疑問がクマの心に宿つたのだが、それはすぐに掻き消えた。なにせ……

「クマさん、あのF・O・Eに急襲をかけるよ！」

「うおおお、シーファー落ちつくクマ！それで5体目クマよー!？」

各フロアにいるF・O・Eを見つけては嬉々として突撃していく総司を窘めたり、パワースポットでアイテムは拾わずに近寄ってきたシャドウを返り討ちにしたり、またまって行動しているシャドウの群れを見つけた時なんてもう先回りするために迷宮内を全力疾走したり……。絶望している暇がないくらいに戦闘漬けであった。

「もう……死ぬクマ……」

総司との秘密特訓を行って憧れのハーレムをと邪まなる野望を抱いて不思議の国のアナタの迷宮に潜つたクマは、息も絶え絶えに転がっていた。ちなみに場所は巨大な女王がいたフロアでシャドウに襲われる心配はない。なので、クマは一時の平穩に身を任

せていた。

「やっぱり、……僕の予想通りだ」

が、突然の総司の喜?の声に驚いてクマは顔を上げた。彼の視線を追うと女王がいたフロアの前に何か大きなモノがあるのに気付く。クマはじっと目を凝らす。すると、それが巨大なシャドウであることに気付いた。

「どっひやああ!? な、な、なんじやありやああ!?」

「クマさん、あれが僕らの秘密特訓パート①の最終目標『金甲蟲』だよ。レベルは23、HPは2500。使用スキルはなぎ払い、アサルトショット、剛殺斬、メッタ突き、ポイズンブレス。有効な攻撃は火炎属性、電撃属性、状態異常全般、封じ全般だよ」

どうして総司がそんな緻密な敵の情報を知っているのか、クマには全然見当もつかなかったけれども、このままだと彼はあの巨大な敵に挑むことだけは分かったクマは必死になって思い留まらせようと声を張り上げる。

「いやいやいやいや、無理無理無理無理! 絶対にやめた方がいいクマよ、シーフー!!」

キグルミの中でクマは、涙とか鼻水とか冷や汗とか他にも色々な体液を垂れ流しながら、総司に縋りついた。すべてはキグルミの中のことなので総司には迷惑が一切かからないようになってる。そんなクマの内情を知らない総司は、クマに向かって慈愛に満ちた表情で言葉を紡いだ。

「クマさん、この特訓をやり切つて他の皆と合流した時のことを思い浮かべてみて。他のメンバーとは一線を隔す實力を見せて、シャドウ相手に活躍をするクマさん。向けられるのは羨望と嫉妬の眼差しだよ。嫉妬の視線を向けてくるのは当然男性陣、羨望の眼差しを向けてくるのは勿論、言わなくても分かるでしょ？」

「ふおおおおお、やる気が漲つてきたクマー!!」

先ほどまでの醜態はなんだったのかと第三者がいれば確実にツツコミを入れたであろうクマの変貌に総司は満足そうに頷いている。

ただ人はそれを『洗脳』と呼ぶということを、クマは知らなかった。

「それに深く考えなくていいんだよ、クマさん。金甲蟲もここに来るまで戦つてきたF・O・Eと同じ。動きを封じて、状態異常で弱らせ、弱点攻撃で止めをさせればイチコロさ」

「クマはシーフを信じて進むクマー！」

クマはびしつと総司に向かって敬礼する。総司も腕を組んでうんうんと頷いている。

「うん。それじゃあ、クマさんは離れた位置からコロポツクルのジオで攻撃して。金甲蟲の前には僕が立つからさ」

そう言うと同時に総司は金甲蟲に向かって駆けた。そして、冬眠しているかのように身動きひとつしない金甲蟲に向かってベルソナのスキルを発動させる。

「アオアンドン、ナイアーム！」

総司が降魔させたのは長い黒髪の鬼女であった。クマは総司が召喚したペルソナを見てブルリと身体を震わせる。あのペルソナを総司が召喚すると、たちまち敵シャドウは弱弱い攻撃しか繰り出せなくなるからだ。スキルの効果が発現したかどうかは、敵の身体に巻きつくように現れる赤い鎖の有無を見ればいい。今回もまた。『運』がいようで金甲蟲の身体には赤い鎖が巻きついていてた。

金甲蟲は苦しげな叫びを上げながら近くにいた総司に攻撃を仕掛ける。だが勢いよく振り下ろしたはずの巨大な角は彼が掲げた片手に易々と受け止められる。攻撃を受け止められ、ガラ空きとなった金甲蟲の肩間に、総司の持つ銃が向けられる。

「ペルソナチェンジ、オチムシヤ。ポイズマ」

総司が銃の引き金を引くと同時にペルソナが変わった。幽鬼のように力ない蒼白い顔、至る所に矢や斬られた痕があるボロボロの鎧を着た武者が浮かび上がる。そのペルソナが絶叫すると金甲蟲の眼前に紫色の靄が掛った。敵シャドウに毒という状態異常を起こさせるスキルが発動したのだ。

「クマさん、攻撃して！」

「分かったクマよ！ゴー、キントキドウジ、ジオー！」

クマの背後に自身のペルソナが浮かび上がる。金太郎をモチーフとし、斧の代わりにトマホークミサイルを手にしているキントキドウジ。の肩に『ちよこん』とふきの葉を

持ったコロポックルが座っている。そのコロポックルがふきの葉を持っていない方の手を上げると、金甲蟲の頭上に雷が落ちた。

弱点である電撃スキルの攻撃を受けた金甲蟲は苦しそうにもがくが、アオアンドンのスキルによって巻きついた赤い鎖によって身体は締めつけられたままだ。もがけばもがくほど苦しさは倍増するのだろう。加えて毒の状態異常まで付加されているのだ。クマはその様子を見て、敵ではあるが同情してしまった。立場が違えば、自分がこんな攻撃をされていたかもしれないと震えあがる。

「クマさん、ぼーっとしていないで攻撃を続けるよー！」
「わ、分かっているクマ」

総司に促され、クマはジオを撃ち続ける。総司はナイアームの効果が解けたらアオアンドンを使ってかけ直し、毒が切れたらオチムシャを使ってかけ直す。そして、クマの度重なるジオ攻撃に力尽きた様に金甲蟲がダウンしたのを見た総司は、その場から少し離れる。そして、声高々に宣言する。

「ペルソナチェンジ、モードレッド」

銃をホルダーにしまった総司は上段に片手剣を構える。すると剣先から柄にかけて赤い雷が迸るのをクマは目撃する。

「クラレント！」

総司はそう言うと同時に上段に構えていた片手剣を金甲蟲に向かつて投げた。金甲蟲に向かつて真つすぐ飛んだ片手剣は角に突き刺さる。そして、赤黒い雷が総司の投げた片手剣を発端として発生し金甲蟲を攻撃する。断末魔を上げて、金甲蟲は黒い霧となつて消え失せるのを確認した総司とクマはハイタッチを交わした。

「倒せたクマー!!」

「だから、言つたでしょ！クマさん」

クマは今の戦いで得た経験値でキントキドウジが成長したのを確認し、喜びの声を上げる。そして、成長したコロポックルの異変にも気付いた。

「あれ、コロポックルもレベルが上がって新しいスキルを覚えたみたいクマ」

「え？」

「これは心の力を回復する気功（中）クマー！これをユキちゃんやゆかりちゃんに渡せば、ムフフフ……」

心の力を消費して魔法スキルを扱う彼女たちに気功（中）を持つサブペルソナをあげれば、きつとなんらかのご褒美がもらえるかと妄想を膨らませるクマであったが、

「クマさん、秘密特訓のことを話すつもりなの？」

と、聞き覚えの無い冷たく感じる総司の抑揚が全く無かった言葉に動きを止めざるを得なかったクマ。自身の背後に立っている総司が今、どんな表情をしながら自分を見て

いるのか分からないため、ガチガチと歯を鳴らすしかない。

「え、えっと……。と、当分の間は、せ、成長したコロポックルはクマが持つておくクマ！そして、出しても問題なくなつた時にセンセイに渡すことにするクマ。だから、シューとの特訓のことを話すつもりはないクマよ」

クマは必死に考えながら言葉を紡いだ。背後に控えていた総司からのプレッシャーが徐々に消えて行つたことに心の底から安心したクマは、自身が選びとつた選択肢は間違つていなかったとほつとした。

以前、命を軽んじる発言をした久保美津雄に対して優が「キレた」姿を見たことがあつたクマは、「やっぱりシューフーとセンセイは血の繋がつた兄妹クマ」と心の中で何度も頷いたのであつた。

金甲蟲を倒し終えたの後は帰るだけであつたのだが、総司に確認したいことがあると言われ一度階段を上つたクマは総司に尋ねる。

「何か忘れ物クマか？」

「うん、ちよつとね。……たぶん、『もういい』かな」

総司が小さく何かを呟いた。それを聞き取れなかつたクマは首を傾げ、尋ねようとしたが総司は昇つたばかりの階段を降りて行つてしまふ。その行動に意味はあるのかと疑問に思いながら、その後を追つたクマは驚愕した。総司と2人で倒したはずの金甲蟲

が、女王がいたフロアの前に復活していたのである。

「そんなバカなクマっ!？」

「ふむふむ、これは使える。……けど、荷物も山になっているし、回復アイテムも残り少ないし、クマさん。今日の所は帰ろうと思うけれど、いいかな？」

「勿論クマ！帰ってゆっくりするクマ！」

クマは総司が帰還するという言葉を発するまでビクビクしていた。もう一度、やるつて言われたらどうしようと思っていたのだ。総司が荷物からカエレールを取り出している最中、クマは考えていた。

今度、総司と秘密特訓をする際には何が何でも陽介と完二を巻き込もうと。総司が望むのは女性陣に知られずに強くなるってことだから、陽介や完二を巻き込む分には構わないはずと高を括って。

カエレールを使って「ヤソガミコウコウ」に戻って早々、総司は手に入れた素材を売りにテオドアの工房に向かって行った。クマはそれについて行くほどの体力が残っておらず、廊下の隅の方に行っておもむろに転がった。

「これは、本当になんとかせんといかんクマ……」

そう呟いたクマは静かに目を閉じるのであった……。

ブーこんぎっさ編—①

一通り文化祭を楽しんだ私たちは次の迷宮に行くこととしたのだが、風花が探索して得た情報を告げたところ、八高メンバーが驚愕の声を上げた。

「2年2組ってウチじゃんか!」

一番声の大きかった花村くんは視線が集中する。すると彼はごにごにごによと聞き取れない声で何かを呟いた。どういうことなのか、疑問に思った私は彼と同じクラスである千枝ちゃんと雪子ちゃんを見るけれども、彼女たちもまた苦笑いを浮かべていた。どうやら私たちには聞かれたくないらしい。

「文化祭で何をやったの、優?」

「合コン喫茶だよ、兄さん。実行委員は陽介」

「うおいつ!!」

総司くんに話を振られた優ちゃんは澁みなく彼の質問に答え、私たちに知られなくなかった情報を垂れ流しにした。そんな優ちゃんは花村くんから勢いよくツツコミを受ける。千枝ちゃんたちも半ば諦めた表情を浮かべていた。それにしても合コン喫茶か、私たちからして2年後の同年代の高校生がそんなのをやるんだ、と納得しているとその

ことに疑問に思った美鶴先輩が問う。

「なんだそれは？」

「クラスの出し物で、その……合コンをやるんです」

美鶴先輩の問いに答えた雪子ちゃんは申し訳なきように告げた。順平がそんなイベントがあるなら八高の生徒になりたいと叫んだのだが、雪子ちゃんは元より千枝ちゃんや巽くんたちもあまり触れてほしくない話題の様で口を閉ざしている。そんな中、玲ちゃんは素朴な疑問を口にした。

「ごーこん……って何？」

それに答えたのはキグルミを脱いだ状態でさらさらの金髪をなびかせるクマくんだった。

「合コン、それは運命の交差点……。この広大な宇宙の中で、赤い糸で繋がるたった一人の相手を探し求め、億千万もの愛の狩人が集う場所……」

「わあ〜！この広大な宇宙の中で、赤い糸で繋がるたった一人の相手を探し求め、億千万もの狩人が煮てき焼いてき食ってき！」

「最後急に怖いな……」

「それに、それは肥後の蹴鞠歌の歌詞だよ」

安定の玲ちゃんの聞き間違いは置いておく。玲ちゃんに嘘を教えたとしてクマくん

は千枝ちゃんと雪子ちゃんからお仕置きを受けているが、クマくんへの制裁は玲ちゃんとアイギスにお付き合いを申し込んで即座に振られる形で済むのだった。

「つまり……合コンとは随分と高尚なイベントだということだな」

「や、違いますから」

今までの話を聞いていた美鶴先輩はそうまとめた。うん、生粋のお嬢様でしたね、美鶴先輩。彼女の間違いを正すため、ゆかりがすぐさまツツこんだ。そんなやり取りをしていたゆかりの傍に移動してきた玲ちゃんは尋ねる。

「赤い糸って、本当に運命の人に繋がってるの？」

「分からないけど……信じたいよね、女の子としては」

「……うん。絶対、あるよね！ね、善」

期待を込めた瞳で善くんを見上げる玲ちゃん。だが、今までの傾向からすると、きつと彼の事だ。「糸を……食べるのか？」とシニールなことを聞き返してくるかもしれない。私はそう予想して、玲ちゃんが落ち込まないようにフォローする言葉を咄嗟に考える。

「そうだな」

そう言った善くんは優しく玲ちゃんの頭を撫でた。

玲ちゃんの意見に同意して頭を撫でたのである！

大事な事なので2回言った。その反応は予想していなかったのか、玲ちゃんも思考をフリーズさせて両手に持っていたフランクフルトを落としている。そんなバカなことがありえるのか、と驚愕していた私たちを余所に善くんは玲ちゃんの前から移動した。その先には総司くんがおり、彼は善くんに向かつてぐつと親指を立てている。

「あつ……」

それを見て善くんが何故、あのような玲ちゃんを喜ばせるような行動が取れたのかを理解した私たちは、彼らのやり取りが見えないよう彼女の周りを壁のように取り囲んだのだった。

ふと、千枝ちゃんが窓の外を見ながらぼつりと呟く。

「あ、まだ0時前。やつぱ止まってんだね」

「……何が？」

ゆかりが首を傾げながら尋ねると千枝ちゃんは指差す。

「外の時計塔。狂ってるか止まっているか分かんなかったけど、やつぱ動いてないみたい」「……いや、止まってはいいない。動いている。とても、ゆつくりと」

千枝ちゃんの疑問をばつさり切る形で話に加わる善くんの言葉は異様に強く感じた。

そのことに気にする様子もなく、千枝ちゃんは納得したように頷く。

「あ、そうなんだ。じゃあ時間が合っていないだけか」

「あの……もう少し、近くで見てもいいでしょうか？」

「名探偵の血が騒ぐか？」

「そういうわけでもありませんが」

そこに待ったを掛けたのは白鐘さんだった。八高メンバーでもキレ者っぽい白鐘さんの言葉を聞いて花村くんが茶化すような言葉を掛けたが、彼女は気にする様子もなく頷く。その後ろで順平が花村くんの言葉に首を傾げたのだった。

迷宮に行くのはちよつと中断して、皆で校庭へと躍り出た私たちは時計塔の前にいる。時間は11時55分を差している。

「校庭の真ん中に時計塔を建てるメリットは何でありますか？ただ邪魔なだけではないでしょうか？」

「本当ですね。これじゃあ、野球もサッカーも満足に出来そうにないし」

アイギスと総司くんが交互に意見を述べる。時計塔の周りを歩いて来た白鐘さんも2人に合流して意見を述べる。

「妙ですね。中に続くはずの扉がありません。これでは、どうやって整備を……」

「メンテナンスが出来ないために、回転速度が不正確になっているのでしょうか」

アイギスの質問に答えようとした白鐘さんであったが、花村くんが腕を組みながら近づいてきて告げる。

「つかそもそも、八十神高校にこんなの無いけどな」

「無いの？」

私が聞くと、白鐘さんが首を横に振った。

「いえ、校長先生から何かの折に聞いたことがありますよ。以前は、八十神高校に時計塔があつたらしいです。もつとも、外見までは分かりませんが」

「……ああ！そうかも！なんとなく覚えてる。でもね、時計塔っていうより、ただの記念碑みたいなものだったような」

白鐘さんが校長先生から聞いた話しをすると傍で聞いていた雪子ちゃんが思い出したように話に加わった。だが、歯切れが悪い話し方に、近くにいたメンバーが首を傾げる。

「少なくとも、こんなふうの中に人が入れそうな大きさじゃなかったと思う。それに、私が小学校にあがる前に壊されたんじゃないやなかったかな」

「とすると、10年以上前のことですね」

「んじゃあひよつとして、オレらタイムスリップしちった！……とか？」

雪子ちゃんの話から時計塔のモデルとなったものが10年前に取り壊されている物

と知った面々。その中で陽気な声で参加した順平であったが、白鐘さんからの返しは非常に冷静なものだった。

「……かもしれせん」

「え、マジかよ」

「何とも言えない、ということですよ。シャドウがいるような場所で、あまり常識で考えても仕方ありません」

順平本人は場を和ませるジョークとして言ったみたいであったが、白鐘さんは逆に真剣に考える方が泥沼に浸かるようだと分かっているかのように振る舞った。

「確かに不思議だよ、ここ。テレビに入った覚えもないし、メガネもいらぬしね」

「テレビ……ってさつきも言っていたよな？何のこと？」

「え？テレビに入んねーの？じゃあどこにシャドウ出んだよ？」

「影時間にタルタロスに入れば……って、そっか。タルタロスにはオレらしかいねーはずだよな。って、ことは影時間に何をしてんの？」

「だから影時間ってなんだよ？」

互いの情報の行き違いから、月高メンバーと八高メンバーの中で疑心暗鬼が膨らんで行くような感じがした。私は咄嗟に彼らの言い合いを収めようとしたが、それよりも先に動いた者たちがいた。

「優、そっちはどんな感じなの？」

「影時間は10月の時点で無くなつた。タルタロスは分かんない。だって、鳴上家はその直後に都合で引越しが決まって月光館学園から離れたし」

優ちゃんから放たれた言葉を聞いて、美鶴先輩の表情が明るくなつた。影時間を失くすことは彼女の悲願であることを知っている面々は嬉しそうに頷く。だが、優ちゃんの言い回しには疑問が残る。影時間は無くなつたけれど、タルタロスは不明。それと引越し？

「こつちのテレビっていうのは貴女たちが想像しているソレで間違いない。……私たちは殺人犯を追っているの」

「さ、殺人!？」

優ちゃんの説明で物騒な言葉が出て、風花が大きな声を上げる。その先の説明は花村くんが受け継いで話を進める。

「俺らが住んでる八十稲羽って町で、連続殺人事件が起こっているんだ。殺害方法は、テレビの中に被害者を入れる事。テレビの中はシャドウの世界なんだ。実はこのクマも、そこ出身」

「クマは、テレビの中に住んでたの？」「ヨースケたちが来てくれて、クマは外の世界に出て来たクマ」

「シャドウのいる世界に住んでいた?……まるで善と玲のようじゃないか」

美鶴先輩の言葉を聞いて玲ちゃんが駆け寄ってくる。善くんはその後ろをゆっくりとついてくる。

「わたし、クマさんと同じ?じゃあわたしたちも、クマさんみたいにみんなと外の世界に出れる?」

「きつと出れるクマ!クマは、ヨースケたちが来るまで、外に出るってキモチも無かったクマ。でも外に出たらとっても楽しくて、もつと早く出れば良かったの!」

「同じだ!みんなが来るまで、帰る!」って気持ち、わたしも無かったもん!」

「……そうだな」

玲ちゃんが自分と同じということでご機嫌だったクマくんだったが、最後に善くんが介入したことによって敗北感からか、その場で崩れ落ちた。ただボウガンで狙われないように言葉の最後には善くんを褒める?言葉を持ってきた。

「こっから大事な話だから黙ってろ」

花村くんがそう言う。「回収しますねー」と巽くと久慈川さんがクマくんの身体を転がして、私たちから離れたところに連れて行った。八高メンバーの連係プレーが光る。

「そのテレビの中の世界なんだけど、霧の日に中にいると、自分のシャドウに襲われて死んじゃうんだ。んで、ペルソナ能力があれば、テレビの中に入れる。……人を入れることも出来る」

「まさか、犯人はペルソナ能力を使って殺人を犯しているということか？」

花村くんの話の聞いた面々が渋い表情を浮かべる中、白鐘さんが決意表明の様な物を述べる。

「まだまだ分からないことは多いですが、僕たちは、犯人を必ず捕まえます」

「そう。必ず、捕まえる。……そして、もう誰も死なせない」

優ちゃんが俯きながらだが、強い感情の籠った声を発し私たちは押し黙った。彼女から鬼気迫る物を感じたからだ。白鐘さんもそんな優ちゃんの姿を見て頷き、続きの言葉を紡ぐ。

「ともあれ、ここはテレビの中ではないし、おそらくあなた方の言うタルタロスでもない。とすると、この世界について僕たちはほとんど何も知りません。各々の常識は一旦捨て、この世界ならではの“ルール”を知るべきだと思います」

白鐘さんはふと時計塔を見上げる。

「この時計塔に何かヒントがあるかとも思っただんですが、中に入れないのなら調査も出来ませんね。引き留めてすみません。次の場所へ向かいましょう」

風花が探索して次の迷宮となった場所へ向かうと看板にはデカデカと「ごーこんきつさ」と書かれていた。

「やっぱか。早速、トラウマをえぐってくんなくていいつつの……」

花村くんは自身が予想した通りの状態になっていて、頬を引き攣らせながら呟いた。見れば千枝ちゃんたちも心なしか煤けている。それを見た総司くんが「大人しく休憩所にもしていればよかったのに」と精神的に追い詰めている。彼女たちも同様の事を思っていたのか、『ぐぬぬぬ……』と齒軋りしているようにも見える。

「サクサク行こうぜ。あと3つぐらいデケエのがあるんだろ？」

「そのはずだ。それに私の記憶が取り戻せる可能性もある」

「善くんの記憶が戻ったら、この世界についても何か分かるかもしれないね」

そんなやり取りをしている八高メンバー11人は放っておいて荒垣さんと風花、そして善くんが話を進めている。そして、掛け声を掛けようとした美鶴先輩が困ったように表情を曇らせた。私たち月高メンバーと、八高メンバーは協力してこの世界の謎に挑むこととなった。そこで、改めてリーダーを決める事となったのだが、優ちゃんの鶴の一声で決定した。

「私はいいです。『結城さん』がしてください」

「ふあっ!?!」

覚悟はしていたけれど、好感度がゼロを突き抜けてマイナスに行っているんじゃないの、コレ!?! ゆかりたちからも不憫なものを見るかのような視線が向けられる。しかし、優ちゃんは言葉を続ける。

「当然、他の方々も『名前呼び』は失礼だと思いますので、『名字』で呼ばせてもらいます」

そう言った優ちゃんは千枝ちゃんや雪子ちゃんたちの所へ向かってしまった。私は恐る恐る振り向くと、そこにはショックを受けて崩れ落ちてしまった美鶴先輩とゆかり、風花の姿があった。

男性陣はおろおろとするばかりで頼りがいがない。唯一、総司君だけが拗ねた妹を見るように「仕方がないなあ」といった感じで呆れているだけであった。

ブーこんきつさ編—②

とりあえず、この世界の謎を紐解くために結成された月高メンバーと八高メンバーの混成チームは、リーダーを私が、サブリーダーを優ちやんが務める事となった。優ちやんは終始不満げだったけれど、総司くんが笑顔で『がんばって』と告げると満面の笑みで頷いていた。それを見て一言。

「まるで主人と犬だな」

「言い得て妙なのは同意つす」

荒垣先輩と巽くんの2人がしみじみと頷いていた。

バックアップを担当する風花と久慈川さんだが、優ちやんをそれぞれ『サブリーダー』、『お姉ちゃん』と呼ぶという。久慈川さんが優ちやんをそう呼ぶようになった訳は今度、改めて聞くことにしよう。そして、善くんと玲ちやんだが、迷宮を進む上でやはり不安が残るようだ。しかし、先ほどの校庭での会話を思い返した玲ちやんが勇気を振り絞った声を張り上げた。

「れっつ、ブーこん！」

ただ、その掛け声はどのようなのかなあ……。

「ごーこんきつき」 迷宮内は、シヨッキングピンクを基調とした非常に目にチカチカする内装であった。その他にはハートを模った物やフリルの装飾もあるけれど、やはり目に付くのは毒々しいほどのピンクだ。もしもそれを狙って誰も来ないように計算された物であったのなら、花村くんは策士ということになるけれど。

「あれ？ 私たちがやった合コン喫茶と内装が違うね」

「へー、センスいいじゃない。何だか、可愛いし」

千枝ちゃんとうゆかりがほぼ同時に話し、お互いを見て苦笑いを浮かべた。

そして、私たちは迷宮内に入ってから違和感に気付いた。

「男子たちがいない？」

「あ、ホントだ。一緒に入ったはずの花村や完二くんたちがいない！」

入る時には一緒に入って来たはずのメンバーがいないことで警戒心がマックスまで上がった私たちはそれぞれ、いつでもペルソナを使えるようにして周囲を警戒する。私はナビゲートを行う風花に連絡を入れる。

「風花、聞こえる？ どういうこと？」

『私たちも混乱しているんですけど、同じ場所に男子メンバーと女子メンバーが分かれて存在しているみたいなんです』

『お姉ちゃん、男子チームも混乱しているよ』

開始早々に男女別々に分断されてしまうと、思いもよらなかつたが、あちらには全ての属性に対応出来る総司くんとコロマルがいる。滅多なことにはならないだろう。

「風花、男子チーム内で仮のリーダーを決めさせて。いきなり分断されはしたけれど、探索を進める分には問題ないよね」

『はい。善くんは玲ちゃんが傍にいないので、少々苛立っていますが大丈夫です』

目下、彼の一番の敵であるクマも幸い「男」に分類されているからあちらにいるようだしね。

『あのリーダーさん。男子チームの伊織先輩、総司くん、天田くんの3人から伝言だよ。』
「この手の分断をされた時は、分かれたそれぞれのチームと一緒に罠を解除したり、扉を開けたりする必要がある」だって』

その3人に共通するのは趣味がゲームであることだが、一応気に留めておくことにしよう。何せ都合よく、少し進んだ先に扉があるからね。

『男子チームが扉に到達しました。力自慢の真田先輩と荒垣先輩、巽くんの3人で押したり引いたりしていますがビクともしません』

「湊、これは骨が折れそうだな」

美鶴先輩が私を労わるように声を掛けてくる。確かに、美鶴先輩という枷が外れた真

田先輩が自重するとは到底思えない。むしろ男子チームにいるのはその勢いに乗っちやいそうなメンバーばかりだ。

『えっと、リーダー。男子チームのリーダーの件ですが9人中4人の票を集めた総司くんに決まりました』

「その内訳は？ 順平がすごくこねそうだけれど」

『はい。その順平くんと乾くん、あと善くんとコロちゃんか総司くんを推薦しました。花村くんは傍観に徹していましたが、総司くんがゆ……鳴上さんのお兄さんつてことで納得したようです……うう』

風花が優ちゃんと呼ぼうとした瞬間、彼女が突然舌打ちした。風花はそれを聞いてすぐに訂正する流れとなったが、私たちはとことん優ちゃんに嫌われてしまったらしい。理由が検討もつかないので後手後手であるが、なんだかちよつと腹が立つてきた。

【ようこそ、迷える羊さんたち。ここは2年2組の出し物だ】
すると突然、機械音声がかこえて来た。

「な、なんだ!？」

警戒を解いていた私たちは再度、密集して背中合わせになり周囲を警戒する。

【はじめましての人も、はじめましてじゃない人も、どうもどうもこんにちは。ここは、簡単な質問に答えるだけで“運命の相手”が見つかってしまう、最新技術を駆使した出

し物なのだ。君はやってもいいし、やらなくてもいい」

「な、何よそれ！つていうか、結局やるしかないじゃん！」

機械音声に対して千枝ちゃんが吼える。玲ちゃんは顔をまるで熟れたリンゴのように真っ赤に染めながら、指をつんつんして何度も何度も頷いている。彼女の意中の人は、男子チームで別の意味で吼えていそうだけれど……。

機械音声が流れなくなつて時間が経つたので、私たちは男子チームが力押しでも開かない扉の前に立つた。するとナビゲータの久慈川さんより、扉の向こう側にシャドウがいることを忠告される。

それを聞いていた白鐘さんより、前回の迷宮に出て来たシャドウよりも強い相手が出てくると考えて、しっかりと準備をした上で開けた方がいいと提案を受ける。私はその意見に頷いたのだが、

『ああつ！真田先輩が突撃しちやつた。敵シャドウは7体、情欲の蛇4体と静寂のマリア3体です』

風花の悲鳴染みた言葉に私はその場でずっこけた。ゆかりは咄嗟に天を仰ぎ、美鶴先輩は怒髪天を突くような感じで怒りの雄叫びを上げる。

「明彦おおおお！」

「アイギス、美鶴先輩を押さえて！風花と久慈川さんは男子チームのナビに集中して」

美鶴先輩はそのままでといもしない男子チームの幻影に向かって、扉に突撃していきそうな雰囲気であつたので、咄嗟にアイギスに拘束させる。そして、新しい迷宮内での最初の戦闘なのでデータ取りも含め、しっかりとナビと解析を風花と久慈川さんに依頼する。

『了解しました』『うん、分かつたよ』

2人はそれぞれの役割に分かれ、男子チームのナビを行っているようだ。

「はあ……真田先輩か」

「ブレーキ役がいなくてというのがキツイよね。総司くんじゃ、厳しいかも……」

私とゆかりがそんな会話をしていると、男子チームが戦闘を終えたのか風花の声が頭に響いて来た。

『男子チーム戦闘終了しました。【情欲の蛇】は弱点が火と光です。雷と風に耐性があります。バインドボイスという麻痺攻撃をしてるので気を付けてください』

『【静寂のマリア】はね、氷と光が弱点で火と雷と風に耐性があるよ！そして、火と風の全体攻撃をしつつ仲間の攻撃力を上げてくるから、気をつけてね』

「となると、情欲の蛇は雪子ちゃんがスキルで攻撃、静寂のマリアは美鶴先輩と千枝ちゃんが攻撃の軸になるね」

「直人、ハマとムドが使えるでしょ。どんどん、狙っていいから」

「分かりました、優さん」

白鐘さんに指示を出す優ちゃん。そっか、白鐘さんは光と闇属性攻撃が使えるのか。覚えておかなきゃ。

「他のメンバーは弱点で怯んだシャドウを武器で攻撃していくよ。男子チームとは違うってところを見せつけよう！」

私たちは扉を開けてシャドウたちと戦う。事前に敵の情報を受けていたこともあり、危機に陥るなんてことはまったくなく、無傷で勝利した私たち。そんな戦いを終えた美鶴先輩がふとした疑問を千枝ちゃんたちにぶつけた。

「君たちは、銃を使わないんだな……」

「銃……は、僕は使いますが？」

「いや、銃型の召喚器のことだ。我々は『召喚器』を自らにつきつけ、己の意思で引き金を引くことでペルソナを召喚する」

私たちはそれが普通だと思っていたので、総司くんや千枝ちゃんたちが、ペルソナが描かれたカードを握りつぶしたり、蹴ったりすることでペルソナを発動させるのに違和感があるのだ。

「召喚器が銃を模しているのは、『死』を意識するため。己の死と向き合うからこそ、潜在的な力を引き出すことが出来る。……召喚器はそのための装置だ」

美鶴先輩の力強い言葉に圧倒されたのか、雪子ちゃんが呆然と呟く。

「死を意識……なんだか、すごい……」

「さつき、ちらつと話題に出ていた影時間って、そんなにヤバいの？」

千枝ちゃんが不安そうに私たちを見てくる。優ちゃんの話によれば、影時間は10月、つまり私たちの時間軸に置いては来月には問題解決となるらしい。

「そうだね、もしも影時間に出てくるシャドウがそのまま、街の人たちを襲ったらまずいことになるのは間違いないよ。私たちの街だけじゃなくて、世界規模でやばくなると思う」

「つまり、結城さんたちは世界を救うために活動しているってこと？」

「なんか、映画みたい……」

雪子ちゃんと千枝ちゃんがそれぞれ感想を述べる。白鐘さんは私たちの言葉をじつと聞いているだけで何も言わずにいる。そして、私たちの活動に参加していた優ちゃんであるが、能面のような無表情でただただ前を見据えているだけであった。

話を切り上げて先に進むと青い棘が床から突き出た部屋に出た。迂回すれば通れるようになってるが、これは一体どういう意味があるのだろうか。

「待て、湊。どうせ、あっちが何かするに決まっている」

「私の計算によると真田さんが25%、クマさんが35%、順平さんと花村さんが14%

ずっと巻き込まれる可能性を考慮して総司さんと荒垣さんが1%ずつとなっているのであります」

遠い目をした美鶴先輩とアイギスの分析を聞き、あり得そうだと思っていたら案の定、男子チームをナビゲートしていた久慈川さんから通信が来た。

『あー、その青い棘は皆の心の力を削るみたいだよ。突っ切ろうとしたクマに引つ張られて、総司くんが巻き込まれちゃった』

そんなオチだろうなと思っていたら、久慈川さんの通信を聞いている内に鬼の形相になっていた優ちゃんが、今にも噴火しそうな火山のような静けさと猛々しさを孕んだ迫力のある声で久慈川さんに向かって告げた。

「りせ。あとでクマに校舎裏に来るように言っておいて」

『はい。分かったよ、お姉ちゃん』

そう言って久慈川さんは通信を切った。私たちはクマくんを訪れる運命に静かに十字を切ったのだった。青い棘を避けつつ先に進み、宝箱からホバーサンダルという名前のアイテムを手に入れた。それは数歩の間、その場から浮いた状態で歩けるというもの。これを使えば青い棘の上も歩けるみたい。その後、あからさまに置かれた巨大な指輪のモニュメントがショートカットということに気付いた私たちはそれを開通させる。そして、男子チームにそれを伝えようと風花に通信を入れるが返事が中々帰ってこな

い。

どうしたのか、首を傾げつつも先に進んで行くと、地図を完璧に書きあげないと開かない宝箱があった。今の状況では当然開かないので地図に書き残して後にする。

「あれ、地図は私が持つているつてことは、男子チームはどうやってるんですかね」
「そうだな。あの青い棘にさえ気をつければいいのだ。そう苦労していかないのかもしれないな」

私の疑問に美鶴先輩はすこし考えた後に返答してくれた。私もそれに頷き返し、先に進む。ちゃんと地図を埋める様に横道に入つてパワースポットでアイテムを手に入れたり、シャドウの群れと戦つたりしながら。そして、今までとは違う雰囲気の前まで来たところで通信が回復した。

『皆さん、すみませんでした。男子チームがショートカットの抜け道を使った時に両方向から不意打ちを受けまして、今まで戦闘のナビに集中していました。どちらも十数体の大群で』

「そ、そうなの!?!皆は無事?」

『はい。けど、探索は続行不可能と判断した総司くんがカエレールを使用し、一時帰還しています』

「男子メンバーが追い込まれるつて、相当な数の敵が出て来たつてこと?」

『ううん。たまたま相性が悪かったの。分断されたメンバーの風属性スキルが扱えない方（伊織・真田・荒垣・巽・クマ・天田）に独占のクピドが18体現れて、弓とブフの波状攻撃を仕掛けてきたの。その所为で真田先輩が早々にダウン!』

『総司さんとコロちゃんがいる方（総司・コロマル・花村・善）には全ての属性に耐性を持つレアシャドウの『財宝の手』が10体出たんです。いつものように逃げずに何故か積極的に攻撃してきたんですよ』

風花たちの通信を聞きつつ、確かにそんな事態に陥ればバックアップをしている風花たちも慌てるよなと納得はするけれど、その間私たちにはバックアップがいなかったことになる。何事もなかったのは不幸中の幸いといえるが、進み方を考える必要があると思われる。

『それで、レアシャドウたちをスキルで行動不能にさせた総司くんがすぐさま一掃した後、分断されて危機に陥っていたメンバーたちの下に行き花村くんと一緒に独占のクピドの群れを殲滅したんですよ』

『待って、風花。『財宝の手』ってあれでしょ。私たちが攻撃しても軽々避けるし、攻撃が当たっても全然怯まないアレだよ。アレを瞬殺したって、嘘でしょ!』

『私もりせちゃんも目が点になったよ。何度も目をこすって、頬を引っ張り合って、これは現実なんだって認識したらそれで、もう絶叫したんだから!』

「総司くんはどうやって倒したの？」

『えつとね、まず財宝の手を混乱させます。そして、あとは物理攻撃で』

「「えー……」」

ゆかりや千枝ちゃん、雪子ちゃんが同時に信じられない物を聞いたと言わんばかりの言葉を発した。私はあらゆるペルソナの情報を思い浮かべる。全体に混乱効果を与えるスキルはテンタラフリーくらいだが、10体にまとめて効くだろうか。詳しい話は総司くんに聞かねばならないだろう。

『あ、皆さん。男子チームが復帰して今、皆さんがいる位置まで来ましたよ』

風花の言葉を聞いて、私が扉に触れると勝手に開かれていく。その部屋には鎖で封鎖された扉があった。白鐘さんが罾かもしれないと注意を促してくる。すると聞き覚えのある機械音が流れて来た。

『ようこそ、迷える羊さんたち。ここは“運命の選択部屋”なのだ』

「最初の扉の時に言っていたアレか。胡散臭いにもほどがあるけど」

優ちゃんの言葉に私たちは苦笑いを浮かべる。

「これから運命の質問が出されるぞ。フィーリングか直感で答えよう。質問はいくつかあるぞ。最後まで答えると、君の運命の相手がゲットできてしまうのだ。では早速、第一問だ」

「Q. 愛があれば、年の差はおろか性別も関係ない？」

「いや、さすがに同性はちよつと嫌なんだけど」

私が小さく呟いたその横で、

「全く関係ないであります！」

「ちよつ、アイギス!?!」

とんでもないことを口走るロボが1体。ゆかりがツツコムけれど後の祭り。扉を封鎖していた鎖は跡形もなく消え去り、そこには白い扉だけが残った。

「こ、この場合、アイギスの意見が採用されちゃうんでしょうか？」

「いや、私に聞かれても分からん」

私と美鶴先輩は、自分は間違ったことを言っていないと主張するアイギスに食ってかかるゆかりを見ながら、大きくため息をついたのであった。

ごーこんきつき編—③

一悶着があつた機械音声による運命の人診断の後、私たちは迷宮を道なりに進んで、とある広いフロアに出た。周囲を見渡すとフロアの中央付近に、金色の馬に跨つた金色のキューピットが佇んでいた。千枝ちゃんが遠目に見ながら呟く。

「見た目は弱そうだけど、あれもやっぱり……」

「うん。たぶん、F・O・Eだね」

私が同意すると、ゆかりが気付いたことを口にした。金色のキューピットの手には玩具のような弓を持っているということ。もしかしたら攻撃してくるのではないかと疑問を投げかける。

「ちよつと、待つて。動き出しそう……」

雪子ちゃんの言葉を聞き、F・O・Eの動きを観察すると、その場から動かずにぐるぐる時計回りに回っているだけのようだ。そのF・O・Eの動きを見ていたゆかりが告げる。

「もしかしたら、標的が通りかかるとのを待つているのかも……。通りかかるとかを矢で狙っているとか。……ここ、無風だし直線的に飛ぶと考えて、あのF・O・Eの直線

上にいるのは気を付けた方がいいかもね」

「さすが、ゆかり。同じ武器を扱っているだけあって、的確な意見だね」

「それは言いすぎよ、湊」

私たちはゆかりの意見を男子チームにも伝え、F・O・Eの動きをちゃんと見極めながら移動して、難なくF・O・Eがいたフロアを突破した。男子チームも美鶴先輩の「今度変な真似をすれば、処刑する」発言で大人しくなった真田先輩とやけに悲壮感漂う八高メンバーに首を傾げつつも総司くんを中心に突破できたようだ。

F・O・Eのいたフロアの先はまっすぐ行けばすぐ扉があったが、左に分かれ道があった。その先は行き止まりであったが、地図のこともあるのでちよつと寄ってみる。するとそこにはテーブルの上に、なぜかここにいる人数分のティーセットが用意されていた。

「うわあ……あからさまに怪しい」

「どうしてこんなところに、テーブルとティーセットがあるんだろう」

千枝ちゃんと雪子ちゃんが訝しげにそれを眺める。私たちの中で唯一、そのティーセットに近づいたのは白鐘さんだった。彼女はポットに手を当てて、『かちやかちや』と音をたてながらだがカップを調べる。

「カップに使用した形跡はありませんね」

「付近には我々以外の気配はしありません」

白鐘さんの分析とアイギスの探知結果を聞き、怪しい物には近寄らないようにしようと皆に目配せする。私たちの中で最年長である美鶴先輩も大きく頷く。

「……先を急ごう。得体が知れないものにかかる時間はない」

「……」

私たちがその場から離れようと来た道を引き返す中、優ちゃんだけが白鐘さんがいる行き止まりへ向かって行く。白鐘さんも自身を迎えに来た様子ではないことに気付कि、優ちゃんに声を掛けた。

「優さん、どうかしましたか？」

「得体の知れないもの、と聞いたたら飲みたくなるのが人の性……」

「お、おい！ゆ……鳴上、ちよつと待て！」

美鶴先輩の制止の声を無視して、優ちゃんは紅茶を一気に飲み干してしまった。その行為を目撃した八高メンバーが彼女に駆け寄り、無事なのか心配そうに尋ねる。だが、当の本人はケロリとしている。

「うん。特に問題ないね。みんなも飲んでみれば？」

私たちは顔を見合わせる。ここで率先して飲んだら、マイナスの値に行ってしまったている優ちゃんの好感度も少しはアップするのだろうかと思ひ、私も飲んでみる事にし

た。私が飲み事に決めたのを聞いた他の皆も次々と紅茶を飲む。香ばしさと適度な甘さが、疲れた体に染み渡る。

「ていーたいむ！紅茶のおともはもちろんどーナツ！」

「普通の紅茶だ……」

「うん。普通……ふふつ。こんなところで普通……くくつ」

玲ちゃんとは四次元ポケットからドーナツを取り出して、紅茶を飲みつつ食べている。見かけ倒しの状態に千枝ちゃんがコメントする横で、雪子ちゃんが小さく嘖き出している。この状況で普通の物が出てくる、という不可思議な状況が彼女の笑いの琴線に触れたらしい。そんな風にまったりとした時間を過ごしていると、慌ただしい声が頭に響いて来た。それは男子チームのナビをしていた久慈川さんの声。

『お姉ちゃん！その紅茶は飲んじや駄目ー！男子チームは全員が毒状態になった……つて、あれ？』

「なんか、男子チームは散々だね」

「トラブルというトラブルが起きまくっているであります」

「回復は大丈夫なの、りせ？」

『うん。総司くんのペルソナでフェアリーっていうのがいて、毒を回復する【ポズムデイ】を覚えていたから、男子チームで行動不能になった人はいないよ』

フエアリーというのは確か総司くんが最初に手に入れたペルソナの内の1体だったはず。総司くんも私たちと同じように結構、力をつけてきたはずだから弱いステータスのペルソナを消去していいそうだけれど、態々残しているのは何か特別な意味があるのだろうか。

そんなことを話しながら先に進むと、またあの青い棘が床から突き出ている所に出てしまった。しかも、今度はご丁寧のパワースポットを取り囲むようにして存在している。

「はあ……、またあのイヤな床だよー」

「湊さん、千枝さんの疲労が順調に蓄積中であります。リーダーとして激励の言葉を掛けるべきタイミングです」

千枝ちゃんの花より団子派ではあると思うけれど、年頃の女の子にそれを言うのは駄目な気がしたので無難にあとで保健室に行こうと提案した。けれど、千枝ちゃんはさらにげんなりしてしまった。そうだ、ヤソガミコウコウの保健室は現在、エリザベスさんが支配者なのだ。すっかり忘れていた。そんな千枝ちゃんの様子とコメントを聞いて、アイギスが相槌を打って大きく頷いた。

「なるほど……、保健室は休むためにあるのですね？」

「えつと？……それ以外にどんな用途があるんですか？」

話を傍で聞いていた白鐘さんが疑問を口にする。アイギスは自身の持つ知識を告げた。ただし、月光館学園限定の知識を。

「月光館学園の保健室は『度胸』を鍛える場なのだそうです」

「『度胸?』」

八高メンバーの声が揃った。何気に優ちゃんも気になった様子で、話に加わってきた。

「勇敢な生徒は、保健室の先生が調合したスペシャルな薬を飲むのだとか」

アイギスの知識は人から聞いた情報であるので、確定したものではない。が、実際に江戸川先生からもらって飲んでいる身としては、ここで口を挟まない方が賢明だと私は判断して口を閉ざした。

「なんか聞くからに怖そうだよね、色んな意味で……」

「というかこの話、エリザベスさんは知らないよね? こんな知ったら、きつと真似するに決まってる」

雪子ちゃんと千枝ちゃんが不安を口にしながら視線をアイギスに向ける。アイギスは優しく微笑んで答える。

「知らないようでありました」

「ああ、良かった……」

八高メンバーはほっと胸を撫で下ろ

「なので、わたしが教えました」

すことが出来ずにその場に皆でずっこけた。

「あんたが教えたんかい！」

ゆかりが伝家の宝刀のチョップとともにツツコミを入れると、アイギスはチョップを受けた所を擦りながら弁明する。

「そもそも総司さんとフードコートにて、傷薬よりも持ち運びが便利で回復力のあるもの”は”はないかを話し合っているところに、エリザベスさんが来られ、たまたまそう言った薬の話題になったため、情報を開示しただけであります」

「ちなみに兄さんは何か言っていなかった？」

「寮に来た頃の風花さんや、”ちえきち”、”ゆつき”、”久慈川先輩”の作る”ちみも”うりよう”な料理に比べたら味の方は大丈夫だろうっておっしゃっていました」

「なんだか総司くんの中の親密度が分かる呼び方にちよつとムツとする自分がいることに気付いた。料理関連はあまり触れないようにするけれど、千枝ちゃんのことを”ちえきち”、雪子ちゃんのことを”ゆつき”とまるで幼馴染を呼ぶように言うって事はそれだけ付き合いが長いって事だ。羨ましい……私は未だに”結城先輩”なのに。」

『ちよつと、待ったー！納得いかないよ、どうして私たちが作る料理と比べて、味は大丈

夫つて断言できるの!!私、総司くんよりも美味しい料理を作る自信あるもん」

「「ああ、それは無理ね」」

私とゆかり、美鶴先輩に優ちゃんの声がハモった。その言葉を聞いて久慈川さんが涙声で訴えてくる。

『皆してひどいよ!お姉ちゃんまで一緒になって……ぐすん』

いや、総司くん料理で勝つのは本当に至難の技だから。私たちが親子丼を作る間に、フランス料理のフルコースを作るくらいにヤバいスペックだから。

話を適当なところで切った私たちは先ほど見たF・O・Eが2体いるフロアに足を踏み入れた。2体の動きをじつと観察すると一挙一動まで同期しているらしく、タイミングを見計らって進む必要がある様子だった。ルートは手前の道か、迂回する道か。私たちは地形を確認し、F・O・Eの動きをしっかりと覚えた後に、手前の道を通って扉まで辿り着いた。

「ふう……2本の矢の行方を気にすると流石に神経を使うな」

「あの天使、弓矢の精度高いですよ。ズレずにまっすぐ打てるんですから」

美鶴先輩とゆかりが汗を拭いながら話をしている。千枝ちゃんはゆかりが弓を武器として使用していることを思い返し、すごいなあと感想を述べる。そんな中、白鐘さん

が何かに気付いたようで、その場にいた皆に聞こえる様に話し始めた。

「あの……、確かに天使のコントロールもそうですが、あの壁に突き刺さった矢を見た限り、武器に転用できれば探索の役に立つと思われれます」

「なるほど、確かにそうだな」

「えっと、まさかと思いますが……戦って奪えと？」

「例えば、の話だ！安心しろ、危険と分かっている状況に飛び込むのはただの愚策ではない。……明彦には絶対にこの話はするなよ」

美鶴先輩は自身が放った言葉の意味を吟味して、表情を曇らせながら私たちに念を押す様に告げた。この「ごーこんきつき」に入った直後の彼の行動を知っているためか私たちだけでなく、八高メンバーの子たちも神妙な表情を浮かべながら頷いた。

『ストツプです！そんな皆さんに朗報です！』

「うわあっ!?!いきなり、大きな声を出さないでよ、風花」

『えへへ、ごめんなさい。先ほど、新たな矢の開発発に關してテオさんが依頼を出したそうです。保健室に立ち寄る際はぜひ、気にかけてみてください！』

「……ということになってしまった以上、皆の協力が必要不可欠だ。明彦がこのことを知る前になんとかしたい。頼む……」

美鶴先輩はそう言う私たちに向かって深く頭を下げた。私たちはすぐに駆け寄り、

そんなことをする必要は無いからと彼女の頭を上げさせる。八高メンバーも優ちゃん以外は協力することは各かではないようだった。

で、次の扉を開けて先に進むと、再び鎖で封じられた扉があった。

「これがあるってことは、またあの変な質問が来るって事？」

千枝ちゃんがそう言って周囲を見渡していると、不意にあの機械音声がかえってきた。

「どうもどうも。呼ばれて飛び出て、こんにちは」

「どうもどうも、こんにちはであります」

聞こえて来た音声に律儀に挨拶し返すアイギス。八高メンバーも彼女がどんなキャラなのかを理解してくれたようで苦笑いを浮かべるだけでツツコミを入れてくることはなかった。

【君たちは苦悩の果てに、最初の部屋を見事突破した。だが、君たちの行く道は果てしなく遠いようだ運命を分ける選択が再び目の前に迫ろうとしているぞ。というわけで、お待ちかねの第二問だ】

Q. 好きな人には、どうされたい？

選択肢は「猛烈アプローチ」「控えめにアプローチ」の2つ。

「うーん、私は控ええ目がいいかな。強いて言えばだけど……」

私はどうせだし、本音で答えることにしてみた。一応、結果がふざけたものであっても一つの指針になりそうだったし。まあ、まだこの人とかうなりたいていうのはないんだけれど……。そんなことを考えながら、他の皆の意見に耳を傾ける。

ゆ「どつちかというと猛烈？」

美「フツ、男ならば堂々と猛烈なアプローチをするのがふさわしい」

ア「アウトドアであります！」

優「控え目……かな」

千「うーん……。控え目？」

雪「猛烈アプローチ……。(ぼっ)」

直「冷静沈着な方……控え目ですかね」

玲「善善善善善善」

2名ほど自由な発言をしているけれど、こんな感じで本当に診断出来ているのだろうか。

扉を封じていた鎖が無くなり、先に進める様になった。すると玲ちゃんがそわそわしているのを声で掛ける。

「どうかしたの、玲ちゃん」

「うん。運命の相手、まだかな？まだかな？」

玲ちゃんに限って言えば、彼女の運命の人は善くん以外には考えられないのだからけれど、それを言ってしまうのも野暮なのかもと思い、「診断結果が楽しみだね」とだけを告げて先に進むことにした。扉を開けると同時に、入り口の方で鍵が開いた音がした。

何かそんな要素はあったかなと地図を見直すと見事に穴だらけであった。私は見なかつたことにして地図を閉じて鞆に入れ直す。そして、ショートカットを開通させた先で、大きく重厚な扉があることに気付いた。恐らく、先ほどの音はこれが原因だろう。扉に触れようとするとナビの風花から向こう側にシャドウがいることを告げられる。武器やアイテム、ペルソナをしつかりと装備し直して私たちは扉を開け放った。

私たちを待ち構えていたシャドウたちは石化させる状態異常攻撃を行ってきたが、逐一回復しつつ皆でフォローし合い殲滅することに成功する。男子チームも問題なく倒せたということだ。そのまま道なりに進むと階段があった。一度ヤソガミコウコウへ戻ることも考えたが、一度先を見ておいてもいいだろうと思い、私たちは階段を降りたのだった。

ごーこんきつき編—④

階段を降りるとその先に合ったのは先ほど見たばかりの重厚な扉と迷宮の先へと伸びる道であった。扉の方は押ししても引いても開く気配がない。

「この扉も開かない……。ということとはきつと」

『ええ。その扉の先からシャドウの反応があります。上の物と同様の試練かと思えます』

「ねえ、風花。男子チームはどんな様子？」

『えっ!?!……えつと、その……』

「山岸先輩？」

優ちゃんが疑問を浮かべながら尋ねると風花は再度口ごもった。代わりに答えたのは現在男子チームを担当している久慈川さんであった。

『男子チームはその部屋にある“移動床”のあるフロアでシャドウの群れと戦闘中だよ！敵は上の階層で戦ってきたシャドウばかりだから問題ないんだけど、この“移動床”が厄介だね』

久慈川さんと風花の話によれば、移動床に足を乗せてしまうと自分の意思とは関係な

く、移動床の示す先へ強制的に運ばれてしまいうらしい。誤って足を乗せてしまった天田くんの後を追って総司くんと荒垣さんがチームから分断された先にシャドウが待ち構えており、助けに行こうとした花村くんたちにも背後からシャドウが襲いかかってきたらしい。下手に移動しようとする移動床に足を乗せて、強制移動を余儀なくされてしまうようだ。

『わあっ、すごい！総司くん、フロアの移動床の位置と行き先を把握したみたいでシャドウの群れを翻弄しているよ！今も移動床に乗りながら、銃を撃ってシャドウを倒している』

久慈川さんが興奮した様子で伝えてくる。総司くんは今回、右手に片手剣、左手に小型銃を装備した状態で迷宮に挑んでいる。そして、彼がつけているペルソナは前回の女王の側近であったF・O・Eを倒した時に得た「リヨウマ」という、幕末維新の英雄らしい。最期は暗殺されてしまったらしいけれど。

『フロア内にいたシャドウは全部倒しきつたみたいだよ。やつぱり若いと柔軟性があるみたい……はっ!? 私はまだピチピチの“女子高生アイドル”なのにくっ!!』

『うわっ、りせちゃん。落ち着いて………』

通信は頭を抱えるような発言をする久慈川さんを慰める風花の発言を最後に通信は切れた。私は呆然としながら周囲を見ると、千枝ちゃんと雪子ちゃんが肩を竦めてい

て、優ちゃんが遠い目をしていた。

重厚な扉が開かないのを確認していたので先に進むと男子チームが苦戦することになった移動床のフロアについた。

「……なんか、動いてんね」

「本当ですね。空港でよく見かける歩く歩道のようなものでしょうか？」

「私もテレビで見たことある。おっきな駅とかにもあるやつ」

「そうか、君たちの街には無いのか。正式にはトラベレーターと呼ぶ」

進行方向から左の方へ向かう移動床。千枝ちゃんと白鐘さん、そして美鶴先輩が会話している。男子チームの先頭にいた天田くんはこれに乗って移動してしまったのだろう。私はそう思って、移動床の示す先を目で追っていくと出口にシャドウが待ち構えていた。

「あれって、「自律のバザルト」だよね」

「岩の前に赤い仮面があつて、上に手が生えていますし間違いないかと」

私の問いに千枝ちゃんたちと会話していた白鐘さんが頷いた。1階の重厚な扉の先にいた仮面が黄色い「無為のバザルト」でなくてよかった。上の階で戦うことになったシャドウは「石化」攻撃を頻回に行ってきた厄介だった。それに比べると自律のバザルトであれば電撃攻撃や光攻撃を行えば倒せるし。

「それにしてもこの床を攻撃に使うって、総司くんって凄いな」

「アイギス、白鐘。同様なことは可能か？」

「可能かどうか、いっちょ試してみます」

「え、ちよつと？」

アイギスは私たちの制止の声を無視して移動床に飛び乗った。彼女の体は移動床の示す方へ勝手に流れて行く。その上で両手に内蔵されたガトリングを使い先制攻撃を仕掛けるが、待ち構えていたシャドウが多すぎる。だが、彼女がつけているサブペルソナは全体に電撃攻撃スキルを与えることができる「カイチ」だ。これはエリザベスの依頼で合成することになったペルソナで、羊の頭にユニコーンのような一本角を持つペルソナだ。

「召喚シークエンス、パラディオン！ ムマハジオ」

アイギスは移動床の上でペルソナを召喚した。金色の装甲を持つ、紺色のワンピースを着たような姿のパラディオン。の上に小さな羊のようなものが見えた。その羊の一本角からバチバチと放電したかと思うと、移動床の先で待機していたシャドウたちに電撃攻撃を仕掛ける。弱点での攻撃スキルを受けたシャドウたちは一様に、身を崩してダウンしている。

「ああ、もう！ あの子はこういふところがあるから！」

「攻撃を寄せ付けない鋼鉄のボディを持っているのも考え物っていうことですか」

額を押さえつつ呆れたように話すゆかりと、アイギスの言動を見た白鐘さんが頷きながら考察している。その2人の会話に混ざろうと思ひ振り向くと、彼女たちの後ろに大きなハートが3つ浮かんでいるのが見えた。さつき、風花たちとの通信した時、彼女たちは何を言った？ 私は咄嗟に召喚器を取り出し、こめかみに宛がう。そして、すぐに引き金を引く。

「ゆかり、白鐘さん！ 2人とも伏せて！ オルフエウス、”マハガル”」

私が装備しているサブペルソナの「カーリー」のスキルが発動すると同時に2人はしやがみ、彼女らに襲いかかろうとしていたシャドウたちに疾風属性のスキルが衝突し暴風が吹き荒れる。

「助かりました、結城さん」

「山岸先輩、こいつの弱点は？」

『敵は「ソウルダンサー」3体です。弱点は氷と闇。全体に打撃攻撃をする『なぎ払い』と、皆さんの動きを阻害する『茨の足枷』というスキルを使っています』

私たちに避けるという手段を失くさせて、自分たちは悠々と攻撃してくるってこと？
なんて嫌らしい攻撃をしてくるシャドウなんだろう。というか……

「ねえ、風花。そこまで分かっているってことは、総司くんたちはどこまで進んでいるの

「？」

『えつとね、湊ちゃん。怒らずに聞いて欲しいんだけど、鎖で封鎖された扉の前まで進んでいるの』

「はやつ!!」

『これ系統の謎解きに関して、総司くんがめつきり強いのは不思議の国のアナタの迷宮で立証されているでしょ。フロア内をぐるりと見渡しただけで、正解の道筋を導き出しちゃうんだから』

『今は、封鎖された扉付近でレベル上げしているよ』

「することがなくなっちゃった」と久慈川さんは笑っているけれど、ちよつと待つて欲しい。この階層に来たタイミングは男女チームともに一緒だつたはずだ。そして、さつき移動床を使つて総司くんがシャドウを攻撃できたつていう話を聞いたと思う。

「ねえ、風花。その封鎖された扉があるところは、ここから近いの?」

『もう一部屋、移動床のあるところを抜けた先です。あ、けどちゃんと部屋の探索はお願いしますね。湊ちゃんたちが今いる部屋にひとつ、その先の部屋にショートカットの先にひとつ宝箱があるはずですから。男子チームは……』

『宝箱から飛び出したシャドウとご対面!飛び出した直後に放つてきたスキルに腰を抜かした真田先輩と完二の姿、是非ともお姉ちゃんに見せたかったなあ』

久慈川さんのちよつとサド気を感じるような発言はスルーしつつ、私は移動床に乗って移動する。風花の話によると最初の移動床のある部屋は向きのにどうしようもないので、さつさと次の部屋に移動する必要があるとのこと。

「扉を通つたら、そのまま直進して移動床に乗るつと」

「ちよつと待て、湊。全員では言わないが、数人で移動した方がいい」

美鶴先輩に肩を掴まれ、私は立ち止まる。見れば、他の皆も心配そうに私を見ていた。私は自分が風花たちからの通信を聞いて焦つたことを鑑み、皆に謝る。そこで美鶴先輩の言うように二手に分かれて探索をしようとしたのだが、

「あれ？私の『肉ようかん』がない!!」

肉ようかん……。肉とようかん？

「え、何よ。その組み合わせ？」

「え、そつちにはないの？」

千枝ちゃんとうゆかりの発言が交差する。互いに互いの発言を心底、不思議に思っているような様子だ。私は優ちゃんと雪子ちゃんに話を聞く。

「八十稲羽にはそんなのが売っているの？」

「いや、まあ……。マニアの方にはウケているんじゃないかな」

「似たような商品で肉ガムつてのがあるけど、そつちはダイエツトにはもって来いみた

いよ。肉の味はするのに、食感はガム。肉の脂や匂いまで再現されているのに、舌触りはクツチャクツチャとしたガムそのもの。思い返しただけで、鳥肌が……」

「食べた事あるの!?!」

「うん、すごく……不味かった……」

食べた時のことを思い返していったのか、優ちゃんの瞳から次第に光が失われていく。彼女の向こうでは肉ようかんの良さを千枝ちゃんが眉に皺を寄せた面々に語っているが、優ちゃんの様子を見る限り、碌なもんじゃなさそうだ。

「でも、おつかしーなー。確かにポケットに入れてたと思うんだけどなー。むー、もしかしたら、誰かが盗ったのかも」

腕を組んでこんなことを言い始めた。そんな千枝ちゃんの言葉を聞いた私たちは心の中で思った。「んな訳あるか!」と。アイギスが千枝ちゃんに近づき尋ねる。

「誰か思い当る人物がいるでありますか?」

「んー……。花村とか」

千枝ちゃんの中で、花村くんはどういった評価をされているのか不安になる一言であった。八高メンバーって皆、仲が良さそうだけれど、実はそんなことはないのだろうか。

「いや、陽介たちが千枝の肉ようかんを欲しがることはないでしょ。というか、陽介たち

には「買ったけれど食べきれなかった残りの肉ガム」を私が食べさせたことあるし。私の前で食べていたってこともあって、「美味しい」って言うしかなかっただろうけれど、美味しいって言った陽介と完二には2枚ずつ、残りは全部クマに食べさせたから『フツ』と綺麗な顔で笑う優ちゃん。成長した彼女が笑うと非常に綺麗ってという言葉が似合うのだが、笑う理由が理由なので笑えない。

何、成長した優ちゃんは「女番長」の他に「女王様」っていう属性も持っているの？
とりあえず、千枝ちゃん肉ようかんに関してはエリザベスさんに依頼して調べてもらうことになったようだ。調べるのはきつと私たちなのだろうけれど。

男子チームが発見したが、出て来たのはアイテムではなくシャドウであった宝箱。私たちに出来たのはシャドウではなく、普通に防具アイテムと武器アイテムであった。この迷宮は男子に何か恨みがあるのではないかと思うくらい、私たちには優遇措置が取られている気がする。そうしてようやく、男子チームが待っている鎖で封鎖された扉がある部屋についていた。

手前にはパワースポットが設置されており、アイテム回収も忘れずに行っていると風花から男子チームも用意が出来たと通信をもらう。鎖で封鎖された扉がある部屋に足を踏み入れるとあの機械音声がかえって来た。

【迷える子羊さんたちの登場だ。新たな階でもこんにちは】

「待って下さい。あなたは何者なんですか？」

聞こえてくる機械音声に向けて白鐘さんが問いかける。だが、

【君たちは死の第二問をくぐりぬけ、それでも歩みを進めた勇者たちだ。その栄誉を称え、とびきりの第三問が用意されているぞ。覚悟して答えるのだ】

「……ダメですね。会話になりません」

機械音声は淀みなく言葉が続けた。白鐘さんの言葉にはまったく耳を貸さずに。

【問題に答えるしか先に進む道はない……ということでしょうか】

【それでは、第三問だ】

くQ. 二人きりで過ごすなら……く

出された選択肢は「喫茶店でまったりと」「遊園地で大盛り上がり」「熱気立つ大浴場でぶつかり稽古」の3つ。

私はポロニアンモールの外れにあるコーヒーの美味しい喫茶店『一期一会』を思い浮かべながら「喫茶店でまったりと」を選んだのだが、『ぶふうつ』と噴き出す音に驚いて振り向いた。そこにいたのは四つ這いになって床をドンドン叩きながら大爆笑する雪子ちゃんの姿。

「熱気立つ……あははは！大浴場で……ふくく。ぶつかり稽古……あははは!!」

「彼女はもうしたんだ？」

「あー……見ないでやってください。偶々、見たことがあるんですよ、私たち」

美鶴先輩があまりの変わりように引きながら、千枝ちゃんに尋ねている。千枝ちゃんは頭を抱えながら悶えているが、いったい何を見たのだろうか。

そんなこんな会話をしながら扉の先を行くと、例の地図を完成させないと開かない宝箱を発見する。そういえば、さっきからひしひしとプレッシャーを感じる。そのプレッシャーの主は、風花だった。

『湊ちゃん、もうそろそろ地図を更新してもらえませんか？出来ないうなら、一度ヤソガミコウコウに戻って、総司くんを手伝ってもらって書きあげてくれませんか？』

「あはは……、この階層を終えたら一回戻るよ」

『約束ですよ、周囲の状況を書き記すのはリーダーとしての責任ですよ』

私は苦笑いしながら風花に弁明した。今の所、厄介なのは移動床の所だけなので、あとは道なりに進むことで行けている。ショートカットもちよいちよい開通させているので、問題ないかと思っていたが、やっぱり駄目か。

迷路をそのまま進んでいると少し開けたところに出たので、女子会も兼ねつつ休憩をすることにいった。こんな風に男子メンバーがいなくていうのは、今後あるかも分からないし丁度いい。ちなみに男子チームも同じ所で休憩をしているらしい。学校のことうや、放課後に何をしているのかを話していると通信を担当している風花と久慈川さん

の心の声が聞こえて来た。

『うわあ……総司くん。(そのデザートはどこでゲットしてきたんですか?)』

『ごくつ……。 (宝石みたいに輝く果物! その果物の甘さを殺さない程度に仕立て上げられた生乳から作られた生クリームで作ったパンナコッタって、美味しいに決まってるじゃん!!)』

『『ガタツ』と立ち上がったのは玲ちゃんと美鶴先輩である。玲ちゃんなんぞ、両手に持っていたドーナツが床に落ちるのも憚らず、おもむろに立ち上がって両手を天に向かって突き出した。

「わたしもたべたい!!」

「ぐおおおお!! 忘れていた! 鳴上と別チームということとは、こういうことだ!!」

誰もいない壁に向かって咆哮する美鶴先輩は完全に総司くんの料理に餌付けされてしまっていることが窺える。まあ、黄金米に始まり、宝石メロンにサファイヤマンゴー、ルビーイチゴといった市場に滅多に出回らない高級果実の栽培方法の確立、その果実の良いところを完全に引きだして作るデザートを片手間で作ってしまうという化け物的な料理の腕。

それと、人の胃袋をがっちり掴む料理を作る上で最も必要な味覚。彼が食べるものは高級店であろうが、人に知られずひっそりとやっているような隠れ家のお店であろう

が、絶対においしいものだ。彼がふらつと出かけて買ってくるお菓子は確実に美味しい。

「……………」

「いきなり落ち込みだしてどうかした訳？ あんたも総司くんが持つてきたデザートが食べたいの？」

「ううん。それもそうだけど、自分の料理に対する語彙の少なさに絶望して」

「あ……………。うん、それは仕方ないよ」

私の肩をぽんぽんと叩くゆかりもまた遠い目をしていることから、彼女も私の意見を笑って流すことが出来ない問題だったようだ。

「ふーかちゃん！ 善に、善に総司くんのデザートもらつておくように言つてー」

『ふあつ!? ふーかちゃん……………可愛い。あ、でも、そのデザートは総司くんが天田くんとクマさんとで全部食べちゃったよ?』

「がーん!!」

「何で、そこでクマが出てくるの!?!」

『なんか、エリザベスさんの依頼の後で仲良くなつたつて…………』

久慈川さんの話を聞いた優ちゃんがぎりぎりど歯軋りしている。彼女をなだめようと近づくと彼女が何かを話していることに気付いた。

「くそつ、あの淫獣め。奈々子だけじゃ飽き足らず兄さんまで……。フツ、校舎裏でどんな目にあわせてやろうか」

私はそつと気配を殺しながら優ちゃんの傍から下がる。彼女の背中から噴き出る不機嫌オーラがまるで魔王のような恐ろしいオーラだったから。

「ねえ、千枝ちゃん。優ちゃんは何で、クマくんをあんなに嫌っているの?」

「いや、嫌っている訳じゃないんですよ。ただ、奈々子ちゃんと仲良くなるのが、優よりもクマくんがスムーズだったのが癪に障っているだけで」

「奈々子ちゃんか……。そう言えば千里さんは元気にしている? 結局、タイミングがなく総司くんにお守り渡せないままなんだけれど」

「うえっ!? ……あ、いや……。千里さんは去年の冬に……」

そう言つて目を伏せた千枝ちゃんの様子を見て、私は唇を噛んだ。なんて不謹慎な質問をしてしまったのだろうか。千枝ちゃんは千里さんの葬式にも参列したらしいが、その時の優ちゃんはまだ幽鬼のようだったと語った。なんだか、微妙な雰囲気になつてしまった休憩は、肩を落とした美鶴先輩が力ない様子で「先に進むか」と言つたことで終わらせ、迷宮の先に進むことになつた。

扉を開け、先に進むと青い馬に跨つた桃色のキューピッド、F・O・Eのいる部屋に ついた。玲ちゃんがそのF・O・Eを見てお洒落だと眩いたが、いつもの元気は無い。

これは由々しき事態だ。こんな姿の彼女を善くんに見せる訳にはいかない。そんな風に思っていると思いの前が壁だった。

『ゴツン!!』

と、音が鳴るほど額を打ち付けた私はその場で蹲る。

「湊さん、タルタロスを含めて、通算10回目の行き止まり激突であります。1位の順平さん26回、2位真田さんの17回に次いで3位の記録であります」

アイギスがそんなことを言いながら私を抱してくれるけれど、そんなことよりも傷薬が欲しい。ぶつけた額を擦りながら立ち上がると千枝ちゃんたちがアイギスに尋ねていた。

「そんなしょうもないデータを取ってどうすんの？」

「わたしの蒐集したデータは、風花さんのパソコンのデータベースに逐次、送られています」

『そうです。皆さんのデータを収集して、次回の作戦の参考にしています』

「コンピュータに強いってすごいね。どうやって勉強したの？」

『あのね、昔から自然と興味あつたっていうか、元々コンピュータが好きでいじっている内に、機械の中身も気になって、解体したり……』

「解体って、すごいっ……」

「手先が器用なんだね、きつと」

そんな会話から何故、あんなことになったのか。私には分からない。総司くんも、荒垣さんも、天田くんだって、「もう大丈夫だ」って太鼓判を押していたのに……。犠牲になつた順平や花村くんたちの冥福を祈るばかりだ。

それはさておき、迷宮を進み続けると例の鎖で塞がれた扉に辿りついた。何の変哲もない部屋であることを再度見渡していると機械音声が聞こえて来た。

「まだまだ先は長いようだぞ。計画的に、そして衝動的に、運命の糸を手繰り寄せろのだ。それでは第四問だ」

くQ. 好きな人に思いの丈をぶつけるには？く

出された選択肢は「勇気を振り絞って告白」「河原で殴り合う！」「夏祭りの後に半裸で抱きつく」の3つ。

最後の選択肢は一体なんなのだろう。ほぼセクハラではないか。選べるのは間違いない、一つ目の「勇気を振り絞って告白」だろう。そう思っていると、ゆかりが隣でぽつりと呟いた。

「うわー、最後の奴。……湊なんかがやっちゃいそうだなー」

「な、……なんでっ!？」

「うわ、聞いてた」

私はゆかりに掴みかかる。いくら何でも、これは聞き捨てられない。私はそんな痴女じゃないもん!!

「好きになった男の子には無理やりにも迫っちゃいそうだなって思っただけよ。他意はないから」

「むしろ他意だらけじゃない!」

「総司くんには、深夜の寮の屋上でノーブラTシャツの格好で迫ったんでしょ?」

「迫つてない!!相談にのってもらっただけ!!」

『ぎゃーぎゃー』言い合う私たちを見かねて美鶴先輩が間に入って止めた。うう……傍から見れば私はそんなエッチに見えちゃうキャラなのだろうか。なんだか不安になってきた。

幕間—④

『煌めく果実のパンナコッタ』

地図の更新と荷物の整理とアイテムの補充のため、一度ヤソガミコウコウに戻った私たちであったが、私たちと同様にヤソガミコウコウへ戻ってきた男子チームの姿を視認した玲ちゃんが駆けだした。彼女の行動に気付いた善くんも心なしか微笑を浮かべたのだが、玲ちゃんが向かったのは彼ではなく、異くんたちと会話していた総司くんだった。

総司くんの背後から、全速力でぶつかりにいった玲ちゃん。その衝撃を殺しきれなかった総司くんはピンポン玉のように撥ねられ、偶々開いていた窓から外に放り出されていった。

「総くん！ さっきのデザートはどこ……って、あれ？」

「にーさーん!？」

撥ねた本人は自覚しておらず、愛しの兄のピンチにすぐさま走り出す優ちゃん。そして、取り残された私たちは呆然としながら、ことの成行きを見守ったのであった。

「あはは。なるほど、女子チームには分からないように山岸先輩たちには黙っていてくださいねって言ったのに、心の声が漏れちゃってしまいましたか」

窓から放り出されることになった総司くんであったが、運よく外に生えていた木に引つ掛かつて何事もなかった。彼は笑いながらそんなことを言っているけれど、その彼をこんな目に合わせる事になった玲ちゃんを寄越す様、善くんにガンつけている優ちゃん。善くんの後ろにはガタガタと身体を震わせる玲ちゃんの姿がある。

「玲さん、迷宮内で僕らが食べていたデザートなんですけれど、模擬店で売っているものではなくて景品なんですよ」

「景品？」

「ええ、体育館の体感型のゲームをクリアしたらもらえる引換券を集めて交換出来たのが『煌めく果実のパンナコッタ』っていうデザートなんですよ。僕『でも』育てるのを『諦めざるを得なかった』『アイストラゴンフルーツ』が使われていて大変美味でした」

満足そうに頷く総司くんと天田くん。そして、ドヤ顔のクマくん。私たちは『いらっ』と来たのだが、総司くんたちからの立ち位置からではクマくんは見えていないのか、総司くんは微笑みながら私たちに告げたのだった。

「商品の数は無制限みたいでしたし、皆さんで挑戦してみてはいかがですか？」



総司くんの情報を元に体育館を訪れた私たちは体育館をめいっぱい使ったアトラクションがいくつも用意されていた。総司くんはここにある全部のアトラクションを一人でクリアして景品である『煌めく果実のパンナコッタ』を手に入れたらしいので、とりあえず皆でやってみることにした。

①体育館のステージ上に設置された巨大もぐら叩き

ルールは簡単。縦3個×横3個＝9個の穴があいていて、その穴からターゲットのシャドウを模したものが顔を出す仕様。100秒間で100体のターゲットを叩いて回るというもので、残り20秒には怒涛のラッシュが待ち受けている。入り口の横には大きなピコハンが置かれているし、あれで攻撃するのだろうか。

私より先に来ていたのは真田先輩と荒垣先輩の2人。どうやらどちらが多くターゲットを倒せるかを勝負しているらしいのだが、

「えっと、真田先輩が74回で、荒垣さんが75回ですか……」

「待っている、結城！すぐに抜き返す！」

「はー……はー……。やれる……もんなら、やってみる……」

「でも、先輩方。1位は総司くんの136回ですよ」

「!?!」

真田先輩と荒垣さんが私の指差した先を見ると、モグラ叩きの得点板があった。そこには1位から3位までの記録が載っている。ちなみに1位から3位までは全て総司くんの得点だ。上から136回、129回、127回と大台が並ぶ。

「……シンジ、正直に言え。やれるか？」

「何度かアキに付き合って挑戦したが、……今の得点から60体以上を倒すのは不可能だ。あいつはどうやった？」

「分身でもない限り無理っばいですよね」

私はそんな感想を抱きつつも、とりあえずもぐら叩きに挑戦した。

結果は59回。いや、ホントごめんなさい。

②アトム&ジェリーナ

ファンシーな灰色の長身の猫と小柄な茶色のネズミが描かれた看板の下にルールが書かれている。猫に扮したプレイヤーは、ネズミに扮したシャドウっばいナニカを捕まえればいようだ。設置されたコーナーは縦10m×横10mの正四角形。

ただ捕まえればいだけならモグラ叩きよりも簡単かな、と思つて先に挑戦していたメンバーの様子を見る。すると疲労困憊の様子で、肩で息をしている者が多い。中でもプスプスと白い煙を立ち上げているのはアイギスだ。

「どうやって……捕まえる事が出来ません……」

「いや、オルギアモードのアイちゃんが無理なら俺らがどうやって無理つしよ」

「どゆっ!?」

私が順平の発言を聞いて驚いていると、丁度千枝ちゃんが挑戦するところであった。虎縞の猫耳をつけた千枝ちゃんはターゲットであるシャドウにそろりそろりと近づいて行く。そして、あと1mと迫ったところで飛びかかったのだが、ネズミ役のシャドウは俊敏な動きで千枝ちゃんから遠く離れたところに移動した。それも、目に映らないスピードで。その後も千枝ちゃんはその手この手を使って捕まえようとすると、一向に距離を詰められず、制限時間の120秒を以て強制終了となった。コーナーから出て来た千枝ちゃんは生まれたての小鹿のような足取りでフラフラと3歩程歩き、その場に崩れ落ちた。

ちなみにルールの横に描かれたランキングにはモグラ叩きと同じように上位者のタイムが刻まれている。

「えー……。全部総司くんなのは予想していたけれど、3秒、4秒、5秒って何をしたの!?」

「この謎を解かない限り、このゲームをクリアするのは難しいであります」

瞬発力を満遍なく發揮し死にかけている千枝ちゃんを介抱しながらアイギスは遠い

目をしながらそう分析結果を呟いたのだった。

③ランニングカラオケ

そこには、前方にカラオケ用のマイクが備え付けてあるランニングマシンが設置されているだけであつた。これに挑戦した花村くと巽くんの話では、ジョギングよりも早いスピードに達するとカラオケマシーンが起動して勝手に曲が流れ始めるらしい。花村くんにはアニメソングが流れ、巽くんには演歌だつたらしいけれど。ランニングマシーンで走りながらカラオケを熱唱することもさることながら、顔見知りがたくさんいる状況でこれは恥ずかしいとまともに歌えなかつたそうだ。確かに、これは一人カラオケよりも条件が厳しい。顔見知りの前で歌うにはある程度の勇氣と度胸が必要なの
だ。

「さすがの総司くんも75点から85点の間みたいだね」

「走りながら、歌いきるだけでもすげーのにな」

私と花村くんがそんな風な会話をしていると、巽くんが首を振りながら、アンタたちは何も分かつてねえと前置きして話し始めた。

「いや、合格ラインが70点以上なんで、そこまで本気じゃなかつたのかもしれないす。総長の場合」

「総長？」

私たちの視線が自分に向いたことを確認した巽くんは大きく頷いて語り始める。

「うつつ。総長には以前から世話になってる。俺がまだガキだった頃、身体が一周りは大きな中高生たちに絡まれた時に唯一、助けてくれたのが総長だったんすよ。あの時の総長の姿は今でも鮮明に覚えている。……そう、相手が泣いて許しを請うても笑いながら自尊心をへし折りに行く鬼神のようなお姿を」

まるで生き神さまを見るかのように語った巽くんを余所に私たちは頬を引き攣らせていた。

「今の話、マジかよっ!? ウソだろ、クマの奇行を見ても微笑んでいたし、真田先輩と荒垣先輩の喧嘩を必死に宥め様として右往左往していたのは何だったんだ!？」

「敵を欺くにはまず味方からっすね」

「敵って誰だよ!!」

花村くんのツツコミは激しいけれど、ちゃんとの的を射ている。というか、総司くんの子供の頃の話ってあまり聞かないけれど、実はやんちゃしていたのかなあ。分からないなあ。

④ 迷宮から大脱出

体育館の壁に入り口と出口だけある変なコーナーがあった。ルールを読む限りでは、このゲームに参加している間、中の1時間は外の時間の1分に相当するようになるみたいだ。参加人数は最大で5人。閉じ込められた場所に用意された謎を解いて、中の時間設定で5時間以内に脱出すれば挑戦したメンバー全員にクリアの証が貰えるとのこと。「参加しているのは、美鶴先輩と白鐘さん、それとゆかりに風花と久慈川さんか。美鶴先輩と白鐘さんがいるなら、大丈夫じゃないかな」

私は参加メンバーの人員を見て大きく頷くと、彼女たちが出てくるのを待った。すると出口の扉が開き、迷宮から大脱出に参加したメンバーがぞろぞろと出てくる。しかし、その表情は暗い。風花と久慈川さんは体育館に出たことを確認するとその場で崩れ落ちて泣きだし、ゆかりは壊れたブリキの玩具のように力なく乾いた笑い声だけを漏らしている。まともそうな美鶴先輩と白鐘さんは出て来た直後から考察しているようなので、彼女たちを刺激しないように声を掛けた。

「あの……何があつたんですか？」

「む、湊か。この迷宮は厄介だぞ。考えれば考えるほど、思考という名の底なし沼に埋まって行くような感じで我々はまったく役に立たなかつた」

「むしろ、僕たちが苦手としているジャンルで謎が構成されているようで、気味が悪かつたですよ」

美鶴先輩と白鐘さんがしみじみ言うのと、会話が聞こえていたのか風花と久慈川さんが声を荒げて詰め寄ってきた。

「ちよつと待つて下さい！自信満々で『私に解けない謎は無い！』つて言つたのは桐条先輩じゃないですか！料理の『さ・し・す・せ・そ』くらいなら私でも解けたのに！」

「そうだよ！直人だつて、『伊達に警察に助言していませんよ』つて自信満々に言つたのに、ブラジャーの付けた方が分からないなら早く言つてよ!!」

「うわああああ!!」

美鶴先輩は風花の口を、白鐘さんは久慈川さんの口を必死に抑えたけれど、私はぼつちりと聞いてしまった後だった。顔を真っ赤にして「これは違うんだ」と弁明する頭脳担当の2人の泡食つた様子に自然と頬が上がつて行くのを自覚する私。あとちよつとで笑うといったところで、もう1人の参加者が口を開いた。

「で、あと少しで謎が解けそうだつて言つて、時間制限を1時間延ばすために、私を生け贄捧げるつて言い始めたのは結局アンタたちの誰だったの？」

「「「っ?!」」」

乾いた笑みをこぼし続けるだけであつたゆかりが美鶴先輩と白鐘さんと風花と久慈川さんの背後に仁王立ちしている。俯いているので表情は計り知れないが、確実にキレている。何せ、言葉にまつたく抑揚がなく、ただ淡々と事実を述べているような声色で

気持ちが一瞬伝わってこないのだ。私は、そつと4人から距離を取った。瞬間、4人から嘆願するような視線を向けられるが、私には対処できない問題だと思つて首を横に振り全速力で逃亡する。

「少し頭冷やそうか」

ゆかりに偶々渡していたサブペルソナの「ジャックフロスト」の氷結属性スキルの全体攻撃が発動したのはその直後であつた。

で、他の体育館にあるゲームの残りは巷でもよく見かけるものばかりであつた。

⑤⑥ボールがシャドウなストラックアウト。ただし野球仕様かサッカー仕様かの違い。

⑦『迷宮から大脱出』と同じように体育館の壁に入り口と出口がある迷路、こちらはタイムアタックのようだ。

⑧パンチングマシーンは、的がアブリー系のシャドウとなつていたので挑戦者は今の所いない。態々あの大きな舌に向かつて拳を突き出すのはちよつと嫌。だけれど、3回攻撃して合計で500以上を出さないといけない。私もゲームセンターでやつてみたことはあるけれど、女子の力じゃ厳しいと思う。

⑨ダーツ

ただし、的は「笑うテーブル」系のシャドウのテーブルの上に浮いているモノである。

お皿や花瓶などに点数が振り分けられている。当然大きなモノだと点数は低くなり、小さくて当てにくい物には高得点が割り当てられている。一番高いのは親指大のコインのようだ。

とりあえず体育館にあつたゲームを一通りやつてみたメンバーを一度、体育館の入り口に集めて作戦会議を行った。そして出た結論は……。

「クリア、無理じゃね？」

順平のこの一言に集約される。

体育館に訪れていないのは総司くん、天田くん、クマさん、コロマルのみで、他のメンバーは全員来ているのにも関わらず、手に入れられた引換券は迷路のタイムアタックが7枚と、シャドウを投げる方のストラックアウトが3枚、シャドウを蹴る方のストラックアウトが2枚。そして、⑩マヨナカ横断ミラクルクイズに参加しまくっている優ちゃんが稼いだ15枚のみ。

「ふう、クイズはもう問題が出尽くしてしまつたみたいで、もはや解答席に座るシャドウたちは私の敵じゃないわ」

「さすがお姉ちゃん！」

久慈川さんが優ちゃんに抱きついて喜びを表現していたが、彼女の体が冷え切ってい

ることに気付いた優ちゃんがこちらを訝しげに見てくる。私は咄嗟に身体をガクガクと震わせる美鶴先輩と風花に視線を向ける。その傍には、やけにすつきりとした表情を浮かべるゆかりの姿が。

「皆さん、お疲れ様です。でもどうしたんですか？こんな入り口で」

優ちゃんの追求をどうしようかと頭をフル回転させて悩んでいたら、後ろから声を掛けられた。声に気付いて振り向くと不思議そうな表情を浮かべた総司くんが立っていた。私は嬉々として今の状況を総司くんに説明する。

すると、説明を聞いている内は神妙な表情を浮かべていた彼も、私たちが手に入れた引換券の枚数を聞くと噴き出した。私たちが一生懸命になつて手に入れた行為を笑うなんてと怒ろうとしたら、総司くんは言った。

「皆さん、ここはシャドウが作った空間だつて第二の迷宮に挑む前に再確認されていたじゃないですか。結局、自分たちに不利なルールを自ら作ってしまったています。この体育館に設けられたゲームのほとんどにはシャドウが使われていますよね？的もそうだし、ストラックアウトに使うボールもシャドウでしょ。つまり、ここではペルソナの力が使えるんです。試しに何かやってみましょうか」

総司くんはそう言つて、移動し始める。彼がデモンストレーションに選んだ舞台は、パンチングマシーンの所だった。

「じゃあ、まずは的の防御力を下げますね。ぬらりひょん、ラクンダー！」

総司くんがいつものようにペルソナが描かれたカードを握りつぶすと、彼の背後に後頭部の長い特徴的な形状をしたはげ頭の老人が浮かび上がった。着物をはためかせ、持っていた煙管を差し向けると的のアブルリーが弱弱しく鳴いた。

「で、次は自分の攻撃力を上げるので、ペルソナチェンジ！コツパテング、タルカジャー！」
総司くんが次に召喚したのは、黒い羽を生やし特徴的なお面をつけた天狗である。天狗が自身の首にかけていた巻物を開くと総司くんの体に淡い光が灯った。

「このまま攻撃してもいいんですけど、一発で500以上のダメージを与えるとボーナスなので、もう一押ししますね。ペルソナチェンジ、モードレッド！」

止めを刺す用にと総司くんが召喚したペルソナは白銀の甲冑を来た騎士のような姿をしていた。兜の横には龍の角のようなものが生えていて力強い感じを受ける。

「モードレッド、剛殺斬！」

総司くんとモードレッドの動きがシンクロし、攻撃力の上がった斬撃攻撃系のスキルが防御力の下がった的のシャドウに直撃した。真上から叩きつけられ、剣の形に凹んだシャドウを見て何人かが痛そうな表情を浮かべ顔を背けている。

「よっし、512だ。へへっ、一回の攻撃で500以上を出すと引換券5枚をもらえるんですよ。この他のゲームも似たようなものですよ。迷宮や迷路の壁もシャドウですか

ら」

「「ん?」」と総司くんの発言を聞いた数人が顔を見合わせた。頬を引き攣らせた美鶴先輩が代表して尋ねる。

「鳴上、お前まさか」

「もしかして、桐条先輩たちも挑戦しました? あれってむかつきますよね。態々、触れられたくない過去とか苦手にしている分野を狙って問題を作ってきますから。つい、やつちやっいました」

『てへっ』と可愛らしく笑う総司くんだが、やっていることは大問題である。完全に攻略していないと公言したようなものだからだ。数人がそんなのアリかよと項垂れている。そんな中、優ちやんが総司くんに近づいて行き提案した。

「ねえ、兄さん。私とクイズで勝負しない?」

「クイズ? ……ああ、ミラクルクイズか。何、自信があるの?」

私たちは優ちやんが問題を全部覚えたという話を知っている、これは総司くんに勝ち目はなさそうだなと思っていると、優ちやんから『負けた方が勝者の言うことをひとつ聞く』という賭けも行った上で勝負することになった。クイズの解答席がある所に移動すると、総司くんを見た解答席に座っていたシャドウたちが全員一目散に逃げ出した。

「まさか……」

荒垣さんが呆れたように総司くんを見ると彼は口笛を吹いて誤魔化そうとしていたが、総司くんはライバルであつたシャドウたちを文字通り“排除”してクイズに参加したようだ。嗚呼、今なら巽くんが総司くんを総長と呼んでいた理由が分かる気がする。

他の解答者がいないと盛り上がり欠けて仕方がないので、4つある解答席にそれぞれ優ちゃん、総司くん、花村くん、千枝ちゃんが座つた。事前に八高メンバーが集まつての、この行為なので何か意味があるに違いない。

【それではクイズを始めます】

ごーこんきつさ内で聞こえてくる機械音声とは違う女性の声で、問題が読まれていくみたいだ。

【では、第一問。愛家のつ】

『ピコン』とボタンを押したのは総司くんだった。観客である私たちは勿論のこと、解答席に座っている優ちゃんたちも啞然としている中、彼はさらりと答える。

「火曜日」

『『ガタツ!!』』と驚愕の表情で解答席に座つたままの総司くんを見る優ちゃんたちの表情は悲壮感たつぷりであつた。クイズが始まる寸前までであつた彼女たちの余裕が第一問目にして微塵も感じられなくなった。

【正解です。問題文は『愛家の通常の肉丼が食べられない日は何曜日?』でした。では、第二問。ま】

『ピコン』とボタンを押したのは総司くんだった。問題はたった一言「ま」しか読み上げられていない。私たちは全然検討もつかないので、彼の言葉を待つしかない。

「200円」

「丸久のがんもかつ!!」

問題文が分かったのか、優ちゃんが解答席で悶えている。総司くんは涼しい顔で胸を張っているが、その横で絶望からか俯いてしまっている花村さんと千枝ちゃんがあまりに場違いな気がする。

【正解です。問題文は『丸久豆腐店で売っているがんもの値段は?』でした。では、第三問。特出し劇場丸久座でりせの影がつ】

例のごとく『ピコン』とボタンを押したのは総司くん。さも当然のように答える。

「金」

「ちよつと待って、兄さん。なんでそれを知っているの?」

優ちゃんの様子が今までと変わり、総司くんの表情の機微を見逃さないような鋭い目つきとなった。何か重要なことか!?!と私たちも息を飲んで見守っていたのだが……。

「え? 優こそ、何を言っているのさ。たかが30回くらいクイズをやり通したくらいで

僕に勝てると思ったら大間違いだよ。僕は全ての問題と解答を聞いた上で問題を書き起こしてクイズが早押しでもやれるんだからね！」

自信満々に胸を張った総司くんを見て優ちゃんが渴いた笑い声を出しつつ解答席に座る。

「あ、うん。そういうことか、何があつたのかまでは知らないのね」

緊張した空気はクイズに出題される問題とその回答を丸暗記しているという総司くんの一言で終了した。というか、無駄に高スペックな頭脳を文字通り無駄に使っている。結局、優ちゃんたちは一問も総司くんには勝てぬまま、ミラクルクイズは彼の圧勝で終了した。

「じゃあ、クイズの前に言っていた負けた方は勝者の言うことをひとつだけ聞くつてやつなんだけど。思いつかないから、保留で！」

「えー……」

完全に魂が抜け落ちてしまったかのように解答席で放っていた優ちゃんは、総司くんのおんまりな発言によって項垂れてしまう。八高のメンバーからは苦笑いが漏れる。

「じゃあ、僕はエリザベスさんたちに依頼されているから、他の種目も廻るね」

総司くんはそう言うのと迷宮から大脱出の入り口に駆けこんで行った。そしてすぐに出口から出てくる。そして入り口から入りなおすという彼自身が説明した通りの力技

を見せる。

「うわあ、あの話は本当だったんだ」

「とりあえず、攻略の糸口は見えた。正直、鳴上のようにうまくやれるかは分かんが、さっさと引換券を集めて『煌めく果実のパンナコッタ』を食べるぞ」

美鶴先輩の掛け声に召喚器を持ちながら移動していく月高出身の私たちであつたが、八高メンバーは自信満々で挑んだクイズで完膚なきまでに敗北することになった優ちゃんを慰めるのものにもの凄く時間がかかったのだった。

幕間—⑤

『煌めく果実のパンナコッタ』をようやく手に入れ、玲は頬を桃色に染めながら幸せを嘯みしめるようにそのデザートを味わっていた。第二の迷宮である。『ごーこんきつき』内で私も総司から勧められたが、甘い物に興味を持たなかったのもらうのを断った。結果、玲に渡して喜んでもらうというチャンスを一度、棒に振ってしまった。

このヤソガミコウコウ内には、まだメンバーの誰にも発掘されていないデザートや食べ物があるのだろう。何か玲の為に人とは違う物を準備しておきたいと思い、私は玲をリーダーやサブリーダーたちに任せ、人探索していた。すると保健室からホクホク顔の総司が出て来た。彼の手には金色の装飾が施されたペルソナカードがあった。

「それは、彼女たちが持っているものとは違うな」

「へ？……善さん、何故ここに!？」

総司は今まで私たちに見せてきた中で一番の笑顔を引っ込めて、カードを私から見えない位置に隠した。その行為に首を傾げていると、総司は嘆願してきた。「今、見たことは誰にも内緒にしておいてくれないか」と。私が返事をしないでいると、総司は焦ったように考え始め、こんな提案をしてきた。

「うう……分かりました。玲さんが絶対に喜ぶだろうと思われる、ヤソガミコウコウ内にある模擬店全てに使用可能な容量増強の食券で手を打ちませんか？」

どうやら総司は先ほどのペルソナカードのことは秘密にしておきたいらしい。私は別に誰にも言いふらすつもりはなかったのだが、こうやって玲が喜びそうなものを得られるというのなら話に乗らないという選択肢はなかった。私は総司に向かって大きく頷く。すると、総司もまた『ほっ』と溜息をついた。

「じゃ、一回校舎から出ましようか」

私はそう言つて先導するように歩き出した総司の後をついていくことにした。総司と共に校舎の外に出ると総司はおもむろに手を差し出してきた。行為の意味が分からず、私が首を傾げていると総司は小声で告げてくる。

「今から行くところはまだメンバーの誰も知らない場所なんです、山岸先輩と久慈川先輩はペルソナの能力で僕らがどこにいるのか自然とわかっちゃうんです。けど、ペルソナの中には気配を消すことが出来るスキルもあつたりするので、ここからはそれを使います」

そう言うのと総司は左手で私の右手を掴み、右手でペルソナカードを握りつぶす。彼の上に現れたのは体育館で見かけた特徴的な頭を持つ『ぬらりひよん』というペルソナだった。

「無為自然（むいしぜん）」

そう総司が眩くと、不思議な光が私たちを包み込む。くいつと、手を引かれるのに気付く。総司は「こつちです」と歩みを進めるので、私は彼に手を引かれる形についていくことになった。途中、廊下を歩く月高の岳羽と視線があつたような気がしたが、あちらは何も見なかつたかのように歩き去つていった。

「ぬらりひよんを手に入れてから、行動に制限がなくなつたんですね。今までは山岸先輩たちがいて自由に動けなかつたし」

「……総司」

「なんででしょうか、善さん？」

振り向いて首を傾げる総司に私は躊躇いなく告げた。

「このぬらりひよんを使って、迷宮内に“1人”で入っていないか？」

「なっ!?!……そそそそそ、そんな訳ないじゃないですかー、いやだなー」

「こつちを見ろ」

明後日の方を向き、口笛を吹いて誤魔化そうとする総司。私は繋いでいる彼の右手を力任せに握り締める。

「いたたたたつ」

私は左手にポウガンを構えると総司の後頭部に宛がう。

「私もこういうことはしたくない。だが、総司。君のそのやり方は他の皆の心を傷つける。いらない心配をさせるな」

「……一応、肝に銘じておきますよ」

それだけを言っ、総司は私に顔を見せずにまた歩き出した。私もボウガンを所定の位置に戻し彼に手を引かれ連れられたまま、歩いて行く。そして、連れて来られた雑木林の中にポツンと食券販売機が一機設置されていた。

「えつと、とりあえず善さん。サイズはどれにしますか?」

私は総司に促され、食券販売機のラインナップを見てみる。

大盛り(500円)、特盛り(1000円)、メガ盛り(3000円)、ギガ盛り(5000円)、デカ盛り(10000円)の5つ。

サイズは大盛りが2倍、特盛りが3倍、メガ盛りが5倍、ギガ盛りが10倍、デカ盛りが20倍とまるで想像が付かない単位で自分でも頬が引き曇るのが分かった。

「善さんはいくら持っていますか?」

「……………」

「お金ないんですね。とりあえず、今回は僕が代わりに払います。特盛り……いやメガ盛り券を買いますから、さっきの話とペルソナカードの話は内緒でお願いしますよ」

総司はそう言っ、券売機にお金を入れメガ盛りの食券を手にし、私に渡してくる。

所謂口止め料という訳だ。しかし、彼が持つお金は1人で迷宮に潜った際に手に入れた、言わば結城や鳴上たちが知りえないお金。

現在、迷宮で手に入れたシャドウが落とす素材や取得物は一旦リーダーとサブリーダーである彼女たちがまとめ上げ、テオドアに売りお金に換えている。その後、私たちが食事やゲームなどに必要な分を彼女たちに言うとその額をもらえるところというシステムになっている以上、自由に使えるお金はないに等しい。今後、この券売機を使用しようと思うとしても私自身が自由に使えるお金を幾らか保有しておきたい。

「総司、頼みがある」

「ええっ!?!さすがにデカ盛りは無理ですよ、僕だって大金を持っている訳じゃないんですから」

「いや、私も迷宮に連れて行ってくれないか」

「はい?」

□□□

最初は渋っていた総司も私が秘密を共有する共犯という存在になると告げたことで態度を軟化させた。それと私の目的が玲にサプライズプレゼントを贈ることだということも効いたようで、渋々ながら同行を許可してくれた。

そして、一度保健室に寄って欲しいということだったので、私は総司と別れた後にまっすぐに向かった。保健室の主であるエリザベスが物珍しそうに私を見ていたが、次々と入ってきたメンバーを見てにんまりと笑った。

「シーフー、今回も秘密の特訓クマね！」

「そうだよ、クマさん。でも、どうして完ちゃんがいるの？」

「うっす、総長。男を上げる特訓と聞いたからには、この巽完二付き合わせてもらおうっすよ！」

入ってきたのは総司の他に八高メンバーである巽とクマの2人であった。彼らの話からすると総司と特訓をしたことがあるのはクマ、巽は私と同様に初参加の様子だ。

「ぎゃーすー！なんでお前がいるクマかつ!？」

保健室を見回していたクマが私を見つけると同時に叫ぶ。歯を食いしばって睨みつけた上に指差してきたので、私はボウガンを手にしようとしたりしたが、

「今回は善さんも同行するよ。僕の目的はペルソナのレベル上げ、クマさんは女性陣にモテるため、完ちゃんは男を磨くため、善さんはお金を稼ぐため。皆、それぞれの目的があるけれど、力を合わせて頑張ろう！じゃあ、エリザベスさん“裏ノート”お願いします」

「かしこまりました。私、出番はいつなのでしょう。いつなのでしょうか、と待ち過ぎて

メギドラオンを放つ寸前でした」

エリザベスは残念そうに怪しい光を放つ辞書のようなものを机の上に置きながら告げる。「メギドラオン」が何かを私は知らないが、非常に拙いものだったのだろう。クマと完二の2人は震えあがっている。そんな中、総司は気にすることなく依頼ノートの横に置かれていた本棚から黒い背表紙のノートを取り出すと開いてページをめくっている。

「まずは『甲蟲殻を30個集めよ』でしよ。それと『封じられた大蛇皮を10個集めよ』で5000円も貰えるのか！あとは……『財宝の欠片を5個集めよ』でいつか」

そう黒い依頼ノートを見ながら総司は頷くと、エリザベスに告げ依頼を受けた証であるタグをもらった。そして、私たちに向き直った総司は説明を始める。

「今回はエリザベスさんが用意した依頼をこなしながら迷宮を探索するよ。挑むメンバーが4人になったから、前回よりは倒し易くなった分、得られる経験値は低くなるからその分を数でカバーします。甲蟲殻は第一の迷宮『不思議の国のアナタ』の第3章に出る熱甲蟲を倒せば出るから、階段を降りた先にいる金甲蟲を倒して、第3章に戻って熱甲蟲を狩るって方法を取るよ。けど、まずは『封じられた大蛇皮』と『財宝の欠片』を集めるために第二の迷宮『グーこんきつき』に潜るよ。じゃ、移動するから皆僕の体に触れてね」

私たちが総司の肩や手に触れたのを確認した彼はぬらりひよんのカードを握りつぶしスキルを発動させる。保健室から出た我々はゆっくりとしたペースで目的地まで歩いて行くのだが、途中で他のメンバーとすれ違うことになった。私やクマは緊張して固まったのだが、彼らは私たちぶつかつたにも関わらず、気付かずに去って行った。

「ぬらりひよんの【無為自然】はヤソガミコウコウ内で使うと一定時間、透明人間になるスキルなんだ。迷宮内では先制攻撃しつつ、回避と命中を上げるスキルで重宝するんだよね」

「つまり、これを使えば女の子たちにエッチないたずらし放題クマか？ あんなことも、こんなことも……むふ。はっ!? じよ、冗談クマよ！」

クマは邪まな考えを抱いたのか悶えていたが、私と総司の無言の視線にビクつき、体を必死に取り繕った。総司はそんなクマの様子に大きいため息を付きつつ肩を竦めると迷宮内に足を踏み入れる。

「疑問に思ったのだが迷宮内では当然、他のペルソナを使うのだろうか？ それを彼女たちに察知されることはないのか？」

「ごーこんきつきさに入って早々、私は総司にそんな疑問をぶつける。総司はサブリーダーや伊織が使うような太刀を扱って、シャドウを一刀両断した後振り返って答える。」

「迷宮内にいる間は存在自体が揺らめいた状態になるみたいなんです。最初からナビゲータとして意識してついて行ったら問題ないみたいなんですけれど、一度迷宮内に入った人間を探し出すのは難しいみたいですよ」

「ふむ、それなら別に良いのだが……、ところで発見したシャドウは全部倒すのか?」
「勿論です。荷物がいっぱいになったら、単価が低い物から捨てて行きますけれど、4人いるので結構稼げると思っていますよ」

私の疑問に笑顔で答える総司。その背後でガタガタ震えているのはクマだ。異が理由を聞きだすと、第一の迷宮ではその理屈でF・O・Eを倒しまくったらしい。ペルソナの能力で動きを拘束し、状態異常で弱らせ、高威力のスキルで葬る。なんてことを繰り返すことになったと。私はちらりと視線を逸らし、その場でくるくると回って警戒する金色のF・O・Eに目を向ける。

「うーん、さすがに今の段階で『恋の使者』は無理ですね。金甲蟲を軽々倒せるようになったら、挑戦してみますか?」

「ちよつと待つクマー!! さすがにそれはちよつと早いクマよ! 今はちゃんと依頼を終わらせることに集中するクマー!」

クマが私たちの会話に介入してきた。総司はクマの意見を聞いて、頷いて武器を構えなおして翼が戦っているシャドウの群れに突撃していった。そういうことで『恋の使

者』と呼ばれるF・O・Eに挑戦するかどうかは有耶無耶になったのだが、

「善、ああいうことはシーフーに言っちゃクマ。あの人はクマたちが思ってもいないようなことをやるのが常クマ。むしろ今回は完二や善がいたから自重したのかもしれないクマ」

そう言ったクマは前回の特訓で嬉々としてF・O・Eに向かって行った総司のことを話す。目の前を通り過ぎるF・O・Eに回し蹴りを打ちこむ総司。正面から立ち向かっていく総司。シャドウの群れを追いかけまわして行った先にいたF・O・Eにとび蹴りを喰らわせる総司。

「お前、よく生きていたな」

「はっちゃけたシーフーは手がつけられんクマ。クマが死なないためには危険行為を繰り返すシーフーについていくしかないっていうのはまさに修羅の道だったクマ」

迷宮の壁に凭れかかって遠い目を浮かべるクマの姿に選択を誤ったかもしれないと心身恐々としていたら、情欲の蛇と呼ばれるシャドウが何かに怯える様に私たちの下に逃げて来た。ただ動きはすぐノロノロしている。見れば情欲の蛇たちには一様に緑色の鎖が巻きついていていた。

「逃げるなー!!」

「俺らが他の奴らと戦っている間にいなくなっているんじゃないぞ!!」

そう言いながら迷宮の先から情欲の蛇を追ってきた総司と巽の2人、の背後にはそれぞれペルソナが浮かび上がっていた。

総司の背後には白い頭巾を被った大柄の僧兵だ。背中には様々な種類の武器を背負っている。

完二の背後に浮かんでいるのは人間の骨格が描かれた黒く逞しい体を持つタケミカヅチと呼ばれるペルソナであった。2人はそれぞれの方法でペルソナのスキルを発動する。

「ベンケイ、剛殺斬！」

「タケミカヅチ、閃電碎！」

2人から必死に逃げていた情欲の蛇たちは私たちの所に辿りつく前に攻撃スキルを受け消滅していった。消滅していく情欲の蛇たちの嘆きの声が耳に残った。

「よしっ、倒した奴らが落とした素材で依頼達成！あとは財宝の欠片だけど、無理っぽいし今回は諦めて、不思議の国のアナタに移動しよう！」

「うっす！総長、ガンガン行きましようぜ！」

総司の喜びの声を聞いて同調する巽。そんな2人を見ながら私はクマに声を掛けた。

「人選を間違えたんじゃないか？」

「完二が脳筋なのを忘れていたクマ……」

その後、私たちはやけにハイになってしまった総司と巽の2人に引き摺られ、第一の迷宮を訪れ、シャドウ討伐マラソンに強制参加となった。倒しても倒しても何故か復活するトランプ兵と金甲蟲、それと普通のシャドウを延々と倒しつつ迷宮内を走り回り、総司が満足して保健室に帰ってきた頃には、秘密特訓に参加したメンバーは私を含め死に掛けていた。

私は腕がパンパンで肩以上の高さには上がらず、前に進もうとすると全身の筋肉が軋む。クマは歩いて移動することを諦め、転がって移動する程だ。巽は戦っている最中に正気に戻ったようで情けない叫び声を上げていたが、今は魂が抜けてしまったようである形のように呆けてしまっている。

「ただいま、戻りましたー。あれ、善さんも完ちゃんもどうしたの？」

秘密特訓の主催であり参加者である、総司だけはケロリとしていた。様々なペルソナを入れ替えつつ戦っていた彼だが、とあるペルソナを出した後に戦いを終わるとたちまち元気になっていた。それが何のペルソナで、何のスキルの効果であるのかは教えてくれなかったのだが。

「はい、善さん。今回の依頼と倒して回ったシャドウの素材を売って得たお金を4等分にしたものです」

そう言って総司は16800円を渡してくれた。同じように参加したクマと巽にも

渡している。私は総司から貰ったお金を懐になおす。すると総司に声を掛けられた。

「エリザベスさんの依頼の報酬でモノクル改をもらったので、善さんにあげますね。命中率が上がるみたいですよ」

「そうか、ありがたくもらっておく」

私は総司が渡してくれたアクセサリを受け取る。すると総司は秘密特訓に参加していた他の2人にもアクセサリを渡している。どれも彼らの役に立つものだったよ。うで喜びも一塩のようだ。私は今回の特訓で得たお金で何を買おうかと思いつつ、玲の姿を探すために保健室から出る。このお金が無くなりかけたら、また総司に頼むとしようと思う。

「……だが、次回もあんな強行軍になるのだとしたら、更に力をつけなければな」

私はそんなことを言いながらバカ騒ぎをしている総司たちを尻目に保健室から離れたのだった。

幕間—⑥

『煌めく果実のパンナコッタ』を食べ終えた私たちは別れて思い思いの時間を過ごすことになったのだが、私は美鶴先輩につれられて保健室に来ていた。ちなみに私の他にもナビの風花と八高メンバーの千枝ちゃんと雪子ちゃんがいたりする。

美鶴先輩の目的はさきほど潜った迷宮内で風花が言っていたF・O・Eの放った矢を回収して武器として改造するという依頼を消化するためである。先ほど猪突猛進さが浮き彫りとなった真田先輩にばれない内に済ませてしまいたいようだ。しかし、保健室には先客がいた。

「む？ 鳴上と巽、クマだったか？」

「お疲れ様です、先輩方。どうかされたんですか？」

総司くんは今まで何かを書き記していたノートを本棚に直すと私たちに向き直った。ちなみにクマくんはエリザベスさんに踏みつけられて悦びの声を上げ、巽くんはそんな彼の様子を見て引いていた。

「私たちは依頼を片付けようときたのだが、お前たちはいったい何をしているんだ？」

「僕たちはエリザベスさんの依頼を片付けたので報告しに来たところですよ。実は迷宮

内でシャドウを倒して手に入れた素材が丁度、依頼に必要な素材だったんです」

そう言うのと総司くんはエリザベスさんの依頼ノートを手にとつてページをめくつた。確かに『幻の薬を調合したい』つていう項目がクリアになつていた。

「これが報酬の振興券です。テオドアさんのてづくりコーボーで買い物をする時に1割引きになるそうです」

そう言つて、総司くんは私に近づいてきて、*“てづくりコーボー振興券”*と書かれたプレートを手渡してくれた。そして、保健室から出ようとしたのだが、私は彼の手を引つ掴んで依頼ノートが置かれてあつた場所まで移動する。そして、本棚に手を伸ばした。

「うわつ、ちよつと待つて」

するとどうでしょう。総司くんはその本棚の前に立つて、私の行為を遮つたじやないですか。今まで総司くんに興味を持つていなかつた美鶴先輩も彼を怪しむような視線を向ける。

「千枝ちゃん、雪子ちゃん。やつちやつて!」

私は黄門さまのように指令を出す。すると千枝ちゃんと雪子ちゃんは面白がつて、総司くんを羽交締めにした。後ろの方でクマくんが羨む声を上げたので、私は美鶴先輩にアイコンタクトする。彼女は大きく頷くと、クマくんの額に踵を振り下ろした。

私は羽交締めされた総司くんの反応を見ながら本棚に置かれたノートはどれなのかを探る。結果、真つ黒の背表紙のノートがそれだと分かった。

私は総司くんに奪い返されないように保健室内を迂回して移動した後、美鶴先輩の横でそのノートを開いた。ノートには男子メンバーの名前の一覧と第二の迷宮内での選択した言葉が書かれていた。

例えば、順平だと、

Q 1. 【愛があれば、年の差どころか性別も問題ない?】【NO】

Q 2. 【一緒に遊ぶなら?】【チドリンは絵を描くから……インドア派で!】

Q 3. 【疲れた心を癒すなら?】【旅館かホテルなら、旅館だろ!】

Q 4. 【あなたの武器って?】【テレットテッター、俺たちの魅力は夢中にさせる話術っしょ!】

という風にノート1枚につき1人のことが男子全員分書かれてあった。

「ふむ、鳴上。ご苦労なことだが、これには意味はあるのか?」

「えっと、僕の推論なんですけれど、3階ではメンバーの入れ替えがあると思うんですよ。ヤソガミコウコウ内にいる人間で自由に動けるのは僕らとテオドアさんたちしかないのです、迷宮内の質問で決まる運命の相手って結局僕らの内で決まるはずです。Q 1は性別を決め、Q 2では外で体を動かすのが好きな人なのか、家の中で頭を使うこと

を得意とする人なのかに分ける。Q3からはその人を彷彿させるワードを選んだら、その後の質問はどう答えてもいいものに変わっている」

総司くんは私の手からノートを受け取ると、一通り目を通した後に告げる。

「男子で相手を決めるワードを言ったのは真田さんと師匠、順平さんと完ちゃんの4人です。人によって質問もバラバラだったので聞き出すまで時間がかかったんですけれどね」

そう言って総司くんは悪意ある改造が施された保健室の奥にあったホワイトボードを引っ張ってきて、何かを書き始める。そして、書き終えた総司くんはホワイトボードをバンツと叩いて私たちの視線を集めた。

「まず真田さんが選んだのは異性で、籠るのは好かんということでアウトドア派、そして『好きな子に褒められた。どんな風に?』という質問の選択肢を聞いて「ブリリアントって美鶴か!」と言われたらしいのでたぶん……」

「明彦は私を選んだと鳴上は言いたいのだな」

「僕の推論ですけれどね。相手が決まった人はたぶん別枠になるんじゃないかなって危惧しているんです。迷宮に挑むのに男女別パーティーになっただけでも大変なのに、もう一組出来るかとナビがてんやわんやになると思ってます」

総司くんは風花の姿を見る。風花は総司くんの話を聞いて、眉を顰めて悩み始めてし

まっている。

「となると、女子メンバーも一度、質問にどんな答えを出したのかを聞きださないと厄介かも」

私がそう言うと千枝ちゃんが元気いっぱい手を上げていた。どうしたのかを尋ねると雪子ちゃんが選んでしまった選択肢はどうなのかを総司くんに尋ねる。雪子ちゃんが選んだワードって確か……。

「熱気立つ大浴場でぶつかり稽古、だっけ？」

「ゆっきーの相手は完ちやんだね」

「俺っすかっ!？」

「でも完ちやんは白鐘先輩を選んでいるから、この場合はどうなるんだろ？」

総司くんは私の言葉を聞いて保健室内で私たちの会話を聞く羽目になった異くんに視線を向けた。そしてホワイトボードの異くんの項目を見て、「好きになった人の意外な一面は？」という質問に対して「王子だと思ったら、実は女の子」という選択をしたらしいことが分かった。

なるほど、美少年だと思ったら、女の子だったって、異くんたちも思っていたって事？

「シーフー、もしもクマを選ぶワードがあるとしたら、どんなのクマか？」

先ほどまでエリザベスさんと美鶴先輩に踏まれて悦びの声を上げていたクマくんが私たちの不意をついて総司くんになんか質問をした。総司くんは私や千枝ちゃんたちの顔を一通り見てくる。どうやら、「それ」を言っているのかを尋ねてくるような感じであったので、私と千枝ちゃんは顔を見合わせた後に力強く頷いた。

「たぶん、『語尾に“クマ”ってつく喋り方』とかじゃないかな」

「おおー、なるほどクマ〜」

クマくんは自分の特徴をそんな風に認識している総司くんに対して、嬉しそうに近づいて行っているが、その情報を得た私たちがどんなことをするかを彼は考えなかったのだろうか。私ならその選択肢は絶対に選ばないと思う。

「つか、総長。荒垣さんが選んだ「彼女のお茶目なところ？」っていう質問に対しての答えが「エスカレーターを真剣に逆走するって、餓鬼の頃のアキそのものじゃねえか!」で、真田さんと喧嘩していたっすけど、これは誰になるんすかね」

「そういや、師匠。そんなことを言っていたね。いきなり喧嘩を始めたから何事かと思ったら、そんな会話が合ったのか。まあ、普通の人じゃありえないっていう意味で、エリザベスさんかなあ……」

「まあー!」

総司くんの予想を聞いたエリザベスさんが両手を頬に当てて、驚きの声を上げた。た

だ照れとか恥ずかしいといった感情は読み取れない。むしろ面白そうだと言わんばかりに頬がひくついているのが見える。

「荒垣さん、と言いますと学生らしからぬ風貌の男性であつたと存じますが、まさか私に好意を持たれていたなど、微塵にも思つておりませんでした。こうしてはおられません、早速恋文というものを作成するとしましょう！」

どこからか紙とペンを取り出して、手紙を書き始めたエリザベスさんを見てほっこりしていると、総司くんが悲壮感たつぷりな様子で十字を切っていた。ちらりとエリザベスさんが書いた恋文の文面を見てみる。

「本日、校庭の時計台前にてお前を待つ」

って、それは恋文違う！果たし状だよ!!

□□□

保健室から出た私たちは女子メンバーをフードコートに集めて事情を説明する。すると皆が協力してくれることになった。懸念であつた優ちゃんも情報をまとめるのが総司くんだと分かる借りて来た猫のように大人しくしている。

「えっと、女子メンバーで運命の相手が決まつたのはゆつきーと岳羽先輩とアイギスさんの3人ですね。それぞれの相手は『完ちゃん』、『花村先輩』、『岳羽先輩』ですね、た

ぶん

そして、話を聞き終わって情報をまとめた総司くんがにこやかな笑みを浮かべて、予想結果を言うところゆかりが微妙な表情を浮かべ、すこし離れたところにいる花村くと近くにいるアイギスを見て、机に項垂れた。

「岳羽先輩、あんまり気にすることないですよ。質問の順番にも問題があるんですから」
「うん、ありがと」

総司くんがゆかりを慰めるようにフォローを入れたのだが、ゆかりは机に項垂れたまままだ。余程、内容に納得がいていなさそうであるが、発言した言葉を消し去ることは出来ない。

「ていうか、アイギスが私を選ぶってというのが信じられないんだけど？」

「私も銃器を扱う者として極めるなら書道や華道よりも、弓道だと思っただけであります」

「うん。なんでそれで運命の相手になっちゃうのか甚だ疑問だよなー」

ゆかりは力なく呟くしか出来ないのであった。

「でも結局、今の所は兄さんの予想でしかないでしょ？希望を捨てるには早いんじゃない。運命の相手が『ガツカリ王子』って悲惨よ」

「うおい！相棒、それを月高の人たちにまで広げんじゃねえーよ!!」

「やっぱり聞き耳立てていたわね」

優ちやんがやれやれと肩を竦めると花村くんはぼつが悪そうにするが、それでも引き下がれないと言わんばかりに彼は声を荒げる。

「大体な、俺のことをそうやってガツカリ王子扱いですんのはお前らだけだつつの！」

ビシツと月高メンバーを指差す花村くん。そんな彼を見て今まで机に項垂れていたゆかりが小さく呟く。

「それだけ本音で話せる友達がいなくてこと？」

「ぐはあっ!？」

花村くんが心臓付近を押さえて蹲った。そして、さめざめと涙を流す。

「ちくしょう……俺の何がダメだって言うんだよ。思っていた感じと違う？ 仕方ねえじゃねーか、俺はこういう奴なんだから……」

彼の今までの苦勞が背中からにじみ出るほど、卑屈な発言を繰り返しつつ落ち込んで暗くなっていく花村くん。そんな彼に手を差し伸ばしたのは意外な人物だった。

「見た目がイケメンな分、花村先輩は損していると思いますよ。他人は自分の理想だけを押し付けてきて、それに適わないとガツカリ王子と呼ぶ。そんなんじゃ、花村先輩も卑屈になつちゃうのは当然です」

先ほどまでノートに情報をまとめていた総司くんが花村くんの傍に膝立ちになりな

がら、彼の肩に手を置いてポンポンと優しく叩いた。花村くんはまるで総司くんを救世主を見るかのような目で見た後、天を仰いだ。

「なんで、こっちにお前がいなんだよっ！中3の時にこんななら、同い年ならマジで親友になれる気がするんだけど!!」

「うーん、高校は絶対に八十神高校を受けるって決めていたんだけど、そうしなかったってことは料理の学校にでも行つたのかな？優に聞いても教えてくれなかったし」

「……と、当然でしょ。私の『兄さん』と、ここにいる『兄さん』は……『別人』……なんだし」

優ちゃんはそう言って総司くんを背を向けた。総司くんは優ちゃんの言葉に一頻り納得した様子で、そのまま花村くと話をしているようだが、私は彼らよりも優ちゃんの方が気になる。振り返った彼女は唇を噛みしめ、必死に涙をこらえる年相応の少女の顔だったからだ。

「……なんですか」

私の視線に気付いた優ちゃんは、何事もなかったような表情で無愛想な言葉をぶつけて来た。私は咄嗟に首を横に振って、何でもないことを伝える。すると、優ちゃんは総司くんと戯れる花村くんを一瞥するとフードコートから去って行ったのだった。

目的であった運命の相手予想まとめが済んだので、各々自由行動となったのだけ

ど、千枝ちゃんが未だ会話中の総司くんと花村くんのところに近づいて行った。私も気になったので、会話には参加しないで話だけを聞く態勢を取る。

「でも、総くん。八十神高校を受験するつもりって本当なの？」

「うん。だって、転勤族の両親のおかげで故郷と呼べる場所がないからね、僕と優には。叔父さんのところに毎年遊びに来るおかげもあって、僕はあの街が好きになったんだ。昔のような活気がなくなっているのは悲しいけど、見ていてよ！僕が、いや僕たちが変えてみせるよ、八十稲羽の街をね」

千枝ちゃんと花村くんが顔を見合わせ、「僕たち？」と呟いた。総司くんは困惑している様子の花村くんたちに向けて満面の笑みを受けべつつ説明を始める。

「まだ構想段階なんだけれど、八十稲羽商店街のあの道を歩行者天国にしてフェアを開催するんだよ。商店街だけじゃなくて、あの街の良い物を集めてさ。勿論、八十稲羽の農作物を使った料理も考えなきゃいけないけどね、僕はそこに携わりたい。肉料理は「まだバイトの身だけど頑張る」って美津雄も約束してくれたし、商店街の道路を歩行者天国にするって話は警視庁から来たばかりの足立さんに頼み込んだしね」

「ちよつと待った！美津雄って、もしかして……久保美津雄？」

「ん、花村先輩も知っているのなら話は早い。美津雄はゲームが得意でさ、僕が倒せなかったボスの攻略法をお店の前で聞いたのが交友のきっかけだったよ。根は暗いけれ

ど、人の気持ち分かる優しい奴なんだよ」

私は誰のことを話しているのか分からなかったけれど、花村くんをはじめとした八高のメンバーは一樣に苦々しい表情を浮かべている。すると、少し離れた位置にいた白鐘さんが総司くんに聞こえないくらい小さな声で呟く。

「きつと、彼もどこかで道を歩み違えてしまっただけだったんですよ。きつと……」

「総長がそう言うんだ。あの野郎も街の為に何かをしようとしていたはずなのに、何で……あんなことを……」

白鐘さんの呟きに答えるように異くんも呟いた。しかし、彼の手はぎゅっと握りしめられており、何かに耐えている様子であった。

「それにさ、国会議員の秘書を務めている生田目さんっているでしょ？八十稲羽の出身なんだけれどね、彼とも話す機会があつてさ。実はメル友なんだ」

「総くんって、本当に顔が広いよね」

「まあね。で、さっきの歩行者天国の話にしても警察は足立さんに頼んだけれど、結局は役所も味方にしないと出来ないでしょ？だから、『国会議員の秘書は辞めて、市長に立候補しませんか』って持ちかけたんだよ。最初は『私の器ではない』って断っていた生田目さんだったけれど、僕が八十稲羽の街をこれだけ愛しているっていう話をしたら、『それだけは絶対に負けない』って反論してきたんだ。あと何回か、焚きつければきつと来

年辺りには立候補してくれるんじゃないかな？」

将来のことを熱く語る総司くんがいる一方で、フードコートにいる八高メンバーは全員が何とも言えない表情を浮かべている。総司くんには何かを伝えようとして、言うのをやめている。そんな印象を受けた。

□□□

月高メンバーであり、この世界を攻略する上で僕たち八高メンバーも含めた20人以上の人間を率いる立場に立つこととなった結城さんが、フードコートから去って行ったのを見計らって僕たちは再度、鳴上総司くんから聞いた話を吟味していた。

完二くんは苛立った様子で机を叩いたり、パイプ椅子を蹴ったりしてイライラを発散しようとしている。千枝先輩と雪子先輩は悲しげな様子で沈黙しており、りせさんに至っては涙目で僕たちの話を聞いている。

「僕たちをテレビに押し込めた人間が、総司さんの夢に協力を約束していた人物だったなんて、思いもよらなかったですね」

「つか、久保のことも驚きだけだよ。あの冴えない足立が、警視庁からエリートってどういうことなんだ。お前らは知っていたのか？」

花村先輩の問いには皆が首を横に振る。僕自身も警察の1人とは思っていないかつ

た。

「一般的に考えて八十稲羽に来たのは左遷だと思えますが、2年前はまだやる気に満ちていたということでしょう。少なくとも総司くんの夢を手伝うようなことを言っていたのであるならば……」

僕は最近になって八十稲羽の街に来たので過去のことは知りようがない。かと言って千枝先輩や雪子先輩、完二くんは総司くんに関係が近すぎるのもあって、客観的なことが分からない。

「よくよく考えれば、商店街のお店の人たちは凄く仲が良かったんだよね、総くんって」

「千枝、それは総司くんがお店の人の悩みをひとつひとつ解決していったからよ。八百屋さんと魚屋さんでも商品を売るだけじゃなくて、晩ご飯のメニューを提案するようにしたので総司くんのアドバイスがきっかけだったみたいだし」

「あ、お祖母ちゃんから聞いたことある。確か『豆腐は一丁ずつ売れるもの』っていう概念を壊してくれた子がいるって」

千枝先輩たちの何気ない会話が聞こえてくる。僕の隣に立つ完二くんも呟いた。「以前母親の方にホームページを開設したらどうか」って言ってくれたことがあったらしい。

「千枝先輩、商店街の方々と仲が『良かった』と過去形ですが、総司さんはいつ頃から八十稲羽に来られなくなったのですか?」

「えつとね、確か……中3に上がる春休みには一緒に遊んだ記憶があるよ。その年の秋くらいに優が八十稲羽に越してきたんだけど、総くんは一緒じゃなかった。その直後くらいだったじゃなかったかな、奈々ちゃんのお母さんが亡くなったのって」

「私も覚えてる、あの時の奈々子ちゃんも優も見えていられないほど酷かったし」

僕も以前、命を軽んじる発言をした久保に対し苛烈の勢いで怒鳴る優さんを見て不思議に思い、どういうことなのかを尋ねたことがある。けど、お世話になった叔母が死んだだけで、言い方は悪いけれどそんな風に変わるだろうか? それこそ……。

「なあ、八十稲羽の街が好きだっていった総司がこんな風に街の皆が変わってしまったのを見過ぎすと思うか? 例え料理の学校に通っているとしても、何か行動を起こすはずだよな? それをしていない、かつ相棒の異常なまでの『死』への恐れつつまり……」

「それ以上はダメです、花村先輩!」

僕はそれ以上言わせないために言葉を張り上げた。自分を止めた人物が僕であったことに花村先輩は驚いた様子だった。けれど仕方がないことなのかもしれない。総司さんと仲が良かった千枝先輩も雪子先輩も、脳裏に浮かんでしまったのだろう。優さんがあんなにも変わってしまった原因が何なのかを。

「直人の言う通りつすよ、他にも海外に留学してしまつて連絡が取れなくなつたつていう線もあるんすから！姉御のアレも、義憤に駆られてのものなんすよ、きつと!!」

「そ、そうだよな！わ、わりーわりー。あんな風に何の気兼ねもなく、楽しいと思える会話したの久しぶりだったからさ。……いや、同年代の男子つて括りでだぞ」

そうやつて、花村先輩たちは想像でできる最悪の考えを無かつたことにしようとして、バカ騒ぎをし始めた。僕らが何を考えようが、僕たちの世界に総司さんがいない以上どうすることもできないのだから……。

ごーこんきつき編—⑤

第二の迷宮である。『ごーこんきつき』の攻略を再開させようと皆に声を掛けている時に冷ややかな視線を向ける風花の姿があり、その理由を尋ねた私は彼女の返答を聞いた瞬間に走り出していた。道行くメンバーの皆に情報を聞きだしつつ、ヤソガミコウコウ内を走り回って目的の人物を見つけた私は外聞を気にせず目的の人物に抱きついた。

「総司くん、へるぷみー!!」

「うわあつ!!……って、結城先輩?」

風花に告げられたのは地図の作成は捗っているかどうかの確認であったが、彼女のあの眼は私が手を付けていないことを確信した上での物だった。普段優しく大人しい子が怒ると怖いっていうのは本当だったみたい。私は総司くんから離れるとすぐにノートを差し出す。総司くんは私とノートを交互に見た後、ノートを受け取って開き、すぐに苦笑いを漏らした。

「なるほど、りよーかいしました。机と椅子があるフードコートで書きましようか」

ノートを閉じた総司くんは私に向けてにっこりと笑うとフードコートに向けて歩き出す。私はすぐに後を追ひ、総司くんの横に並ぶ。周囲を見渡すと、そこは色々なゲー

ムを体験できるフロアであった。

「もしかして、新しいデザートか何かの発見があったりした？」

私は体育館でのゲームの景品であった『煌めく果実のパンナコッタ』の味を思い出しつつ、総司くんに見つけた。ノートを小脇に抱えた総司くんはパンフレットのようなものを取り出し、おもむろに広げた。私は総司くんに着目するように近づいて、そのパンフレットを覗き込んだ。

『ヤソガミコウコウ宝箱探しマップ』？

「設置された宝箱は10個。だけど、1人につき開ける事が出来る宝箱は3つだけ。宝箱の位置はそれぞれに設けられた3つの問題をクリアすると座標が浮かび上がる仕様なんです。問題が難しいからといって僕が欲しいアイテムであるかと言われると……って感じで悩んでいるんですね」

総司くんは懐からパンフレットとは別に紙の束を取り出した。確かに5択の問題がズラッと書かれていて骨が折れそうな感じだ。私はその問題を詳しく見ようと思いつつ手を伸ばそうとしたのだが、総司くんがパンフレットと一緒に制服の胸ポケットに入れてしまった。それも私が覗き込んだ瞬間に。

「え？……ちよつとくらいいいじゃん」

「やーです。僕が初めてに見つけたんだから、僕がやるんです。それにフードコートに着

きましたし」

気付けばそこはフードコートだった。メンバーも数人いるし、第一の迷宮で玲ちゃんが食べた紙製の巨大お菓子のように大きなドーナツを頬張る彼女の姿があった。つて、デカっ!!

「な、ナニアレ!?!」

「あー……。善さん、早速使ったのか。しかも、デカ盛り券。容量20倍でも、玲さんに掛れば大したことなさそうですねー」

「なに、デカ盛り券? 容量20倍?」

「詳しいことは善さんにどうぞ。僕はこつちを仕上げないといけませんし」

そう言つて総司くんは手ごろな椅子に座るとノートを開いた。そして、第二の迷宮である「ごーこんきつき」の1階と2階の地図をさらさらと淀みなく書きあげて行く。しかも鼻歌交じりで。

「不思議の国のアナタでも思つたけれど、凄いやね」

「そーですか? ちゃんと地図を書き上げたら有用なアイテムが手に入るんだから、結城先輩もしつかりと書きましようよ。それに、この地図は重要なものなんですし」

総司くんはそう言う顔と顔を上げ、巨大すぎるドーナツを食べ終え満足そうに微笑む玲ちゃんを見る。玲ちゃんは善くんにお礼を言う抱きついた。善くんもまた満足そう

に何度も頂き、玲ちゃんの頭を撫でている。

「玲ちゃんがどうかしたの？」

「……いいえ。この分だと善さんが泣きついてくるのも早いかもって思っただけです」

「さつき言っていたデカ盛り券っていうのが関わってくるの？」

「はい。ぶつちやけますけれど、もぎてん通りにあるお店すべてで使える食券が買える券売機があるんですけど、まあそれなりに値が張るんです。デカ盛りだと、福沢さんが1人くらい」

「あー……なるほど」

今も満面の笑みを浮かべて善くんに甘える玲ちゃんを見れば、この1回だけで満足する風には見えない。きつと、玲ちゃんは善くんに縋るような視線を向けるだろう。玲ちゃんを悲しませる真似を善くんがする訳がないので、結局は券を購入せざるを得ないという訳で。そこで、ふと疑問が浮かんだ。私は地図を書き上げた総司くんを見つつ尋ねる。

「ところで、総司くん」

「なんででしょうか？」

総司くんがノートを閉じた後、私の顔を不思議そうに見てくる。

「お金は全部、私と優ちゃんが管理しているんだけど、どういうことかな？」

目をパチクリさせて佇む総司くん。だが、すぐにフツと笑った。

「ヤソガミコウコウ内のゲームで得られるアイテムつて中には売るしかないようなものもゴロゴロあつてですね、僕の財布は結構潤っているんですよ。善さんには秘密を共有してもらっているので口止め料として、デカ盛り券を買えるだけのお金を渡したんです」

「へー。例えば、どんなの？」

「輪投げで手に入れたんですけれど、『進る金のマール像』が3万だったかな。テオドアさんも苦笑いしていたし」

「……なぜだろう。それがどんなものなのか分からないけれど、これ以上それを追求したらダメって言われている気がする」

「僕も結城先輩が現実で『進る金のマール像』を持っていたら、迷わず警察に通報します」
「そこまでのものなの!？」

「造形的に」

とにかく総司くんは私たちが把握しきれないお金を持っているということらしい。それも総司くんがゲームをクリアして得た資金なので、それを私が寄越せつていうのも変な話だ。

「まあ、総司くんなら変な風に使ったりしないと思うけれど」

「なんだか釈然としない信用のされかたですけど、まあいいです。地図、出来上がりしましたよ」

テーブル席の向かい側に座る形となった総司くんからノートが返却される。第一の迷宮の時と同じように、私が作成した前衛的な地図のような物が、見やすく分かりやすい地図へと変わっている。

「ありがとー。助かるよ、総司くん。いやー、風花が怖くつてね」

「山岸先輩たちは僕たちと一緒に迷宮に潜ることができない上に、タルタロスのように進むべきルートを指示できないんです。彼女らの生命線はまさに結城先輩の書く地図のみ。神経質になるのも致し方ないのでは？」

「はーい。これからは、できるだけ頑張るよ」

私は総司くんの忠告を聞き神妙に頷く。確かに風花たちは地図がないと迷宮内を知ることが出来ない。迷宮内がはつきりイメージできないとシャドウの接近も間近にならないと分からないらしいし、やっぱり真剣に書く必要があるみたい。だけど……

「地図書くのってセンスがいりますからね」

「そうなんだよねー」

私と総司くんは地図を記したノートに視線を落とすと、ほぼ同時にため息をついたのであった。



さて、再び第二の迷宮に挑むことになったのだが、入り口から入ってすぐに異変に気付いた。前回は入り口から男女別チームになっていたのに、なんと全員が同じ場所に入ったのである。

「ほう……、これはどういうことだ？」

「考えられるのは、『階層にある質問をすべて答えたから』なのか、それとも『階段を使用し降りたから』か、の2つですね」

美鶴先輩の呟きに白鐘さんが考えたことを口にする。その実証は下の階に降りればはつきりするのだろう。白鐘さんの考えた状況が下の階層にはあるのだから。結局のところ白鐘さんの考察は後者が正しかったのだが、重厚な扉の先にいた中ボスっぽいシャドウを倒し階段を降りた先はカジノっぽい内装がなされた所であった。部屋には大きな扉と今私たちが使用して降りてきた階段とは別に先に進むための階段、そして4つのルーレットが設置されてあった。このルーレットは床の模様の扉と連動している様子。

「わふっー！」

「さすがです、コロマルさん。えーと『Predetermined Fate Routelette』……直訳すれば、『決められた運命のルーレット』でありますか？」

扉の前で吠えたコロマルの視線の先にあつた文字を読み上げるアイギスの下に集まる面々であつたが、1人だけ今しがた降りて来た階段の前で蹲る少女がいた。それに気付いた私が傍に駆け寄ると、彼女はフルフルと首を横に振って立ち上がった。

「迷える子羊さんたちに朗報だ。ここはポーナステージ。扉の先には5つのフロアがあり、それぞれの試練を乗り越えたと宝物庫へ行くことが出来るのだ。君たちは挑戦してもいいし、しなくてもいい。ただし、このポーナステージは今回だけのものだ」

言うだけ言ってしまったのか、アナウンスはそこで切れてしまった。扉の前に集まっていた面々も扉と階段を交互に見た後で顔を見合わせる。

「“試練”を越えた先にある宝物庫」

「これからの探索に役立つものである可能性も否めない……か」

『試練』という言葉を強調しながら告げたのは無論真田先輩で、彼は仕切りに美鶴先輩に對して熱い視線を送っている。美鶴先輩は不思議の国のアナタの迷宮でも言っていたように現実世界に早く戻ることを念頭に置いているものの、私たちが挑んでいる迷宮はまだ2つ目だ。先はまだまだあると思われる。急いでは仕損じるといふし、ここはこのポーナステージとやらに挑むのもありなのではないかと思ひ、私は皆の様子を見てみ

る。

すると、八高メンバーが集まっているところが騒がしいことに気づいた。様子を伺うために近づくと、優ちゃんが「暴れて」いた。

「駄目！絶対駄目っ！」「運命のルーレット」なんか、絶対に駄目ええええ！」

「落ち着けて、姉御！」

「ちよつと、優。はしたないから足をバタバタさせないでよっ！」

優ちゃんは異くんに羽交い絞めにされた上に右手は千枝ちゃん、左手は雪子ちゃんによつて押さえつけられていた。優ちゃんのその慌て様に白鐘さんや花村くんは元よりゆかりや順平たちも訝しげにしている。

優ちゃんはそれでも興奮したままであるため、私は彼女のストッパー役を探して部屋の中を見渡すと、そんな喧騒なんて関係ないと言わんばかりにクマくと天田くんを連れた総司くんが件のルーレットを覗き込んでいた。

「H」「I」「S」「E」「N」の文字の下にそれぞれ「4」「3」「4」「4」の数字か」

「英語の方は分かりませんが、数字の方は、ひい、ふう、みい……。この部屋にいる僕らの数と一緒にみたいです」

「クマはゆかりちゃんや千枝ちゃんたちと行きたいクマね」

「数字は人数……だとすると英文字の方は頭文字かな。時間、敵の強さ、いや……難易度？」

総司くんたちは円陣を組みつつルーレットに書かれている文字の解説を行っている様子で、それに気付いたアイギスとコロマル、荒垣先輩が近寄って行っている。今まで暴れていた優ちゃんも一段落ついたのか落ち着いたみたいだが、このポーナゲームに挑戦したくない気持ちがひしひしと伝わってくる。

ルーレットと連動している扉から離れた位置に一度集合した私たちはこのポーナゲームに挑戦するかしないかの多数決を取る事になった。

ポーナゲームに挑戦したいと主張するのは順当な真田先輩の他に女の子と一緒にやりたいと欲望を隠さないクマくん、それと総司君と天田くんの4人。反対に絶対に挑戦したくないと捲くし立てるのは優ちゃんだ。彼女は八高メンバー全員に睨みを利かせた上に美鶴先輩を自分の陣営に引き込んだ。この時点で勝敗は明らかであるもの、とりあえず残っているメンバーの意見を尋ねる。まずは、お疲れ気味なゆかり。

「ゆかりはどっち？」

「えー。もう先に進むのでいいんじゃない？ 順平もそうでしょ」

「そーだなー……。けど俺たちは挑戦するのもありだと思っただけ。俺たちも一個目の迷宮とは違って大所帯だけだよ、"それ"を崩されたときに今の装備はちっと頼りないし

よ」

「うっ……確かに」

順平の言うとおり、現在の私たちの装備はどこかで妥協している部分がある。そもそも出費に対して、収入が少なすぎるのである。無尽蔵に出てくるシャドウの素材は安いし、ちよつと高めの素材が出てくるパワースポットにはシャドウが集まりやすくて中々うまくいかないし。むしろ総司くんのお小遣いになつてゐる出し物をメンバー全員でかき集めて売つたほうが効率いいかもしれない。

「荒垣先輩はどうですか？」

「伊織の言い分も正しいが、ここは俺たちの常識が通用しない未知の空間だ。甘い話には裏があると思つて、ここは見送るのが妥当だろう。それも分からないバカの説得は任せておけ」

そう言つた荒垣先輩はボーナスゲームの試練が控えている扉に向かつてシャドーボクシングをしている真田先輩がいるところに向かつて近づいていく。この不可思議な場所に来て何度目か分からない言い争いがまた勃発し、美鶴先輩がまた眉間にしわを寄せる姿が眼に入った。

「結局のところ、どうすることになつたんだ？」

今まで私たちのことを、フランクフルトを頬張る玲ちゃんの隣で傍観していた善くん

が尋ねてきた。私は皆の様子を鑑みて答える。

「今回は見送る方向でいくよ。今は先に進むことにしよう」

「……そうか。分かった」

善くんも安心したように頷き、元いた玲ちゃん隣の隣へ戻っていく。総司くんたちは挑戦できなかったことを残念がっているけれど、先に進むことを伝えたら一番に降りていってしまった。その後をコロマルとアイギスが素早く追っていく。優ちゃんの暴走のおかげでほとんど発言できなかった八高メンバーの彼らも降りていった。

フロアに最後まで残ったのは私と優ちゃんと白鐘さんの3人。階段を降りる前には優ちゃんの様子を見た。彼女はこのボーンスゲームに挑むことが無くなって心底ほっとしたのか、あどけなさが残る年齢相応の柔らかな笑みを浮かべていたのだった。

ごーこんきつき編一⑥

試練を越えた先に宝物庫があるというボーナスゲームの誘惑を断ち切って、第二の迷宮の「三次会」に來た私は階段付近にいるメンバーを見渡し、一際低い身長で目立つ天田さんと丸っこいキグルミ姿のクマさんと一緒にいる灰色の髪が特徴の総司くんの姿を見て内心でガッツポーズをする。ただ「彼」は自分たちの周囲にいないメンバー構成を考えて、大きくため息を吐いている。

「ふむ。総司の懸念通りになった訳か」

「そうですね。でも、まあなんとかなるんじゃないですかね」

「どういうことクマか、シーフー?」

思案するように腕を組む総司くんを見て、どう声を掛けようかを私が悩んでいるうちに善くんが彼に話しかけていた。しかし、彼らの話に耳を傾けるとどうやら総司くんは別グループになったゆかりたちのことをあまり心配していないようであり、疑問に思ったクマくんに尋ねられても表情は崩れなかった。

「確かに元のペルソナの属性だと順平さんやユツキーとか、真田先輩と完ちゃんみたい

に被っちゃっている人が多いけれど、真田先輩は弱点の氷結属性を補うために『ジャツ

クフロスト』をつけているし、完ちゃんは弱点の風属性を防ぐスキルを持っている『ティターニア』をつけているし、なんだかんだで師匠は頼りになるからきつと問題ないよ」

総司くんが男子チームを率いている間、サブペルソナ枠は彼らの弱点を補う構成で配分されていたようだ。

「明彦が氷結属性も使えるようになってきているということは、なんとか四属性は揃っているという訳か。しかし、質問の具合によつてはこの迷宮を少人数で挑まなければならぬ事態に陥る可能性も捨てきれない。最悪、自分の気持ちとは違う選択肢を選ぶ必要があるということには十分に理解してもらいたい」

美鶴先輩がそう言うのと納得したように大きく頷く者、どこ吹く風と反応しない者、そして思い人の名前を呪文のように唱え続ける少女と個人の性格が露になったのだった。



さて、気を取り直し迷宮の探索を再開させた私たちだったが、せつかくなので合流した後も戦闘は男子と女子を分けている。そこで司令塔が総司くんな男子チームと私と優ちゃんが指揮する女子チームの連携の差が浮き彫りとなった。

いや、例外はあるけれど。総司くんを人間の頭脳だとすると手足の役割を果たす善く

んや天田くんやクマくんの足を引つ張る形になつてゐるのは、意外にも器用そうな花村くんである。本人も気になつてゐるのか、しきりに総司くんやクマくんとコミュニケーションを図つてゐる。その様子を見て不思議そうにしているのは無論、八高の女子メンバーの優ちゃん、千枝ちゃん、白鐘さん、そしてナビのりせちゃんだ。

「らしくないですね、花村先輩にしては」

「……うん。いくら何でもおかしい」

『足を引つ張つてゐるのがクマなら分かるけれど、花村先輩となるとな……』

「皆もそう思うよね。総くんが指揮を執つてゐるだけなら、花村だけがあんな風に孤立するよなことにはならないはずだし」

八高メンバー内でのカースト順位が垣間見えた気がする。彼女らの中ではクマくんは余程低い位置に座してゐるのか、花村くんをフォロウするような声が上がつてゐる。うちの順平とは大違いだ。

「ところで、本来のワイルドの力を持つ優さんと結城さんにお尋ねしたいのですが、貴女方はペルソナをどの程度保有することが可能だったのでしょうか？」

白鐘さんの素朴な疑問に私と優ちゃんは咄嗟に顔を見合わせ、同時に口を開く。

「12体」

私たちの答えは見事に揃つた。その答えを聞いて千枝ちゃんや美鶴先輩なんかはふ

むむむと頷き、ナビ組の風花とりせちちゃんの2人は感心するような声が聞こえてきたのだが、質問を投げかけた当人は腕を組んで首を傾げている。彼女の視線の先にはシャドウの撃退に成功して、ハイタッチして喜ぶ男子チームの姿があった。

「そんなに気になるなら、私が聞いてあげるよ。直人」

そう言った優ちゃんは総司くんの下へトコトコと歩いて近づいて行く。その様子を見ていた白鐘さんが優ちゃんに駆け寄り、何か耳打ちをした。優ちゃんは初め首を傾げていたが頷き、歩みを再開させ総司くんに近づいていく。

シャドウに何もさせずに倒しきって盛り上がっていた男子チームだが、優ちゃんが妙な表情を浮かべて近づいてきたのもあり、真剣な面持ちで彼女の話を聞く。優ちゃんは事情を説明し終えたのか総司くんを伴って戻ってきた。勿論、彼を慕っている天田くんとクマくんを連れて。

「というか、天田くんはともかくクマくんは会って間もないのに、総司くんとすぐく仲が良くなったよね。やっぱり初めての依頼で味方してもらったのが、効いているのかな」
「うーん。優のお兄ちゃんっていうのも効いていると思うけれど、確かにあの懐き方はないかー。あとは……餌付け？」

私がぼそりと呟いた独り言に反応したのは千枝ちゃんだった。千枝ちゃんの話によると、クマくんは花村くんの家に居候しながら八十稲羽の町に住んでいるらしい。大好

物はアイスのホームランバー。キグルミ姿で働いて、花村くんのお父さんが経営しているお店のマスコットとなっているようだ。

そんな風にクマくんの日常の様子を聞いていると、白鐘さんが近づいてきて私たちに耳打ちしてきた。曰く「僕に話を合わせてください」とのこと。私と千枝ちゃんは事情が良く分からなかったものの、領いて肯定しておく。それを見た白鐘さんは大きく深呼吸すると総司くんに向かって尋ねかける。

「すみません、総司さん。ちよつとお尋ねしたいことがあるのですが」

「うん、優から聞いているよ。何でも聞いてくださいね」

真剣な眼差しを総司くんに向ける白鐘さんに対し、彼はニコニコと微笑みを携えている。

「それでは早速。単刀直入にお尋ねしますが、総司さんが保有しているペルソナは現在何体ですか？」

「全部で12体ですね。今、つけているのは『リョウマ』ですけど、お見せしましょうか？」

「ええ、お願いします」

私には白鐘さんの思惑が分からないけれど、現在の総司くんの戦力を把握するのにいい機会だと思つて、彼らの手元を覗き見る。すると総司くんの手の中にカードがたくさ

ん現れる。総司くんは具現化されたカードを一枚一枚、私たちに見えるようにしながら説明していく。

前の階層で毒状態になったメンバーを癒した『フェアリー』を始めとした状態異常回復スキルを得た初期のペルソナに加え、第一の迷宮の最奥にて倒すことになったF・O・Eを倒して手に入れたという『リヨウマ』や強力な雷のスキルを扱える『モードレッツ』といったペルソナも見せてもらった。

「こーやって見てみると、兄さんが得るペルソナって独特ね。日本の英雄や妖怪は勿論だけれど、西洋の英雄や妖精も混じっているし」

「そうですね。話を聞く限り、結城さんは西洋系のペルソナ、優さんは日本に縁のあるペルソナっていう感じがありますし、総司さんは丁度その間っていう感じでしょうか」

「まあ、結城先輩のことも優のことも知っているし、それぞれが関係しているんじゃないかな」

右手で顎を擦ってちよつとの間、思案した総司くんは自分の見解を呟く。白鐘さんはそんな総司くんの様子をじつと眺め、次の質問を口にする。

「なるほど。……では質問を変えますが、戦闘開始直後にスキルも使わずにペルソナ交換するのは何故ですか？」

「えっと、ペルソナの中には戦闘開始直後にオートで発動スキルがあるから……。僕の

場合はチーム全体の回避力と命中力があがる『マハスクカオート』というスキルを覚え
たチュウウコを戦闘開始時につけるようにしていますよ」

さすがに我が特別課外活動部の裏方として長い間、支援に特化してきただけある。確
かにその部分が低いとダメージが増えるし、戦闘が長引くことに直結してしまうから、
総司くんの方法も一理ある。というか、ここに来る前は私がそうしていたし。ただ、そ
れは自分だけ恩恵のあるものだったので、ちよつと皆に対して負い目があるから、これ
は黙っておこう。

「あの一見、無駄に見えた行為もまた意味があつたということですね。それに本来であ
れば結城さんや優さんも取れていた戦法のはずですし。……総司さんは、そのような戦
闘法はどういった経験を元にして思いつき実践するに至つたのですか？」

白鐘さんの質問に総司くんは助けを求めるように視線を泳がしたが、男子メンバーは
おろか私たちも助け舟を出すことができない。優ちゃんもやれやれと言いたげに首を
横に振る。白鐘さんだけが首を傾げてクエスチョンマークを頭の上に浮かべているこ
とだろう。総司くんは諦めた表情で小さく呟く。

「えつと、その……。ゲームで……」

総司くんの人となりを知る皆が、「そうだろうな」と言いたげな微妙な表情を浮かべる
のであつた。

さて、白鐘さんの疑問も解決したので迷宮の先に進む訳だが、ここの階層に居るF・O・Eは私たちが正面を向いていると近づいてきて横に移動したり、ムーンウォークしたりすれば微動だしないという特性を持つている。にっちもさっちもいなくなつたら扉から入りなおすと一番初めの位置まで戻る律儀さがある。総司くんじやないけれど、F・O・Eの動きは規則性があるというよりはゲームのルールに基づいた動きに見える。うん、どうして私がF・O・Eの動きをのんびり眺めることができるのか。その理由は女子チームの前に行く、男子チームのやる気によるものである。

「この手の仕掛けがあるときは、抜け道が近くにあるのが常なんですから、ずんずん進んじや駄目です」

と、地図作成に手間取る私の手から皮手帳をひたたくた総司くん。ここにくるまでにコツを掴んでしまったのか、指輪のモニュメントをあつさりと発見してくる天田くんとコロマル。クマくんと善くんは探索と地図作成に夢中になつている年少組2人と1匹をフォローしていて、花村くんだけがどう動こうか迷つている状況である。

「……うう。こういう場合、相棒だと『黙つて私についてこい！』的な雰囲気だから特に考えなくても良かった。けれど総司の場合はまさに究極の協力プレイって感じなんだよな。このチームのために自分は何をするんだって明確な意思をもたないと……。や

べえ、やばいって！俺は何をしたらいんだっ!?」

花村くんが女子チームの前で赤くなったり青くなったり百面相しながら悶えている。思い当たる節があるのか、千枝ちゃんと白鐘さんが黙り込んでしまっている。そんな中、優ちゃんだけが動き、両手で頭を抱えている花村くんの背後に立つと思いい切り蹴飛ばした。呆然とする花村くんの前に仁王立ちして優ちゃんは断言する。

「うだうだ考えてないで、兄さんのところで謎解きを手伝うか、クマたちと一緒に護衛するかしなさいよ！」

「い、イエスマム！」

蹴り飛ばされて呆然としていた花村くんであつたが、優ちゃんの檄を受けてクマくんたちがいる所へ走っていく。千枝ちゃんはそんなだから駄目なんじゃないと頬を膨らませて花村くんを非難するようであつたが、彼を見送つたままの状態で佇む優ちゃん。不思議に思った私は優ちゃんの隣に並んで様子を鑑みると、下唇をかみ締め何かに耐えるようにしていた。

「このやり方じゃ駄目だ……。あの頃の、自分で考えず周囲の状況に流されるままだったあの頃から、……私は成長していないじゃない。私は……わたしは……」

迷宮の床に水滴が数度に渡って落ち、小さな染みを作った。嗚咽こそ漏らさないが、優ちゃんは口元を抑え袖で何度も眼を擦って、涙を隠そうとしている。私は咄嗟に彼女

の手を握って引つ張り、総司くんらがいる場所から見えない位置に移動し、文句を言うとうと開口した優ちゃんの頭を胸に抱え込んだ。優ちゃんは初め、私から離れようとバタバタと暴れていたが、無駄だということが分かったのか大人しくなった。私は優ちゃんの後ろ髪を撫でながら優しく語りかける。

「優ちゃん。貴女が何に苦しんでいるのか私には分からない。けれど、だからといって泣くのは我慢しないでいいと思うよ。総司くんに泣き顔を見られたくないっていうなら私たちが壁になるから、ね！」

「……………」

優ちゃんはだらりと床に向かって伸ばしたままにしていた手を私の背中に回す。そのすぐ後だった。今まで胸のうちに秘め続けた悲哀や後悔を滲ませる様な声で優ちゃんが泣き始めたのは。

悪夢—①

忘れもしない。

2年前の10月4日、『剛毅』と『運命』のアルカナを持つ大型シャドウと戦う満月の夜。

私たち特別課外活動部の全員を荒垣先輩と天田くんの元へ向かわせた「兄さん」はナビ役だった山岸先輩を気絶させ、1人で大型シャドウに戦いを挑んだ。

半死半生になりながらも『剛毅』のシャドウを弱らせた後で自分の体に封印してみたんだけど、『運命』のシャドウと戦う力は残っていない……。私と伊織先輩、岳羽先輩がその場にたどり着いた時には兄さんは息絶えていた。

その傍らには物言わぬガラクタとなったアイギスの姿もあった。

□□□

「久しぶりに兄さんの手料理が食べたいな。たとえば……『満漢全席』とか」
「ぶふうっ!？」

第二の迷宮の三次会を攻略途中、泣き出してしまった優ちゃんを気遣いヤソガミコウコウに戻ってきた私たちであったが、泣き腫らして目を真っ赤にした彼女が突如、総司君に対してこんな提案をした。何故、探索を切り上げて急遽戻ることになったのか理由を尋ねに男子を代表して来ていた総司くんはその場で噴出して優ちゃんに詰め寄っている。

「優！さすがに僕でも満漢全席は作ったことないよ！というか一人で作るような料理じゃないし」

「うん、知ってる」

「え、じゃあどうして？」

優ちゃんは詰め寄ってきていた総司くんの肩に手を置くと、にっこりと笑う。その笑顔に恐怖を抱いたのか総司くんが彼女から離れようとしたのだが、がっちりとホールドされているのかびくともしない。

「満漢全席ってね、中国料理の選りすぐったメニューを一度に食べられる画期的な料理なんだよ。北京ダックはもちろん、マーボー豆腐、チンジャオロース、ホイコーローなどなど」

総司くんの料理の腕を知っている特別課外活動部のメンバーは優ちゃんのあげた料理名を聞いて生唾をぐくりと飲み込む。そういえば総司くんが作るマーボー系の料理

は人間の味覚を全て網羅しており、人気も高かった。私も総司くんが作ったマーボーをご飯にかけて食べるのが好きだ。と、あふれ出てくるよだれを袖で拭っていると、善くんが慌てているのが目に入った。「どうしたの?」と聞こうとした私の横を猛スピードで駆け抜ける影がひとつ。

「そんなの優より僕のほうが知って……って、優。誰を」見て言ってい『ガシィッ!!』
げふう!!」

集団から抜け出た影の正体は玲ちゃんだった。彼女は総司くんの背後から飛び掛り、彼を押し倒した。優ちゃんは玲ちゃんが飛び掛るのを見届けた瞬間には総司くんを解放し、身を振らせ射線上から回避している。総司くんは背後からの急襲に対応できず、そのまま押し倒されなすがままにされる。

「総くん、私! その『まんかんせんせき』ってやつがたべたい!! たべたい食べたい食べさせろー!!」

「ぎゃー!! 逃げ道が塞がれた!!」

食の野獣と化した玲ちゃんに恫喝される総司くん。優ちゃんにしてはやりすぎなのではと思ったが、彼女はすでに荒垣先輩と天田くんの元へ移動しており、総司くんを手伝って満漢全席を作るように仕向けている。

「……ちっ、しゃーねーか。ここに来て、フライパン握ってねーしな。リハビリがてらや

るか」

「総司さーん、材料を集めにいきましょー」

「あれ？師匠と乾くんは乗り気なの!？」

総司くんはてつきり断つてくれるものと思っていたらしいが、何故だか荒垣先輩と天田くんは料理するのに忌避はなかったようだ。そんな2人を見て、目をぎらぎらさせる玲ちゃん、申し訳なさそうに佇む善くん、そして騒ぎの張本人である優ちゃんを見た彼は深々ため息をつくと立ち上がって、荒垣先輩と天田くんの後を追って小走りして行く。聞いたことの無い料理の名前に興味津々だった玲ちゃんと保護者な善くんも後に続いた。

「ではアイツらの料理が出来上がるまで解散ってことでいいのか」

「ふむ、保健室に依頼の確認にでも行くとするか」

なんだかんだ巖戸台学生寮で三強の料理人に胃袋をがっちりと掴まれているメンバーである真田先輩と美鶴先輩が言うと、その場にいたほかのメンバーも次々と話し始める。が、

「いえ、諸々用事があると思うけど、話したいことがあるからベルベットルームに集まってください」

総司くんらを見送った優ちゃんが真剣な眼差しでそう告げた。

率先してベルベットルームに入った優ちゃんは大きなソファに腰掛けていたマーガレットさんと床に転がって何かを記していたマリーちゃんをどかすと私たちを手招きする。私のほうが先にいたのにと頬を膨らませているマリーちゃんのほつぺたを千枝ちゃんや雪子ちゃんがぶにぶにと突いているが、優ちゃんは我関せずを貫く態度をとっている。依頼された料理を作るためにヤソガミコウコウ内に残った総司くんら5名を除いた月高と八高のメンバーが揃っていることを確認した優ちゃんはおもむろに頭を下げた。

「さてと。まずは……ごめんなさい」

顔を見合わせきよとんとするメンバーたち。突然の謝罪に意味が分からないといった様子だ。

「いったい、何に対しての謝罪なんすか、姉御」

「そうだよ。お姉ちゃんが謝ることなんて……」

八高メンバーで優ちゃんを慕っている異くんとりせちゃんが声をかける。優ちゃんはふるふると首を横に振るとしつかりと私たちを見据えて言葉をつむぐ。

「りせたちには不甲斐ない姿を見せた上にリーダーあるまじき行動をとって困らせたこと。そして結城さん……『現在』の湊先輩たちには不必要なほど失礼な態度をとり続けたこと。……それに対しての謝罪」

そう区切った優ちゃんを見て、八高メンバーは表情を曇らせた。分かっているのはクマくんくらいに見える。無論、月高メンバーは優ちゃんが何を言おうとしているのかピンときているものはいない。

「私が湊先輩たちに冷たく当たっていた理由はただひとつ。私を含めた特別課外活動部の皆で兄さんを殺したようなものだから」

「!?!?!?!?!」

優ちゃんは語り始める。何故、彼女がこんな風が変わってしまったのかを。

□□□□

2009年10月4日

アルカナを持つ大型シャドウの討伐日でもある満月の夜。影時間になる直前になっても荒垣先輩と天田くんは帰ってこなくて美鶴先輩の額には青筋が浮かんでいた。彼女に話を振ると怒られそうなこともあり、私は湊先輩やゆかり先輩と話をしていた。伊織先輩は真田先輩と兄さんと話をしていて、アイギスはコロマルと何やら話をしているような感じだった。だが、プルプルと美鶴先輩が震えだしたのを見て、彼女の近くにいた人たちが非難し終えると同時に吼えた。

「ええい！荒垣と天田はどこに行つたんだ！作戦日だというのに、どこで油を売っているんだ！」

「留守にするなら言つていて欲しかったですよ。てつきり3人で作るものだと思つていたのに」

美鶴先輩の魂が震えるような叫びの後に、肅々といった感じで兄さんが呟いた。結局、時間を掛けてだがすべての料理を1人で作つた兄さんに私たちは感謝の言葉を送るしかない。というか、今日の作戦も皆で必ず帰つてくるのが報いる方法なのかもだけだ。

「美鶴先輩、いないものは仕方ありません。まずは今日のシャドウをどうにかしましう」

「全く……帰つてきたら処刑だな」

湊先輩が慰めるように声を掛けたけれども、美鶴先輩の怒りは萎える事は無い。2人は特別課外活動部の面々にはもちろんのこと、一緒にいることの多い兄さんにも声を掛けることなく席をはずしているのだ。無論、無線による呼びかけにも反応は無い。作戦日を無断で放り出したとあれば、先月の伊織先輩の如く恐ろしいお仕置きが待つてゐることなど分かつていそうなものだが、あの2人がと思うと意外としか思えない。

「師匠と乾くんの2人がいないつてのいうのは珍しいですよ。どちらも真摯に取り組

むし、ペルソナを扱う上では2人は師匠と弟子の関係ですしね。……そういえば、乾くんのお母さんの命日って今日でしたっけ」

兄さんの言葉を静かに聞いていた真田先輩が目を見開きながら身を乗り出した。そして、慌てた様子で美鶴先輩に駆け寄る。

「美鶴！俺は今すぐにシンジたちのところに行く、後は任せる」

「なっ!?ちよつと待て、明彦っ!!」

美鶴先輩の制止を振り切つて作戦室から出て行く真田先輩。どういう状況なのかを私たちが美鶴先輩に尋ねると同時に湊先輩の呟きが耳に入る。

「確か天田くんのお母さんは事故死という扱いになつていているけれど、彼は大きな馬に跨つたナニカに殺されたつて言つていた。それに荒垣先輩も、自分の命は償いのためにあるつて……まさか!？」

湊先輩は顔色を青くしながら唇を震わせる。しかし、すぐに頭を振つて意思の籠つた瞳を美鶴先輩に向けた。美鶴先輩は何かを言いたげであったが、頭を振つて大きなため息をつくとき大きく頷いた。湊先輩はすぐに頷き返すと、作戦室に残つていた皆に向けて自分の意思を伝える。

「大型シャドウを倒すのも重要だけれど、今は荒垣先輩と天田くんの命を優先したい。だから……」

「皆まで言うなよ、湊っちー！」

「そうだよ、湊。来月はちよつと大変になるかもだけれど、2人を助けに行こう！」

湊先輩の宣言を聞いた面々はしつかりと頷いた。そして、次々と作戦室から出て行く。風花先輩がペルソナを使って2人の居場所を探るとポートアイランド駅の裏路地にいることが分かった。そこにストレガの2人が近づいていることも分かり、一刻も早く向かわないといけないと思った時、私は違和感を抱いて足を止めた。

私は部活で走りこんでいることもあって、後続メンバーの中でもコロマルに次いで前方にいたのだが、誰かが足りないと思った。足を止めていた私の横を湊先輩と美鶴先輩が走りぬける。これで私の前にいるのはコロマルと湊先輩と美鶴先輩。それといち早く荒垣先輩と天田くんの危機を察した真田先輩。

「……はあっ……はあ……」

間の前がチカチカする。身体が芯から冷たくなっていつている気がする。大事なことを見落としているのではないかと、私はゆっくりと思索し作戦室での異常な光景を思い出した。

「ありえないっ！」

「うおうっ!?!どうした、優ちゃん?」

「はあはあ……皆、早過ぎ」

後続メンバーでも遅れていた伊織先輩とゆかり先輩の2人が立ち止まっていた私の横に立って心配そうに見てくる。私是要領の得ないと自覚しつつ、彼らに私が感じた違和感について伝える。

「影時間になっていましたよね！風花先輩がルキアを使っていましたもん」

「へ？」

「優、何をいいたいの？」

「作戦室でルキアが現れた。荒垣先輩たちのことは勿論だけど、ストレガの2人の場所もわかって」

「落ち着けよ、優ちゃん。いったい、どうしたんだよ！」

困惑した表情を浮かべている2人の先輩に向かって私は、私を感じた異常を思い切り大きな声で伝える。

「作戦室でルキアを顕現させた風花先輩の隣に、『兄さん』が立っていたんです！『象徴化』していません！そして、今は兄さんとアイギスの2人がいない！」

「はあっ!?!」

私はここ最近の兄さんの行動を思い浮かべる。そうだ、兄さんはアイギスに何かを尋ねたり、相談したりする様子が見て取れた。何を話しているのか聞いてもはぐかされて、結局なんだったのかが分からない。

「寒気が止まらない。口の中も異様に乾いて気持ち悪い。何か良くないことが起きようとしているに違いないんです。だから、私は寮に戻ります！2人は荒垣先輩たちの方に向かってください」

私はそう言つて振り返ると巖戸台学生寮に向かつて走り出す。するとすぐに伊織先輩とゆかり先輩が横に並んだ。

「ああもう！これで何もなかったら桐条先輩に確実に怒鳴られる」

「じゃあねえつて、ゆかりっち。むしろ、何か」あつたら優ちゃんだけでは対処が難しいだろ。それに風花と通信がつながらねえんだ。何かが起きたのは間違いねえつて！」

伊織先輩とゆかり先輩は息切れを起こしつつも私のトップスピードについてくる。私は前を向いて、一心不乱に走り続けるのだった。

□□□

優ちゃんは「ちよつと休憩」と言つて肩を鳴らした。

過去を語っている間、優ちゃんは床の一点を見ながら淡々と事実だけを告げていく。

天田くんと荒垣先輩の因縁を聞いた真田先輩は、話すメンバーが厳選された理由を感じ取つて沈黙せざるを得なかった。それにしても総司くんが象徴化しなかつたつて、そ

んな異常な光景を私や美鶴先輩が見逃すとは思えないけどな。

「気付かれなくするって、もしかして『ムイシゼン』を使ったクマか?」

『無為自然』って何? ベルベットルームに集まっていた面々の視線が発言者であるクマくんに集中する。するが、唯一優ちゃんは達観したように呟いた。

「そっか。兄さんはここでペルソナが使えるようになって、そのままの状態であの目を迎えちゃったのか……」

悪夢—②

優ちゃんの謝罪から始まった彼女にとつては過去の、そして私たちにとつての未来の話は各々に大なり小なりの衝撃を与えていた。

前提として総司くんの死が確定している。

荒垣先輩と天田くんには深すぎる溝があり、2人の因縁による衝突の阻止は真田先輩にとつて大型シャドウの討伐よりも優先されるようなものであった。

そして、何故か2人の事情を知っていた私もまた彼らの救命を優先させた。〃させてしまった〃。何故私は優ちゃんの異変に気付かず荒垣先輩と天田くんの下へ走つたんだらう。

「ところでクマ? 『ムイシゼン』って何だ?」

「えっと、シーフーが使うスキルのひとつで……はっ!? 秘密クマ!」

「そこまで話しておいて、今更だなあっ!」

八高メンバーのクマくと花村くんが漫才を繰り広げている。どういふスキルかなんて、『無為自然』という四字熟語の意味と優ちゃんの話の踏まえて考えればすぐに答えが出るだらう。自然のあるがままの姿でいること、つまり周囲と同化し気付かれなくす

ること。でなければ、ルキアを顕現させた風花の隣に立ったままでいるなんて芸当をできるはずが無い。

「クマのお仕置きは確定として、話の続きをするよ」

優ちゃんはそう言って、再び話し始めた。

□□□

月光館学園に通っている特別課外活動部の拠点でもある巖戸台学生寮。そのラウンジのソファで寝かされていた風花先輩を私たちはすぐに起こして事情を聞く。風花先輩はくらくらする頭を押さえながらだが、私たちが作戦室から出て行った後のことを話し始めた。

「湊ちゃんたちが荒垣先輩や天田くんのところへ向かった後、私に大型シャドウの動きはどうかを尋ねてくる声があったの。私は特に気にすることも無く、巖戸台駅前にいることを伝えて不思議に思った。私は一体誰に話たんだろうって。そしたら、目の前に総司くんが立っていたの。傍らにはアイちゃんもいて。どういふことなのか尋ねようとしたら、当身されちゃって」

「……総司とアイちゃんはグルか」

「2人は何をするつもりなの？」

「分かりません。でも、私が気を失う直前、彼らが『戦う』『封印』『助かる』っていう話をして聞いたのを聞きました。そして、現在総司くんとアイちゃんは巖戸台駅前の大型シャドウと戦闘中で……つて、優ちゃん！」

私は脇目も見ずに走り出した。学生寮の玄関を蹴つ飛ばして外に出ると最寄の駅に向かつて走る。その後を伊織先輩とゆかり先輩が追ってくる。

学生寮から巖戸台駅まで時間はそうは掛からない。走って行けば10分も掛からない。その時、凄まじい爆発音と共に大量の黒煙が緑掛かった空に浮かぶ黄金色に妖しく輝く月に向かつて上がった。

「おいおい、あつちは駅だよな」

「ちよっ!? あんな規模の爆発を起こせるシャドウってこと?」

私は全身に汗が流れる不気味さを感じ、ここから先に進みたくないと本能が訴えかけてくるような恐怖に歯をガチガチ言わせる。がけつぶちを足で踏み出すような怖い思い、それと同時にあの場所に兄さんがいる以上行かなければならないという気持ちの板ばさみになった私は、下唇を噛み締めて走り出した。

後方から伊織先輩とゆかり先輩の声が聞こえてくるが、私は兄さんの下にたどり着くまでは足を止めないと自分に言い聞かせて走った。

そして、たどり着いた巖戸台駅前広場にあったのは

『大切な家族の亡骸』と

『物言わぬガラクタとなった仲間』と

『不気味な赤い瞳でこちらを見てくるルーレットに乗った異形』だった。

「あ…………うああ…………」

私はおぼつかない足取りで巖戸台駅前広場を進む。胸部が貫かれ、両腕を落とし膝立ちの状態で止まってしまったアイギスの横を通り過ぎた私は、そこでようやく倒れ伏した兄さんの状態を見た。

身体の右半分は焼け爛れ、左半分も大小さまざまな傷が生々しく残っている。

「ああ…………うああ…………あぐつ…………」

身体の中央。胸の部分にはいくつもの孔が開いており、彼を中心に赤い池が出来上がっている。口元を見れば、何度も拭った跡があつて厳しい戦いであつたことが伺える。

それはそうだろう、だって、私たちが全員で挑んでも大怪我を負うような相手たちなんだから、いくらなんでも出来る兄さんでもアイギスさんと2人でなんて不可能だよ…………。

亡骸となつて微動だしない兄さんの表情は穏やかだった。だが私の心は反対に荒れ

狂っていて、この気持ちを留めておくことは出来そうに無かった。振り返れば、ルーレットの盤面を指す針の役目を果たすような大型シャドウがいる。先輩たちの話によれば、今夜現れる大型シャドウは『運命』と『剛毅』のアルカナを持つ2体だったはずだから、残っているのは『運命』の方なのだろう。

そして、兄さんを殺した相手でもある。

噛み締めていた下唇が切れて乾いていた口の中が鉄の味で埋め尽くされる。私は、振り返り『運命』のアルカナを持つ大型シャドウを睨みつけ叫んだ。

「うあああああああああああ!!!」

私の頭上に私の心を映し出す鏡のような存在。ペルソナのウシワカマルが浮かび上がる。

しかし、白い衣を身にまとう童子のような姿をしていたウシワカマルは私の怒りや憎しみといった暗い感情を吸って、異質な存在へと変貌を遂げていく。血のような赤黒い鎧を身にまとう武者へと。顔のところには黒い仮面をつけ目と口の部分に切れ込みが入っていて紅く妖しい光を放っている。両手に持っている刀はそれぞれ、何かを斬った直後のように血が滴り、剣先から落ちていつている。

まるで相手を殺したくて殺したくてたまらないといった様子だ。当然だろう、私は目の前にいる運命のシャドウを殺したくてたまらないのだから。

駅も、

何もかもが切り裂かれ、

壊れていく。

私はそれを見ても何とも思わなくなっていた。

私の瞳に映るのは血溜まりの上で眠るように死んでしまった兄さんだけ。他のものはモノクロに見えるだけで、もうどうでもよくなっていた。

「仇は……取ったよ」

私は兄さんを見ながら呟いたが、私の心を占めた思いは虚しさだけだった。

□
□
□

優ちゃんの独白を聞き終えた私たちは何も言えなかった。これは彼女の主観でしかなかったけれど、当時中学校3年生だった優ちゃんの心が悲鳴を上げることも出来ずに壊れていく様子が手に取るように分かった。それだけ総司くんという存在がかけがえのないものだったのだ。

「兄さんが死んだことを理事長から聞いた両親は出張先からすぐに戻ってきた。けれど、兄さんの状態を見て絶句して、警察や学園関係者に詰め寄っていた。けど真相なん

て一般人の彼らに分かるものじゃなくて、すぐにどうしようもないことに気付いた。そして、鳴上家の歪な家族関係が浮き彫りになってしまった。幼い頃から何でも出来た兄さんは、何をするにしても手の掛からない存在だったから、両親は兄さんについてのことをよく知らなかった。兄さんがとてつもなく広い交友関係を持っていたことも分ならず、兄さんの知り合いのほとんどは彼の死を知らない。少なくとも、私たちの時代で兄さんと交友があった人たちは知らなかった。知っていたらその人の生き方も変わっていたかもしれないというのが多い」

八高メンバーは優ちゃんの発言に神妙そうな表情を浮かべ深々と頷く。彼らは優ちゃんの話を聞く前からどこか予想していた様子だった。彼らは自分たちの街で起きた殺人事件の犯人を追っていると言っていた。つまり彼らの内、誰かが大切な人を亡くした経験があったのかもしれない。

「私がこうやって話したのは、私にとつての過去を、貴女たちにとつての未来を変えてもらいたいから。荒垣先輩や天田くんがどうでもいいなんて言わないけれど、みんなが笑って過ごせる明日を作って欲しい。兄さんはきつとそれを望んでいた」

「優ちゃん……」

私は優ちゃんの傍に近づく。彼女は両手で顔を覆って蹲っている。私はそつと彼女の頭を上げさせ、正面から抱きしめた。そして背中を優しく撫でる。

「……つらかったね。それと……ごめんね」

「………………。うう………………。どうじで……。ひぐう………………。みなとせんばいは………………。にいざんのかい……………」

優ちゃんは私に縋り付きながら泣き叫ぶ。大きな声で、『どうして?』と泣いている。総司くんのことを意識していたはずの私がどうして荒垣先輩や天田くんの救命を優先させたのか。もしかして、喧嘩でもしていたのだろうか。彼とのコミュがリバーズやブロークン状態だったら、もしかするかもしれないけれど……。

「やっと思つけたー! 『まんかんぜんせき』できたって! 皆が揃わないと食べちゃ、『メツ』て言われたんだよー! 早く、行こう!」

しんみりとしてしまったベルベットルームに場違いな明るい声が響き渡る。

見れば目を爛々と輝かせた玲ちゃんが入り口に立っていた。優ちゃんが時間稼ぎに使った無理難題だったが総司くんをはじめとした巖戸台学生寮の台所番3人は作り終えてしまったようだ。優ちゃんの話はそれほど時間が掛かったわけではないけれど、それを考えても凄いとしか言いようが無い。

「あつ、ゆうちゃんが泣いてる! 総司くんに報告だー!!」

「「やめてっ!!」」

「え?」

総司くんは報告するためにベルベットルームから出て行こうとした玲ちゃんを必死に止める私とゆかりと風花。玲ちゃんはきよんとしているがそれだけは洒落にならん。

優ちゃん自体は女番長で女王さまのように育ってしまったが、総司くんにとつては可愛い妹に変わりない。つまり、以前彼が言っていた『優を泣かせた奴は』真つ黒に焦がしたメザシのみ定食』の刑』に処される確立が高い。ましてや総司くんや荒垣先輩たちが作つた『満漢全席』を食べられないことになったら目も当てられない！

「総司が死ぬって聞かされてもピンとこねーんだけどよ、第一の迷宮で見たヨシツネっていうペルソナはマジで強かった」

順平がしみじみ言うとうゆかりや真田先輩が同意する。

そんな中、優ちゃんの話聞いた美鶴先輩がすごくショックを受けたようで頭を抱えて蹲っていた。彼女の目的である桐条総帥の悲願は果たされたことを優ちゃんから聞いていたこともあって、総司くんの死については青天の霹靂だった様子。特に総司くんは私たち特別課外活動部の庇護下にあつたにも関わらず、9月の満月の時にはストレガのチドリに人質に取られるし、その翌週は彼女のペルソナが彼の中に妙に残ってしまった大量のシャドウを呼び寄せることになってしまった。挙句の果てに、荒垣先輩と天田くんの代わりに死んでしまうなんて聞かされたらたまつたものではないだろう。

「これ以上、遅れたら兄さんたちが来てしまいますのでこれでお開きにしましょう。それと、もう大丈夫だから、今まで迷惑かけてごめん」

優ちゃんはそう言つて八高メンバーと向かい合っている。

彼女の中で何かが変わったというのならそれでいいのだけれど、私たちにはしこりが残る。

私はふと思い出す。ここに来たばかりの頃、エリザベスさんに言われた総司くんのアルカナのこと、そして生き方のことを。エリザベスさんはその生き方は変えられると言わんばかりに警告を私に促した。

ここから出るまでに総司くんの考え方を改めさせることができれば、その悲劇は回避できるのだろうか。私はそんなことを考えながらベルベットルームから出て、玲ちゃんに案内されるがままにフードコートへ向かうのだった。

ブーこんきつさ編—⑦

「どうかしましたか？ 僕の格好に変なところでもありませんか？」

フードコートの上に用意された様々な中華料理の数々を見て、食欲旺盛なメンバーは目を輝かせ、多少なりとも料理ができる面々は圧倒的な料理の完成度に打ちひしがれる。特に八高メンバーの雪子ちゃんと千枝ちゃんとりせちゃんは用意された料理を一口食べた瞬間に背景ごと真っ白になりつつ敗北者となった。

ちなみに総司くんは月光館学園の制服の上に何故かジャックフロストの描かれたエプロンを身につけていた。荒垣先輩や天田くんはそれぞれ黒と黄色のエプロンであるにも関わらずにだ。

「いや、なんでジャックフロスト？」

「うん？ ああ、このエプロン、エリザベスさんに貰ったんですよ。試作品の小籠包の味見を頼んだらお礼に、無料でくれたんです」

「相変わらず、服のセンスは壊滅的なんだね、兄さん」

「え？ 可愛いでしょ」

くるとターンを決めつつ素っ頓狂な持論を展開する総司くんであるが、私たちから

見たらジャックフロストが大口を開けて迫ってきているようにしか見えないので、可愛いよりも不気味でしかない。エリザベスさんは何かジャックフロストに恨みでもあるのだろうか。保健室では首を吊らせるような形で飾ってあるし。

「まあ、エプロンの話はいいいじゃない。それよりも優が好きなのエビチリも用意したんだからさ、熱い内に食べなよ」

「いや、別に私はどれが好きっていうのはないよ。……兄さんが作ってくれた料理なら何でも好きだし」

「そう？ いやでも、早く食べないと玲さんが全部食べそうな勢いなんだよね」

総司くんが苦笑いを浮かべながらフードコートの一角を見る。そこには次々に料理が盛りられた皿を空けていく食魔人の姿があった。あまりの食いつぶりのよさではあるが、確かに自分の分を確保しておかないとすぐに食べるものが無くなってしまおうっていうのは本当みたい。

「あついでおいしい。からいけどおいしい。にがいけどおいしい。つーんってくるけどおいしい。あまくておいしい……」

「……………」

善くんが寡黙な執事のようにお嬢様な玲ちゃんやんが淀みなく料理を食べられるようにフォローをしている光景が妙にマッチしていて何ともいえない。この世界にいるエレ

ベーターボーイとエレベーターガールは一心不乱に中華料理を頬張り舌鼓を打っているし。

「ねえねえ、デザートはないの?」

「ベターな杏仁豆腐と香ばしいゴマ揚げ団子の2種類ありますよ」

ベルベツトルーム組のマリーちゃんもいつのまにかフードコートに来ており、八高メロンバーに混ざって頬張っていた様子。彼女がぽつりと呟いた一言に素早く反応したのは総司くんだった。彼に差し出されたデザートにおずおずと手を出すマリーちゃん。そして、一口食べて悶絶する彼女を微笑みながら満足そうに頷く総司くん。

「み、湊……?」

ゆかりが頬を引き攣らせながら声を掛けてくるが、私はぱくぱくと箸を動かして総司くんたちが作った料理を口に放り込む。彼女は意外なものを見るかのようにしている。するとそこに風花が寄ってきた。私の様子を見て、目を丸くしながら呟く。

「湊ちゃん、……もしかしてマリーちゃんに嫉妬してる?」

「うっさい」

間髪入れずに私が否定するのを見て、くすりと小さく笑みをこぼすゆかり。

「湊が嫉妬するって初めてじゃない? いつもは人と人の間に立つことが当たり前だし」

「うっさいうっさいうっさい」

ぱくぱくぱくぱく。

「別に嫉妬なんてしていいないもん！」

ゆかりと風花はそんな風に言った私に向かってにやにやとした笑みを向けてくる。私は確保していた料理を口に詰め込むと立ち上がったってフードコートを後にする。

優ちゃんのヘビーな話を聞いた直後だということもあり、私は1人になるために屋上に向かった。階段を駆け上がって屋上へと続く扉を開け放つ。そしてフェンスに寄りかかって霧掛かった空を見上げた。しばらくそうやって空を眺めていると扉の開く音がした。見れば優ちゃんが気まずそうに立っていた。私は彼女に向かって手招きすると、優ちゃんは小さく頷いて寄ってくる。

「やっぱり湊先輩は兄さんのことが気になってるんですね」

「それは勿論だよ。総司くんが眠ったままだった今月初めの頃なんて生きた心地がしなかったし、変にペルソナの影響が残って多くのシャドウを呼び寄せることになった時だって、言っちゃ悪いと思うけれど今まで大型シャドウ戦以上に全力で取り組んだつもり」

「確かに意気込みが違いましたもんね。……じゃあ、この世界から戻った後から10月4日までの短い期間の間に何かがあったってことですよね」

「そう……だね」

私が相槌を打つと優ちゃんは黙り込んでしまった。優ちゃんたちの現在がある以上、総司くんの死は避けられないのだろうか。総司くんが死ななければ、優ちゃんはこんな女番長で女王さまな感じには育たないだろうし、何よりも八高メンバーの様子を見る限り総司くんと関わりのある人物が事件に大きく関与しているのは間違いがなさそうだし。

「そういうえば、さつきクマに『お仕置き』を実行してきたんですけれど、興味深いことを言っていたんですよ。聞きたいですか、湊先輩？」

「あはは。なんか不思議な感じだね、優ちゃん。年齢的には同じ年なのに、その呼び方がしっくりとくるよ。それで興味深いことって何かな？」

「兄さんと善とクマと完二の4人でダンジョンに入り浸って、レベル上げしていたみたいなんですよ。F・O・Eを狩ったり、第1の迷宮の女王がいた部屋の前に陣取っている大きなカブトムシを倒したりしているって」

「あれえ？それはちよつと聞き捨てならないんだけれど」

迷宮内では何が起こるか分からないから、もしも依頼とかで迷宮内に行くときは風花かりせちゃんやんのナビをつけるっていうのは暗黙の了解になっているはずなのに。私がぶくつと頬を膨らませていると優ちゃんが噴出して笑っていた。

「くすくす。湊先輩って、昔は明るい人なんだなって思っていたけれど、明るいんじゃない

くて子供っぽかったんですね」

「むう……。優ちゃんが大人しくなりすぎなんだよ」

「そうみたいです。……それと直人の推理が当たっていました。クマや完二を尋も……2人から聞きだした情報によれば、兄さんは迷宮に潜る前に言っていた12体の他にもペルソナを扱えるみたいです」

優ちゃんの口からまたまた物騒な言葉が聞こえてきたけれど、一端スルーする。だって、後者の方が一大事だ。

「ちなみに今は何体くらいいるって?」

「恐らく20数体かと。中にはかなり高レベルまで上げたものもあるみたいです。というかクマのレベルが私たちよりも10以上になっているって聞いたときはキグルミの中の本体に向かって刀をぶっ刺しました」

「うわあ……」

光景がありありと浮かび上がる。しかし困ったな。総司くんがそんなにも暴走かつ隠し事をしていているとは思ってもよらなかった。恐らく優ちゃんの話を書く際にポロリとクマくんが零した『無為自然』というスキルを使っているのだろうが、こういうのは現行犯で捕まえて説教しないと止めないだろう。何かいい方法はないものか、と私が悩んでいると再び屋上の扉が開く音がした。

「あれ？意外な組み合わせだ。結城先輩と優が並んで会話しているっていうことは……
わだかまりは解けたってことかな」

「まあ、そういうことかな」

総司くんは優ちゃんの返事を聞き、につこりと微笑んだ。そして、ゆつくりとした足取りで屋上の隅の方へ行くと持つてきていたダンボールを組み立て、おもむろに被る。その行為を無言で見っていた私たちに総司くんはダンボール越しに告げた。

「僕はここにはいません。……………」

総司くんの謎の行為に2人して首を傾げていると荒々しく屋上の扉が開け放たれた。そこに立っていたのは目を三角にして怒り狂うマリーちゃんとタラコ唇となった口元に手を当てる泣いているテオドアの2人。2人はキョロキョロと屋上を確認すると、踵を返して屋上から去って行った。

「……兄さん？」

「……悪気はなかったんだ。マーガレットさんに味の感想を聞いたら、『こんなもの誰でも作れる。もつと趣向を凝らしたものを持つてきなさい』って言われて、カツとなつて『ブート・ジョロキア』を使って作った激辛ゴマ団子を作つて渡したんだけど、何故かばれちゃつていてさっきの2人が犠牲に……」

私は『ブート・ジョロキア』という単語を聞いて首を傾げていたのだが、優ちゃんは

校舎に向かつて十字を切った。聞けば、優ちゃんたちの時代では有名な地球で最も辛い食べ物として認知されているらしい。

「というか、食べ物を粗末にするなっていう兄さんにしては珍しいね。大方、マーガレットの言い方はさっきのようなものじゃなくて、もつと頭に来るようなことを言われたってことかな」

「……」想像にお任せするよ」

そう言つてダンボールから出てきた総司くんは頬をポリポリと掻きながら私たちを見て言った。

「昔、僕が玲さんに会ったことがあるっていったら2人はどう思う？」

「へ？」

総司くんの口から飛び出した、思いもよらなかつた一言は私たちの思考と凍結させるのには十分過ぎるものだった。

ブーこんぎつさ編—⑧

屋上で優ちゃんと話をしていた時に、ほんの悪戯心から大変な事態を引き起こし逃げてきた総司くんの口から発せられた新事実は私たちの行動を凍りつかせるのには十分すぎるものだった。玲ちゃんと面識があるってことは、つまり……。

「なんてね」

「へっ？」

「さすがにそんな奇跡みたいな偶然ある訳ないじゃないですか。もしも会ったことがあったのなら、玲さんもすぐ僕に気付くはずでしょ？」

「……ちよつと、兄さん！」

「あはは、怖い鬼もいなくなつたことだし僕は行くよ」

そう言つて総司くんはダンボールを腋に抱えて屋上から去つていく。優ちゃんは冗談を言いながら去つていった兄の背中に向けて、大きくため息をついた後、私に向かつて苦笑いを向けてきた。酸いも甘いも経験して大人っぽくなつてしまった妹分の姿にちよつとした感動を覚えた。

その直後、校舎の方から『パシーン』という乾いた音が響き渡つた。私と優ちゃんの

2人は音の発生原因を知っているのでクスリと笑みを漏らすだけで、おしゃべりを続けたのだった。

□

ごーこんきつさの探索を再開することになったのだけれど、私たちの班の皆の視線は総司くんの左頬に集中していた。彼の左頬には見事な紅葉が浮かび上がっていたからである。私は優ちゃんに放っておいていいのかを尋ねたが、皆に事情を話してすつきりしたのか総司くんの所業によるものだから、ああなつて当然という反応だった。

「シーフー、大丈夫クマか？」

「うん。料理で悪戯するのは金輪際止めるよ。何より、せつかくテオドアさんから貰ったマリーさんのポエム集を本人に回収されちゃったのが大きいや。結構、面白いことも書いてあったのに」

「もう！人の黒歴史を掘り返さないの」

「はい」

周囲にいた皆が驚いた表情を浮かべた。総司くんは特に気にしていないようだが、今のやり取りは優ちゃんが総司くんを注意した形だ。今までは総司君から優ちゃんが窘

められることはあっても逆はなかったのに。つまり、優ちゃんはそれだけ成長しているっていうことなんだ。

「ところで『ブーこんきつさ』の3階層にいるF・O・Eに関してなんですけれど、こちらが奴らに対し正面を向いた状態で前後に動くと前進してきて、横向きやムーンウォークなら反応しないことが分かっています。そこでF・O・Eを動かして皆さんが通れるようにするのは僕と乾くんが担当するのぢよつと待っていて欲しいのですが」

総司くんの提案を向けられた美鶴先輩は少し考えた後に右手を突き出した。その行動の意図が読み取れなかった私たちは首を傾げる。

「鳴上、お前の提案は嬉しく思うが、第1の迷宮の謎解きでも君に任せきりだった。今回は私たちが主導で謎を解きたいと思う。我々がにっちもさっちもいなくなったら助けてくれ。山岸、明彦たちにもまずは自力で謎解きをさせるんだ。今回は男女別に分けられても通信で情報を相互交換することで問題なかったが、今後はどうなるか分からない。メンバーの1人ひとりが謎解きを今後のことも考えて、意識しなければならぬと思うんだ」

『なるほど……。分かりました。そのように伝えますね』

風花との通信が切れる。総司くんは美鶴先輩の発言を聞いて納得したのか大きく頷いた。そして、周囲を見て“善くんとクマくん”を連れて私たちの後ろへ下がった。天

田くと花村くんは私たちのところに取り残され、ぎよつとした表情を浮かべた。すぐに彼らの後を追おうとしたが、優ちゃんがそれを止める。

「ちよつとだけ待ってて、2人とも。兄さん、どうして善とクマの2人を連れて殿に行つたのかな？まるで後方から強敵が複数で襲い掛かってきても自分たちなら対処できるといわんばかりの行動だよ」

「え？いや、近くにいたのが善さんとクマさんだったからってだけで」

「残念ながら、総司さん。貴方の近くにいたのは天田くとクマくんであって、善さんは少し離れた位置に立っていました。残念ながら調べはついているんです。白状されてください」

「えつと……？」

総司くんは急に始まったこの展開についていけないよう目で目を白黒させている。それは私や優ちゃん、白鐘さんを除く面々も同じ事。白鐘さんは大きく深呼吸をした後、ビシッと総司くんを指差す。

「総司さん、貴方がクマくんや善さん、巽くんを連れて迷宮に入り浸りペルソナのレベル上げをしていることはすでに分かっています。加えて優さんや結城さんの常識が通用しないことも。証言者はプライバシーもあるので伏せさせてもらいますが、何か反論はありますか？」

白鐘さんの追及を受けて観念したのか、総司くんは乾いた笑い声を漏らしながら呟くように話し始める。

「まいったなあ、こんなにも早くばれちゃうなんて。さすが、水着審査が嫌で逃げ出しちゃったのにミスコンで優勝しちゃった名探偵な「つて、うわあああああ！なんで貴方が知っているんですか!!」ふっふっふ、証言者はプライバシーもあるので伏せさせてもらいます」

得られた事実を追求し追い詰めて後は罪を白状させるだけだったはずの容疑者にとんでもない秘密を暴露される名探偵なんて、新たなジャンルを開拓したね、白鐘さん。じゃなくて、ミスコンって何の話？

「クマ、陽介」

怒りを含んだ冷たい声で呼ばれた名前がフロアに響き渡る。

発声した当人は武器である刀を抜き放ち刃のところをツツと指を這わせる艶やかな妖しい笑みを浮かべている。ちなみに彼女の背後に浮かび上がるペルソナは両手に持っている血が滴る刀に舌を這わせているように見える。

そんな恐ろしい姿を見せるリーダーの姿を見て狼狽する八高メンバーの男子2人。

「ち、違うクマー!!」

「お、俺じゃねえ！俺じゃねえよ!!」

必死になって総司くんに話したのは自分ではないと主張する2人。信じてくれよと、優ちゃんの足元で懇願する2人を見て毒気が抜かれた優ちゃんであったが、刀を鞘に納めることなく私たちに近づいてきた。私と美鶴先輩は顔を見合わせる。

私が首を横に振れば、美鶴先輩も横に振る。当然だ、優ちゃんの学校でのイベントのことなんて分からないのだから。そう思っていたら、総司くんが更なる爆弾を投下した。

「修学旅行の2日目」

その場にいた八高メンバー全員の動きが止まる。通信を繋いだままにしていた久慈川さんの生唾をごくりと飲む音が聞こえてきた。

「クラブ『エスカ・ペイド』で王様ゲーム」

総司くんを見て話すのを止めさせようとするが、時すでに遅し。

「クマと完ちゃんが自爆した後に起きたのは、選ばれた2番と4番の舌を絡ませる大人のキス。それをしたのは誰と誰だ？」

「何で、総司がそれを知っているんだよっ！クマと完二は気絶したままだったから知らないはずぞー！しかも俺じゃねーってことは……え？」

花村くんの視線は優ちゃんと千枝ちゃんたちに向けられる。当然、優ちゃんは違うので残りは千枝ちゃんっていうことになるが、彼女もまた手と首を横に振って自分ではな

いと主張を繰り返す。しかし、意外なところから声が漏れ出てきた。

『あうう……そういえば私、お姉ちゃん……あつ!? なんでもないよ!』

「大人のキスといえば、優は結城先輩ともしているよね。その結城先輩に……」

総司くんはそう言い掛けて動きをピタツとまるで彫刻のように止めた。にこやかな笑みを浮かべていたその表情は見る見るうちに茹蟄のように真っ赤になって目はぐるぐると回りだす。

恐らく、総司くんの脳裏には皆で遊びに行ったプールで的一幕のことがリピートされていることだろう。事情を知らない八高メンバーの花村くんと千枝ちゃんが総司くんに声を掛けようとしたら、総司くんは急にその場から逃げ出すように駆け出した。

その先には黒い馬に跨った白い天使の姿をしたF・O・Eがいる。総司くんが向かって行くので当然、そのF・O・Eも近づいてくることになり接触してしまった。この場合、誰が悪いのかなと苦笑いしながら戦闘の準備をする私たちであったのだが、

「バレてるのならば仕方がありませんあ! 今こそ、クマの力を見せる時クマー!」

「玲、そこで待っている。あの『程度』、どうということはない。我々3人だけで十分だ」

自信満々の様子のクマくんと善くんがゆったりと武器を構えながら歩み出た。見れば総司くんと接触したF・O・Eはすでに赤色、青色、緑色の3色の鎖が身体に巻き付

いていて身動きが取れない上に状態異常でもがき苦しんでいる。そこにクマくと善くんが並び立つ。

「キントキドウジ、ブフーラクマア！」

「マインドリープ」

クマくんは自分のペルソナ能力である氷結属性のスキルを発動し、善くんは斬撃系のスキルを放つ。避けることも防御もできないF・O・Eは攻撃をモロに受けて床に倒れ込む。そこに総司くんの追撃が……入らない。どうしたのか彼を見ると、俯きながら呪文を呟くように何かを連呼している。

総司くんが何かを呟くたびに、彼のペルソナの身体が大きくなっていくように見える。何を呟いているのか気になった私が彼の声が聞こえる位置に移動すると、同じ言葉を繰り返していた。

「チャージチャージチャージチャージチャージチャージ……」

心なしか彼のペルソナが「もう無駄だぞ」と言っているような気がした。その直後、3色の鎖を引きちぎって立ち上がったF・O・Eを見て、総司くんは指差しながら心の叫びを言葉にする。

「無防備すぎるだろ寝巻きがノーブラTシャツって誘ってんのかよ夏祭りの後で火照った身体の半裸浴衣とかアホか殺す気か眩いばかりの白ビキニで迫ってくん大人のキ

スすんじゃねえよこつちが洗濯しているときにバスタオル一枚で出て来るな押し倒すのを何度我慢したと思つてイノセントタック!!」

『ドグシャアアアアア!!』

肥大化したペルソナに圧殺される形になったF・O・Eに対し幾分かすつきりした表情の総司くん。

そして、一緒にいる女性陣から極寒零度といわんばかりの冷たい視線が注がれる私。そんな私に優しく手を差し伸べてくれたのは、総司くんの妹である優ちゃん。

「2年前のこととはいえ、ギルティです」

「ですよー……」

その後、私は皆からすごくお仕置きされた。

ごーこんきつき編—⑨

総司くんを始めとした男子数人が私たちに隠れてレベル上げとお金稼ぎをするために迷宮内に入り浸っていた事実は白日の下に晒され、月高と八高含めて最年長かつ生徒会長という座に就いている美鶴先輩の逆鱗に触れた。巽くんやクマくんは彼女のあまりの迫力に腰を抜かしていたが、総司くんと善くんはケロリとしている辺り年齢にしては肝が座り過ぎである。

とりあえず、決まりを守らなかつた罰はごーこんきつきの攻略が済んだ後ということになったので相変わらず彼らは私たちの前で戦っている。実力を隠す必要がなくなつた総司くんは優ちゃんの調べや白鐘さんの分析通り、20数体のペルソナを使ってシャドウを翻弄し、自分たちが優位になるように立ち回る。

総司くんの場合、ペルソナに合わせて得意な武器や戦い方が変わるらしく、剣術を使う事もあれば真田先輩のようなボクシング、荒垣先輩のような防衛を捨てた攻撃など多種多様。けど、銃を片手にシャドウを跳び箱のように飛び越えたり、シャドウの群れのど真ん中でバレットダンスしたりするのは勘弁してもらいたい。そういうことに慣れていない私たちは絶叫に次ぐ絶叫で生きた心地がしないし。

そんなこんなで私たちは総司くんのスペックの高さに呆れつつも、エリザベスさんの依頼もこなしつつ迷宮の探索を進め最後の扉の前に立っていた。残っているのは私と総司くんと善くと玲ちゃんとの4人。私は相手が総司くんになるようにちゃんと質問の内容を聞いていたのだけれど、結局出るのは無く、善くと玲ちゃんはお互いのことを思いすぎて質問は無視状態だった。問題なのは総司くんである。

総司くんは以前の屋久島旅行の際に面識の無かったマリーちゃんの名前を挙げている。加えて彼女に対する接し方が優し過ぎる。マリーちゃんから総司くんはそうでもないけれど、総司くんからマリーちゃんに対する好感度が半年近く一緒に過ごしてきた私たち並に高い気がする。もしも、総司くんの運命の相手がマリーちゃんだった場合、私はどうすればいいのだろうか。応援？それとも……

「——先輩？……結城先輩！」

「わあっ!? え、何?」

見れば周りはお花畑で私の右手はしっかりと総司くんの左手とつながっている。近くには善くと玲ちゃんペアもおり、彼らの場合は善くんの右手と玲ちゃんの左手がしっかりとつながっている。これは私の運命の相手が総司くんってことでいいのだろうか。

「最後の扉に触った瞬間、床が開いて僕たちは落下したんです。気付いたら手は繋いで

いる状態で」

「リーダー。君が放心している間、玲と周囲を調べてみたが上の階層へ戻る階段はない。この道の先にある建物しか手がかりはなさそうだ」

善くんが左手で指差す先に何か建物らしきものが見えた。ちなみに玲ちゃんはその建物が何なのか想像がついている様子で頬を真っ赤に染めていやんいやんと身体をくねくねさせて喜びを体現しているように見える。

私はそつと総司くんと触れ合っている手に視線を向ける。総司くんは善くんと何やら話をしていて気付かない様子だが、私は内心で誓いなおす。ぽつと出のマリーちゃんに総司くんは渡さないよと。



善くんの言った道の先にある建物に向かう途中、大きなパネルに描かれた私たちの合成写真を見つけた。タキシードを着た善くん、ウエディングドレスを着た玲ちゃんがお姫さま抱っこされているものを見て、玲ちゃんは泣きながら喜んだ。善くんもまんざらでは無い様に見えるのは私の気のせいだろうか。

ちなみに私と総司くんのは配役が逆であった。総司くんのウエディングドレス姿が

妙に似合っていたので何とも言えない。

スキップするほど浮かれている玲ちゃん、善くんが連れて建物、美しい白い壁で作られた教会へと足を踏み入れる。私も総司くんと手を繋いだまま彼女らに続いて教会に入ってあまりの神々しさに言葉を失った。

教会の奥には光を透かして色鮮やかに浮かび上がるステンドグラスが嵌め込まれている。白い羽が等間隔ごとに降って来て、青い絨毯に華を添える。

結婚式を挙げるならやっぱり教会式だよねと心をウキウキさせる私を余所に総司くんは周囲が気になるのか目を配っている。

「何か気になることでもあるの?」

「ええ。たぶん、シャドウ……それもハートのクイーン並の奴がいます」

「ハートのつて……まさか! 善くん、玲ちゃん!」

私が声を掛けるのと教会の奥に居た宣教師が振り向くのはほぼ同時だった。

【祈りナ・サーイ……ヒヤツフウウウ】

私たちや玲ちゃんたちを歓迎するように“4本”の腕を大きく広げる宣教師は低い声で言葉を発し、天井付近に設置された鐘近くまで飛び上がるとガランガランと荒々しく鳴らして、私たちの前に振ってきた。大きく広げた腕の先の手にはそれぞれ聖書のような厚みの本が握られている。私は咄嗟に武器を取ろうとしたのだが、慌てるような声

と共に総司くんが近寄ってきた。そういえば、まだ私たちは手を繋いだままだ。

『やつとつながった！湊ちゃんたち、無事ですか……って、番人シャドウ!!』

『お姉ちゃんたちとはまだ連絡が取れないって言うのに、……解析するね!』

後方支援をしてくれる風花と久慈川さんの声が聞こえてくるが、通信が繋がったと思っただけに私たちが接敵していることに驚いたものすぐに気を取り直して解析してくれる。しかし、私たちは片手を封じられている。どうしたものかと私が悩んでいると声が響いた。

【誓いな・サーイ!病めるトキモー? H u u ! 健やかなるトキモー? H o o ! 神ノー? 御許へー? Y O U ・ S H A L L ・ D I E !!】

先ほどまで蕾開いた花のような満面の笑みを浮かべていた玲ちゃんは青い顔で首をふるふると小刻みに揺らし後ずさろうとする。

「つやだ……いこないでええええ!」

そんな玲ちゃんへと宣教師は手を伸ばし……

「善さん!」

「矢は充填済みだつ!」

教会内の空間を飛び交うのは今まで総司くんが使用していた刀と善くんが使っているクロスボウ。放物線を描いて飛んできたそれを手にした総司くんは狙いを定めて宣

教師の額をクロスボウで撃ち抜き、善くんは柄を左手で掴むと思い切り振って鞘を投げ飛ばすとその勢いのまま、玲ちゃんへと伸ばされた宣教師の手に突き刺した。

「結城先輩、ペルソナを！」

「うん、来て！オルフェウス、アギラオ！」

ホルダーから外した召喚器を米神につけて引き金を引く。現れた私のペルソナであるオルフェウスが琴を奏でると総司くんが放ったクロスボウの矢付近に火炎系スキルのアギラオが着弾し小規模だが爆発を起こした。

「グアアアア……」

4つの手で被弾した顔を押さえて私たちから距離を取る番人シャドウ。怖がる玲ちゃんに無理をさせる訳にはいかなないので私は総司くん目配せをした後、同じタイミングで走り出す。しかし、番人シャドウと私たちの間に複数の棺桶が降って来て接近を許さない。数ある棺桶の隙間の先で体勢を整えた番人シャドウが何かを言っている。

「——わないと誓いな・サーイ！」

「物理攻撃が無理なら、もう一発！オルフェウス、アギラオ！」

再び顕現したオルフェウスが火炎系の攻撃スキルを放ち、4本腕の宣教師に直撃する。しかし、先ほどと違って大したダメージが通っていないようで、宣教師の姿をした番人シャドウは腕を天高く上げつつ騒々しい大きな声で言う。

【導いてやる・子羊メーン！天罰デッドナウ……】

教会内に紫色の雲が発生したかと思うと、紫電が私目掛けて降り注ぐ。脳天から地面に向かって紫電が瞬く間も無く駆け抜ける。意識を一発で持っていられるほど強力な一撃に視界が霞んだのだが手を繋いだままの総司くんに支えられる。

私の迂闊な攻撃の所為で彼にも迷惑を掛けてしまった。申し訳なく思うと同時に自分の駄目さ加減に泣きそうになったのだが、唇に何かの感触があった直後、口腔内に液体が入り込んだ。甘くも苦い微妙な味ではあったが、今にも崩れ落ちそうだった身体が楽になった。

「……ど、どうやらアイツはこちらの行動を縛ることができるといいます。それを破ると今みたいなカウンター攻撃が飛んできますので気をつけてください」

「え……あ。う、うん」

総司くんの頬には朱が差し込んでいる。

私は無意識に左手で唇に触れる。熱い唇の感触が火花のように紫電に痺れたばかりの脳天を貫く。スキルの使用を封じられているから勿論回復スキルも使えない。だから、使える手段はアイテムだけなのだが、教会の床に転がっているのはエリザベス印の『ゲンキ一発！』と書かれたラベルの貼られた瓶のみ。

総司くんの右手は私の身体を支えるために使われて、霞む視界の中で唇に何か触れる

感覚……ふあああああああああ!!」

『湊ちゃんっ?!:どうしたのっ!!』

風花の私を心配する声が聞こえる気がするけれど、自分が総司くんにも口移しで回復アイテムを使われたんだって理解してしまった今、落ち着くことなんてできないってば!!しかし、嬉恥ずかしいことに現在の私は総司くんと手を繋いだ状態で逃げ場が無い。

意識すると駄目だっ!顔がにやけて身体が火照ってくる。緊張しているって、総司くんにはバレちゃう!今更な気がするけど!

「とりあえず、私の思いを全てぶつける!くらえ、ふあいやー!!」

ペルソナは当人の心の機微によつて発揮する力が変動する。気分が沈んでいれば威力は弱まるし、心が弾んでいれば余計な威力が発揮される。今の私のように。胴体が、赤く、なつたオルフェウスが力強く琴を奏すると番人シャドウを中心に焔の渦が巻き、教会の天井にある鐘をも巻き込んで立ち上つていく。ゴオオオオオ……火は勢いを増していく。

すると番人シャドウと私たちの間を阻んでいた棺桶のひとつも焼け落ち、中から何故か順平と雪子ちゃんとコロマルが出てきた。

「あつちいいいい!!」

「し、死ぬかと思つた……」

「きゅーん」

順平は教会内を走り回って身体を冷やそうとし、雪子ちゃんはコロマルと一緒に床でぐったりとしている。そうこうしていると火の渦は収まり、中から怒り狂った宣教師の番人シャドウが飛び出てきた。

【神に・逆らう・不屈き子羊！そんな・奴には・誓ってもら『サクツ』ouch！】

「また額に命なか。筋がいいぞ、総司」

「あははは……」

クロスボウを構えた総司くんが善くんに褒められている。善くんの傍にはちゃんと幾分か落ち着いた玲ちゃん姿もある。

【神の祝福アースー！】

宣教師の番人シャドウはくるくる回って、本の中身が赤色と緑色の聖書っぽいものを差し出しながら告げる。

【ワタシを殴らないと誓いな・サーイー！えばらないと誓いな・サーイー！】

「とりあえず、順平さんたちは本体に炎系のスキル攻撃。結城先輩は氷系の、善さんは雷系の全体攻撃スキルを棺桶にぶつけてください。僕は風系のスキルを使います」

「なるほど、番人シャドウの前に置かれた棺桶の中身はここにはいない仲間たちという訳か」

「でもちよつと待つて。順平、私の放ったスキルでダメージ受けてる？」

善くと総司くんがきな臭い会話を平然とするので身震いをした私は咄嗟に召喚器を使おうとしていた順平に話を振った。すると、彼は非常に嫌そうな表情で返答する。

『『受けてる?』』つて、可愛い子ぶるなー!ヘルメスで耐性持つていてもやばかったつーの!」

順平と雪子ちゃんがジと目で私を見てくる。ということとは、棺桶はあくまで皆の行動を戒めるための枷でしかなく、ダメージ判定はあくまで本体のみである……と。

「総司くん、……皆が死んじやうから作戦を変更しようか。ほら、やる気むんむんのクラマテングはしまいなさい」

そんな悠長にしていられるほど余裕はないですよクラマテングのペルソナカードを懐に入れなおしながら言う総司くんの視線に耐えつつ、皆を出来るだけ無傷に近い形で救い出すことができるように考える。そんな私の気苦労も知らずに……

「閃雷」

残っていた棺桶全部に小さな雷撃が降り注いだ。下手人は善くん。

複数あった棺桶のひとつが砕け散り、中から真田先輩と優ちゃんと巽くんの3人が出てきた。3人は蒸された上に感電したようで時折ビクビクと振動している。これはゆかりがやばいなと私は内心、冷や汗が止まらない。

「総司のペルソナが強力で危険であるならば、私なら問題はないだろう、リーダー？」
いえ、問題大有りです。



宣教師の格好をした番人シャドウを倒すのは奴の言う『誓いな・サーイ』のルールに従えば、全員揃った私たちの敵ではなかった。むしろ、私たちの攻撃で死に掛ける羽目になった仲間たちに申し訳ない気持ちになる戦いだっただけ。

それぞれの属性攻撃スキルを受けないと割れない棺桶ということで私と総司くんと善くんで手分けして当てるっていうことも出来たのだが、私以外の2人はレベル上げ済みで味方を助ける為の攻撃スキルが恐ろしい威力を内包していそうなので結局、サブペルソナを使い分けつつ私だけで破壊することになった。その間、総司くんはクロスボウで番人シャドウを攻撃し、善くんは棺桶から解放された仲間と一緒に攻撃に参加したり、玲ちゃんも回復スキルを使ったりして危なげなく倒したのである。

「うわあつ……兄さんのクラマテング、疾風ブースター”に疾風ハイブースター”の重ね掛けしてある……ってことはあの時、善じやなくて兄さんがマハガルーラを先に放っていたら、私たちは一発で気絶コースだったっていう訳か。湊先輩、ナイスプレイ

!

優ちゃんは総司くんが呼び出そうとしていたクラマテングのスペックに戦慄しつつ、私にサムズアップしてくる。内容が分からなかった面々が彼女から詳しい説明を聞いて、驚愕の表情を浮かべながら総司くんを凝視している。

「リーダー、もうそろそろいいか？」

「ああ、うん。待たせてごめんね、善くん」

教会の奥に設置された宝箱に近づくと善くん。玲ちゃんは俯きがちに震えていたが、善くんが宝箱に触れようとした瞬間に声を絞り出すように静止の声を上げた。しかし、善くんは一度手を止めただけで、意を決するように宝箱を開け放つ。

宝箱の中にあつたのは赤い宝石のようなものがついた指輪だった。しかし、玲ちゃんはそのを忌まわしいもののように睨み付けて払いのける。指輪は教会の床を転がって総司くんの足元に。それを拾い上げて掌に乗せた総司くんの下に集まる面々。その時、遙か彼方から鐘の音が聞こえてくる。

「(ト)のじゃ……ないってことは」

白鐘さんが天井を見上げながら言う。そういえばこの教会には天井に鐘が設置してあつたつくと見上げれば、煤で真っ黒になつてしまつた鐘のようなものが鎮座している。そういう私が番人シャドウごと燃やしてしまつたんだつて、と冷や汗を掻いている

と鐘の音が止む。そして感情的に指輪を振り払った玲ちゃんは青い顔をしながら、善くに指輪を払ったことを謝る。善くんも少し困惑しながら、玲ちゃんを気遣っている。

「善さん、これ」

そんな2人に近づいて善くんに拾い上げた指輪を渡す総司くん。彼が手渡した指輪はおもちゃの指輪であった。千枝ちゃんや雪子ちゃんも昔持っていたと話す。宝物だったと。玲ちゃんのあんな姿を見た直後であったため、会話が盛り上がることはなかった。そんな中、話題を変えるように荒垣先輩が善くんを声をかけた。

「で、善。何か思い出したか？」

「ああ……。私はこの世界で何かを探していた。玲が、泣いたからだ。……だが私にはその『何か』が見つけれなかった」

その時の悔しさを思い出したのか善くんは唇を噛み締めるように眩き拳を握り締める。そんな善くんを見て、玲ちゃんもまた何かを言いたそうにしているが口を噤んだまま、また俯いてしまう。ふと総司くんに手渡れたおもちゃの指輪に視線を落とした善くんが口を開こうとしたのだが、

「とりあえず、一度ヤソガミコウコウに戻りましょうよ。善さんや玲さんの記憶の混濁とかもあるだろうし、何よりお腹が空きました」

あつけらかんとした場違いな総司くんの一言で順平と花村くんがずっこけた。厳し

い表情を浮かべていた美鶴先輩たちも肩の力が抜けたようでもそれもそうかと頷く。

シリアスな空気はどこに行ったのかと私も深く溜息をついていると、総司くんがさつと善くんに近づいて声をかけていた。そして、何かを会話して善くんからおもちやの指輪を預かる姿を何となく見続けるのだった。

幕間—⑦

皆で決めた迷宮への立ち入りのルールを破ってレベル上げと資金稼ぎをしていたメンバーの主犯である総司くんに課せられた罰は、彼が扱うペルソナの力が封ぜられたカードの没収である。

特別課外活動部に所属する私たちは召喚器を使う事で自在にペルソナを召喚できる。

花村くんたち八高のメンバーは自分のペルソナが決まっているので特に発動には問題ないが、優ちゃんと総司くんの場合はペルソナの力が封じられたカードを握りつぶすという工程を挟まないとペルソナチェンジが出来ないのである。

「金色の縁のカードは無理みたいだけど……」

美鶴先輩の命で総司くんのペルソナカードは私と優ちゃん管理することになったのだけれど、カードには2種類あることが分かった。

カードの縁が黒い物と金色の物だ。そのカードの縁が黒い物を手にした優ちゃんがおもむろにカードを握りつぶすと、総司くんのペルソナカードであるにも関わらず、優ちゃんのサブペルソナカードとして扱うことが出来たのである。ただし、「使用後」は本人の手元に戻るようで困惑した表情の総司くんがカードを届けに来た。

ちなみに『無為自然』という“使用した本人を他人に認識させなくする”スキルを持つ『ぬらりひよん』は金色の縁のカードで私たちでは扱うことが出来ない。

「ところで美鶴先輩。総司くんのこの罰はいつまで継続するんですか？」

「次の迷宮に挑むまでの間だ。少なくともホラー要素に動じない胆力を持つ鳴上をメンバーから外すというのは得策ではない」

「私もグロ系は苦手だからなあ……。兄さんは嬉々として向かっていくタイプだし」

そう第二の迷宮であつたごーこんきつさの番人シャドウを倒して戻ってきた私たちはベルベットルームにある巨大な扉を封じていた鍵のひとつが弾け飛ぶのを確認した。そして、私たちが帰ってくるまでの短い間に風花たちが次の迷宮を探しておいてくれたのである。

ただし、その第三の迷宮というのが『放課後悪霊クラブ』という名前の出し物が元になつているといってお化け屋敷系であつたのだ。それを聞いていた千枝ちゃんとうかりの表情が凍りついたのは言うまでも無い。それと対照的であつたのが天田くんと総司くんの2人であつたのだ。

「第一の迷宮も第二の迷宮もかなり大げさになつていたから、次の迷宮もきつと絶叫して気絶してしまうような仕掛けがきつと待っていますね」

「なんで嬉しそうに言うかなあ……」

コロコロと鈴が転がるように笑う優ちゃんにちよつと引き気味の私と美鶴先輩。だつてと前置きした優ちゃんは携帯電話を操作して、件の「幽霊さん」の画像を取り出した。

「私は兄さんに連れられて小さい頃からこういう体験をしているから、ホラー系とかはあんまり怖くないですよ。だから怖がっている人を見ると、もう少しいいじめ……リアクションを見れるように立ち回りたいなあと思っただけで」

「優ちゃん、本音ががっちり聞こえたよ」

苦笑いを浮かべる私たちの前で優ちゃんはへつと舌を出して笑う。私たちの知る天真爛漫の中学生の優ちゃんの姿がダブって見える。その姿に安心した美鶴先輩であったが、これから私たちを待ち受ける難関の前に遠い目をしながら学校の外を眺めるのであった。



第二の迷宮をクリアした俺たちは現在、医務室にいるエリザベスさんが統括している依頼をこなしつつ、装備を充実させるために第一と第二の迷宮を駆けずり回って素材やアイテムを集めている。そんな中、相棒の双子の兄でこの世界では年下となっている総

司の姿が目に入った。

月高のリーダーや相棒が決めたルールを破ってクマたちを連れてレベル上げをしていた話は俺も聞いている。どうして声を掛けてくれなかったんだと思ったのだが、よく考えれば俺は相棒から過去の話を聞くまで、総司とはあまり関わらないようにしていた。

むしろ、この世界に来てからずっと精神的に不安定になっていた相棒にばかり気を取られて……。

そんな相棒も俺たちに全てを曝け出したことによつて、気を取り直している。まだまだ不安定なところもあるだろうが、この不思議な世界から出る頃には今までの相棒とは違う、一回り大きく強くなった姿を見ることができだろう。しかし、その時の俺はどうだろうと考えるようになった。

相棒が成長しているのに、俺が成長しないでどうするつもりか意気込んだところでどうにもなるわけではないが何もしていないよりはと考えている時、ヤソガミコウコウ内を散策する総司の姿を見つけた。

「よつ、総司。こんなところで何をしているんだ？」

「花村先輩？」

「なんだよ、相棒の双子ってことは元の世界じゃ同い年ってことだろ？ 陽介でいいって」

「うん、分かりまし……。いや、分かったよ、陽介」

総司は手に持っていた『ヤソガミコウコウ生徒会主催宝探しマップ』というものを見せてくれた。問題を解くことで座標が表示されるようになり、宝箱を開けることでアイテムを手に入れられるアクティビティに参加しているらしい。

「これならペルソナがなくても参加できるしね。あ、そうだ。さつきこんなのを手に入れたんだ」

そう言つて総司がズボンのポケットから取り出して俺に手渡してくれたのは手の平サイズの黄金に輝く恵比寿像だった。手に持った瞬間にジライヤのステータスで目に見えて低い運が大分アップしたような気がする。

「クマにも聞いたんだけどよ、総司つて知らないはずの俺たちのことを良く分かっているんだな……」

「そうだね、完ちゃんやちえきちたちは幼少の頃から知っているし、この世界で初めて会う陽介やクマさんのことをしっかりと見れているからかな」

「はあ……マジで俺たちの時代に何故総司はいなんだ。居てくれたら、俺の苦勞を分かってくれればいい関係になれたと思うのによ」

「あははは。そういう風に言っているけれど、実のところは苦ではないでしょ？しょうがないと思いつつ、皆のフォローをしてくれる陽介に優たちもきつと頼りにしている部

分があると思うよ」

「そうだといいがな……っっていうかマジでウチのメンバーにも総司が欲しいわー」

俺の気苦労を察して慰めというか元気をくれる声掛けしてくれる総司の言葉に、涙腺が刺激を受けて不意に泣きそうになった。そうこうしているとフードコートについた。総司の目的地なのかと周囲を見渡すと、相棒が月高のリーダーやマリィを初めとした女性陣とお茶会をしていた。そして、給仕係りに任命されたのか完二とクマが女性陣からキツイ駄目出しを受けつつ、肩で息をしながらがつくりと項垂れている。

「あれって……」

「エリザベスさんの依頼の中に『私も遊びたい』っていう項目があったと思う。たぶんマリィさんからの依頼じゃないかな」

「とりあえず、別のところに行かないか？下手に近づくと……」

「もう遅いよ、クマさんが「シーフ〜！助けてクマー〜!!」走ってくるし」

「マジかよ！目聡過ぎるだろ、クマ!!」

クマの狙いは俺ではなく総司だったようで俺はおまけ扱いで女子会が開催されているところについてくることになった。

美人系、クール系、可愛い系、天然系、アイドル系と多種多様な女性陣が集まって行う女子会。何の会話がなされているのか分からないが、か弱い男でしかない俺らにとつ

ては厄介極まりない。クマや完二に取りに行かせるのに注文する内容をコロコロ変える。

面倒くせーと思っている俺の横で女性陣の注文を聞き終えた総司が完二とクマに指示を出し、テキパキと捌いていく。いつの間にか女性陣の飲み物の甘さ苦さの好みまで把握した総司の自信に満ち溢れた的確な指示によって、いつもではありえない動きを發揮する完二とクマの回転数だけが上がっていく。

女子会の給仕係という仕事を追えた彼らに与えられた報酬は女子会に参加していたメンバーに頭を撫でられるだけであつたが、2人は奇声を上げて喜んでいたのでこれはこれでいいのだろう。

「ちよつと待つてて、陽介」

背中合わせに座り込んでいる完二とクマの横にキンキンに冷えたジュースを置いて戻ってきた総司はおもむろに俺にそう言うのと、女子会が行われていた机の下に潜り込んでいった。そして、しばらくすると大きな宝箱を抱えて戻ってくる。

「こんなでけーのが足元にあつたのに、相棒たちは気付かなかつたのか？」

「うーん。どうも僕のぬらりひよんが使うスキルと同じような効果が宝箱に掛かっているみたいで皆は認識できていないみたいなんだ。その効果が切れるのが」

「宝探しマップの問題を解いた人間が近づいた瞬間ってことか」

「そういうこと。やっぱり陽介は察しいね。元の世界に戻ってもリーダーの優や探偵の白鐘先輩に引け目を感じることなく、自分が思っていることを積極的に発言した方がいいと思うよ。ただし、調子に乗っているときの発言は要注意だけどね」

「耳が痛くなることをさりとて言うなあ。でも少し、意識してみるよ。ありがとな、総司」

そんな会話をしながら総司は手に入れた大きな宝箱を開けた。

中に入っていたのは縁が赤色のペルソナカードが1枚だけ。

大きさに見合っていないかと思いつながら総司が手にしたカードの絵柄を見てびっくり。ペルソナカードに描かれていたのは俺と眼鏡を掛けて少し大人びた姿となった総司が背中合わせになって互いに双剣を構える姿。その下に『衝破疾風迅』というスキル名が書かれている。

「おおー………何これ?」

首を傾げる総司の横で俺はジライヤのステータスを思い浮かべる。すると条件付であるが総司と同時攻撃が出来るようになっていた。ジライヤによれば俺が『陣風撃』を使用して、総司が『疾風系の攻撃スキル』を使うと発動し、場全体の敵に疾風属性の物理攻撃をした後で強制的にダウンさせる強力な攻撃のようだ。

俺は咄嗟に総司の肩を組んで引き寄せると、フードコートに設置されている屋台に向

かつて歩いていく。

「つしやー！総司、このことは2人の秘密な！きつとこれを使う場面がきつと来るはずだからさ、その時の演出を考えようぜ！」

「ええー!?ペルソナカードは全部出せって言われているから結城先輩たちに秘密にするのはちよつと勘弁して欲しいんだけど……」

「固いことは言うなつて、大体これは俺たちのコンビ技であつてペルソナカードじゃないんだから大丈夫だつて」

「そ、それもそう……かな？」

とりあえず渋つていた総司の説得は済んだので、たこ焼きや焼きそばを購入した俺らは屋上に行つて台詞を考える。よくよく考えれば八高のメンバーはほとんどが女子であり、後輩の完二もまたこういういった馬鹿話をする相手でもなかったので、結構盛り上がったと思う。悩んでいるような表情を浮かべていた総司もまた、終盤にはノリノリで演出の練習をしていたし。

それだけにやはり、元の世界に総司がいないつていう事実が俺に重く押し掛かる。

憧れを抱いていた小西先輩の死を目の当たりにした時とは違う、この言い表すことの出来ない気持ちに蓋をするように俺は笑顔を作り総司に接し続ける。月高の人たちが過去を変えて総司を生き永らえさせてくれることを願いながら。



総司さんに聞きたいことがあったので優さんたちに誘われて参加した女子会の後、花村先輩と行動を共にする彼の後を追って屋上に行くと2人で何かの予行練習をしていた。

「行くぜっ!」

「逃がさない!」

「衝破疾風迅っ!!」

「あの2人とも……何をしているんですか?」

「ふあっ!」

待てども待てども終わらないので扉を開けて2人に声を掛けると飛び上がるようにして驚く。花村先輩は動悸がするのかわ手で心臓を押さえ、総司さんの方はすでに落ちて着きを取り戻している。

「なんだ、直人かよ」

「お疲れさまです、白鐘先輩」

「いえ、突然すみません。総司さんにお尋ねしたいことがあって待っていたのですが終

わる気配がないので声を掛けさせてもらいました」

「……はい？何でしょうか」

花村先輩から席を外した方がいいかという目配せがあったものの僕は首を横に振った。花村先輩にも聞いていてもらいたいから。

「聞きたいことというのは久保美津夫という方のことです。総司さんには辛い話になりますがよろしいでしょうか？」

「美津夫がどうかしたんですか？」

当然、総司さんが尋ね返してくる。彼の隣にいる花村先輩の表情が曇ったけれど、僕の話に口を挟んでくる様子はない。

「久保美津夫は僕たちの世界で起きた殺人事件を模倣して、とある男性を殺した犯人なんです」

「……。詳しい話を聞かせてください」

暫く間を置いた後、総司さんは真剣な眼差しを僕や花村先輩に向けてくる。

僕は知り得る情報を花村先輩の補足を付け加えながら説明する。マヨナカテレビの噂、花村先輩の憧れの女性・小西沙紀さんの死、テレビの中に入るといふ特殊な現象、テレビの中の異世界に蔓延る怪物、テレビで有名になった人を狙った誘拐拉致監禁。優さんをはじめとする特別捜査隊の活躍でテレビの中に入れられた人の救出が続いて安堵

した矢先、死者が出たこと。その犯人が久保美津夫であったこと。ただ今までのやり方と違うこともあって不審に思った僕が態とテレビで有名になった後、同様の手口でまた事件が起き、真犯人は別に居ることが分かっていること。少し簡略化した説明であったが、すべてを総司さんに伝えた。

「その陽介たちの担任を殺したのが美津夫だってことは分かった。虫を殺すのも躊躇うあいつがそんなことをするとは思えないけれど。ところで聞きたいことがあるんだけれどいいかな？」

僕たちの話をじっくりと聞いた総司さんが質問をしてくる。僕はどんな質問が来てもいいように深呼吸してまっすぐ総司さんを見据える。

「何でしょう?」

「優の下に届いたという脅迫状の内容は分かりますか?」

「脅迫状の内容……ですか。確か……」

『『コレイジヨウ タスケルナ』ってカタカナで書かれていたはずだぜ』

僕が答える前に花村さんが言葉を挟む。今までテレビに入れて勝手に死ぬのを傍観するだけであった犯人が邪魔をされていることに気付き、特別捜査隊のリーダーである優さんに間接的に接触してきた瞬間の証拠物品である。僕も仲間に入っただけのことだったから、よく覚えている。

「第2の被害者である小西さんが4月の中旬に亡くなってから、美津夫が殺した教師を除くと10月まで傍観していた犯人がいきなり行動を起こしたっていうのは違和感があるよね。しかも、特別捜査隊を率いている優をピンポイントで特定しているし、誘拐した人を殺すのが目的ならば、救助された後も狙うのが普通でしょ？つまり、犯人の狙いは殺すことではなく、あくまで有名になってマヨナカテレビに映った人をテレビに入れること」

「ちよつと待つてくれ、総司。小西先輩や山野アナは実際に死んでいるんだ。テレビに入れただけで殺すつもりがなかったとは言わせな」

少し感情的になって身を乗り出してきた花村先輩に待ったを掛けたのは僕ではなく総司さん。

「陽介、僕が言いたいのはそうじゃない。どうして、優や真犯人のようにテレビに干渉できる力を持つ人間が他にいないと決め付けているんだと言っているんだ」

「……………は？」

総司さんの指摘は正に僕や花村先輩には青天の霹靂だった。確かにこれまでの捜査で犯人が僕たちと同じペルソナ使いであることは確実である。かといって他にも同じ能力を持った人間がいらないとは言い切れないのに、僕はその可能性を切り捨てていた。

「僕はその山野アナと小西さんの事件と、ゆつきーや完ちゃんたちが狙われた事件はそ

れぞれ違った犯人によるものだと思う。脅迫状もたぶんだけど山野アナと小西さんを殺した犯人が傍観の立場でいることに飽きたから優たちを困惑させるために送りつけてきた、いやポストに投函したものと考えられる。陽介や白鐘先輩はどう思いますか？」

総司さんが提示した可能性の話に過ぎない考察を聞いて僕の身体は久しぶりに身体の奥底から震えた。花村先輩もまた感情的なつてぶつけた言葉に考えもしなかったような切り返しをされて目を見開き、拳をぎゅつと握り締めて僕らに背中を向けた直後、大声で叫んだ。

「なんで俺らの世界に総司がいないんだよー！！」

キョトンと目を丸くしている総司さんの姿を見ながら、僕もうんうんと花村先輩の意見に肯定するように大きく頷く。

この話は特別捜査隊のメンバー全員が認識しておく必要があるものと花村先輩と確信した僕たちは必ず場を設けることを誓うのだった。

幕間—⑧

総司くんがレベル上げによく倒していた金色のカブトムシを倒しに第一の迷宮である『不思議の国のアナタ』の最奥へとやってきた私たちは番人シャドウよりは弱いだろうと高をくくり挑み、物の見事に返り討ちにあった。雷属性が弱点であったが、中々ダウンせず、金色のカブトムシの攻撃は一撃必殺級の威力を持ち、定期的に全体に毒攻撃をしてくる強敵であったのだ。

「久々に痛い目にあつたねー」

「弱点をついてもダウンしないため、総攻撃によるダメージは諦めた方がいいであります」

「総司はあいつをクマとだけで倒している。何らかの方法があるはずだぜ」

多種多様のペルソナを扱える総司くんは当初、仲良くなったクマくと2人だけで迷宮に潜っていた。ありとあらゆるFOEと戦い、倒しても復活する金色のカブトムシと戦って経験地を稼いでいたという。そんな総司くんのやり方に危機感を覚えたクマくんが異くんを巻き込み、善くんは総司くんの危うさに気付いて自ら参加した。

「なあ、総司が時々使用している3色の鎖による拘束は俺たちには使えないのか？」

フードコートでの会議なので出店で購入してきたのか、たこ焼きを頬張っている真田先輩がふと思いついたように質問を投げかけてきた。その場にいた私たちの脳裏に赤・青・緑の鎖を使って敵を封じ込める総司くんの姿が思い浮ぶ。

「スキル名が『ナイアーム』、『マカジャマ』、『スケアスロウ』の3つのことですね。元の世界で総司さんが僕に作ってくれた銃の特別弾と同じ名前です」

「……ああ。あの『死神』の時の物か」

「総司がそのスキルを使う度『どつかで見た覚えがあんなあ』って思ってたら天田少年の戦う姿をはじめて見たあの時の起死回生の一手か」

天田くんが嬉しそうに手振りを付け加えながら笑みを浮かべてそう言うと、荒垣先輩が疲れたような表情を浮かべて肩を竦める。それを聞いて順平が発言するとゆかりも納得するように『ぼん』と手を打って頷く。

「そういうえば、姿を見た瞬間に『私たち死ぬんだ』って本能で感じるような相手が、あの鎖を巻かれたことで普通のシャドウと変わらなくらいの気配に弱体化するくらいだもん。そりゃあ、F・O・Eいえども抗えないよね」

「となると、我々もその効力を持つ攻撃スキルを積極的に使っていく必要があるだろう……って、八高の彼らはどこに行っただ？」

「さつき、花村さんと白鐘さんが、八十稲羽市で起きている連続殺人事件について重要な

話があるって連れて行っちゃいましたからね」

美鶴先輩が総括を述べた後、肩をすくめながら八高メンバーの不在のことを呟くと風花が苦笑いしながら答えた。そう、この場に優ちゃんたちの姿はない。丁度善くんも玲ちゃんも席を外しているため、奇しくも月高メンバーだけが残っている状態なのである。

「……彼らのいる未来において影時間は無くなっているのが分かっているとはいえ、我々も話し合いが必要なのではないかと思うのだが」

「いや、でもそれは……」

少し間を置いた後、美鶴先輩が呟くように切り出した話題に反応を示した私たちの様子を見て、荒垣先輩と天田くんの2人が首を傾げた。

「何の話なんですか、皆さん？」

「……俺と天田だけが知らない話みたいだな。どういうことだ、アキ」

凭れ掛かっていた壁際から離れた荒垣先輩はまっすぐ真田先輩のいる場所に向かい彼の胸倉を掴みあげた。自分を掴む腕を振り払った真田先輩はベストを調べるとひとつ溜息を吐いた後、荒垣先輩をじつと見つめながら口を開いた。

「……。これは起こりえる可能性のひとつだという前置きをした上で話す。シンジ、お前。自分が死んだ時、どれくらいの間が悲しむと思う？」

「なんだ、藪から棒に」

「少なくともここにいる全員は悲しむし、その引き金を引くことになった奴もいらぬことを抱え込むことになる。この際だが言つて置くが、ここに居る全員がお前と天田の確執を知っている。天田が母親の仇を取ろうとしていることも、お前がその敵討ちに殉じて死のうとしていることもな」

「なっ……」

「どういうことですか!？」

真田先輩のはつきりとした物言いは時として鋭利な刃物となる。確かに天田くんのお母さんの命を奪つたのは、タルタロスの外に現れたシャドウを討伐するために向かつた荒垣先輩のペルソナが暴走したことによつて起きた事故であつた。母子家庭で育つた天田くんにとつてお母さんを失うつてことはとつてもないショックな出来事であつただろう。復讐したい気持ちも分からないでもない。けれど……

「これはお前たちの問題だ。ただ、俺はお前たちに命を奪い合うような選択はして欲しくない。天田に母親の復讐を諦めろと言つてもりはない。だが、シンジは生きることから逃げるな。天田が復讐を果たした時、こいつの生きる目的が無くなつてしまふ。新たな目標を見つけるにしても、こいつは幼過ぎるだろ！」

「お前らには関係ない話だ。これは俺と天田の問題で」

「私たちは仲間ではないのか、荒垣？」

「……桐条？」

自分の思いをまつすぐぶつけてくる真田先輩から逃れるように私たち全員に告げるように言う荒垣先輩であったが、美鶴先輩が落ち着いた声色で話しかけたことよって彼もまた冷静になったようだ。何かを言いたそうにしている天田くんもまた席に座りなおす。

「成長した優から未来に影時間は残っていないという話を聞いて喜んだ私に言うべき資格はないのかもしれないが、自分の悩みが自分だけのものと考えるのは止せ、荒垣。明彦も言ったが、お前が死んで悲しまないものがいると思っているのか？ そんな非情な人間の集まりなのか、私たちは」

荒垣先輩は美鶴先輩に向けていた視線を逸らす。彼女はそのまま天田くん視線を向ける。

「天田、私たちは確かにお前たちのことを知ろうともしなかったし、力になろうともしなかった。誰かの言われるままに、何も考えずに突き進んだ結果が、あんなにも変わり果ててしまった優の痛々しい姿だった。私たちに対して敵意を剥き出しにして、総司に縋りつき甘えるあの姿」

「でも、今では……『僕たち』の知る優さんの姿ですよ」

天田くんが恐る恐る言うのと美鶴先輩は大きく頷いた。そして、言葉を紡ぐ。

「10月4日、荒垣にとつても天田にとつても因縁の日だな。元の世界では巨大シャドウが現れる満月の日でもある。優が経験した過去の世界では『お前たちが争う場にストレガの2人が現れ危機に陥ったが、明彦を始めとした私たちが現場に駆けつけるのが間に合い、幸いにも命に支障を来すような重傷を負う事はなかった』」

「……それじゃあ、別に僕たちのことは放っておいてくれても」

「話には続きがある。影時間が終わって荒垣や天田が無事な姿でいることに安堵した私たちに理事長からとある一報が入る。優の兄である総司がアイギスと共に巨大シャドウと戦闘を行い、剛毅のシャドウと相討ちになつて死亡したこと。ぼろぼろになつた彼の遺体を目の当たりにした優のペルソナが暴走し、巖戸台駅前広場を破壊したことが」

誰かの息を呑む音が聞こえるほど、私たちがいる一角は静まり返つた。

優ちゃんが私たちに告げた時は、彼女自身の感情が入り混じつていたので優ちゃん自身を氣遣う気持ちが大きかったが、今回は話を聞いた美鶴先輩が客観的に聞いたことを自分たちの現状を踏まえた上で述べているため、結構シヨックが大きい。ゆかりと順平は優ちゃんの異変に氣付いて一緒に向かつているからどうとは言えないけれど、私はきつと混乱して取り乱すだろうな。「悪い冗談はよして下さい」って言っちゃうかも。でない、事実を事実として受け入れることなんて不可能だと思ふから。

「桐条、その話は本当のことなのか？総司はペルソナを使えない、影時間だって……っ
!?!」

「まさか、この世界に総司さんがいること事態がその未来に行き着く証明だっていうんですか!?!」

自分たちのいざこざが総司くんの死に繋がると聞いた荒垣先輩たちは疑問をぶつけようとしたが、何かに気付いたのか押し黙った。

私たちにとって総司くんが影時間に適性が無くて棺桶のようなモニユメントになることは当たり前だ。しかし、彼がペルソナ使いとなったのなら話は別である。私たちは総司くんが無為自然というスキルを使って、誰にも知られること無くレベル上げや資金稼ぎを行っていたことを知っている。それを応用すれば、元の世界で影時間内に総司くんが活動していても気にも留めない可能性がある。

天田くんが荒垣先輩に対して復讐する気持ちは背景を知っているから分からないでもない。けれど、総司くんがアイギスと2人だけで巨大シャドウに挑む理由や背景が私たちには分からない。私は皆にこの世界に来た頃にエリザベスさんから告げられた話をすることにした。

「このことは黙っていようと思っていたんだけど、私だけじゃどうすればいいのか分からない。だから協力をして欲しいの」

私はそう言って、総司くんのアルカナが「逆位置」の『世界』であること。そこから考えられる総司くんの行動原理に関して話した。『何か避けられない運命を変える為に、自らの命を終わらせ、その人生を捧げる覚悟を持って行動している』ことを。

「……何それ。たった15歳の男の子が考えるようなことじゃないじゃない!」

「いくら総司が大人びているとはいえ、さすがにそれはおかしくないか?」

「我々は、何か重要なことを見落としているのではないか?」

私がエリザベスさんに聞いた話だけであつたのなら、考え過ぎじゃないのかつていう話になつていたと思う。だけれど、実際に総司くんが死んでいることが優ちゃんの口から話された後であるため、皆が受けた衝撃が大きかつた。中でも天田くんは総司くんのことを本当の兄弟のように慕っているため、涙目で俯いている。しかも、総司くんの死に少なからず自分が絡むことになっていると知ればなおさらだと思う。

「どうして、アイちゃんだつたんでしようか?」

「風花?」

「どうして、総司くんはリーダーの湊ちゃんでも、仲の良い順平くんでもなく、アイちゃんを相棒に選んだんでしようか? 荒垣先輩と天田くんの確執を知る真田先輩は無理だつたとしても、打倒巨大シャドウを掲げる桐条先輩やゆかりちゃんといったメンバーいたにも関わらず。まるでアイちゃんにはシャドウと戦う他になんらかの能力がある

みたい」

風花の言葉を聞いてその場に居た全員の視線が静かに佇むアイギスに向けられる。しかし……

「私にも分からないであります。どうして、未来の総司さんが私を選び、私自身が皆さんに黙って総司さんと共に戦う手段を選んだのか、全く見当がつかないであります」

「それもそっか……。ごめんね、アイちゃん」

「……いえ。私も何か思い出したら、皆さんにいの一番に伝えるようにします」

風花とアイギスのやり取りを見ていた皆に目配せをすると頷く。青い顔をしている天田くんを慰めるようにコロマルが寄り添う。荒垣先輩は外の空気を吸ってくとフードコートから出て行ってしまい、この場はこれでお開きになった。それと同時に優ちゃんを始めとした八高メンバーが入れ違いになるようにフードコートへやってきている。その中に話題に上がった人物はいなかった。



「あ、クマさん、完ちゃん。今ヒマ？」

「よよっ、どうしたクマか。シーファー？」

花村先輩と直人の話を聞き終わった俺たちが腹ごしらえをしにフードコートに向かう途中、声を掛けてきたのは総長だった。俺が餓鬼の頃に悪さをする高校生の相手をする際に見せた凶悪な笑みを浮かべるでもなく、詐欺行為を図ろうとした大人たちを脅す時のような無表情でもなく、春のぼかぼか陽気のような優しいげで暖かな笑みを浮かべている。

今回、総長は取り決めを破り無断で迷宮内に入り浸り、レベル上げや資金稼ぎを行ったとして罰を受けている。しかし、そのことで特に行動に制限が出ているわけでもなく、割とのんびり過ごしているようだ。

「お腹が空いているのなら僕がご馳走するからさ、ちよつと手伝って欲しいことがあるんだ」

「手伝いつすか?」

俺はクマと顔を見合わせる。総長は現在、ペルソナカードを全て姉御に預けている状態だから、迷宮関係ではないと思うのだが、さっぱり見当がつかない。そうこうしていると総長はポケットから第二の迷宮の奥で手に入れたおもちゃの指輪を取り出した。

「それって、玲ちゃんのものクマ?」

「本人は否定してたけどな。それで、総長その指輪をどうするつすか?」

「2人とも手先が器用でしょ?フェルトで人形や迷宮の様子とかを作って、大きめな

ポップアップカードを作つて玲さんに送ろうかなつて思うんだ。第一の迷宮のウサギのぬいぐるみはそれ自体をデコレーションしようと思つているよ。主人公のアリスのように青いドレスを着せてあげるとかさ」

総長の提案を聞いて俺は頷くしか出来なかつた。

宝箱から出て来た指輪を払いのけた彼女の様子は凄く記憶に残つている。その指輪に対し、怯えのようなものを感じ取れた。それだけ、あの指輪が彼女に関したものであることは間違いないと思われる。

しかし、それをやたらに刺激するのはいかなものかと思つていたが、総長の提案は辛くて苦い記憶があるのならば、ここで俺たちと過ごす事によつて手に入れた楽しい思い出を上書きしてしまえばいいのではないかっていう気遣いだ。

「それはいい考えクマ！材料はあるクマか？」

「うん、テオドアさんに売らずに残つている素材は山ほどあるしね。やつぱり作るからには現実世界では絶対に手に入らないものにしたいたいじゃない？」

「加工が難しそうだけど、遣り甲斐はあるつすね」

「じゃあ、家庭科室に行こうか2人とも」

そう言つて総長は先導するように歩き出した。クマはすたこらさつさと総長の横に行つて、世間話じゃねえけれども姉御たちと迷宮に潜つた時のことを話している。総長

はにっこりと笑みを浮かべながら、クマの舌足らずの話を聞いて感心したり、驚いたりして聞いている。そんな巧い聞き方を総長がするもんだから、クマは一生懸命になつて色々な話をしていく。

姉御の従妹である菜々子ちゃんのこと、

叔父さんのこと、

花村先輩の家でお世話になつている事、

夏休みはジュネスで汗だくになつて働いたこと。

総長が知ることの出来ない未来の、色々なことを。総長とクマの話を後ろで聞いているうちに目的地の家庭科室についた。総長は躊躇うことなくさつと引き戸を引いて中に入っていく。

「さて、まずはウサギさんからだね。静寂のマリアから奪ってきた聖母のベールとかワンドーマグスをひん剥いて手に入れて来たローブでしょ、クラリスダンサーを蹴飛ばして仕入れてきた靴もあるし、装飾品は金甲蟲の殻をじっくり丁寧に剥がしてきたからこれを碎けばいいものが作れる……」

「なあ、クマ。あいつ、そんなもの落としたっけ？」

「いや、経験値だけクマ」

「と……とは……」

「シーフーの言ったとおり、生きた状態で剥ぎ取られ……」

俺とクマはさらりとえげつないことを言う総長におっかなびつくりしながら、玲さんのために作ることになるプレゼント全体の案を練ることになった。そして、大体の構図が浮かび上がったところでクマの腹が盛大になったので、総長が言っていたように料理を作ってくれることになった。

家庭科室と銘打っているだけあって、調理器具もちやんと揃っており、パパッとまるで魔法のように用意されたのはオムレツであった。ただし、総長が作ったオムレツがただのオムレツであるはずがなく。一口食べたクマの「中身」が半裸で飛び出てきた。

「美味し過ぎるクマアーーー!!」

「大げさだよ、クマさん。材料は卵とバターとケチャップだけの簡単オムレツなんだし」「いや、総長。少なくともオムレツ作るのに、卵を角が立つまでかき混ぜないっすよ」

スプーンで押せばプルプル震え、適度な弾力が残っていることが窺える。口に入れればふんわりと解けていく感触がなんともいえない。オムレツとは名ばかりで、もはやスイーツと読んでも過言ではない出来映え。

さすがというべきか、やはりと言うべきか、たまたまこの世界に来て年上の状態で総長と再会したのに、高校1年の自分がまだまだ餓鬼なんだって思えちまうほど、総長は色んなものでかい。器もそうだが、考え方も。

「総長、花村先輩に聞いたんすけど、どこら辺で気付いたんすか？ 姉御のような能力者が他にもいることに」

「それは言い方が悪くなるけれど、ゆつきーや完ちゃんが生きている時点で、変だなんて思ったんだ。殺すことが目的であるならば、テレビの中から救出された以降も狙われていないと同一犯であるならばおかしいし。だから少し見方を変えてみようって。被害者が死んでしまった2件の事件と、ゆつきーや完ちゃんたちが狙われた誘拐事件を分けて」

総長はそう言うのと卵の殻の半分をテーブルの上に並べる。

「これは陽介たちにも言っていないんだけれど、ペルソナ能力というかテレビに干渉する力を自ら覚醒した完ちゃんたちを除いて持っているのは優を含めて3人だったんだじゃないかなって思っている。1人は山野アナと小西沙紀さんを殺した奴、もう1人はゆつきーや完ちゃんたちを誘拐した犯人。その根拠はさっき言った通り、同一犯ならありえない行動をしている点だよ。その考え方に至ったもうひとつのヒントが堂島家に届いたって言う脅迫状。『コレイジョウ タスケルナ』、これは山野アナや小西沙紀さんを殺した奴がゆつきーたちを救出している優や完ちゃんたちの行動を面白くないと感じている証拠なんだと思う」

「ちよつと待つクマ、シーフー。それじゃあ……」

「俺たちが追っている犯人の他に、高みの見物をしている野郎がいるってことつすか!」
「あくまで僕の考察だつてことを忘れないで完ちゃん。殺人事件の犯人っていう常識では考えられない相手を探しているんだから、広い視野を持たなきゃ駄目だ。周りの状況に流されるだけじゃ駄目なんだ。ちゃんと踏みとどまって、普通ではありえない行動をしている人の言動に気をつけたりしないと大事なことを見落としてしまうよ」

「普通ではあり得ない行動つすか……」

「優が居候している堂島家には叔父さんという現役の刑事がいる。下手すれば、その脅迫状だつて見られていた可能性がある訳だよ。それでも犯人は出してきた。相当捕まらない自信があるのか、それとも優の動きを制限させようとしたのか分からないけれど、そこに付け入る隙はあるはずだよ。それと、美津夫の件なんだけれど。いくら自暴自棄になって模倣して殺人を犯したとしても、長々と隠れていられるような奴じやない。早々に自首したと思うんだ。元の世界に戻ったら、そこら辺を叔父さんに聞いてみる」といいよ」

総長はそう言うのと卵の殻を片付ける。そして、食べ終わった食器も洗おうとして、ふと顔を上げた。直後、頬を引き攣らせた。

何事かと思つて振り向くと家庭科室室内を覗き込むように膨れつ面で窓に顔を押し付けている玲さんの姿があった。視線は総長が自分で食べようと思つて用意していた才

ムレッツへ注がれている。

「完ちゃん」

「合点承知」

俺は彼女に送るためのプレゼント案を書き記した画用紙を丸めて、家庭科室脇に設置されている用具入れに隠そうと移動する。いざ扉を開けて、画用紙を突っ込んだ俺は、棚の上にカードらしき物が置かれてあることに気付いた。画用紙を隠しつつ、そのカードを手にとつて絵柄を見ると大きな鉄板を持ち上げる自分と大人びた姿をした総長が大きな斧を持つてニヒルな笑みを浮かべている姿が描かれていた。絵柄の下には『雷神爆砕撃』という技名が書かれている。

これが何なのか分からない俺はそれとなく総長に聞こうと思つたのだが、振り向いて絶句した。

いつの間にか家庭科室内に侵入した玲さんに山のようなオムレッツを作り続ける総長の姿があったからだ。出来た傍からどんどん消化していく彼女に圧倒された俺はカードをズボンのポケットに入れてその場を後にするしかなかったのだった。

放課後悪霊クラブ編—①

2年4組の出し物、放課後悪霊クラブ”前にやってきた私たちであったが、入る前からナイーブになって肩を落としているメンバーがいれば、突入はまだかと期待を籠めた眼差しを向けてくるメンバーにはつきりと目に分かるほど分かれている。

前者はゆかりと千枝ちゃん、後者は鳴上兄妹と天田くんだ。

教室内が見えないように暗幕が掛けられ、妖怪を模したキャラクターが貼り付けられたり、不気味な提灯が下がっていたりしておどろおどろしい雰囲気が漂っている。

「自力歩行型のお化け屋敷アトラクションと思われます」

「見た目はそんなに怖そうじゃないですね」

アイギスの見も蓋もない一言に天田くんの率直な感想が述べられる。私たちの世界の優ちゃんには前科があるから背後にも気を配らないといけないなあと思っていたら、千枝ちゃんがつくりと肩を落としながら消えそうなほど小さな声で呟く。よくよく見れば手足が小刻みに震えている。

「……入んなきゃダメ？」

「里中サ〜ン、もうビビッてんの？たかが文化祭の出し物じゃんか」

「だといいけど……ね」

茶化すように言うのは花村くんだった。普段であれば千枝ちゃんの物理的なツツコミ返しがあるのだけれど、ちよつと今の彼女にそんな余裕はない様子で花村くんもまた調子が狂ったような仕草を見せている。ゆかりもまた、文化祭レベルのものであったのなら、大丈夫と言いたげな感想を漏らす。

「でも、ちよつと入ってみたかったな」

ナビゲーター役の風花がそう発言すると羨ましそうに千枝ちゃんとゆかりが視線を向ける。八高のナビゲーターである久慈川さんも意外なものを見るように風花に怖くないのか尋ねているが、彼女の場合『怖いのが楽しい』というこういったものが好きなの一般的な意見が出る。そんな風花を見て優ちゃんの視線が千枝ちゃんとゆかりに向いたのを私は見なかったことにして、他のメンバーに視線を向ける。

クマさんや巽くんは特に怖がっている様子はない。玲ちゃんが不安そうにしているのは、今までの迷宮と同じであるし、善くんは表情では感情を読みにくいのは相変わらず。先輩たちは幽霊であってもシャドウと同じなら殴れるから怖くないという真田先輩に呆れた様子だし、順平がいつかのネタの様に懐中電灯を鞆に入れるのは、今のところとりあえず害はなさそうなので流しておく。

「……………」

他の皆のテンションが上がって行くと比例するように、怖がっている千枝ちゃんとかりが行きたくなさそうに入り口の方を見ていたので、何か声を掛けるべきと思いつく。

「うう……やっぱり行かないとダメ？」

「こんなにも一杯いるんだから、私たちが抜けても大丈夫だよ。きつと」

「2人とも大丈夫だって、いざって時はちゃんと守るから。総司くんが」

「ええー。今の流れで僕に来ますか？」

鞆の自身のチェックをしていた総司くんが顔を上げて寄ってくる。千枝ちゃんとゆかりも総司くんを見て大きく頷く。

たぶん、ここにいるメンバーの中でペルソナ能力的にも幽霊を怖がらない意味でも、常識人である面でも頼りになるのは間違いなく総司くんだろう。この世界に来てからはちよつと無鉄砲な一面が出ちゃっているけれど。

周囲を見回して善くと玲ちゃんの会話に割って入ったクマくんがゆかりたちに窘められるのを見届けた後、私たちは迷宮に足を踏み入れる。



お化け屋敷系のアトラクション特有の薄暗い上に壁や床に飛び散るように広がる赤い染みを見て雰囲気出ているなあと順平が呟く。予想できた世界観であったが、千枝ちゃんとうっかりは総司くんは左右から抱きつきながら周囲に注意を向けている。怖がる玲ちゃんが善くんに怖くないか尋ねる場面があつたけれど、善くんは無表情で怖くないと断言する。その発言に反応する天田くんとクマくんであつたがここでは置いておくでしょう。

「第二の迷宮の時の様に男女別になることもなく、恐怖感を煽るような雰囲気だけで特に問題はなさそうだな。おい、さっさと進むぞ」

真田先輩がそう言つてずんずんと歩き出すと呆れた様子の荒垣先輩と美鶴先輩もそれに続くように歩き出した。その後を総司くんたちが動き難そうについていく。

これだけの人数で進めば、怖く感じるものも怖くないんじゃないのかと私が思った矢先のことだった。ピシつという効果音を発しそうな程、石像のように千枝ちゃんとゆかりが足を止めてしまったのは。

「おいおい、通路のど真ん中で止まるじゃねえって」

そう言つて順平が3人を避けるようにして前に出た後、振り向いた瞬間、腰を抜かして尻餅をついた。様子がおかしいことに気付いた先輩たちも足を止めて振り返つたら、その場から急に飛びのいて武器を構えた。武器を向けられているのは総司くんだ。

「ちよっ……どうしたっていうんですか!？」

最愛の家族に武器を向けられた優ちゃんから発せられる殺気が恐ろしいと思いがながら質問を投げかけると、先輩たちは微妙な表情を浮かべ、何と言えいいのかを躊躇っているように見える。どうということなのかと問おうとした私よりも先に総司くんが振り向くのが早かった。

「結城先輩、優。僕はどうかやら、……顔を落としちゃったみたいです」

いつもの温和な笑みを浮かべる総司くんの顔がない。『のっぺらぼう』の彼がそこにいた。私も含めた後続のメンバーが絶叫したのは言うまでもない。

白鐘さんは立ったまま気絶し、玲ちゃんは泣き叫び、優ちゃんはペタペタと総司くんの顔を触る。どうやら、視覚的な認識阻害的なものらしく、総司くんの顔は触れると普通にあるらしい。

「なるほど、今回のギミックはこんな感じかー。ペルソナ召喚は普通に出来るっぽいので。僕は」問題ないかなあ」

のほほんと自身のペルソナカードをシャッフルしながら、そんなことを言う総司くんから千枝ちゃんとゆかりはすでに離れている。総司くんの発言で気になることがあったのか、優ちゃんが近づいて行ったのだが、すぐに足を止めた。

何事かと見れば、総司くんの後ろに赤黒い筋肉隆々の上半身を持ちニット帽の横から

角を生やした牛の顔を持った男と鋭い牙を持ち青い毛並みを持つ上半身裸の狼男がいたのである。

「なんじゃこりやあああ!?!」

「お、師匠は『牛鬼』。明彦先輩は『狼男』みたいですね」

混乱する2人?を余所に冷静に分析する総司くんのいつもの調子に頬を引き攣らせていると、順平の頭がぼろつと落ちた。床を転がっていく頭が目覚ましく変わる状況についていけず目をぐるぐる回す千枝ちゃんとゆかりの足元に。自分の身体に起きた異常事態にも関わらず、順平は視界に入ったあるものを言おうとして、

「あ、ゆかりっちのぼん『しゅーとっ!!』へぶっらっ!?!」

サッカーボールのように蹴つ飛ばされた。迷宮の天井や床、壁に当たってどこかに飛んでいく頭を追って、首ナシの身体も走り出す。その光景は非常にシニールである。

「順平さんは『デュラハン』ですか。……ちえきちに生えているのは狸の耳だし『化け狸』、ゆつきーのは妖狐かな?」

顔なし総司くんの解説で順平が何なのか分かったと思ったら、千枝ちゃんと雪子ちゃんにも身体的な特徴の変化が現れていた。確かに千枝ちゃんの頭には丸っこい茶色の耳が生え、雪子ちゃんの頭には黄色い三角の耳がピンと立っている。

男子組の変化と比べると明らかかな差がみられる。男子の変化がリアル系だとすると、

女子の変化は可愛いファンシー系だ。玲ちゃんも2人の変化は大歓迎なのか、彼女のお尻付近にあるしつぽに触れて大興奮の様子。

「ねえ、湊……」

「何かな。ゆかり」

「……あれは誰で、何の妖怪?」

「知らない振りをしていたのに、何故に私に振ったの!？」

ゆかりの発言を聞いて、分散していた視線が1人に向けられる。

「おいおい、皆どうしたって言うんだよ?俺の身体には何の変化もねえって……なんだよ、その目は?」

声は間違いなく八高メンバーの参謀的立ち居地にいる花村くんである。彼の言うとおり首から下は彼の身体のままであるが、顔部分は別物と化している。変化だけでいえばトップクラスの恐ろしさであるが、誰も花村くんが変化した妖怪の名称が分からないのでコメントのしようがないのだ。

「ニイサン、ヨウスケノヘンカシタスガタガナニカワカル?」

「すつごい片言になっているね、優……。つて、うわあ、アイギスさんよりロボになっている。アイギスさんはアイギスさんでフランス人形っぽくなっているし」

総司くんの驚くような声に導かれるように私たちは優ちゃんとアイギスに視線を向

ける。そこいたのは手足に小さな歯車をつけて、伽藍堂のような無機質な瞳を持つ優ちゃんに良く似た人形と、ゴスロリファッションで長い金髪を揺らすふつくらとした質感を持つ人形となったアイギスの姿。何がなんだかもう訳が分からない。

「ちなみに陽介が変化したのは、時計台をモチーフとしながら屋根の部分に開閉する大きな口、歯は鋭く、目は悲しげ。たぶん『時計GUY』かなあ。北海道の時計台の怨念が具現化した姿の妖怪」

「怨念で……」

「日本三大『がっかり』名所として名を馳せていることから……」

「つておいしいおいしい!?ここでもがっかりに支配されんのか俺の個性iiiiiiii!」

花村くんは総司くんの説明を聞いて天を仰ぎながら崩れ落ちた。現実世界でも、ちよつとおかしなこの世界でも『がっかり』という称号から逃げる事が出来ない花村くんに皆から同情の視線が注がれる。しかし、唯一そんな花村くんに陽気な声で話しかけたのがクマくんだ。

「しょうがないクマよ、よーすけのがっかり属性は誰にも勝てんクマ。その点、クマはこんななぶりちーな姿のままクマ」

「「「「……」」」」

「あれ、皆どうしたクマか?」

知らぬのは自分だけという状態がようやく分かったのかクマさんは不安そうに周囲にいる人間に声を掛ける。しかし、皆は目を背けるだけで何も言わない。そこでクマさんは総司くんに駆け寄って、自分が今どんな姿なのかを聞いたです。

「シーファー！クマは、クマはぶりちーな姿クマよね？」

「うん。まあ、プリティーなんじゃないかなあ。ただ首に縄が巻きついていて、片目が飛び出っていて、臓器っぽいものが外に飛び出ている以外はいつものクマさんだよ。あえて今の状態に名前をつけるならば、『チツソククマ』さんかな？」

「がびーんっ!？」

総司くんの飾らない評価を聞いて花村くんの隣で落ち込むクマくん。頭が時計台のお化けと臓器が前後から飛び出しているクマというシユールな光景が繰り広げられている。

「とりあえず、総司くん。残り全員が何になっているか、言ってくれないかな？私
は、もう諦めたよ……」

視線を下に向けると扇情的な衣類を身につけている私の身体。背後に向ければ腰の辺りにパタパタと動く蝙蝠の様な羽が見える。隣にいるゆかりもいつの間にか手の部分
分が鳥のような羽になり動き難そうにしていた。

「とりあえず、ざっと行きますよー」

結城湊……夢魔／女性体なのでサキユバス。睡眠中の男性を襲って誘惑し、せ……この説明はいいって？うーん……。

岳羽ゆかり……姑獲鳥／出産で死んだ妊婦が化けるとされ子供を誘拐する。え？語弊があるからやめろ？……はい。

伊織順平……デュラハン／えつと頭がないイコール……ちよつと泣かないで下さい、順平さん。ジョークですって！

桐条美鶴……雪女／ペルソナの関係上だと思えます。逸話の中には人間を凍死させる場合も……。はい、黙ります。

真田明彦……狼男／師匠もそうなんですけれど、この迷宮ではペルソナ召喚は無理っぽいですね。

アイギス……フランス人形／なぜ、こうなったんでしょう？

天田乾……コロポックル／うん、文句ならこの迷宮の奥にいる番人シャドウに言つてね！

荒垣真次郎……牛鬼／明彦先輩と一緒に物理が効かない相手には突つ込まないで下さいね。何で微妙そうな顔するんですか！

コロマル………狛犬／浮いてるね、コロマル。ちゃんと動ける？いい機会だから頑張ってみるって、凄いな。

鳴上優……デウス・エクス・マキナ／なんて機械の体になっちゃったのさ……お腹の中を開けて見せるな、歯車だらけじゃんか！

花村陽介……時計GUY／ごめん、掛ける言葉が見つからないよ。

里中千枝……化け狸／「赤いきつねと緑のたぬき」のたぬきの方だね。

天城雪子……妖狐／「赤いきつねと緑のたぬき」のきつねの方だね。

巽完二……百々目鬼／完ちゃん、手足にも目が出ているけど酔わないように気をつけるんだよ。目薬いるかい？ エリザベスさん製だけど。

クマ……ゾンビ／チツソククマ

白鐘直人……フランケンシュタイン／八高の皆は納得していたけれど、思い当たる節がありますか？ 何故、顔を逸らすんです？

鳴上総司……のっぺらぼう／顔がないだけでペルソナ召喚などに支障はないです。

「とまあ、こんな感じですけど、善さんも玲さんも大丈夫ですか？」

「ああ。問題ないと言ったら嘘になるが問題ない」

「私は怖いから千枝ちゃんと雪ちゃんのしつぽを握っとく！」

「「やめてっ！ 動けなくなるっ!!」」

「何なの、このカオス」

「あははは……」

百鬼夜行状態の私たちは自分の身体に起こった変化に戸惑いながらも第三の迷宮の探索を開始するのであった。

放課後悪霊クラブ編—②

形容しがたいナマモノへと変貌を遂げた私たちであったが、第三の迷宮である放課後悪霊クラブの探索は恙無く進めることが出来ている。

ホラー要素にビビリもしなければ動じもしない鋼鉄の心臓を持つ優ちゃんに、喜怒哀楽がまったく分からなくなった総司くんに加え、西洋のドツキリに出てきそうな姿となったアイギスというメンバーが率先して前を歩いてくれるので、後方からついていく形になった私たちは何かがあっても心的ダメージは少なく済んでいる。

「皆さん、こんな見つけたであります」

そう言いながらゴスロリを身に纏った西洋人形もといアイギスが駆け寄ってきた。絹の手袋をつけた掌に乗せられていたのは古めかしい年代ものの鍵。私はその鍵を受け取ってそれが何の変哲もない鍵であることを確かめる。情報を他のメンバーにも共有するために白鐘さんに鍵を渡した私は部屋の中をくまなく調べる優ちゃんと総司くんの兄妹の行動を眺める。

「トクニシカケハナサソウ」

「まあ、序盤だしね。とりあえず、壁や床の雰囲気的に古い学校がモチーフになってい

るっぽいね。ということは、学校の怪談系か」

「ハシルジンタイモケイ！」

「音楽室の肖像画の目が動く！とかね」

鳴上兄妹は顔を見合わせてベタなものからマニアックな学校の怪談の候補を上げていく。私はそつと振り返る。すると案の定、千枝ちゃんとゆかりが手を取り合い涙目になっており、玲ちゃんも善くんに抱きついてガタガタブルブルと顔を青くして震えていた。会話しているのが、パツと見て外見がロボとのつぺらぼうだから尚更怖いし。

「優ちゃん、総司くん。考察はもういいから先に進もうか」

「……って階段を使わないといけな。つと、了解しました」

のつぺらぼうが会話を中断してこちらを見て敬礼してくる。うん、落ち着かないから変な仕草は心底やめて欲しい。そんなやり取りをしながら進むと開かない扉があった。手に入れた鍵を使うも開く気配がなく周囲の探索を行うことになったのだが、怖がりの3人が動きたくない駄々をこね始める。

「もうやだあ！……でもふもふしてるー！」

「いや、だつて私も手がこんだし、シャドウとも戦えないしさ」

「なはは……。玲ちゃんに尻尾掴まれているし、私もここで待つているよー」

上から玲ちゃん、ゆかり、千枝ちゃんの発言である。玲ちゃんは変化していないけれ

ど、こういったお化け屋敷系のアトラクションはダメっぽいし、ゆかりは両手が鳥の羽のようになっちゃってしまっていて身動きは取れない。千枝ちゃんも辛うじて人型であるものの、狸の耳と尻尾が生えている姿であり、妖狐となった雪子ちゃんと同様に玲ちゃんの精神を落ち着かせる癒しとなっている。

「まあ、どちらにしてもこの開かずの扉を開けるために鍵か仕掛けを探さないといけないんですし、探索班と待機班に分かれて動いても問題なものではないでしょうか？」

フランケンシュタインとなった白鐘さんが提案すると、それがいいとゆかりや千枝ちゃんたちが賛同したため、2チームに分かれることになった。

「じゃあ、僕とコロマル。善さんと陽介、あと完ちゃんが残ります。僕らがいれば戦闘で役に立ちそうにない、ちえきちたちをフォローしながらでも戦えますし」

総司くんと呼ばれた面々が開かずの扉の前に移動する。優ちゃんがじつと花村くんを見ている以外は特に問題は無さそうだ。唯一コロマルは立ち居地というか浮遊具合を掴めていないようでフワフワと天井付近を風船のように漂っている。

狼男と牛鬼となった真田先輩と荒垣先輩が左手で頭を押さえている順平を伴って進んでいく。私は悩むように腕を組んでいる優ちゃんロボを引き摺りながら探索メンバーと合流するべく駆けた。

「アア。ヨウスケヲヨウスケツテ、ニイサンガヨンデタ」

「うん？総司くんが花村くんを名前呼びしていたってことがそんなに不思議なことなの、優ちゃん？」

「ニイサンガナマエデヨブノハ、アルティドナカヨクナツタシヨウコダカラ」

「私はまだ『結城先輩』なんだけど……」

「……。ジョセイハマタバツ……ダトオモウ」

優ちゃん口ボはそつと私から目を逸らした。後で総司くんとお話しなきやと意気込んでいると、一番後ろにいたアイギスが角を曲がった瞬間に遠くの方から赤ちゃんの泣き声が聞こえてきた。

「気のせいじゃ、……ないよな？」

「音が反響していて正確な位置までは分かりませんが……」

先頭を歩いていて真田先輩が振り返りながら言うのと白鐘さんが頷きながら答える。

先ほどから一言も発しないなと雪女な美鶴先輩に視線を向けると、遠い目をしながら乾いた笑みを漏らしていた。近づいて独り言を聞くには、「年長者としてのプライドとかいい年なのにお化けが怖いというのは示しつかないなんて言わずに、素直になつてゆかりや千枝ちゃんたちと一緒に残ればよかった」と後悔しているようだ。

彼女を励まそうと声を掛け様とした瞬間、後方でドサツという重量のあるものが落ちてきた音がした。振り返っちゃいけないと思いつつも、ギギギツと錆び付いたブリキの

玩具のように振り返った私たちが見たのは頭に白い袋を被せられ、水色の服を着せられた赤ちゃんだった。ただし、至る所に血飛沫を浴びており、普通の赤ちゃんでないことは確かだ。

天井から落ちたばかりで痙攣するような動きを見せた赤ちゃんであったが、次第に手足に力が入っていくのが見て取れる。体勢を整えた赤ちゃんは這い這いの格好で私たちに向かってくる。

「に、逃げろーっ!!」

美鶴先輩の切羽詰った声が響く。土煙を上げるような速さで私たちを追いかけくる巨大な赤ちゃんは母親を呼ぶような大きな泣き声を上げている。赤ちゃんに追いつかれる前に次の部屋に入った私たちは扉を閉めて、赤ちゃんが入って来ないように全員掛りで扉を押さえつける。扉が壊れそうなほどの力で扉を開けようとしてくる赤ちゃんに負けないように全員の力を合わせ続けた結果なんとか相手が諦める方が先だった。ヘトヘトになった全員がその場でへたり込む。

「一体何なんですか、あいつ……」

「勝てる気がしないっていう点ではF・O・Eみたいだったが……」

『荒垣先輩の言う通り、今の赤ちゃんはF・O・Eです。名前は【かわいいあかちゃん】で』

「「どい」がつ!」」

風花の解析結果に間髪いれずのツツコミが入る。風花に悪気がないことは分かっているけれど、ツツコまずにいられない体験を現在進行形でしている今のわたし達には心に余裕がない。次の部屋に向かうのが億劫になる。そんな中、順平がとある物に気付いた。

「おい、湊つち!あの黄色いやつって、部屋を移動する奴じゃね?」

順平が見つけたものは正しくショートカットそのものであり、わたし達は精神の安定化を図るために一度ヤソガミコウコウに戻ることにしたのだが、待機組がいるはずの場所に誰もいなかったたのである。

『お姉ちゃんっ!大変だよ、花村先輩たちがその扉の中に引き摺り込まれちゃった!』
久慈川さんの悲痛な叫びを聞いて私はドアノブに手を掛けたのだが、開かずの扉は相変わらずビクともしない。気配を感じて後ろを見れば、真田先輩と荒垣先輩が拳を握り締め殴りかかっていた。それぞれの拳がガラスと木枠にぶつかったがヒビが入ることもなく、毅然としてその場にあり続けている。

「クソがつ!」

「ちいっ!」

「山岸、扉の先にいる岳羽たちの様子はどうか!?」

真田先輩たちの行為が無に帰したのを見届けた美鶴先輩は中にいる総司くんたちの様子がどうなっているかを風花に尋ねる。返って来た答えは私たちを焦らせるものであった。

『総司くんたちは現在、その扉の先にある部屋で隣接する部屋から際限なく侵入してくる多数のシャドウの群れを相手に戦っています。正直、総司くんが残っていないかと思うと……。それでもそう長く戦いは保てません、一刻も早く開かずの扉を開ける必要があります!』

風花のその言葉を聞いて私は開かずの扉に背を向ける。その場にいたメンバーたちに目を向けると彼らもまた大きく頷いてくれた。

「皆を助ける為に、先に進もう! 帰っている暇はないよ」

私は武器を握りなおして、ショートカットをした場所に向かって走り出した。



怖いのが嫌で進みたくなないと駄々を捏ねた結果、その意見が採用されてしまい手持ち沙汰になった私たちが開かずの扉の前でおしやべりをしていたら、突然開かないはずの扉が開いた。

その扉からは黒くて細い手が幾つも伸びてきて、まず月高の岳羽さんが黒い手に捕まって何を言うこともできずに引き摺り込まれた。その手は私や玲ちゃんにも伸びてきて、必死に抵抗しようとしたが、その手に掴まれていると力が吸われていくような感覚に陥った。

「里中ああああ!」

虚ろになる視界の中で見たのは私の左手首をぎゅつと握って引つ張る残念妖怪へと変貌してしまつた花村の姿と、コロちゃんを脇に抱えて黒い手が蠢く扉の向こう側に飛び込んでいくのつぺらぼうの総くんの姿だった。

誰かに揺さぶられているような感覚に閉じていた瞼を開けると泣き腫らしたような赤い目をした玲ちゃんが映った。身体を起こすと自分が小さな部屋の中にいることがわかる。部屋には私の他に岳羽さんと壁に凭れ掛かつたままの善くんだけがいる状態。

「(ハハ)は……ど(ハハ)は…」

「千枝ちゃん、起きたつ!善……、千枝ちゃん。私たちはあの開かずの扉の先に引き摺り込まれちゃつたんだよ。覚えてる?」

「開かずの扉の先?……花村や他の皆は!」

玲ちゃんは言葉を出さずに視線を扉に向ける。耳を澄ませば、誰かがナニカと戦っている音が聞こえてくる。私は玲ちゃんに肩を貸してもらって立ち上がる。壁に凭れ掛かったままの善くんを見れば、手足の至る所から血が滲んでいて、顔も数箇所を殴られたような打撲痕が痛々しい状態。微動だしないのは気を失っているからみたい。

「花村や総くんたちはどのくらい戦っているの?」

「分からないよ。倒しても倒しても次から次に湧いて出てくるって善が言ってた」

私たちがどのくらいの間、気を失っていたのか分からない。けれど、彼らが愚痴を零すほどの量の相手と戦っているのが分かった。

私は玲ちゃんの肩に回していた手を離し、グーパーと手を握ったり開いたりする。体的には問題無さそうだと私が気合を入れると同時に扉が開いて、勢い良く床を転がって反対側の壁にぶつかって停まる物体。それは善と同様にボロボロになって完全に気を失った後輩の異完二の姿だった。

「千枝ちゃん、私は皆を回復させることしか出来ないから……。一緒に戦えないから……。だからっ!」

「分かっているって!玲ちゃん、善くんと完二を任せようっ!」

私はそう言って軽く助走をつけると扉を蹴って開けつつ戦いの地へ飛び込んでいく。扉の先では宙を文字通り駆けるコロちゃんがシャドウに噛み付いたり、火炎スキルを

使ったりして舞っていた。総くんはあらゆるペルソナを使って全体攻撃を中心に敵を屠り、花村がその攻撃で倒しきれなかったシャドウに止めを刺すように動いていた。

「里中、ぼーつとすんな、避けるっ！」

「うっひゃあっ!?!」

カンテラを持ったカラスのように真つ黒なシャドウが、今まで私がいた位置に向かって突撃してきたのを花村の掛け声を聞いて前転して避ける。私が避けたため目標を失ったシャドウが右往左往していると、濃厚な殺気が飛んできた。咄嗟にそちらに顔を向けると総くんがペルソナカードを握り潰すところだった。

「ペルソナチェンジ、コジロウ！利剣乱舞！」

総くんの背後に浮かび上がった細長い長刀を構えた美丈夫が剣先を上げる動作をすると同時に、部屋の中に幾つもの剣筋が飛び交い、カンテラを持ったカラスっぽいシャドウや槍で横方向に貫かれている双子のシャドウを切り刻む。

「行くぜ、ジライヤ！マハガルーラっ！」

追撃と言わんばかりの花村の風系全体攻撃スキルが吹き荒れる。その結果、部屋の中にいたシャドウはほとんどが消え去った。

内心、格好良く出てきたのにと文句が漏れそうになったのだが、扉が開く音を聞いて発生源を見て唾をぐくりと飲み込む。この部屋には3つの扉が在る。その内の私が

入ってきた扉ではない残りの2つの扉が開け放たれ、総くと花村が倒したシャドウの数以上のシャドウが流れ込んでくる。

「貪欲のマーヤとファントムメイジ、あとお守りレキシィか。コロマル！」

「ワオオーンツ!!」

総くんの合図で足を止めたコロちゃんはペルソナを発動させる。黒い身体に三つの首を持つ地獄の番犬、その名はケルベロス。部屋全体に闇系スキルの効果が及び、臨界点に達すると同時に力が解放される。マハムドの効果によって弱点を突かれたシャドウはそのまま闇に呑まれる様に消え去る。だが、仕留め切れていないシャドウもいて、そいつらは何故か総くんに向かっていく。

「里中、貪欲のマーヤは壊攻撃が弱点だ！」

「花村、ありがと！行くよ、トモエ」

意識を集中させずとも現れる私のペルソナ。全身黄色のジャージを着て、フルフェイスマスクに入りきらなかった黒髪を揺らしながら薙刀を振るう、もう1人の私自身。

「ソニックパンチ！」

花村の言った通り弱点の攻撃スキルを受けたシャドウはもれなく消滅していく。その間に私は花村と総くんの近くに移動する。

「花村、なんで総くんにシャドウが殺到している訳？」

私は花村と背中合わせになり周囲に警戒の視線をくべながら尋ねる。花村は服の袖で汗や血を拭いながら答える。

「決まっているだろ、気絶した善や完二、玲たちのいる部屋にシャドウを向かわせないためだ。それをしているのは魔寄せの札っていうアイテムの効果なんだけどよ、正直俺たちも限界に近い」

「……次が来たみたいだよ、陽介」

総くんの声を聞いて視線を扉へ向ける。開かれているのはひとつの扉だけで、しかも「何も入ってこない」。総くんの焦燥感たつぷりの発言で気張った私は何もいないじゃないかと、ふっと力を抜いた。しかし、

「ペルソナチェンジ！ラスプーチン、姿を現せ！メギド！」

私や花村の前に立つ総くんが新たなペルソナを召喚した。総くんの背後に現れたのは宣教師のような黒い衣服を着た顎鬚をいっばい生やしたオッサンだったけれど、彼の目がカッと開くと同時に無属性でありながら強力な攻撃スキルが私たちのいる空間内で炸裂した。

すると、今まで何もいなかった空間から金色のシャドウが現れる。大きな顔だけのシャドウで、周囲にはギョロリと動く目玉を持った鳥のようなものが舞っている。

「なんで、この階層にソウルサーチャーがっ!? くっ、陽介・ちえきち・コロマル！サブペ

ルソナを付け替えて！」

焦るような総くんが私たちにそれぞれ縁が黒いカードを投げ寄越す。花村やコロちゃんも総くんの言うとおりにサブペルソナを付け替えたため、私も急いで付け変える。

私に与えられたペルソナカードはキヨヒメ。火と闇に耐性を持ち、仲間の攻撃力を上げるタルカジャと魔法系スキルの攻撃力を上げるコンセントレイトを持つペルソナであった。

総くんの意図が分からなかった私は隣にいる花村に聞こうとしたのだが、金色のシャドウが目を見開くと同時に額にある蛇のような縦に割れる目が怪しく光った。目晦ましかと思われたが、特に異常は見当たらない。肩透かしかと思ったその瞬間、宙を浮いていたコロちゃんがゴトツという固めのものが落ちたときと同じような音を立てて床に落ちた。

「コロマルのことは二の次！来るよ、構えて」

総くんが言うのが早いか、金色のシャドウの攻撃に移る動作の方が早いか。気付いた時には悪魔の舌のような真つ赤な焰が自身の肌を舐めるように撫でた後であった。

「あつっうーいっ!!」

「総司に貰ったペルソナをつけていなかったら拙かったぜ。で、これを使えばいいんだ

な？マナの恵」

花村が総くんに向かって目配せすると彼は大きく頷いた。花村は躊躇うことなく、スキルを発動させる。するとジライヤの背に掴まるように透き通った肌と海色の髪を持つ女性が現れる。彼女が両手を大きく天に向かって差し伸ばすと、上空から光の粒が雨のように降り注いだ。その光の粒に触れた私たちの身体はすぐに癒される。

そして、先ほど宙から床に落ちたコロちゃんも起き上がって、すぐにペルソナを発動させた。三つ首の地獄の番犬の前足に踏まれる赤いナマモノが見える。尻尾が2つあり、猫耳が生えていることから猫又つぼいのだが、妙に変な姿だ。

「ワオオーン！（ひゃくれつ肉球！）」

コロちゃんのケルベロスが赤いナマモノを踏んでいない方の前足を上げる。すると金色のシャドウが幾度となく繰り返される衝撃を受けて仰け反りながら壁に押し付けられていく。

「二通り味わったと思うけれど、奴の攻撃は状態異常攻撃と炎系スキル、そして闇系スキルによる気絶攻撃だ。3人に配ったペルソナはそれぞれ火と闇に対して耐性を持つペルソナだから、ダメージは最小限に抑えられる。地道に削れば何とかなる相手だから気に病むことはないよ」

総くんはそう言って苦笑いを浮かべている。花村もそうだが、総くんも足元がふらつ

いていて私が起きるまでの間、ずっと戦っていたことが手に取るようにわかる。私は両手をぎゅつと握り締める。そして、深呼吸をひとつした後、総くんを押しつけて前に躍り出る。

「花村も総くんも休んで、こいつを倒したらまたシャドウが一杯出てきてもおかしくないんだし。ここは私がやるよ」

「はあっ!?ちよつ、ふざけんよ。全員でやればいいだろうが!」

花村は強い口調で私に言ってくる。ペルソナの回復スキルで怪我は癒えたと思うけれど、体力が底を尽き掛けているのは肩で息をする花村を見ても分かる。浅い呼吸を繰り返す総くんが肩越しに私を見ながら呟く。

「……ちえきち。任せてもいいの?」

私は何も答えず、彼の目を見て大きく頷いた。総くんは肩の力をフツと抜くと、剣を鞘に入れて振り返って歩いてくる。そして、私の肩をポンッと叩いてそのまま歩いていく。総くんはこいつの相手を私に任せてくれた。

「えっ!?ちよつ、本気かよ……しゃーねえ、分かった。けど、里中。ピンチになったらすぐに助太刀するからな」

そう悪態をつきながらも心配するような視線を向けてくる花村。総くんはすでに壁に背を預け、傷ついた身体を休めているのが呼吸を聞いていて分かる。ふよふよと宙を

浮かびながらコロちゃん私の傍に来るけれど、私の意を汲んでか力を貸すのは花村と同様のタイムミングになりそうだ。

もう一度、深呼吸をする。

こうやって、何かを任せられることなんて久しぶりだ。この世界に来てからもそうだけれど、元の世界でも私は何をするにしても誰かの後を追ってばかりだ。優は率先して前へ前へ行ってしまおうし、花村はそんな彼女を支えようと色んなことに手を出す。雪子は将来に向けて勉強を始めた。完二くんは自分の長所を伸ばすようにチャレンジしている。りせちゃんは自分を支えてきたものを再確認してもう一度踏み出そうとしている。現状で燻っているのは私だけだ。

そういった焦燥感が私の中にあつたのは事実だけれど、こうやって何かを任せられると自分が必要とされているって実感できる。

「とりあえず、ちやつちやつと倒してしまえますかなっ！」

私の掛け声に反応するようにペルソナが顕現する。片方はトモエ、もう片方は淡い緑色の髪と同じ色彩の着物を纏った槍を持った女傑。名前はキヨヒメ。

私は床をしつかりと踏みしめ、手始めに得意の蹴り技を金色のシャドウの眼前にぶち込む。予期していなかったのは、日本の女傑武将の代表ともいえるトモエとキヨヒメのダブルペルソナによる力の相乗効果。

私が蹴った金色のシャドウはまるでピンボールのように部屋中をバウンドし、ダウンして目をクルクル回しながら転がった。これは追撃のチャンスだと思った私は、先ほどよりも大きく助走をつけて蹴り上げる。

「どーんっ！」

金色のシャドウは入ってきた扉を突き破ってどこかに星となって消え去った。

私がいい汗を掻いたと振り向けば、がっくりと肩を落とした総くんと花村の姿があった。

どうやら、私は匙加減を誤ったらしい。

放課後悪霊クラブ編—③

□陽介□

里中の活躍によって強敵と思われた金色のシャドウが星になるのを見届けた俺と総司はその場に崩れ落ちた。疲労のピークに達していたということもあるのだが、里中の問答無用のクリティカル攻撃に呆れて気が抜けた感じだ。

ただ総司の疲労は半端なものではない。シャドウへの攻撃や味方に対する補助・回復スキルを使い続けて精神力はほとんど空っぽだろう。それでも善や完二が倒れた後も武器を構え、ずっと際限なく現れるシャドウを相手に戦い続けた。

「……どうやら、さっきのシャドウで終わりだったみたいだね。……隣の部屋に戻って助けを待とう」

「ああ、そうだな。ま、里中は暴れ足りないだろうけれどな」

「いや、まあ私もやりすぎっちゃったかなあとは思わないこともないけどさ……」

肩で息をしている総司が完二や玲ちゃんたちがいる部屋へと続く扉のドアノブに手を掛ける。しかし、ガチャガチャと動かすだけで扉は一向に開く気配がない。

先ほどまで問題なく開閉できていたのだ、立て付けが悪いのだと思い、俺と里中も一

緒に扉を開けようと奮闘する。ギシギシと扉が鳴るがあともう少しというところで開かず、シャドウとの連戦で疲労している俺と総司のフラストレーションはマックスに達する。

「ああもう、こっちは疲れてんだよ！」

「バラバラじゃ駄目だ。タイミングを合わせよう！」

「じゃあ、行くよ！セーのっ!!」

里中の掛け声に合わせて力を入れた俺たち。その成果もあって、扉は大きく開かれたのだが、扉の先にあったのは完二や善たちの姿ではなく、真つ暗な闇。勢いがついていたこともあって、踏みとどまることもできず俺たちはそのまま闇に向かって踏み出してしまった。

里中は悲鳴を上げて縮こまり、俺は仰け反ってしまったものの、離れ離れになることはない。何せ、里中の尻尾と俺の胸倉を掴むのっぺらぼうの総司がいたから。

パチパチと何かが燃えるような音と仄かな温かきを感じながら身体を起こそうとすると腕の中に狸の耳を生やしたままの里中がいた。黙っていれば可愛いじゃんと思っただけで視線を感じてそちらを向くと、火に照らされながら総司が見ていた。のっぺらぼうであるが、本物の顔は確実にニヤニヤしていそうな雰囲気なのが、分かって腹立た

しい。

「……起きたみたいだね、陽介」

「総司」

「周囲を少し調べてみたけれど、壁や床の雰囲気が一変している。恐らく1階ではないね」

「総司」

「うろついているシャドウも一癖二癖ありそうな奴らばかりだ。ここもいつまで安全か分からない」

「総司」

「……別に他意はなかったよ。僕は『主花』よりも『花千枝』を推しているけれどね！」

「やっぱり手前かあ!! 確信犯じゃねえかあ!!」

気を失っている状態の里中をそつと寝かせた俺はのっぺらぼうの下でほくそ笑んでいるだろう総司に向かって斬りかかった。ちなみに俺と総司の攻防は物音に対してうるさいといいながら起き上がった里中に注意されるまで続いたのだった。

総司の鞆に入っていた非常食で腹ごしらえをした俺たちは階段を探して動き始める。

めに動こう。先頭は僕が行くから、真ん中がちえきち。陽介は殿をお願い。雰囲気的に廃病院っぽいから、血の跡とか、叫び声とか聞こえてくると思うから気構えだけはしっかりね」

「……うう、分かった」

里中はそう言うのと部屋の扉へ向かっていく総司の服の裾を掴んでついていく。

俺も2人の後を追いながら、総司が一緒にいてくれたことに感謝する。もしも、里中と俺だけでこんなところに飛ばされていたら、早々にパニックを起こしシャドウに殺されていただろう。

もし、パニックを起こしていなくても、仲間と連絡を取ることができない、籠城するにも食料が心許ない、最悪を想定するには十分すぎる。恐怖心が勝る里中を抱えて、俺一人で未知のダンジョンを走破するなんて不可能だ。闇雲に突破をしようと里中共々シャドウの餌食になっていた可能性すらある。

「陽介、隣の部屋に早速シャドウがいる。『変容の彫像』と『トランスツイインズ』が2体」「トランスツイインズは風スキルが弱点だったよな。あの部屋に流れ込んで来ていたシャドウはこの階層から来たってことなのか？」

「さて、それを考えるには情報が少ないけれどね。もう1体のシャドウの変容の彫像は氷結スキルが弱点だから、総攻撃を狙おう。行けるよね、ちえきち？」

「お化けじゃないなら大丈夫ー」

総司は里中に確認し、俺に目配せをしてくる。

俺たちは大きく頷き、隣の部屋になだれ込むと同時にそれぞれがスキルを発動させる。総司のペルソナによるブローラと俺のマハガルーラが部屋の全体に吹き荒れて、もう吹雪のようだ。吹雪が吹き止んだ後に残ったのは気絶して部屋の床に無防備な状態で転がるシャドウの群れ。

俺たちは各々の武器を構えて気絶しているシャドウたちをタコ殴りにする。初戦はこうして特に反撃を受けることもなく終了。おかげで心細くておどおどしていた里中の気分も上昇し、明るい笑顔を振り撒くまでになった。

「総司、サンキュ」

「うん?どうしたの、陽介」

「いや、俺じゃあ里中をこんな短い時間で元気にすることは出来なかったはずだ」

「そんなことはないよ、陽介。今回は僕がいたからこんな方法になったけれど、陽介もちゃんとちえきちとの2人だけでも乗り越えることが出来ていたはずだよ。だって、2人も優と一緒にテレビの世界でシャドウと戦って、苦楽を共にしてきた最初の仲間なんだしさ」

総司はそう言うのと部屋の2つある扉のうちの右側へと向かっていく。

里中は俺たちの会話の内容は聞こえなかったみたいで、首をかしげながら総司の後を追った。俺は変なモニュメントを被ることとなった頭部に手をやる。ザラザラとした手触りしか伝わってこないが、俺はその下で本当の目から涙がこぼれ落ち続けていることを自覚する。

なんで……、どうして……、総司の時間軸では会った事も喋ったこともない俺に全幅の信頼を寄せてくれるのだろう。俺ならばリーダーである優を支え、里中をはじめとした仲間を励ますことが出来るって、信じてくれるのだろう。

「総司、頼む。生きて俺と出会って親友になってくれ。……俺、お前と一緒に馬鹿がやりたいよ。拳をつき合わせて、色々な思い出を作りたい」

□千枝□

優の口から総くんが死んだ事実を聞かされた時、私は思わず『そんなはずはない』と叫びたかった。

私と総くんとの出会いは小学生になる頃まで遡る。雪子から預かったムクの散歩をしている際、いつもの散歩コースから外れてしまい、稲羽町で生まれ育った私も知らない場所に来てしまい途方にくれていた時に声を掛けて来てくれたのが総くんだった。

その時にムクの「リードを長くし過ぎ」とか、「怒る時はデレデレとするのではなくしっかり」と怒れ」とか、私が説教されることになったのだけれどそれは置いておこうかな。

総くんの親は転勤族で、春休みや夏休みといった長期休みの時にしか稲羽町に来ることが出来なかった彼だけれど、この町に住んでいる私よりも仲の良い人が多かった。仕事に困っている大人に何かと提案したり、相談を受けたり。同年代の子たちに新しい遊びを教えたり、勉強の楽しいやり方を伝授したり。いじめられている人を助ける為に立ち回りをして、総長なんてあだ名をつけられたりして、私も含めて皆を笑顔にしてくれるそんな優しい幼馴染が、死んでしまったなんてそんな話、すぐに受け入れることは出来なかった。

第3の迷宮はあろうことかお化け屋敷が元となったダンジョン。

それだけでも嫌なのに、迷宮に足を踏み入れてすぐに私たちは姿形が変わってしまった。私や雪子なんかは可愛いものであったが、月高の先輩たちはおっかない牛男や狼男に変身してしまった。優も機械仕掛けの身体に変貌した。安定の花村は残念妖怪になつてオチをつけてくれたのだが、幽霊とかお化けが苦手な私には迷宮を進んでいく勇氣はなかった。

まあ、そのの所為で更にややこしい状態に陥ってしまったのは反省点だ。

のつべらぼうという表情すら読み取れない姿へと変貌してしまった総くんであったが、纏う雰囲気は優しいまま。メンバーが3人となった今だつて進んで先頭を歩き、周囲の警戒を一手に引き受けてくれている。花村は私の後ろで後方の警戒を務めているけれど、総くんのような安心感はない。とはいえ、2人に守られた状態の私が言えたことではないのだけれど。

「2人ともストップ。次の部屋は『完全に真つ暗』な状態かつ強敵の気配がする。……固まつて移動しよう」

私と花村は総くんの話を聞いて進む予定の次の部屋を確認する。総くんの言う通り、次の部屋は自分の足元すらおぼつかない真つ暗闇の中を移動しなければならぬらしい。私は咄嗟に真後ろの扉を見て、この暗闇の中を突つ切るのはやめようと提案しようとしたのだが、それよりも前に花村が口を開いた。

「総司、暗闇の中でその強敵に襲われでもしたら俺たちは全滅してしまう。他の道もあるようだし、一旦あつちに行かないか？」

「……そ、そうだよ。総くん」

「んー……。別にいいけど、たぶんここに戻ってくる”ことになるよ」

私と花村はその場で顔を見合わせて首を傾げる。総くんのやけに確信めいた言葉が気になったけれど、花村と私の意見を採用した彼は振り返ってまだ行っていない扉の先

へと向かった。

その先にあつた開かずの扉と意味深なワードを見て謎解きの必要があることが分かつたのだけれど、必要な情報は私たちが行ける部屋の中になかつたのだ。行つていないのはあの真つ暗な部屋だけ。

「2人とも覚悟は決まつた?」

扉の前で振り返つた総くんが尋ねてくる。私も花村も彼を見ながら大きく頷き、真つ暗な部屋へと足を踏み入れる。『一寸先も闇』ということわざを思い返すくらい、その部屋は真つ暗だった。総くんと花村の手を繋ぐ真ん中の立ち位置でなければ、その場に竦んで動けなくなつていたと思う。

「怖くない……、怖くない……。総くんと花村が一緒なんだから……」

私は手を離さないようにしっかりと手に力を籠める。すると総くんも花村をギュツと握り返してくれる。2人に守られてばかりで申し訳なくて、情けなくて涙が出そうになる。

そんな時、先に進んでいた総くんが足を止めた。何かと思つて前を見れば、天井から吊り下がる形で日本人形のような巨大な物体が私たちを見ていたのである。

「ひいっ!?!」

足がガタガタ震えて私は思わず叫びそうになつた、けれど。

「大丈夫だ、里中。そいつは見てるだけっぽい」

「……そ、そうなの？」

「それに見てみる、総司は全然警戒していないだろう？」

「言われてみれば……」

後ろにいた花村が私の頭をポンポンと撫でながら優しい声色で告げてきた。確かにその日本人形っぽい大きなやつはその場から動こうとしないし、総くんも特に何とも思っていないようでシャドウをただの置物同然に見ている。

「どうやら、この部屋にいるシャドウはこの手の奴みたいだから落ち着いていこうぜ」

残念妖怪の被り物をしている花村のドヤ顔が思い浮かんで無償に殴りたくなっただけで、両手は完全に塞がっていたので私は小さく呟くだけにした。

「花村のばーか。……格好いいところあるじゃん」

「……ん？何か言ったか、里中？」

「べっつにー」

あー。この部屋が暗闇で良かった。きつと今頃、私の顔は真っ赤に染まっているだろうし、こんなの花村に知られたら絶対に微妙な空気になること間違いないだもん。この部屋から出るまでに心を落ち着かせなきゃ。そう思いながら先導する総くんについて

いくこと暫し、右手で壁を伝いながら先を行つていた彼が急に壁に引きずり込まれてしまった。気付いた私と花村が抵抗するには反応するのが遅かった。

真つ暗な部屋から明るい場所へと出た私たちはチカチカする視界に戸惑いながらも周囲を見る。すると、総くんが呟いた。

「あ、＼上へのぼる階段＼だ」

私と花村は勢い良く立ち上がると総くんの視線の向こう側へ走つた。そして＼曲つた先にあつた階段＼を見て思わずハイタッチをする。これが下に降りる階段だったらどうしようかと思つたが杞憂だった。いきなり壁をすり抜ける形になり、床にうつ伏せで倒れていた総くんも合流し、私たちは満を持して階段を駆け上がった。

階段を上がつた先は床や壁が古い学校の雰囲気になつていた。つまり迷宮の1階層と同じになつたのである。相変わらず薄暗いけれど、大分気持ちが楽になつた私であつたが、

『この反応つて……間違いない！花村先輩に千枝先輩!!』

「うつひやあぁーっ!? つて、りせちゃんかい！」

いきなりの大音量で聞こえてきたナビで後輩の声にびっくりして飛び上がってしまった私は、気を取り直してツツコミを入れたのだが。

「今までで一番の驚きようだったね、ちえきち」

「いや、今まで怖いのを我慢してきたんだから、いいってこのくらい」
総くと花村から向けられた生易しい視線が逆に辛い。

『漫才をしている場合じゃないの、千枝先輩！お姉ちゃんたちが大変なのっ!!』
仲間の危機を聞きつけた私たちははりせちゃんナビに従って迷宮内を駆ける。

そして、何故か灯りの下には入れないとはいえ、多くの大きくて不気味な赤ん坊に周囲を固められて身動きひとつ取れなくなってしまった仲間たちの下に辿り着いた。

その時、私たちの目に映りこんだのは浅い呼吸を繰り返す、月高のリーダーたちと口元についた赤いナニカを拭う優の姿。私は拳を握り締め、花村が武器を取り出す。そして、シャドウたちへ襲い掛かろうとした時、ぞわりと身体の芯から凍えるような殺気が背後から放たれた。

「てめえら、俺の湊と妹に何をした？」

底冷えするような声色に、私と花村はその場から飛び退いて壁際で恐怖心を誤魔化すように抱き合った。ギリギリと歯を軋ませながら、一歩ずつシャドウに向かう総くんから放たれる覇気はとてつもなく、紅黒く、怨霊よりも恐ろしいものに見えた。

事実、負傷している仲間たちのいる灯りの下に入らずに機を窺っていたシャドウたちは、私たちの登場に嬉々としながらこちらに向かって歩を進めていたのにも関わらず、魔王を降臨させた総くんを見て踵を返して逃げ始めている。

「俺の湊を傷つけておいて、逃げ果せられると思っっているのかああ!! 来い、ノブナガあああ!!」

総くんが金色の縁のカードを握りつぶすと同時に現れたのは西洋甲冑のような曲線のある鎧を来た筋肉隆々の大男。その眼差しは鷹の様に鋭く、目の色は血のような紅。第六天魔王と呼ばれるに相応しいフォルムに、その場にいる全員が頬を引き攣らせる。

「お前らなんか潰れてしまえ!! 天魔王の剛腕!!」

総くんの背後に浮かび上がっていた魔王が大きく腕を振りかぶると、天井が消えうせ、代わりに超巨大な拳が私たちのいる部屋に降ってきた。私と花村は一瞬で事態を把握し遠い目になる。

大丈夫、味方の攻撃だし、なんともないさ。そんな楽観的なことを思い浮かべながら、ぎゅっと抱き締めあい。その瞬間を耐えた。

地面が爆発するような轟音、命を磨り潰されるような断末魔、身体が内側から破壊されてしまうのではないかと思えるくらいの衝撃。

気付けば私たちはヤソガミコウコウの廊下に放り出されていた。心配そうに見つめてくる視線はナビを務める後輩のりせちゃん和月高の山岸さん。私はあの後、どうなったのと尋ねようとしたのだが、彼女たちはそつと指差していた。

彼女たちの指差した方向を見れば、放課後悪霊クラブと書かれた教室に入るための扉の前に、『修理中につき、暫くお待ちください』という張り紙が貼られていた。

「……あれが、噂の『総長モード』かあ。あんなのに睨まれたら、ヤクザも暴走族も大人しくなるのが当たり前だよな」

ぼてりと廊下で仰向けになるとジャージの中に違和感があり、手を突っ込んでみる。するとカードが入っていた。こんなものいつの間にと思い、絵を見れば、先ほど見たばかりの巨漢の男を背後に浮かび上がらせた灰色の髪に銀色のメガネをつけた青年と一緒に背中合わせに拳を突き出す自分の姿が描かれていた。

『これが私と俺の殺劇舞荒拳！』

敵に対して私がゴッドハンド、総くんが天魔王の剛腕を発動した際に発生するスキルで、一発でも強力でオーバーキルなパンチを計16発もお見舞いする恐ろしい技のようだ。

しかも、止めでゴッドハンドによるアップパーで打ち上げられ、天魔王の剛腕で磨り潰されるといふ怒涛の鬼コンボが待っている。

「……ごくり。なにこれ、怖い」

私はそつと、そのカードを見なかつたことにしてジャージのポケットの中に入れなおすのだった。

幕間一⑨

□優□

兄さんが怒ることは滅多になかった。私が知っているだけでも片手で数えられる。

少し窘めたり、注意したりすることはあれ、兄さんは犬歯を剥き出しにして自身の持つ力で相手をねじ伏せるといふやり方は好まないから。しかし、自分が『大切にしている誰か』のために怒ることがあった。

相手が友達をカツアゲしていた高校生とか、

夜間に迷惑な音を鳴り響かせていた暴走族や、

仲が良いお婆さんを狙った詐欺グループなどだ。

私も間近で見た事はなかったけれど、目撃者である後輩の完二の話によれば兄さんの『総長モード』と呼ばれる姿は鬼神の如き強さだったという。

で、その鬼神の如き強さを持つ総長モードの兄さんをこの眼で見ることになったのだけれど、一言で表すのならばただただ恐ろしかった。顕現させたペルソナが『織田信長』であったことも関係しているのだろうけれど、正に『魔王』って感じ。

ただ気になることがあるとすれば傷つけられた兄さんの大切な誰かが妹である私で

はなく、湊先輩であることはなんだか分からないけれど、ちよつとムツとする事案である。

「にゅふふふふ……」

兄さんの『大切な誰か』認定をされた湊先輩は頬を真つ赤に染めて蕩けた表情を浮かべ、フードコートの机の上に顎を乗せた状態で悶えている。何を話しかけても『にゅふふふ……』『えへへへ……』としか言わずお話にならない。そして、もう一人の当事者である兄さんは現在……。

「あいつはどこに引き籠もりやがったっ！」

『無為自然』を使われたらわからんクマー！ シーフー、クマの皮を返して欲しいクマー！！

「こうなったらコロマルさんだけが頼りであります。……えつ、『骨付き肉以上の物』を持つてこい？コロマルさんがすでに買取されているっ!？」

隔離部屋に引き摺り込まれ、シャドウと連戦し精神力を使い続け、終わったと思つたら更に迷宮の奥深くに追い込まれ、足手まといを2人連れて脱出したところで仲間の窮地に駆けつける形になった兄さん。

よほど余裕がなかったのだろう、好きになった女性が傷つけられているのを見て、
「キレてもしょうがない」とは思うけれど、兄さんにとっては完全に黒歴史だよね。」

「元来、兄さんはヘタレだし。ごーこんきっさのボスの時に口移しで、回復薬を湊先輩に飲ませた辺りで意識はしていたんだろうけれど……」

私はそう呟きながら湊先輩の頬をプニプニと押す。

第3の迷宮は兄さんのペルソナによる憤怒の一撃で破壊され、『修理中』と張り紙が為されるほどの事態になっている。その修理が終わるまでの間に、兄さんの発言の真相究明を興味津々な女性陣がしようとしたら、一目散に逃げ出したのである。

追っ手として選ばれた男性陣であったが、兄さんがぬらりひよんのスキルである『無為自然』を先に発動して雲隠れしてしまったから、さあ大変。完全にヤソガミコウコウを舞台とした大捕物と化しているのだ。

「兄さんが死ぬほど恥ずかしい思いをして逃げ出すなんてこと、今まで無かったからなあー」

そう思いながらぼんやりと眺めているとフードコートの屋台の前をトコトコと歩いて移動しているクマ（外側）がいるのを発見する。そのクマ？はトコトコと私と湊先輩が座っている席にどんだん近づいてくる。そのクマ？の両手には紫色の何が入っているか分からない瓶が握られており、嫌な予感しかないため、私は上着の胸ポケットからイザナギのカードを取り出すと雷属性の攻撃スキルである『ジオンガ』を唱えた。

『ギョウヤ〜！』

狙い通りジオンガが直撃したクマ？は、ばたりとフードコートのと真ん中で倒れこむ。猫が驚いたような声の悲鳴を聞いて集まってくる面々の中にクマ（中身）を発見し、倒れこんだクマが兄さんであることを確信した私は椅子から立ち上がるとクマ（外側）のジツパーを開いて、中で蒸された上に目を回している人物を引きずり出した。

「きゅー……」

「なるほど、ぬらりひよんのスキルを発動している間は完全な無防備になる訳か。気をつけないと駄目じゃない、兄さん」

私が引きずり出した兄さんの額を指で叩きながら告げる。すると陽介がすたすたと近づいてきて、さつとツツコミを入れてくる。

「いや、攻撃したの相棒じゃねえか！」

「まあ、いいじゃない。で、陽介、その足元に転がっている瓶は何か分かる？」

「うん？えーと、『キオクワスレール』。エリザベス製薬って書いてあるわ」

「処分しといて、陽介」

私はそれを聞いて兄さんが何をしようとしたのかを察した。効能はともかく、そういうことをしようとした事態がアウトであるということをしつかりと身体とハートに叩き込む!!

へタレという名の乙女の敵に裁きをつ!

「ジオー！ジオー！ジオー！ジオンガ！ジオー！ジオー！ジオンガー！！」

「ぎやひいいい……」

「ジオー！ジオンガ！ジオー！ジオンガ！ジオー！ジオッ！ジオンガッ！ジオダイーン！！」

「……。……。」

途中でイザナギからヨシツネへとペルソナチェンジしてスキルを発動したことで威力が3割増しに。

結果、真つ黒こげの物言わぬ屍と化した兄さんの躯を、正気を取り戻した湊先輩が抱えて保健室へ向かっていく。兄さんは愛し愛されるっていうことを学ばないといけないんだ。

きつと、この気持ちを理解していなかったからこそ、兄さんは簡単に死を選んでしまったんだ。普通だったら、死んでも護ろうなんて思わないはずなんだ。そこに大切な人がいるのであれば、尚のこと生きて護り抜く選択をしてもらわないと困る。

「さすが総長の姉御！今度からクイーンって呼んでいいっすか！」

「やめろおおっ！！ただでさえクロスオーバー物なのに、”5”から”世紀末覇者先輩”が来ちまうだろおがああああ！！」

陽介のツツコミの意図は良く分からなかったけれども、とりあえず完二の私の呼び方は『姉御』を継続する形となった。

「ふむ、我々の知らないところでこういう関係になるための下地が出来上がっていったのだな」

「桐条先輩、『家事万能で運動神経もよく、性格も優しくて頼りになる』なんて絵に書いたような人間、総司くんの他にいますか？」

「湊ちゃんがコロっていつちやってもおかしくないですよ」

まだまだ女性陣による私刑は終わりを見せないらしい。

今度は桐条先輩やゆかりっち、風花も参戦する。彼女らが言う話題は、ずばり寮生活についてだ。以前、影時間が生まれるきっかけを作った人物が桐条先輩に近しい人物でないかとゆかりっちが糾弾した後、悩みを打ち消すために屋上へ上がった湊っちを諭すような話をした総司。ただその時の湊っちの格好はノーブラTシャツという無防備にも程がある格好。総司は少し指摘するだけで目を逸らしていたらしいが。

「夏祭りエスコートは私が嫉けた」

「あの時の湊さんのコンディションを考えれば、総司さんとの夏祭りデートは最適だったであります」

実妹である優ちゃんは嬉々としてこの総司の私刑に参加している。そういえばあの時点ですでに湊っちは総司に対して好意を抱いていたのだろう。

何でも出来る凄い奴だと思っていた総司の意外な欠点、優ちゃん曰く『極度のヘタ

レ』。

俺が知っている総司の弱点は将来という子供であれば誰でもぼんやりと描けていそうなものを全然描けていないということ。今考えれば、総司は将来に至る前に「自分は死ぬ」ということを予期していたのかもしれない。だから、敢えて考えてこなかったのかもな。

あの夏休みの終盤、俺が投じた一石は総司の考え方を変えることは出来ていないのだろうけれど、ひとつのきっかけにしてくれればと思う。

さて、ようやく終わった私刑から解放された総司はまたクマのキグルミを借りてフードコートの間で落ち込んでいる。何とも言えない哀愁漂わせる姿に俺たちは何も言えなくなる。

何か明るい話題はないか、先輩たちや八高の男子たちに目配せすると、そう言えばと金髪でガタイのいい八高メンバーの一人である異完二が縁の赤いカードを取り出した。描かれているのはカードの持ち主である異と大人びた姿の総司。

『雷神爆砕撃』……すげえ、格好いい技名じゃん！……何だ、これ？』

「総長と一緒に作業しているところで見つけたつす。姉御から『ああ言った話』を聞いた直後だったつすから、相談するにも出来ない状態で。でも里中先輩も似たようなものを持っていたんでもしかして思っ」

「ムムツ！何故シーフと行動を多く共にしていたクマが持っていないのに、完二が持っているクマかつ！言え、何をしたクマかつ!!」

「何って、家庭科室でのあの時に掃除用具入れに入っていたんだ。『たまたま』じゃねえのかよ!」

イーツと歯を？き出しにて怒るクマに対し、面倒くさそうに相手をしている巽。俺は巽と同じカードを持っているという里中さんも呼びつけて、件のカードを見せてもらう。すると、青い帽子を被る『男装』少年探偵の白鐘さんも話しに参加し、俺と同年である花村陽介も同じものを持っているという情報を手に入れる。

「ちえっ。後々の切り札にしようと思っていたのによ……」

「ヨヨヨ……、完二や千枝ちゃんだけならまだしも、ヨースケまで持っているなんて。シーフー!どうしてクマにはカードをくれないクマかつ?」

両手を床につき、滝のように涙を流すクマを放って置きつつ、八高メンバーでカードを持つ者、持たない者が一同に会する。

「へー、総司くんって成長したらこうなるんだ。というか、死角なしの完璧男子でビジュアルもこんなに格好良くなるなんて反則!」

「知名度だけなら、稲羽市ではナンバーワン。警察にも顔が利いて、商工会も後押しするのは間違いなし、農業をしている人なんかは『是非媚に』と直接言っているくらいだ

から、もし市長選に成長した総司くんが立候補した確実に勝つ」

「雪子の言うとおりだよ。過疎化が進んでいる稲羽市も総くんの手腕ならきつと……」

八高メンバー全員の視線がフードコートの隅で黄昏ている総司へと向けられる。回復までしばらく時間が掛かるようで総司はぼんやりと中空を眺めたまま、微動だしないでいる。俺は熱い眼差しを向ける八高メンバーに近づく。

「ところで、カードの獲得条件は分かったのか？」

「その点について何ですが、3人に共通するのは【総司さんに心から生きて欲しい】と思っている、かどうかという曖昧な物なんです」

少年探偵と呼ばれるに相応しく、自分の考察を口にする白鐘。

カードを手に入れた3人と総司の付き合いはバラバラだ。幼い頃からの幼馴染である里中さん、総司の総長モードを見て憧れを抱き舎弟となった巽はともかく、花村はこのヤソガミコウコウで初めて総司に知り会ったばかり。

しかし、花村は直に総司と接して話を聞いて、総司が生きて稲羽市に来ることを望んだ。

「つまり、3人は『未来の可能性』をペルソナカードとして『具現化』した？ いや、それじゃあ3人の困惑ぶりが説明できねえや。もつと、こう……あー！ 自分の頭の悪さに反吐が出らあつ!!」

「いえ、伊織さん。『ありがとうございます』。ここは色々な人の思いが交錯する場所であり、伊織さんをはじめとした月高の方々と出会うことで深まった縁もあります。何より、僕たちに欠けているものを持つている総司さんとここで出会えたことに僕は感謝をして、『願います』。僕は総司さんと稲羽市で出会って話をして、一緒に事件を捜査したい。自分の視野をもっと広げたい。だから、生きて僕を、……いや僕たちを正しき場所へと導いてください」

両手を握り締めながら祈るように言葉を紡いだ白鐘さんがゆっくりと掌を開くと、そこには縁が赤いカードがあった。

絵柄は背中を見せる総司と正面に向かってウインクする『なにか違和感のある』白鐘さんの姿。総司の手には黒く砲身の長い銃、白鐘さんの手には白い拳銃が握られていて、技名が左右に一つずつ。

総司の持つ黒い銃の横には『断命銃アトロポス』、白鐘さんの持つ白い銃の横には『致命銃ラケシス』。

「あー、これ直人が着ているのって八高の女子の制服だ！」

「『なにいつ!?!』」

「ちよつ、りせさん!?!うわわわつ、一先ず退却しますつ!!」

身の危険を感じたのか白鐘さんはカードを胸ポケットに仕舞い込むと一目散に逃げ

出し、フードコートから出て行く。それを俺の知っている彼女よりも成長した優ちゃんや里中さんや巽、久慈川さんなどが追いかけていく。俺は苦笑いしながら佇む花村に声を掛ける。

「いいメンバーだよな」

「ああ。頼りになる仲間だよ」

「……花村、総司の在り方を変えるのは過去の俺たちじゃ駄目なのかもしれない」

「え？」

「俺はよお、総司の兄貴分つてやつだからさ。夏の終わりに遊びに行つた時、総司に質問したんだ。『将来の夢はあるのか』。て。あいつ勉強も運動も難なくこなせて、料理の腕もセレブを唸らせるくらいプロ級なのに何も考えていなかったんだ。俺みたいに頭の出来が悪くて何も考えられないんじゃない。自ら将来への展望を閉ざしちゃまっていたんだ」

「……」

「あいつに生きる目的を与えてやってくれ。……湊つちへの想いだけじゃ駄目な気がするんだ。あいつは、総司は、『誰かのために自分の命を賭けてしまえる奴』だ。もしかしたら、あの『運命の日』に現れる『大型シャドウ』が俺たちの手に負えない化け物で『湊つちが死ぬ』リスクがあるのだとしたら、愛する者を護ろうと総司とアイちゃんが身

体を張るのかもしれないねえ」

俺は思いついた単語をそのまま羅列するように花村に伝えたのだが、それで分かっちゃまった。総司は、本当に『愛する女』を護るために戦うことを選んだのだと。

総司が死んでしまう世界線の俺たちはそんな彼の思いの強さを察することが出来なかったのだろう。寮に住んでいるだけの、他人以上仲間未満の関係でしかない俺たち。俺たちを繋ぎとめるのはタルタロスとシャドウとペルソナだけ。なんて希薄な関係なのだろうか。

「総司にとつて、俺はそんなに頼りなかったのかな。……ははは、当然じゃねえか。シャドウとの戦いでは湊っちにおんぶ抱っこ、勉強は教えらんねえし、出来るのは遊びについていだけ。ははは……ちくしょう、……ちくしょう……」

「伊織……。総司の兄貴分つて言うなら俯いていちや、駄目だろ！俺たちの世界線での伊織は間違えたかもしれないけれど、今の伊織なら間違わないだろ？悔やんでないで、これからをどうするかを考えろよ！」

俺は俯きながら花村の言葉を聞いて帽子の唾を触る。鼻を嚙りながら顔を上げて、ニツと笑う花村に右手を伸ばし握手を求めた。

触れれば斬られてしまうのではないかというくらい鋭い眼差しを向ける女性へと間違った成長をってしまった優ちゃんを宥めたり窘めたりしてきたのだろう、そんな彼

女の相棒を自称するに相応しい男だと、俺はようやく花村陽介という人間を見られた気がする。陽介は俺の手をしっかりと握り返した。

「サンキュな、花村。俺の事は順平でいいぜ」

「2年後は先輩かもしれないけど、今は同級生だからな。俺も陽介って呼び捨てにしてくれよ。いつまでも苗字じゃ、他人行儀だしさ」

「こういうのって、最初にしねえといけなかったのに。何をやっていたんだろうな、俺たち」

「事情が事情だったから仕方ねえって、もうそろそろ総司を正気に戻してやろう順平。たぶん、第3の迷宮の修理も終わった頃合だろうしさ」

「確かに、こういうときはシャドウに八つ当たりするのに限る。どうせ無限に湧き出てくるし、問題ねえだろ。行くぜ、陽介」

俺たちはフードコートの隅でいじけていた総司を回収すると一度、放課後幽霊クラブに寄る。丁度、扉が横にスライドして黒い手が貼紙を剥がすところだった。

俺と陽介は扉を全開にして中の様子を確認し、自分たちの首や頭を触って確認する。どうやら変な妖怪への変身は初回限定だったようだ。

ただクマの皮を脱いだ総司の顔からは一切の表情が抜け落ち、のっぺらぼうではないけれど別の意味での恐怖に苛まれそうであった。